

平成12年度 神奈川県考古学会考古学講座

# 相模野旧石器編年の到達点



日時 2001年3月11日(日)  
場所 神奈川県民センターホール  
主催 神奈川県考古学会

# ～ 目 次 ～

考古学講座「相模野旧石器編年の到達点」の開催にあたって

例 言

基調報告

相模野旧石器編年の到達点	諏訪間順…………… 1
相模野台地の立地と文化層	小池 聡……………21
ナイフ形石器文化前半期の様相	鈴木次郎……………35
相模野ナイフ形石器文化の終焉	織笠 昭……………55
相模野細石器編年の到達点	砂田佳弘……………73
相模野編年の問題点	白石浩之……………91
相模野旧石器編年の年代観 (14C年代測定法と暦年代)	御堂島正……………101

## 考古学講座「相模野旧石器編年の到達点」の開催にあたって

神奈川県中央部に位置する相模野台地は、これまで隣接する武蔵野台地と同様、旧石器時代の人々の暮らしを解明する上で極めて重要な役割を果たしてきました。

富士・箱根の各山々にほど近い相模野台地は、旧石器時代の人々の生活の痕跡が発見される関東ローム層、俗に言う「赤土」の堆積が極めて良好な地域です。本台地上でこのローム層をよく観察してみると、黄褐色と黒色の二色の帯が何枚も交互に重なり合っている存在していることに気が付きます。つまり、相模野台地では、ほぼ同様な特徴を示すローム層が、厚く・広く堆積しているため、離れた場所同士のタテとヨコの関係を把握することができるのです。換言すれば、相模野台地上から出土した旧石器時代の各石器群は、あらゆる研究を進めていく上で最も基礎的でありながら、極めて重要な役割を担う「時間軸」を明確に提示することができるのです。

考古学上、時間軸の設定に関する研究は、「編年研究」と呼ばれ、今なお古くて新しい研究と言えるでしょう。相模野台地から出土した各石器群も、上記の様な特性を生かし、「編年研究」に極めて大きな影響を及ぼしています。そこで、新世紀を迎えた今回の考古学講座は、「相模野旧石器編年の到達点」と題し、全国の旧石器時代における編年研究をリードしてきた相模野旧石器編年の到達点と研究の課題について皆さんと共に議論していきたいと考え、企画致しました。

各パネラーの皆さんは、相模野台地における旧石器時代研究はもとより、より広い視野・分野から第一線で全国的にご活躍されている方々です。このような蒼々たるパネラーを迎え、21世紀最初の考古学講座を皆さんと共に開催できるのは、大変喜ばしいことと思っております。また、この講座をきっかけとし、より広い視点から、「考古学」が抱えるあらゆる問題について、一人でも多くの方と真剣な議論を交わしていただければ幸いです。

2001年3月11日 神奈川県考古学会

### 例 言

1. 本書は、神奈川県考古学会主催が平成13年3月11日に平成12年度の考古学講座として開催した「相模野旧石器編年の到達点」の予稿集である。
2. 本書の編集は、神奈川県考古学会講座担当である諏訪間順が担当し、栗原伸好、大塚健一、吉田政行、井関文明、長沼正樹、橋詰 潤、井上由美子の協力を得た。
3. 本書の執筆は、白石浩之・織笠 昭・諏訪間順・小池 聡の幹事役員の他、鈴木次郎・御堂島 正砂田佳弘の会員諸氏から玉稿を賜った。  
ご多忙にもかかわらず快く執筆いただいた諸氏に心より感謝申し上げます。
4. 本講座開催にあたっては、下記の諸氏、団体からご協力を賜った。  
石器文化研究会、かながわ考古学財団旧石器時代研究プロジェクトチーム、小田原市教育委員会
5. 本講座は加藤 緑、白石浩之、明石 新、大坪宣雄、諏訪間順が担当した。

平成12年度 神奈川県考古学会 考古学講座

# 相模野旧石器編年の到達点

～ 日 程 ～

平成13(2001)年3月11日(日) 9:30～16:45

開 場 9:30

開 会 9:50

開会挨拶 9:50-10:00

## 基調報告

10:00-10:40 相模野旧石器編年の到達点 諏訪間 順

10:40-11:00 相模野台地の立地と文化層 小池 聡

11:00-11:30 ナイフ形石器文化前半期の様相 鈴木次郎

11:30-12:00 ナイフ形石器文化後半期の様相 織笠 昭

12:00-13:00 ～ 昼 食 ～

13:00-13:30 尖頭器文化～細石器文化の様相 砂田佳弘

13:30-14:00 相模野旧石器編年の問題点 白石浩之

14:00-14:30 相模野旧石器編年の年代観 御堂島 正

14:30-14:50 ～ 休 憩 ～

## 討 論 「相模野旧石器編年の到達点」

14:50-16:40 司 会 : 諏訪間 順

パネラー : 小池 聡・鈴木次郎・織笠 昭  
砂田佳弘・白石浩之・御堂島正

閉会挨拶 16:40-16:45

閉 会 16:45

## 相模野旧石器編年の到達点

諏訪 順

(小田原市教育委員会)

はじめに

1976年、神奈川考古1号の巻頭論文として掲載された鈴木次郎・矢島國雄両氏による「相模野台地における先土器時代研究の現状」は、相模野台地の旧石器時代編年をはじめ体系的に提示した極めて重要な文献である(矢島・鈴木1976)。ここで提示された相模野5期編年は、その後の資料の増加に伴って、その都度、石器群の変遷を捉え直す作業が繰り返され、各期の内容の修正(鈴木・矢島1978)や細分の提示(鈴木・矢島1979・諏訪・堤1985)はあるものの、その基本的な枠組みは大きな変更なく今日に至っている(鈴木1994)。

筆者も1988年に相模野5期編年を基本としつつも、「各期の細分された各々の石器群の内容は、相模野台地の移りゆく石器文化の一つの過程(段階)をそれぞれ表すものとして、積極的に評価」し、層位的な出土例を基に段階I～段階XIIまでの段階変遷案を提示している(諏訪1988)。筆者の段階変遷案もその後、細石刃石器群を対象にした変遷案(諏訪1991)や、AT降灰以降の石器群についての再論(諏訪1995)などによってその一部を修正しつつあるが、大幅な変更は加える必要がないままに今日に至っている。

こうした相模野の旧石器編年は、編年の構築の際に石器群の層位的な出土例を基本とした「地層學の法則」の原理・原則に則った編年体系であることと、新出器種の出現を基準にするものの、その器種が出現する背景としての石器製作技術総体(技術基盤)を構造的に捉え、その変化を編年の基準としていることからその大枠は確固たるものとなっている。そして、相模野台地という限定された地域編年ではあるが、日本の後期旧石器編年としては、最も精緻な地域編年として評価され、まさしく、関東・中部地方における旧石器編年のスタンダードともいえるものとなっている。

しかしながら、これまで資料が少なく十分な内容の評価ができていなかったAT降灰以前の石器群について、吉岡遺跡群の調査成果が報告されたことにより(白石他1996・砂田他1996)、新たな検討が始まっている(矢島・野口・門内・吉川1997・1998、鈴木2000)。また、かながわ考古学財団の旧石器時代研究プロジェクトチームによって、6年にもわたる相模野旧石器石器群の組織的な集成と検討の蓄積を背景として(白石他1994～1999)、「新たな相模野編年の構築に向けて」とサブタイトルがつけられた相模野編年の現状と課題がまとめられている(白石他2000)。相模野編年は、矢島・鈴木論文から24年、諏訪論文から12年が経過し、これまでの編年の枠組み、或いは内容や評価について、再度検討を加える時期に来ていることは間違いない。このような状況の中で、本考古学講座「相模野旧石器編年の到達点」が企画されたのである。

2000年11月に前期旧石器遺構捏造事件が発覚し、旧石器時代研究全体に対する信頼が大きく揺らいでおり、信頼回復のために何をすべきかが真剣に模索されている。筆者は旧石器研究を志す一人として、今、我々に求められているもの一つには、自らの寄って立つ足元の研究をしっかりとやることであろうと考えている。そのような意味でも、これまで構築された研究を振り返り、自らの研究を見つめ直し、再確認・再検討する機会が必要であろうし、そこから徹底的な議論が生まれることを望むものである。21世紀の幕開けは辛いものであったが、この考古学講座を契機として新しい気持ちで研究をスタートさせたいと考えている。

### 1. 相模野編年の前提

相模野台地は旧石器時代の石器群を研究するにあたり、日本列島内でも最も優れた条件が揃っている地域である。その最大の理由は、石器群の出土する地層が厚く、各時期の石器群が層位的に出土することにつきる。相模野台地では関東ローム層の中でも立川ローム層から石器群が出土し、それ以前の武蔵野ロームからの確実な石器の出土はない。すなわち、後期旧石器時代の石器群に相当するものである。

立川ローム層は、主に富士山から供給された火山灰層によって形成されたもので、層厚にして7～8mの堆積がある。表土からは9～10mにも達する。武蔵野台地では3～4mで約2倍、下総台地1: 5～2mの約3倍の層厚があり、近隣地域に比べて圧倒的に土層堆積の条件がいいことが理解できる(第1図)。

その中に、B0層～B5層までの6枚の黒色帯があり、さらには、B4には3枚、B3も2枚、B2はB2LとB2Uに細分できる。B2Lはさらに下部と間層がある。また、L3層には広域火山灰である始良丹沢火山灰層(AT)や相模野上位スコリア(S1S)、L6層中には相模野第2スコリア(S2S)などの鍵層が認められる。こうした黒色帯や鍵層により、遺跡から出土した石器群の出土層位を確認し、さらに遺跡間の比較・対比が容易となっている。しかしながら、この層厚が弊害となり、よほどの大規模開発でなければ、AT下位の層位まで発掘調査が及ぶことは少なく、この点が相模野の弱点ともいわれている。

こうした相模野台地の層位区分は相模考古学研究会による相模野台地全域の分布調査によって呼称されてきたもので(相模考古学研究会1971)、今日まで継承されているものであるが、この考古学土層分層に加え、

近年では富士・箱根系火山灰のワンフオール・ユニット単位で編年されたテフラカタログ(Y-ナンバー)によって詳細な層位区分も行われつつある。これによって、武蔵野台地や下総台地などの台地間の対比にも有効性を発揮しつつある(上本・上杉1996)

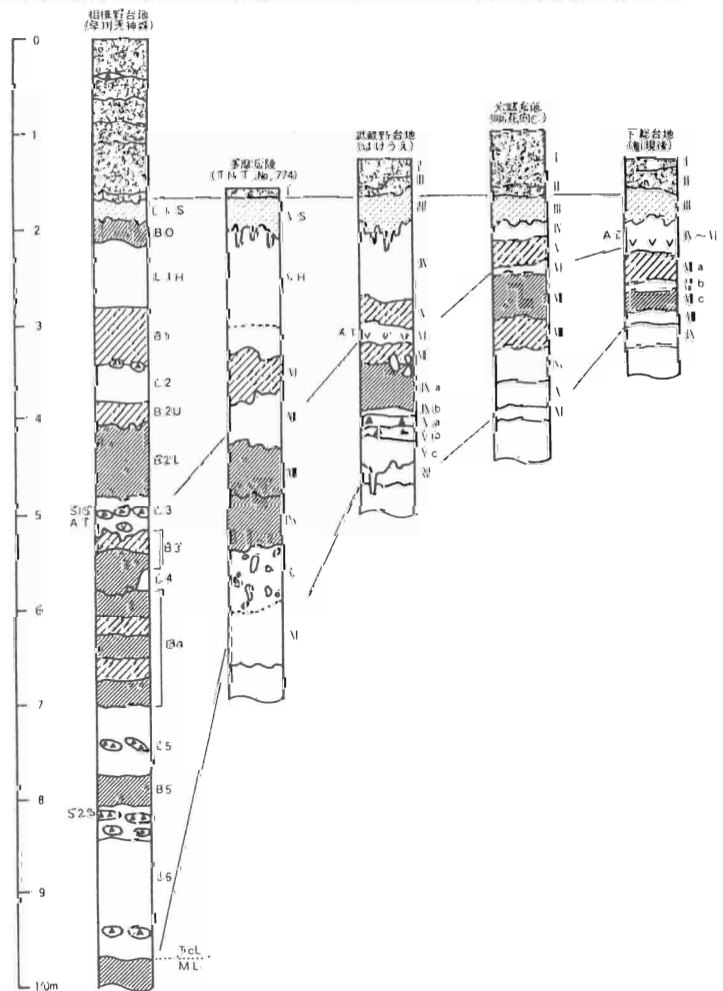
(小池氏論文参照)。

また、放射性炭素C14年代測定も加速器質量分析法(AMS法)の開発から高精度化が進んでいるが、近年、相模野での分析例も蓄積されつつある。石器群の相対的な序列(石器群の変遷)に絶対年代が加わることによって、今後の台地内だけでなく、より広域的な比較・検討も行われることになろう

(御堂島論文参照)。

こうした相模野台地の層位の有意性、有効性が相模野編年の前提であるといえる。

そして、さらに付け加えるとすれば、



第1図 関東地方の層位対比図(石器文化研究会編1991)

石器研究者の量と質である。旧石器時代の発掘調査だけで比較すれば、他府県と比べれば多いとはいえないが、かながわ考古学財団や市町村、民間調査団においても一定の調査・整理体制が整備されていることや、調査や整理期間中に研究者相互に検討する機会が多いことなども挙げられる。こうした背景もあり、石器群の内容に踏み込んだ質の高い報告書が刊行され続けている。また、相模野台地の旧石器に関わる神奈川県在住・在勤の旧石器時代研究者が多いというだけでなく、石器群の研究対象としての魅力からか多くの研究者に取り上げられ、多方面から繰り返し研究が行われていることも挙げられよう。本来はきちんとした数字で示すべきであろうが、おそらくは、相模野台地の石器群を題材とした論文の数は1980年以降のここ20年間の間では他地域に比べ群を抜いているものと思われる(引用・参考文献参照)。それだけ、研究テーマとして良好な石器群が豊富でかつ層位的に出土しているということであろうか。

## 2. 相模野旧石器編年の研究の歩み

1949年の岩宿の発見後、数年のうちに関東・中部地方における旧石器時代の編年の大綱が杉原荘介氏(杉原1953・1956)、芹沢長介氏によって相次いで発表される(芹沢1954)。こうした編年は、特徴的な石器によって示準化石化したいわゆる大別編年であったが、前後して、武井遺跡での尖頭器石器群が、矢出川遺跡で細石刃石器群が相次いで調査されたことにより、関東及び中部地方における石器の編年的な大枠ができあがっていく。そして、岩宿発見から約15年後の1965年には初めての旧石器時代単独の研究書である『日本の考古学Ⅰ先土器時代』が刊行され、「敲打器文化」－「刃器文化」－「ナイフ形石器文化」－「尖頭器文化」－「細石器文化」という全国規模の編年大綱がほぼできあがった(杉原編1965)。

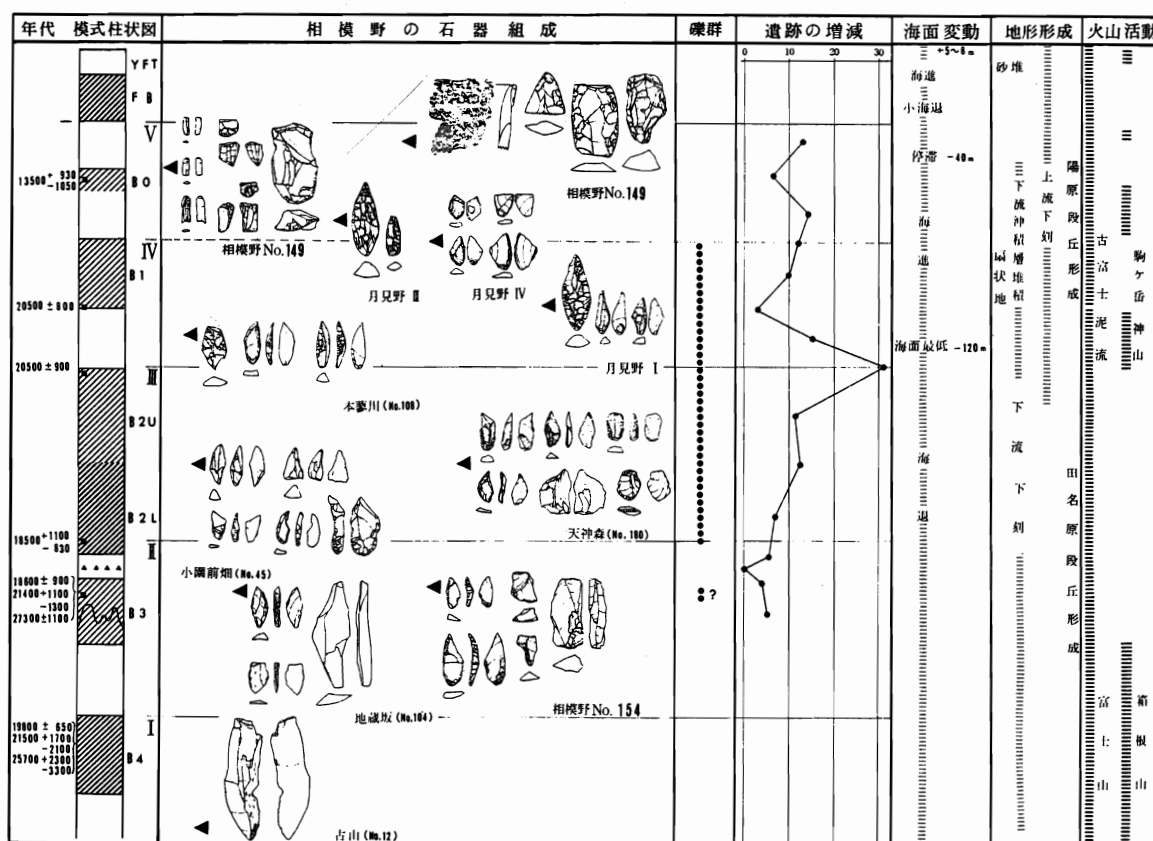
1960年代後半になると、示準化石化による大別編年は、各地の最新の調査成果によって矛盾が生じ破綻していくことになる。そして、編年研究や石器の型式・形態的な研究が深化していく中で生まれてきた矛盾を克服するための、新たな研究方向が示されるようになる。戸沢充則による「インダストリー論」(戸沢1965)、佐藤達夫による石器群の系統的理解(佐藤1970)などは新しい編年研究の基礎となるものであった。戸沢氏のインダストリー論は、砂川遺跡の調査・研究によって実践された。1966年と1973年の2度にわたる調査から、個体別資料の分布とその接合関係から、各ブロック間の石器の移動を基にして人間の動きを捉える遺跡構造研究が出発した(戸沢1968)。また、それは稲田孝司氏によって引き継がれ、石器群の持つ構造性を器種・型式・製作の各視点から分析した研究へと続いていく(稲田1969)。

### 月見野遺跡群の調査

1960年代後半から日本列島は高度経済成長が始まり、列島内では大規模な開発に伴い、これまでとは比較にならない規模の発掘調査が行われるようになる。神奈川県の月見野遺跡群と、東京都野川遺跡の調査である。1968年から始まった月見野遺跡群は、相模考古学研究会による分布調査の結果発見されたもので、目黒川流域で4遺跡10地点が明治大学考古学研究室・月見野遺跡群調査団によって発掘調査が行われた(明大・月見野遺跡群調査団1969)。この調査では10地点で7枚以上の文化層が重複して検出され、相模野編年の基礎資料となったのである。同時に、石器群の広がりや当時の認識をはるかに超えた平面的な広がりを持っていたことも確かめられ、遺跡の構造研究や遺跡群研究への新しい視点を醸成するきっかけとなった。

### 相模野編年の成立

相模野編年は、月見野遺跡群の調査成果を基にして、1970年相模考古学研究会会報「さがみの」No.6号に素案が示され(鈴木1970)、1972年の小園前畑遺跡の報告書で相模野第Ⅰ期～第Ⅴ期に区分された相模野編



第2図 第四紀総合編年を目指した最初の相模野編年 (小野・鈴木 1972)

年の骨子が示された (小野・鈴木他 1972)。ここでの重要な視点は、第四紀学総合編年を目指し、海面変動や地形形成、火山活動などと石器群の内容の変化や遺跡の増減などを対応させ、説明している点である (第2図)。

そして、1976年には鈴木次郎・矢島國雄両氏によって「相模野台地における先土器時代研究の現状」が発表された (矢島・鈴木 1976)。この論文は、文字どおり月見野遺跡群の発掘や分布調査をはじめとするこれまでの相模野台地の研究成果を集大成したもので、「石器組成・石器製作技術・遺跡分布のあり方等」によって相模野第I期～第V期に区分された。そして、隣接地域との編年的対比が行われたものである。続いて発表された「先土器時代の石器群とその編年」では、武蔵野台地の成果も取り入れ、南関東地方の統一的な編年案を提示した (鈴木・矢島 1978)。

#### 寺尾遺跡の調査

相模野台地では武蔵野台地での状況からやや遅れて 1977 年頃より本格的な大規模行政調査の時代が到来した。まず、1977年に寺尾遺跡が調査され7枚の文化層が検出された (白石・鈴木 1980)。神奈川県での最初の大規模な行政発掘であり、御子柴系の石斧などを伴う大量の尖頭器と無文土器が出土した第I文化層、黒曜石製の大量のナイフ形石器が出土した第VI文化層など、今日でも相模野台地の石器群を語る上で欠かせない重要な資料である。この調査は主に武蔵野台地を研究の基盤としていた白石浩之氏と相模野台地の鈴木次郎氏という神奈川県を代表する旧石器研究者二人によって調査・報告された画期的なものであり学史的な意味を持つ。執筆された報告書は、精緻な資料の報告と考察が行われた神奈川県で最初の旧石器報告書で、今日までこの報告書がテキストになっている。



大規模重層遺跡の調査と研究の進展

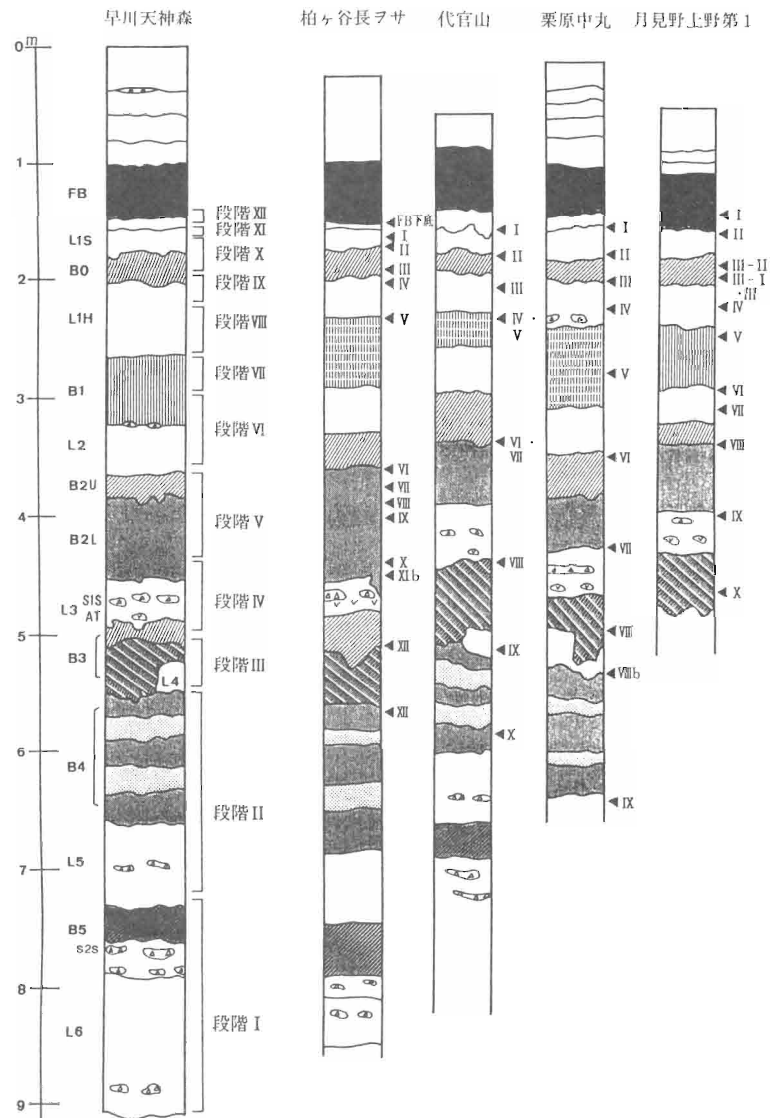
寺尾遺跡の調査をはじめとして、下鶴間長堀遺跡、月見野上野遺跡、栗原中丸遺跡、柏ヶ谷長ヲサ遺跡、橋本遺跡、代官山遺跡、中村遺跡、長堀南遺跡など重層的な良好な遺跡の調査が続き、A T降灰後のナイフ形石器文化後半から細石刃文化・縄文時代草創期までの良好な石器群が検出された。こうした調査成果を基に、筆者は「各期の細分された各々の石器群の内容は、相模野台地の移りゆく石器文化の一つの過程（段階）をそれぞれ表すものとして、積極的に評価」し、層位的な出土例を基に段階Ⅰ～段階ⅩⅡまでの段階変遷案を提示した（諏訪間 1988）。また、ナイフ形石器の終末期をめぐる研究（鈴木 1986、白石 1986、諏訪間 1989）、尖頭器石器群の変遷や評価に関する研究（織笠 1987、伊藤 1988、諏訪間 1989）、細石刃石器群の変遷に関する研究（鈴木 1983、堤 1987、砂田 1988、諏訪間 1991）など後期旧石器後半段階の石器群の詳細な検討が行われた。1991年には石器文化研究会による第1回シンポジウム「A T降灰以前の石器文化」が開催され（石器文化研究会編 1991）、相模野台地の様相がまとめられている（諏訪間・麻生 1991）。

1980年代後半からは宮ヶ瀬遺跡群、慶応S F C遺跡群の調査、1990年代になると吉岡遺跡群など極めて大規模な発掘調査が実施された。そ

の中では、近年ではこれまで資料の少なかったB 5層からB 3下部層までの石器群が吉岡遺跡群で層位的に出土し、A T降灰以前の石器群の様相をつかむことが可能となっている（白石他 1996・砂田他 1996）。また、矢島国雄・野口淳らによって、石材構成の変化と遺跡間の石器製作工程連鎖の構造的差異を視野におき、遺跡構造の変遷として相模野第Ⅱ期の再検討が行われている（矢島・野口・門内・吉川 1997・1998）。

1996年には石器文化研究会による第2回目のシンポジウム「A T降灰以降のナイフ形石器文化」が開催され、V～Ⅳ層下部段階、相模野第Ⅲ期の範囲や細分についての議論が行われた（石器文化研究会編 1996）。

2000年には第3回めのシンポジウム「砂川—その石器群と地域性—」が開催され、砂川期に関わる膨大な資料集成（石器文化研究会編



第3図 段階区分と層位的出土例（諏訪間 1988 を一部改変）

2000 a) と多角的な検討が行われている(石器文化研究会編 2000 b)。

そして、昨年にはかながわ考古学財団の旧石器時代研究プロジェクトチームによって、7年にもわたる相模野旧石器石器群の組織的な集成と検討の蓄積を背景として(白石他 1992~2000)、「新たな相模野編年の構築に向けて」とサブタイトルがつけられた相模野編年の現状と課題が提示されている。

こうした調査と研究の積み重ねによって相模野の旧石器の実態が解明され、編年についても何度も検討が加えられている状況にある。

### 3. 相模野旧石器時代石器群の変遷

ここでは、筆者の12段階変遷区分に沿って、相模野旧石器石器群の変遷を概観する。筆者の変遷観は重層遺跡の層位的出土事例の検討により石器群の変遷を段階的に示すものである(第3図)。第4図~第7図には各層位から出土した主要な石器群を図示した。柱状図に丸数字で出土層位を示し、各石器群と対応させている。この図によって、相模野台地における石器群の変遷がある程度理解できるように、特徴的な石器群を抽出している。また、相模野5期編年及び武蔵野層位編年との対比のみ加えた。

#### 段階Ⅰ(相模野第Ⅰ期、武蔵野第Ⅰa期、武蔵野台地X層下部)

本段階は、これまで内容不明のままL6層中の早川天神森遺跡第X文化層、第IX文化層などの単独出土した小礫を素材とした錐器、削器を考えていたが、出土状況から自然破砕の可能性があるため、人口遺物としての積極的な評価はできない状況であった。吉岡遺跡群D区B5層を段階Ⅰ石器群として捉え直し、本段階をB5層までと変更する。吉岡以外では大和市No.159遺跡第Ⅱ文化層B5上面で黒曜石製台形様石器と硬質細粒凝灰岩製打製石斧の調整剥片が出土し(村澤 1997)、長久保遺跡で黒曜石製剥片が採集されている(諏訪 1983)。数少ない資料であるが、本段階は台形様石器と石斧を特徴とした石器群として捉え、明確なナイフ形石器と石刃・縦長剥片剥離技術の成立以前と位置づけたい。本段階は今後の資料増加によって内容の変更があるものと考えている。

##### ①吉岡遺跡群D区B5層(第4図25~28)

出土層位はB5層で、台形様石器(25・26)、ナイフ状石器(27・28)、楔形石器、彫器、石斧調整剥片などが出土している。石材構成はチャート主体で、黒曜石も認められる。剥片剥離技術は90度打面転位を繰り返しサイコロ状の残核や横長剥片剥離が主体となるが、明確な石刃・縦長剥片剥離技術は認められない。

#### 段階Ⅱ(相模野第Ⅰ期・Ⅱ期、武蔵野第Ⅰb期、武蔵野台地X層上部~IX層上部)

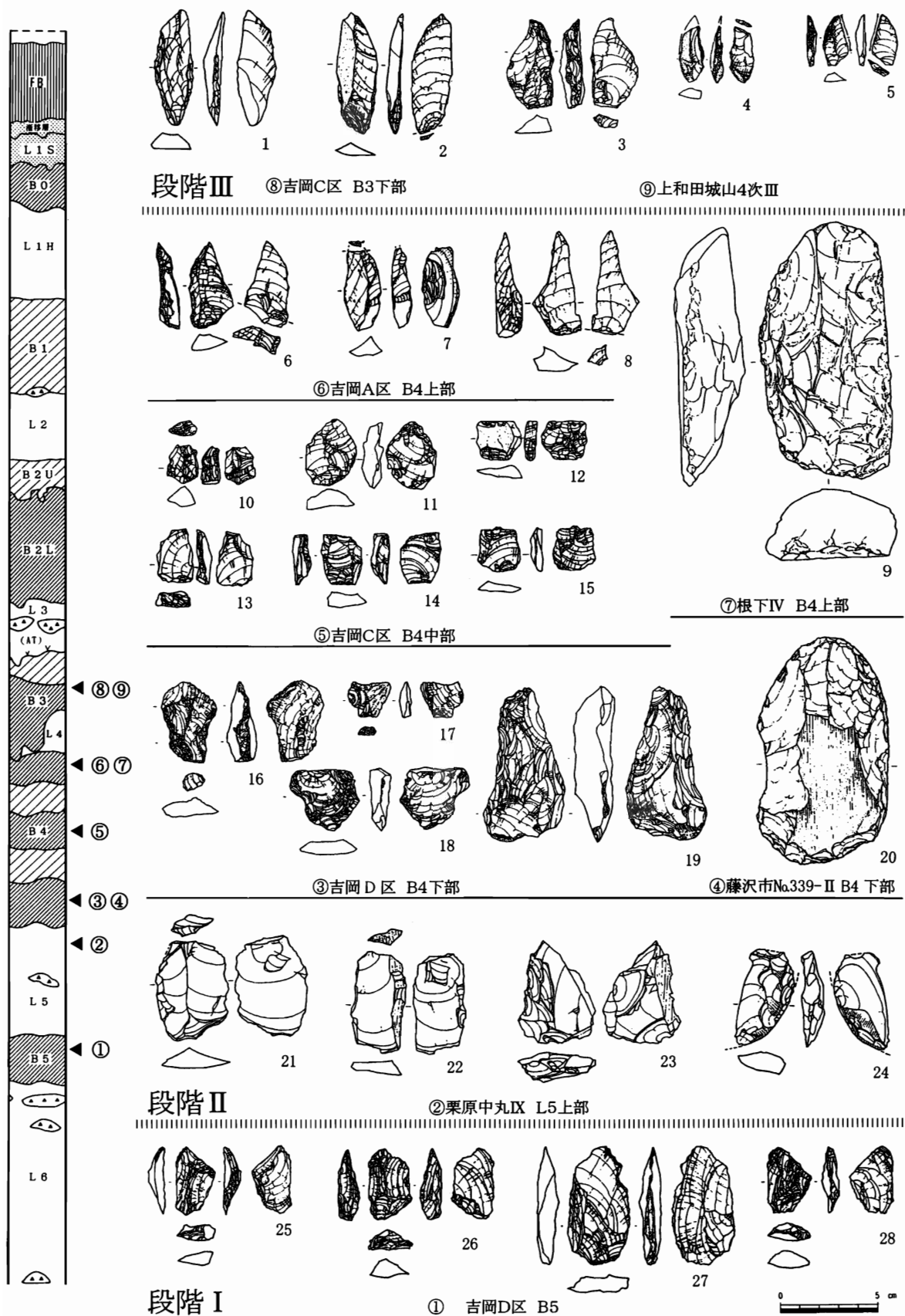
本段階はL5上部~B4上面までとし、台形様石器と基部加工ナイフ形石器、局部磨製石斧を特徴とする。二側縁加工ナイフ形石器は明確には認められていない。剥片剥離技術は栗原中丸例などにより石刃・縦長剥片剥離技術の存在が確認されており、横長・幅広剥片剥離技術の両者が認められる段階と捉える。石材はチャートが特に多い段階であるが、検出された石器群も少ないため今後の資料の増加によって様相は変わる可能性があると考えている。

##### ②栗原中丸遺跡第IX文化層(第4図21~24)

出土層位はL5上部でチャート製のやや寸詰まりではあるが石刃・縦長剥片(21・22)、削器(23)、局部磨製石斧(24)が出土している。

##### ③吉岡遺跡群D区B4下部(第4図16~19)

出土層位はB4下部で畑宿産黒曜石を素材とした台形様石器(16・17)、削器(18)、局部磨製石斧(19)



第4図 段階Ⅰ～段階Ⅲ石器群 (B5～B3下部出土)

が出土している。台形様石器は吉岡遺跡群B 5層と比べ調整加工が明瞭である。

④藤沢市No.339 遺跡第Ⅱ文化層 (第4図20)

出土層位はB 4下部で頁岩製の局部磨製石斧が2点出土している。

⑤吉岡遺跡群C区B 4中部 (第4図10～15)

出土層位はB 4中部でガラス質流紋岩、チャート、ガラス質黒色安山岩など多用な石材を素材とした粗雑な調整加工ではあるが、二側縁加工のナイフ形石器(10)、両極打法による楔形石器(11～15)搔器、削器などが出土している。石材の質が悪いせいか小型で粗雑な石器が多い。石刃・縦長剥片剥離は明確ではない。

⑥吉岡遺跡群A区B 4上部 (第4図6～8)

出土層位はB 4上部でガラス質黒色安山岩など素材とした一側縁加工ナイフ形石器(6)、台形様石器(7)基部加工ナイフ形石器(8)などが出土している。剥片剥離技術は縦長剥片剥離、横長剥片剥離ともに認められる。

⑦根下遺跡第Ⅳ文化層 (第4図9)

出土層位はB 4上部で基部加工ナイフ形石器と打製石斧(9)が出土している。

**段階Ⅲ**(相模野第Ⅱ期後半、武蔵野第Ⅰb期、武蔵野台地Ⅶ層)

本段階はB 3下部を中心とするが、B 4上部との判別はできない。縦長剥片に段階Ⅱから続く基部加工や一側縁のナイフ形石器に加え、二側縁加工ナイフ形石器に特徴づけられる段階である。台形様石器は平坦加工から急斜なブランディングへと調整加工に変化がみられる。

⑧吉岡遺跡群C区B 3下部 (第4図1・2)

出土層位はB 3下部上面で、ナイフ形石器と台形様石器など楔形石器、彫器などが出土している。石材は黒曜石は少なく、硬質細粒凝灰岩やガラス質黒色安山岩が多い。ナイフ形石器は基部加工(1・2)が主体である。石斧未製品も認められることから、B 3下部まで石斧が伴う層準と捉えることができる。接合資料は少ないが、石刃・縦長剥片剥離技術が特徴的に認められる。

⑨上和田城山遺跡第4次第Ⅲ文化層 (第4図3～5)

出土層位はB 3下部で、一側縁加工ナイフ形石器(3～5)が特徴的に出土している。

**段階Ⅳ**(相模野第Ⅱ期後半、武蔵野第Ⅰc期、武蔵野台地Ⅵ層～Ⅴ層下部)

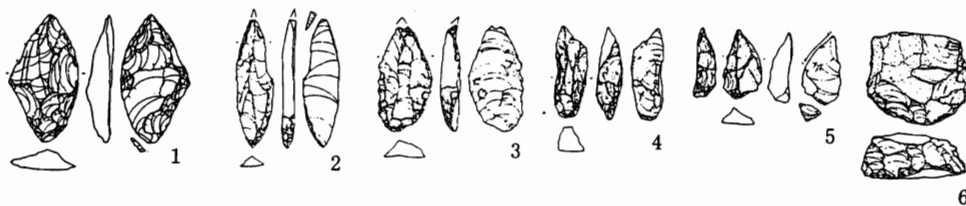
本段階はB 3上部～B 2L下部まで、AT層、S 1 S層を挟んだ上層までが相当する。二側縁加工のナイフ形石器とそれを量産するための石刃技法が強固な結びつきを持つ段階である。円形搔器は本段階後半に位置づけられる慶応SFC遺跡第Ⅴ文化層に認められる。石材は黒曜石が多用されるが、信州産だけではなく、伊豆柏峠産、箱根畑宿産も用いられる。

⑩寺尾遺跡第Ⅵ文化層 (第5図35～41)

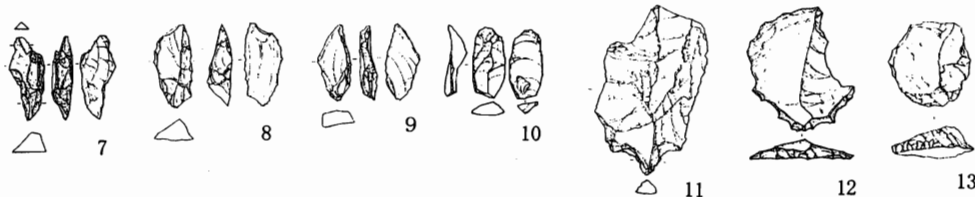
出土層位はB 3層上部で、黒曜石製ナイフ形石器が多量に出土している。二側縁加工ナイフ形石器がほとんどを占める(35～39)。錘器(40)や搔器(41)も認められる。黒曜石は信州産が主体ではあるが、伊豆柏峠産も一定量認められる。剥片剥離技術は石刃技法である。

⑪慶応SFC遺跡第Ⅴ文化層 (第5図29～34)

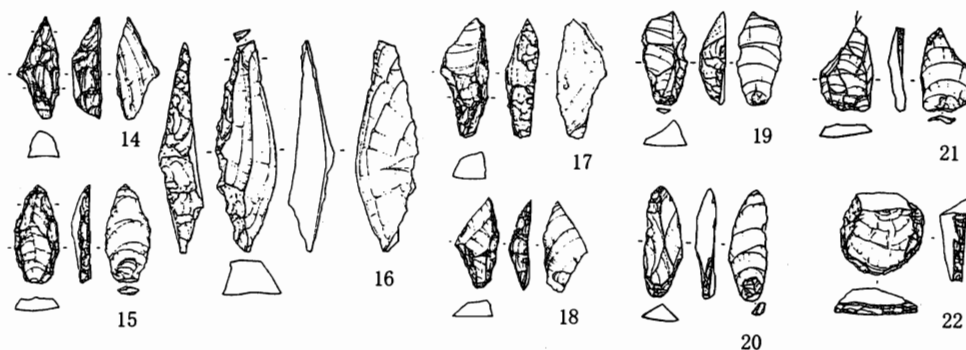
出土層位はB 2L下部で、黒曜石製ナイフ形石器が多量に出土している。二側縁加工ナイフ形石器がほとんどを占めるが(29～31)、基部加工(32)も認められる。楔形石器(33)や円形搔器(34)がこの層位から第認められようになる。黒曜石は箱根畑宿産が主体ではある。剥片剥離技術は石核調整を丁寧に施す両設打面



⑮ 県営高座渋谷団地内V B2U中部



⑭ 柏ヶ谷長ヲサVI B2L上面

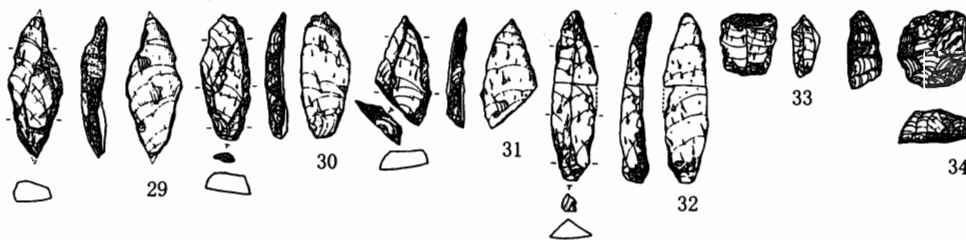


⑬ 柏ヶ谷長ヲサIX B2L中部



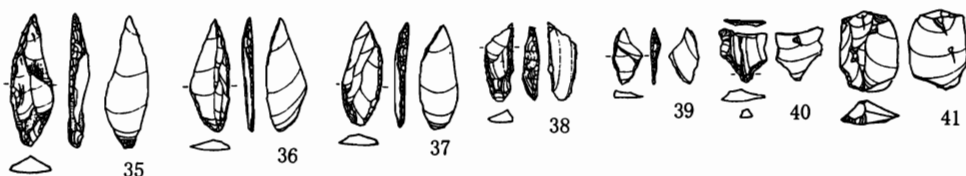
段階V

⑫ 柏ヶ谷長ヲサX B2L下部



AT

⑩ 慶応SFCV B2L下部



段階IV

⑨ 寺尾VI B3上部



第5図 段階IV・段階V石器群 (B3上部~B2U)

の石核で典型的な石刃技法である(服部 1992)。

**段階V**(相模野第Ⅲ期、武蔵野第Ⅱa期、武蔵野台地V層上部～IV層中部)

本段階はB2L下部～B2Uまでで、切出形ナイフ形石器、角錐状石器、円形搔器が特徴的な段階である。量的には少ないが、国府型ナイフ形石器が前半期に、尖頭器が後半期に伴うようである。こうした器種組成の変化から、本段階の細分は可能であるが、本段階を通じての技術基盤は横長・幅広剥片剥離技術と鋸歯状の粗い調整加工である点が前後の段階との大きな違いである。石材は箱根畑宿産、伊豆柏峠産の黒曜石が全体を通じて多く、B2L上部～B2Uには信州産黒曜石も搬入されるようである。硬質細粒凝灰岩、ガラス質黒色安山岩、チャートと比較的近在地系の石材の比率が高い。

⑫柏ヶ谷長ヲサ遺跡第Ⅹ文化層(第5図23～28)

出土層位はB2L下部黒色帯上面で、角錐状石器(23)、ナイフ形石器(24～27) 搔器(28)などが出土している。ナイフ形石器は切出形ナイフ形石器が主体で(24)、基部加工ナイフ形石器も伴っている。

⑬柏ヶ谷長ヲサ遺跡第Ⅸ文化層(第5図14～22)

出土層位はB2L中部で、相模野台地最大規模の石器群の一つである。角錐状石器(14)、尖頭器(15)、国府型ナイフ形石器(16)、切出形ナイフ形石器(17～19)、基部加工ナイフ形石器(20)、彫器(21)、円形搔器(22)が出土している。石材構成は黒曜石、ガラス質黒色安山岩、硬質細粒凝灰岩の三者が主体を占める。黒曜石は箱根畑宿産及び伊豆柏峠産に加え、神津島産や高原山産もごく僅かであるが持ち込まれている。

⑭柏ヶ谷長ヲサ遺跡第Ⅵ文化層(第5図7～13)

出土層位はB2L上面で、切出形ナイフ形石器(7～9)、基部加工ナイフ形石器(10)、錐器(11)、削器(12) 円形搔器(13)が出土している。石材構成は畑宿産黒曜石が主体で、硬質細粒凝灰岩が続く。

⑮県営高座渋谷団地内遺跡第Ⅴ文化層(第5図1～6)

出土層位はB2U中部～下部で、尖頭器(1)、ナイフ形石器(2～6)、搔器(6)などが出土している。尖頭器はガラス質黒色安山岩製で平面形態は下九沢山谷遺跡第Ⅳ文化層の尖頭器と類似し、出現期の尖頭器と位置づけられる。

**段階Ⅵ**(相模野第Ⅳ期前半、武蔵野第Ⅱb期、武蔵野台地Ⅳ層中～上部)

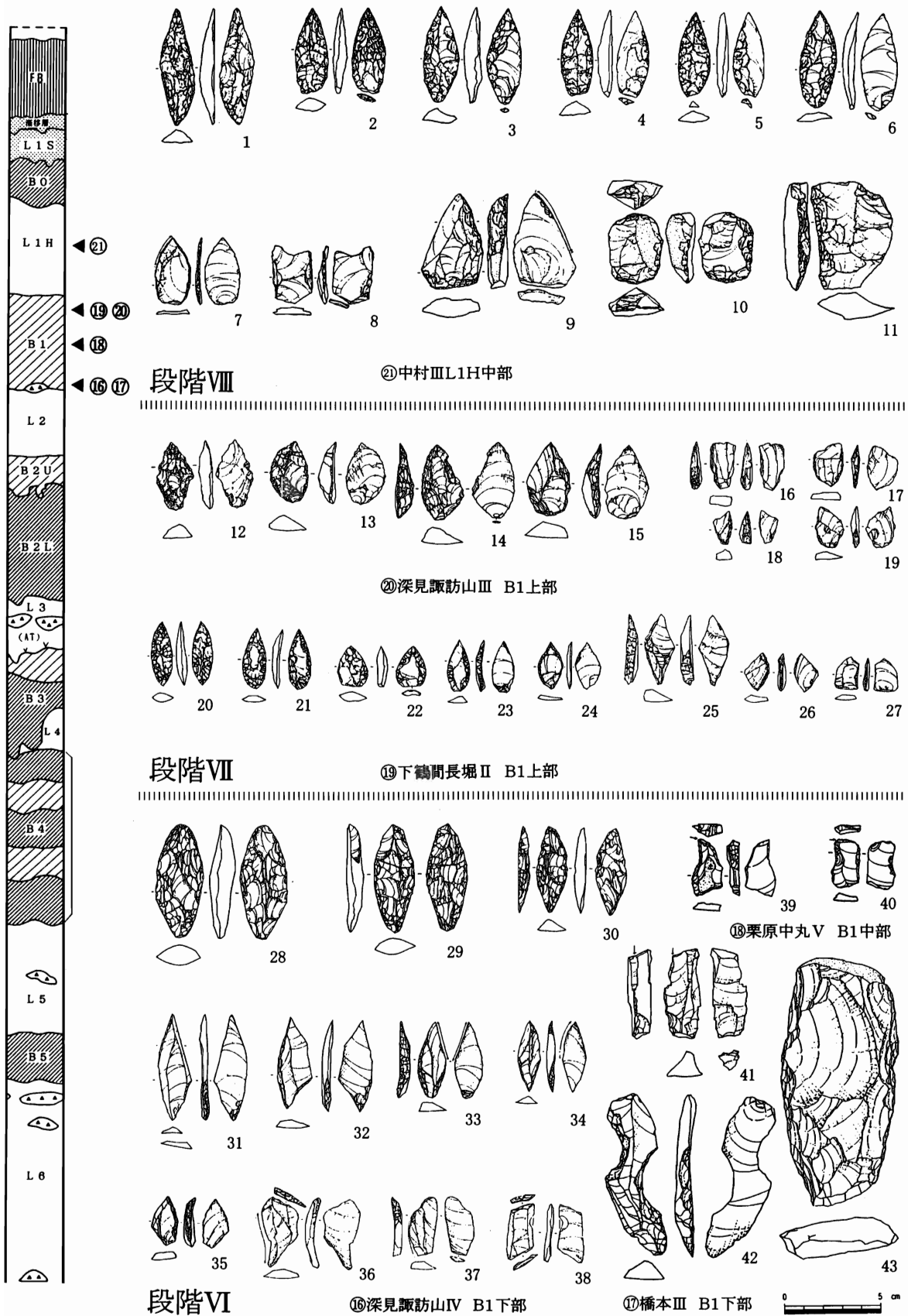
本段階はL2からB1中部までで、二側縁加工と部分加工のナイフ形石器、男女倉型有樋尖頭器が特徴的な段階である。他に先刃搔器、小坂型彫器、上ヶ屋型彫器、ノッチなどの特徴的な加工具類の存在も本段階の特徴である。ナイフ形石器をはじめ石器のほとんどが「砂川型刃器技法」と呼ばれる両設打面を典型とする石刃技法により製作される。南鍛冶山遺跡や本蓼川遺跡などでは、伊豆柏峠産黒曜石を素材とした単設打面石核の存在も認められる。石材構成は硬質細粒凝灰岩やチャートなどの在地石材が多用され、尖頭器には信州産黒曜石が主体に用いられている。また、箱根畑宿産はほとんど使われない段階である。

⑯深見諏訪山遺跡第Ⅳ文化層(第6図28～38)

出土層位はB1下部で、尖頭器(28～30)、ナイフ形石器(31～38)などが出土している。尖頭器は男女倉型有樋尖頭器で信州産黒曜石を素材としている。ナイフ形石器は二側縁加工ナイフ形石器(31～35)と部分加工ナイフ形石器(36～38)が特徴である。

⑰橋本遺跡第Ⅲ文化層(第6図41～43)

出土層位はB1下部で、尖頭器、二側縁加工と部分加工のナイフ形石器、彫器(41)、ノッチ(42)、先刃搔器、打製石斧(43)などが出土している。



第6図 段階Ⅵ～段階Ⅷ石器群 (B 1 下部～L 1 H 中部)

⑩栗原中丸遺跡第V文化層 (第6図 39・40)

出土層位はB 1 中部であるが、豊富なナイフ形石器や搔器、削器に加え、彫器がまとまって出土している。彫器は上ヶ屋型彫器と分類できるものである。この石材には黄玉石やメノウなどの特徴的な石材が用いられている。

段階Ⅶ (相模野第IV期後半、武蔵野第Ⅱb期、武蔵野台地IV層上部～Ⅲ層下部)

本段階はB 1 上部～上面までを出土層位とし、打面を残置する幅広の二側縁加工のナイフ形石器(下九沢山谷型)と小形幾何形ナイフ形石器が主体となり、二側縁加工のいわゆる茂呂型ナイフ形石器は小型化になる段階である。剥片剥離技術は両設打面の石刃・縦長剥片剥離技術は明確には認められず、90度の打面転位を繰り返すものや、幅広で寸詰まりの縦長剥片を剥離するものになる。石材構成は、多くの石器群が黒曜石を9割以上用いるという極めて石材が偏った段階といえる。箱根畑宿産の黒曜石を主体とする深見諏訪山Ⅲや中村Ⅳ、信州産の黒曜石を主体とし、尖頭器製作に主眼が置かれている下鶴間長堀遺跡第Ⅱ文化層、田名向原遺跡、根岸山遺跡など、さらに寺尾遺跡第Ⅲ文化層、台山遺跡第Ⅲ文化層等の尖頭器を含まない石器群も存在する。現在のところこれらの前後関係は不明である。

⑨下鶴間長堀遺跡第Ⅱ文化層 (第6図 20～27)

出土層位はB 1 上部で中型の両面加工(20・21)、小型で半両面から片面加工(22～24)の尖頭器、二側縁加工ナイフ形石器(25)や小形幾何形ナイフ形石器(26・27)が多く出土している。尖頭器は信州産黒曜石が使用されている。

⑧深見諏訪山遺跡第Ⅲ文化層 (第6図 12～19)

出土層位はB 1 上部で片面加工尖頭器(12・13)と下九沢山谷型ナイフ形石器(14・15)、小形幾何形ナイフ形石器(16～19)が出土している。石材は箱根畑宿産黒曜石でほとんどを占め、一部に伊豆柏峠産が使われる。

段階Ⅷ (相模野第V期前半、武蔵野第Ⅱb期、武蔵野台地Ⅲ層下部)

本段階はL 1 H中部を中心とする出土層位で、中型の尖頭器を主体とする段階である。尖頭器は両面加工、半両面加工、片面加工とバラエティーを持つが、両面加工のものが多い。大きさのバラエティーも顕著である。ナイフ形石器は各石器群に数点と極めて少ない。加工具類は大型の削器が伴う。剥片剥離技術は石材は前段階で主体を占めた黒曜石が激減し、代わってチャート、ガラス質黒色安山岩が主体となる。

⑦中村遺跡第Ⅲ文化層 (第6図 1～11)

出土層位はL 1 H中部で、多量の尖頭器(1～6)と若干のナイフ形石器(7～9)、搔器(10)、削器(11)などが出土している。尖頭器は幅広の縦長剥片を素材とし両面加工(1・2)、半両面加工(3・4)、片面加工(5)とバラエティーを持つが、サイズのばらつきは少なく4～6cmにはほぼ収まる。石材はチャートが主体となっている。

段階Ⅵ (相模野第V期後半、武蔵野第Ⅲ期、武蔵野台地Ⅲ層中部)

本段階はL 1 H上部～B 0 下部までに出土層位がある細石刃石器群である。石器組成は、細石刃核、細石刃、削器、錐器、礫器などで構成される。細石刃は黒曜石が用いられ、L 1 H上部の吉岡遺跡群B区、代官山遺跡第Ⅲ文化層では伊豆柏峠産黒曜石の小角礫を素材とした細石刃核がまとまって出土している。これらは代官山段階として相模野最古段階の細石刃石器群として位置づけられそうである。ただ、柏ヶ谷長ヲサ遺跡第Ⅳ文化層では「野岳・休場型」細石刃核に神津島産黒曜石が用いられており、層位的には最古段階を確



定できない。代官山や吉岡例は柏峠産黒曜石の原石の形状に適応した石器製作技術の姿を示していることも考えられる。黒曜石産地の変化と細石刃剥離技術との対応関係を編年的な指標にできそうではあるが、一方では慎重な姿勢をとることも必要である。本段階は尖頭器の共伴が不明確な段階として設定していたが、吉岡例は調整剥片が伴うことから共伴と認められる。段階IVに主体であった尖頭器が組成に残る段階と評価すれば吉岡遺跡群は最古の細石刃石器群ということもできる。

#### ②吉岡遺跡群第B区(第7図37～48)

層位はL1H上部で、細石刃核(37～39)、細石刃(40～47)、尖頭器(48)が出土した。細石刃核は「代官山型」で、伊豆柏峠産の小角礫を素材としている。剥離された細石刃は幅が狭く短い。尖頭器は両面加工で調整剥片とともに出土している。

#### ③月見野遺跡群上野遺跡第1地点第Ⅲ文化層(I群)(第7図25～36)

出土層位はB0下部で細石刃核(25～28)、細石刃(29～33)、錐器(34)、削器(35・36)などで構成される。細石刃核は「野岳・休場型」である。

#### 段階X(相模野第V期後半、武蔵野第Ⅲ期、武蔵野台地Ⅲ層中部)

本段階はB0中部～L1S上部までに出土層準を持つ細石刃石器群で、「野岳・休場型」に加え、「船野型」細石刃核が組成に加わることを特徴とする。細石刃核は段階IXよりも一回り大きく、細石刃も幅広で長くなる傾向がある。石器組成は単純で大型の削器が伴うことが多い。石材は「野岳・休場型」は黒曜石で、「船野型」は硬質細粒凝灰岩などの在在系石材を素材とする。削器などはガラス質黒色安山岩や硬質細粒凝灰岩である。

#### ④上草柳第遺跡第1地点第I文化層(第7図16～24)

出土層位はB0中部で、船野型(16)と野岳・休場型(17)細石刃核が共伴している。細石刃は段階IXに比べ幅、長さとも大きくなる(18～23)。これは硬質細粒凝灰岩などの石材の変化とも連動した変化と捉えられる。

#### 段階XI(縄文時代草創期初頭、武蔵野第Ⅳ期、武蔵野台地Ⅲ層上部)

本段階はL1S中部～漸移層までに出土層位を持ち、尖頭器、搔器、削器、石斧などに削片系細石刃核、細石刃が共伴する段階である。また、隆起線土器以前の最古段階の土器群が共伴する段階でもある。尖頭器は両面加工の中型～大型品である。石斧は御子柴型石斧の範疇に入る特徴的な形態のものが認められる。石材は黒曜石がほとんど使われなくなり、ガラス質黒色安山岩、硬質細粒凝灰岩などの石材が多用される。本段階は神子柴・長者久保系石器群として捉えられるもので、縄文時代草創期初頭に位置づけられる。

#### ⑤長堀北遺跡第Ⅱ文化層(第7図8～15)

出土層位はL1S中部であり、本段階の石器群の中では最も下層から出土している(小池1996)。

削片系細石刃核(8・9)、細石刃(10～12)、尖頭器(13～15)などによって構成され、有舌尖頭器の共伴の可能性がある。土器は出土していないが、共伴する段階の石器群と考えられる。

#### ⑥寺尾遺跡第I文化層(第7図7)

出土層位はL1S上部で多量と尖頭器、搔器、削器、石斧、舟底形石器などが出土している。土器は口縁部に肥厚する段部を持つ押圧文系土器の一種である。

#### 段階XII(縄文時代草創期)

本段階は漸移層～富士黒土層下部に出土層位を持ち、有舌尖頭器、打製石斧などに隆起線土器群と共伴



第7図 段階IX~段階XII石器群(L1H上部~FB下部)

する段階である。石鏃は花見山遺跡、三ノ宮下谷戸遺跡など相模野台地周辺部の大規模な遺跡での共伴は認められるものの、台地内では明確な共伴事例は少ない。本段階も黒曜石の使用は少なく、チャートを主体とした石材である。

#### ㊸月見野遺跡群上野遺跡第1 地点第I 文化層 (第7図1～6)

出土層位は富士黒土層下部で隆起線文土器(1)、有舌尖頭器(2・3)、搔器(4)、削器(5)、打製石斧(6)などで構成される。

## 4. 相模野旧石器編年の展望

相模野台地の石器群を段階I～段階XIIまでを通してその変遷を考えたとき、どこで区分できるのか。その画期と前後の繋がりを考えることは重要である。その時の視点として、ナイフ形石器、尖頭器、細石刃という主要な器種の出現や消滅、器種内での形態組成の消長や組み合わせの変化、そして、それらを製作する剥片剥離技術や調整加工技術などの技術基盤の構造的な変化をどう読みとるのかで、編年区分に違いがでてくる。筆者としては相模野の石器群の変遷観は、段階Iと段階IIについては今後の資料の増加によって、変更の可能性が残されるが、段階区分の枠組みそのものを変更することは今後ともないものと予測している。しかしながら、石器群の変化から当時の人間の諸活動を探る時には、石器群を区分された段階に当て込む手法は通用しないであろうし、さらに段階内での細かい時期区分を基に議論が行われなければならない。今回提示した①～㉗までの27の石器群は、各層位を下部、中部、上部と区分した際におおよそ22の層位から出土したものである。相模野ではこれら以外の出土層位もあわせると30～35の文化層として出土層位が確認できるだろう。こうしてみると、石器群が集中する層位と散漫或いはほとんど出土しない層位があることを知ることができる。石器のでない層位は人がいないか、一瞬の火山灰降下により地層が形成されたかのどちらかであろう。火山灰層序学との連携によって解き明かしたい問題である。段階V石器群(相模野第III期)の時期には、南関東への遺跡の集中し、北関東の遺跡の消滅に近い状況が把握されている。こうした意味でも精緻な編年研究と同時に地域的な広がりを考える作業は積み重ねていかなければならない。そこから、相模野に居住した相模野人の具体的な動態に迫ることができるのであろう。

もう一つ、通史的にみると段階毎に石材構成が大きく変化していることが指摘できる。石器群の構造的な変化と石材構成の変化は強い相関関係があり、石器群構造は石材までもその構造化に取り込んだシステムであるといえる。具体的には段階IVにおける信州産黒曜石と伊豆柏峠産黒曜石の関係や段階VIIにおけるの硬質細粒凝灰岩やチャートでのナイフ形石器の製作と信州産黒曜石と有樋尖頭器との結びつき、段階VIIでの下九沢山谷型ナイフ形石器と畑宿産黒曜石、尖頭器と信州産黒曜石、段階IX以降の細石刃石器群での伊豆柏峠産→信州・神津島産→硬質細粒凝灰岩・ガラス質黒色安山岩への変化、段階XI・XIIでの黒曜石の激減など、特に黒曜石の搬入状況と在地系石材との関係が指摘できる。その一部はAT降灰前後の石器群の検討を通して「相模野石材圏」を設定し行動領域についての検討を行っているが(諏訪問 1997)、時期毎に変化する石材構成から「相模野的石材構成」の強固な時期、緩む時期などを検討しつつ、当時の人の具体的な行動に迫りたいものである。その意味で、昨年、実施されたシンポジウム「砂川」では、そうした実践が南関東全域で展開され、地域性研究の新しい展開をみせているし(石器文化研究会編 2000a・2000b)、相模野第II期の再検討で行われた「石器原料の入手・消費からみた相模野台地における遺跡構造の変遷」を通時代的に実践することによって、これまでの石器組成や剥片剥離を構造的に捉える編年から、石材消費と補給やその遺

跡形成のあり方などの違いによる新しい編年体系へと進むことができるかもしれない(矢島・野口他 1997)。

今後の編年研究は、さらに細かい時期区分が行われることであろうが、一方では石器群の構造から遺跡構造の違いを通して、人間活動の全てを包括するするような社会構造の変化を編年するという方向を模索しなければならないと考えている。その意味で、相模野旧石器編年の到達点は「石器群構造編年」であり、今後の展望としては、「遺跡構造編年」そして「社会構造編年」へと向かうべきであろうと考える。

その一方で、AMS法による世界共通の時間軸(年代観)を取り入れ、世界的に整備が進みつつある地球環境変動との対比を行うことである。そうすれば、日本列島のごく狭い地域である相模野を世界の人類紀の中に位置づけることも可能になるのでは、と考える。

相模野編年の到達点はまだまだ遠いが、新たな人類史の構築(小野 1998)をめざし、相模野編年の研究の初期に目指していた第四紀総合編年(小野・鈴木 1972)を目指すべきであろうと考える。

そのための用意として、先のAMS法による「高精度年代革命」と膨大な石器データを取り込み解析するための「IT革命」の波が押し寄せているのだから。

本稿は「相模野旧石器編年の到達点にはほど遠い」というタイトルに変更したいところだが、そうもいかないのでこのまま提出する。日頃からの不勉強を反省しつつ、パソコンのキーボードを閉じることにする。

本稿を草するにあたり、白石浩之、中村喜代重、鈴木次郎、織笠 昭、御堂島 正、砂田佳弘、麻生順司、西井幸雄、伊藤 健、小池 聡、堤 隆、栗原伸好、吉田政行、大塚健一の各氏、石器文化研究会の各氏には日頃からのご教示・ご協力を賜っている。図版作製には井上由美子氏にご協力いただいた。こうした方々に末筆であるが謝意を表したい。

## 追記

昨年11月に発覚した前期旧石器時代遺構捏造は、我が国の旧石器時代研究にとってこれまでに経験したことのない重大な事件であった。私は、相模野台地を主要な研究テーマにしていることもあり、前中期旧石器について詳細な検討を行ったことはないが、これまでにいくつかの研究動向や書評の中で紹介したことがある。自分自身で資料の十分な検討を行わず論評をした点は、反省すべきであり責任を感じている。

捏造発覚後に会津若松市で開催された「東北の旧石器文化を語る会」での資料検討会に参加し、石器を観察した結果、残念ながら微かに抱いていた「淡い期待」は崩れ去った。石器の形態、風化の度合い、押圧剥離と加熱処理の痕跡など多くの点で、縄文時代の石器との区別が付かなかつたのである。そこで指摘された「錆痕」や「黒土の付着」にも合点がいくのである。捏造が何時からであったのかは现阶段では明らかではないが、「灰色」の資料を基に研究はできないし、座散乱木遺跡の発掘以降に新しく始まった日本の前中期旧石器時代研究は出直しが必要であろう。

斜軸尖頭器から初期台形様石器への移行など、中期から後期旧石器時代への移行の問題なども、これまでの研究は宮城県を中心とした資料を基に進んできた経緯がある。関東地方の後期旧石器時代の始原期の議論にも大いに関係があるのである。北海道や九州での中期旧石器段階に相当する石器群の存在は指摘されているが、これまでに発掘調査が行われ、報告書として公表されている資料のうち、確実な層位から出土した最も古い石器群は何があるだろうか。そう考えた時、少なくとも筆者がフィールドにしている相模野や関東では相模野台地B5層、武蔵野台地X層下部など立川ローム基底部の石器群しかないのである。まずは、後期旧石器時代の始原期に位置するこうした石器群の検討から始めなければならないのは必然なのである。

この考古学講座が終わったら、相模野をはじめ武蔵野、下総、愛鷹・箱根、北関東と立川ローム層基底部の石器群の再

検討を行いたいと考えている。それが、昨年起こった事件に対して、石器研究者の一人として私の取れる行動の一つであると信じるからであり、説明責任の一端を果たしたいと思う私のささやかな気持なのである。

#### 引用・参考文献

- 芹沢長介 1954 「関東及び中部地方における無土器文化の終末と縄文文化の発生に関する予察」『駿台史学』4
- 岡本勇・松沢亜生 1965 「相模野台地における関東ローム層中遺跡群の研究」『物質文化』6
- 杉原荘介編 1965 『日本の考古学』1 先土器時代
- 戸沢充則 1965 「先土器時代における石器群研究の方法」『信濃』17-4
- 戸沢充則 1968 「埼玉県砂川遺跡の石器文化」『考古学集刊』4-1
- 佐藤達夫 1969 「ナイフ形石器の編年的一考察」『東京国立博物館 紀要』5
- 明治大学考古学研究室・月見野遺跡群調査団 1969 『概報月見野遺跡群』
- 小林達雄・小田静夫・羽鳥謙三・鈴木正男 1971 「野川先土器時代遺跡の研究」『第四紀研究』10-4
- 相模考古学研究会編 1971 『先土器時代遺跡分布調査報告書 相模野篇』
- 小野正敏・鈴木次郎編 1972 『小園前畑遺跡発掘調査報告書』綾瀬町文化財調査報告書 第1集
- 白石浩之 1973 「茂呂系ナイフ形石器の細分と変遷に関する一試論」『物質文化』21
- 白石浩之 1974 「尖頭器出現過程における内容と評価」『信濃』26-1
- 鈴木次郎・矢島國雄編 1974 『地藏坂遺跡発掘調査報告書』綾瀬町文化財調査報告書 第2集
- 矢島國雄・鈴木次郎 1976 「相模野台地における先土器時代研究の現状」『神奈川考古』1
- 鈴木次郎・矢島國雄 1978 「先土器時代の石器群とその編年」『日本考古学を学ぶ』1
- 鈴木次郎・矢島國雄 1979 「神奈川県綾瀬市報恩寺遺跡の細石刃石器群」『神奈川考古』6
- 神奈川考古同人会編 1979 「特集ナイフ形石器文化終末期の問題」『神奈川考古』7
- 白石浩之・鈴木次郎 1979 『寺尾遺跡』神奈川県埋蔵文化財調査報告書 18
- 中村喜代重 1979 「神奈川県相模原市下九沢山谷遺跡の石器群」『神奈川考古』7
- 小田静夫 1980a 「広域火山灰と先土器時代の編年—特にATについて—」『史館』11
- 小田静夫 1980b 「武蔵野台地に於ける先土器文化」『神奈川考古』8
- 神奈川考古同人会編 1980 「特集ナイフ形石器文化終末期の問題 (II)」『神奈川考古』8
- 鈴木次郎 1980 「第VI文化層」『寺尾遺跡』神奈川県埋蔵文化財調査報告書 18
- 神奈川考古同人会編 1982 『シンポジウム南関東を中心としたナイフ形石器文化の諸問題<資料>』
- 岡本孝之・鈴木次郎他 1983 『早川天神森遺跡』神奈川県立埋蔵文化財センター調査報告 2
- 神奈川考古同人会編 1983 「シンポジウム 南関東を中心としたナイフ形石器文化の諸問題」『神奈川考古』16
- 白石浩之 1983 「考古学と火山灰層序」『第四紀研究』23-4
- 中村喜代重他 1983 『先土器時代 海老名市柏ヶ谷長ヲサ遺跡発掘調査報告書』柏ヶ谷長ヲサ遺跡調査団
- 諏訪間順 1983 「神奈川県相模原市長久保遺跡採集の石器」『神奈川考古』15
- 諏訪間順・堤隆・榎田誠他 1983 『深見諏訪山遺跡』大和市文化財調査報告書第14集
- 大上周三・鈴木次郎 1984 『栗原中丸遺跡』神奈川県立埋蔵文化財センター調査報告 3
- 金山喜昭・土井永好他 1984 『橋本遺跡 先土器時代編』

- 鈴木次郎 1984「細石器(本州地方)ー関東・中部南部を中心にー」『季刊考古学』4
- 諏訪間順・堤隆 1985「神奈川県大和市深見諏訪山遺跡第IV文化層の石器群について」『旧石器考古学』30
- 砂田佳弘他 1986『代官山遺跡』神奈川県立埋蔵文化財センター調査報告 11
- 麻生順司 1987『藤沢市大庭根下遺跡発掘調査報告書』根下遺跡発掘調査団
- 伊藤恒彦 1987『中村遺跡』中村遺跡調査団
- 織笠 昭 1987a「相模野尖頭器文化の成立と展開」『大和市史研究』13
- 織笠 昭 1987b「殿山技法と国府型ナイフ形石器」『考古学雑誌』72-4
- 堤 隆 1987「相模野台地の細石刃石核」『大和市史研究』13
- 織笠 昭 1988「角錐状石器の形態と技術」『東海史学』22
- 佐藤宏之 1988「台形様石器研究序論」『考古学雑誌』73-3
- 鈴木次郎・矢島國雄 1988「先土器時代の石器群とその編年」『新版 日本考古学を学ぶ(1)』
- 砂田佳弘 1988「相模野の細石器ーその発生と展開に向けてー」『神奈川考古』24
- 諏訪間順 1988「相模野台地における石器群の変遷についてー層位的出土例の検討による石器群の段階的把握ー」『神奈川考古』24
- 諏訪間順 1989「ナイフ形石器文化の終焉と尖頭器文化の成立」『旧石器考古学』38
- 諏訪間順 1989「相模野台地における尖頭器の様相」『長野県考古学会誌』59・60
- 織笠 昭 1989「尖頭器文化とは何かー文化・考古学的文化・石器文化ー」『長野県考古学会誌』59・60
- 白石浩之 1989『旧石器時代の石槍』 東京大学出版会
- 石器文化研究会編 1989『石器文化研究』1
- 伊藤 健 1990「ナイフ形石器文化の画期と変容」『物質文化』54
- 金山喜昭 1990「始良 Tn 火山灰降下期における黒耀石石器群」『國學院大学考古学資料館紀要』6
- 石器文化研究会編 1990『石器文化研究』2
- 砂田佳弘 1990「ナイフ形石器と細石器の分布」『神奈川県下における主要遺跡の分布と問題点 かながわの考古学』1
- 伊藤 健 1991「ナイフ形石器の変移と変遷」『研究論集』X 東京都埋蔵文化財センター
- 伊藤 健 1991「ナイフ形石器研究の視座と定点」『東海史学』
- 織笠 昭 1991「先土器時代人の生活領域ー集団移動と領域の形成ー」『日本村落史講座』6
- 西井幸雄 1991「南関東地方における武蔵野台地第IV下層～第VI層のナイフ形石器」『埼玉考古学論集』埼玉県埋蔵文化財事業団
- 諏訪間順 1991「AT 降灰の石器文化に与えた影響」『立正史学』69
- 諏訪間順 1991「細石刃石器群を中心とした石器群の変遷に関する予察」『中ッ原第5遺跡B地点の研究』
- 石器文化研究会編 1991『石器文化研究3 シンポジウム AT 降灰以前の石器文化ー列島内の様相と対比ー』
- 堤 隆 1991「相模野細石刃文化における石器装備の構造」『大和市史研究』17
- 織笠 昭 1992「南関東における国府型ナイフ形石器の受容と変容」『海老名市史研究』4
- 織笠 昭 1992「茂呂系ナイフ形石器型式論」『東北文化論のための先史学・歴史学論集』
- 佐藤宏之 1992『日本旧石器文化の構造と進化』柏書房
- 石器文化研究会編 1992『石器文化研究』4
- 服部隆博 1992「ナイフ形石器の型式学的基礎研究ー特に始良 Tn 火山灰降灰前後のナイフ形石器を対象としてー」『考

## 古論叢神奈河』1 神奈川県考古学会

- 織笠明子 1993 「スクレイパー刃部の形態的研究」『大和市史研究』19
- 織笠 昭 1993 「石器に見る文化との出会い—先土器時代の柏ヶ谷長ヲサ遺跡から—」『海老名市史研究』5
- 島立 桂 1993 「相模野台地における槍先形尖頭器と細石刃の展開」『潮見浩先生退官記念論文集』
- 諏訪間順 1993 「相模野台地における細石刃石器群と尖頭器」『細石刃文化研究の新たな展開』II
- 砂田佳弘 1994 「相模野細石器の出現—器種変遷と石材流通—」『國學院大學考古学資料館紀要』10
- 砂田佳弘 1994 「相模野細石器の変遷」『神奈川考古』30
- 堤 隆 1994 「細石刃はどのように使われたか？」『大和市研究』20
- 織笠 昭ほか 1990 「細石器文化・縄文時代草創期文献目録」『神奈川考古』26
- 上本進二・上杉陽・由井将雄・米澤宏・中村喜代重 1994 「南関東の立川ローム層と考古学土層」『神奈川考古』30
- 織笠 昭 1994 「時を紡ぐ人たち—岩宿石器文化の編年付けとその変遷—」『第2回岩宿フォーラム/シンポジウム群馬の岩宿時代の変遷と特色予稿集』 笠懸野岩宿文化資料館・岩宿フォーラム実行委員会
- 小池 聡他 1994 『上和田城山遺跡第4次調査』大和市上和田城山遺跡調査会
- 鈴木次郎 1994 「南関東地方の様相」『第2回岩宿フォーラム/シンポジウム群馬の岩宿時代の変遷と特色予稿集』 笠懸野岩宿文化資料館・岩宿フォーラム実行委員会
- 諏訪間順 1995 「関東地方におけるAT上位石器群の変遷」『静岡県考古学会シンポジウムIX 愛鷹・箱根山麓の旧石器時代編年予稿集』静岡県考古学会
- 野口 淳 1995 「武蔵野台地IV下・V上層段階の遺跡群—石器製作の工程配置と連鎖の体系—」『旧石器考古学』51
- 栗原伸好・畠中俊明・大塚健一・井関文明・加藤 学 1996 「V~IV層下部の石器群~相模野台地の様相~」『石器文化研究』5
- 小池 聡 1996 「第IV章 旧石器時代の調査」『神奈川県大和市県営高座渋谷団地内遺跡』
- 笹原芳郎 1996 「愛鷹・箱根(第3期について)」『石器文化研究』5 石器文化研究会
- 柴田 徹 1996 「V~IV下層段階の南関東における石器石材の採集地推定について」『石器文化研究』5
- 白石浩之他 1996 『吉岡遺跡群II』かながわ考古学財団調査報告 7
- 白石浩之 1996 「中期旧石器時代終末から後期旧石器時代にかけての石器群に対する新視点」『神奈川考古』32
- 砂田佳弘他 1996 『吉岡遺跡群I』かながわ考古学財団調査報告 6
- 諏訪間 順 1996 「V~IV下層段階の石器群の範囲—最終氷期寒冷期に適応した地域社会の成立—」『石器文化研究』5
- 石器文化研究会編 1996 「シンポジウムAT降灰以降のナイフ形石器文化」『石器文化研究』5
- 矢島國雄 1996 「第2章先土器時代」『綾瀬市史9 別篇 考古』
- 砂田佳弘 1997 「日本列島細石器文化の編年へ向けて」『九州の細石器文化細石器文化の開始と編年研究—』第22回九州旧石器文化研究会
- 諏訪間順 1997 「相模野台地の石器石材」『第5回岩宿フォーラム/シンポジウム予稿集 石器石材II』 笠懸野岩宿文化資料館・岩宿フォーラム実行委員会
- 望月明彦・堤 隆 1997 「相模野台地の細石刃石器群の黒曜石利用に関する研究」『大和市史研究』23
- 諏訪間順・堤 隆 1997 「柏ヶ谷長ヲサ遺跡における旧石器時代石器群」『柏ヶ谷長ヲサ遺跡 柏ヶ谷長ヲサ遺跡調査団』
- 矢島國雄・野口淳・門内政広・吉川耕太郎 1997 「相模野第II期をめぐる諸問題(1)」『綾瀬市史研究』4
- 五十嵐 彰 1998 『慶応藤沢第V文化層こうもり編』の提唱—範囲と細分についてのコメントに代えて—『石器文化研

究』6

小野 昭 1998「新たな人類史のはじまり」『科学』68-1

織笠 昭 1998「第3章 先土器時代」『海老名市史 1 資料編 原始・古代』

織笠 昭 1998「先土器時代の限定形態と広域比較」『石器文化研究』6

かながわ考古学財団・神奈川県立埋蔵文化財センター1998『公開セミナー記録集「用田バイパス関連遺跡群ローム層中出土の炭化材」「旧石器時代の住居遺構を探る」』

島田和高 1998「中部日本南部における旧石器地域社会の一様相」『駿台史学』101号

白石浩之他(旧石器時代研究プロジェクト) 1998「旧石器時代後半における石器群の諸問題—L3層からB3層の石器群の様相—」『かながわの考古学 研究紀要』3

白石浩之 1998「細石器文化の諸問題—原料・技術・分布—」『九州の細石器文化—九州島における細石器文化の石器と技術—』第23回九州旧石器文化研究会

石器文化研究会編 1998「記録・論評・回答集シンポジウムA.T降灰以降のナイフ形石器文化」『石器文化研究』6

諏訪間順 1988「相模野台地におけるA.T降灰前後の石器石材について」『列島の考古学 渡辺誠先生還暦記念論集』

西井幸雄 1998「V~IV下層段階の範囲と細分の可能性」『石器文化研究』6

矢島國雄・野口淳・門内政広・吉川耕太郎 1998「相模野第II期をめぐる諸問題(2)」『綾瀬市史研究』5

吉川耕太郎 1998「後期旧石器時代における石器原料の消費過程と石器石材に関する一考察」『旧石器考古学』56

織笠明子 1999「石器石材研究」『石器文化研究』7

栗原伸好 1999「相模野第III期と第IV期の間—相模野第III期・第IV期の石器群の連続性の存在に関する予察—」『神奈川考古』35

白石浩之他(旧石器時代研究プロジェクト) 1999「旧石器時代後半における石器群の諸問題—L4層以下の石器群の様相—」『かながわの考古学研究紀要』4

鈴木次郎 1999「寺尾・栗原中丸両遺跡の石器石材の再検討」『かながわの考古学 研究紀要』4

鈴木次郎 1999「第II部 旧石器時代研究の到達点と展望 編年論」『石器文化研究』7

諏訪間順 1999「第I部 列島各地域の研究結果と展望 関東地方」『石器文化研究』7

深澤幸江 1999「L1Hの細石器文化」『石器に学ぶ』2

田中裕子 1999「関東西南部における尖頭器文化成立についての一考察」『石器に学ぶ』2

白石浩之他(旧石器時代研究プロジェクト) 2000「旧石器時代における石器群の諸問題—新たな相模野編年の構築に向けて—」『かながわの考古学 研究紀要』5

鈴木次郎 2000「相模野台地におけるナイフ形石器文化の出現」『神奈川考古』36

砂田佳弘 2000「砂川時代の剥片剥離工程」『石器文化研究』9

諏訪間順 2000「砂川」の時間的枠組みと前後の変遷」『石器文化研究』9

石器文化研究会編 2000a「シンポジウム砂川—その石器群と地域性—資料集成南関東各地域の基礎的検討」『石器文化研究』8

石器文化研究会編 2000b「シンポジウム砂川—その石器群と地域性—予稿集」『石器文化研究』9

榊 剛史 2000「両面調整尖頭器の変遷観—相模野台地における検討—」『専修考古』8



## 相模野台地の立地と文化層

小池 聡

(盤古堂考古学研究所)

### はじめに

神奈川県の中東部に位置する相模野台地は、その供給源に近いという立地的特性から、台地上には厚い関東ローム層が堆積していることが知られている。調査された多くの遺跡で確認された文化層は発達したローム層にも助けられて、極めて良好に重層関係を持っていることが認められている。特にローム層上部に含まれている旧石器時代終末期の段階では、遺跡数・調査事例・検出状況などいずれをとっても編年研究に良好な資料を提供するフィールドとなっている。

相模野台地での旧石器時代研究は、1965年に報告された分布調査(岡本・松沢 1965)に端を発し、次いで1967年から相模考古学研究会による詳細な分布調査(相模考古学研究会 1971)が繰り返されたことによって、台地上に数多くの遺跡の存在が確認された。そのような状況の中で、目黒川の上流部である大和市月見野遺跡群の1968年から開始された調査(明治大学考古学研究室・月見野遺跡群調査団 1969)によって、複数の遺物集中地点や礫群が河川に沿って集中する遺跡群を形成しており、またそれらの遺物集中地点が礫群とともに層位的に重複して検出され、旧石器時代研究上の重要な事実が確認された。それ以後、相模野台地上の調査事例の増加に伴って相模野編年(矢島・鈴木 1978、諏訪間 1988 など)として結実する。

本稿では、相模野台地の地形的特徴と遺跡分布・遺跡立地、各遺跡のローム層序・遺跡間の層序対比・文化層についての諸問題に触れたい。

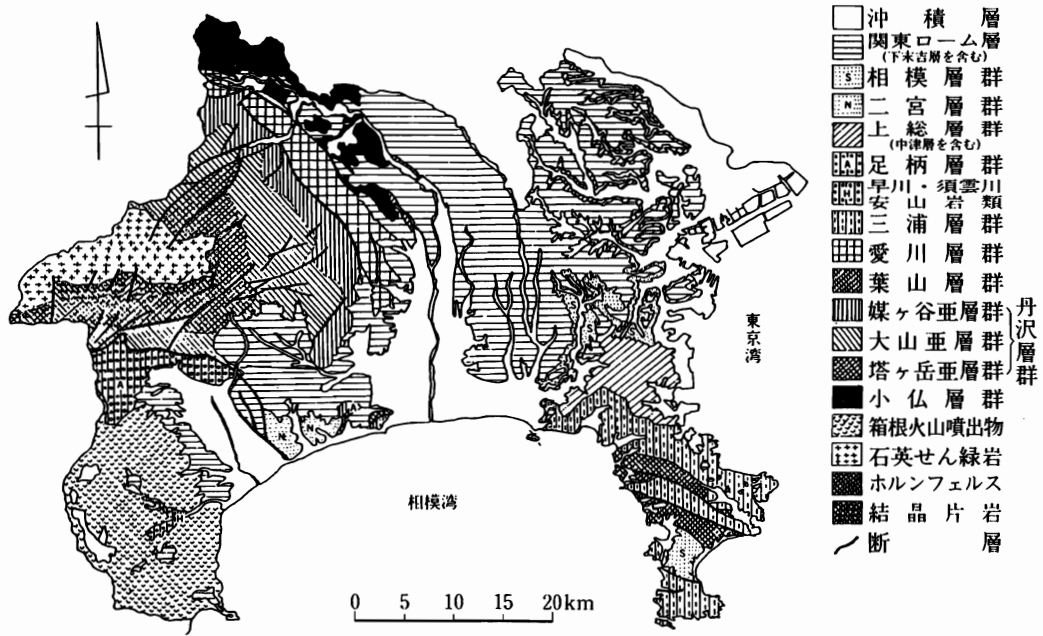
### 1. 相模野台地の地形的特徴

#### (1) 相模野台地の地形的特徴

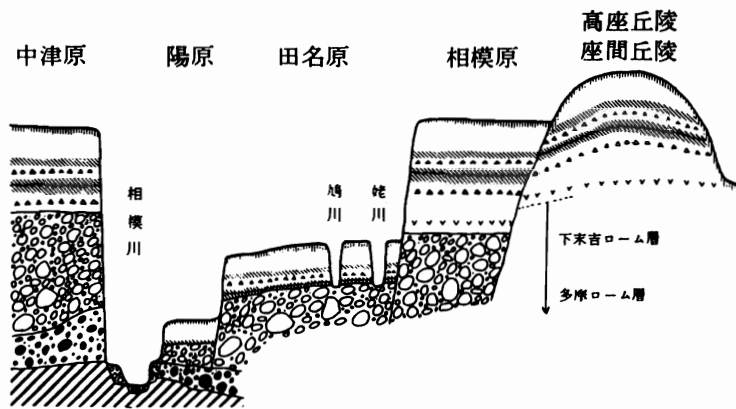
関東南部にあたる神奈川県は、南は東京湾・相模湾に面し、西には富士・箱根火山、北は丹沢山地と変化に富んだ地形を呈している。そのほぼ県中央部には、相模川によって形成された広大な沖積平野と相模野台地と呼ばれる洪積台地が展開する。この相模野台地上には富士・箱根火山を供給源とする発達した関東ローム層が堆積している。

相模野台地は、神奈川県ほぼ中央部を南流する相模川の左岸に形成された河成段丘であり、津久井郡城山町に始まり、北方・東方では境川によって画され多摩丘陵と接して、南方へ徐々に高度を減じながら藤沢市にいたる東西約10 km、南北約30 kmの広がりを持つ細長い広大な台地部及び相模川・目久尻川・引地川によって形成された丘陵部である。最も標高が高い北側部分の城山町では標高約150 m、南側部分で最も標高が低い部分では標高約40 mを測り、南北の比高差は約110 mである。

相模野台地は高位面から、座間丘陵・高座丘陵・相模原面・中津原面・田名原面・陽原面と呼ばれる高度の異なる6面の段丘面に区分されている。座間丘陵面は、座間Ⅰ面と座間Ⅱ面とに区分される。相模原面は、相模原面・S1・S2・S3とに区分される。区分されている6面の段丘面の内、台地中央部分の相模原面が最も広く相模野台地のほとんどを占めている。これらの段丘面には、相模川によって形成された段丘砂礫層や海進期に形成された海成砂礫層を覆って関東ローム層が堆積しており、離水した形成時期新しい低位段



第1図 神奈川県地質区分(織笠 1998より引用改変)



第2図 相模野台地の地形面層序模式図(白石 1992から引用改変)

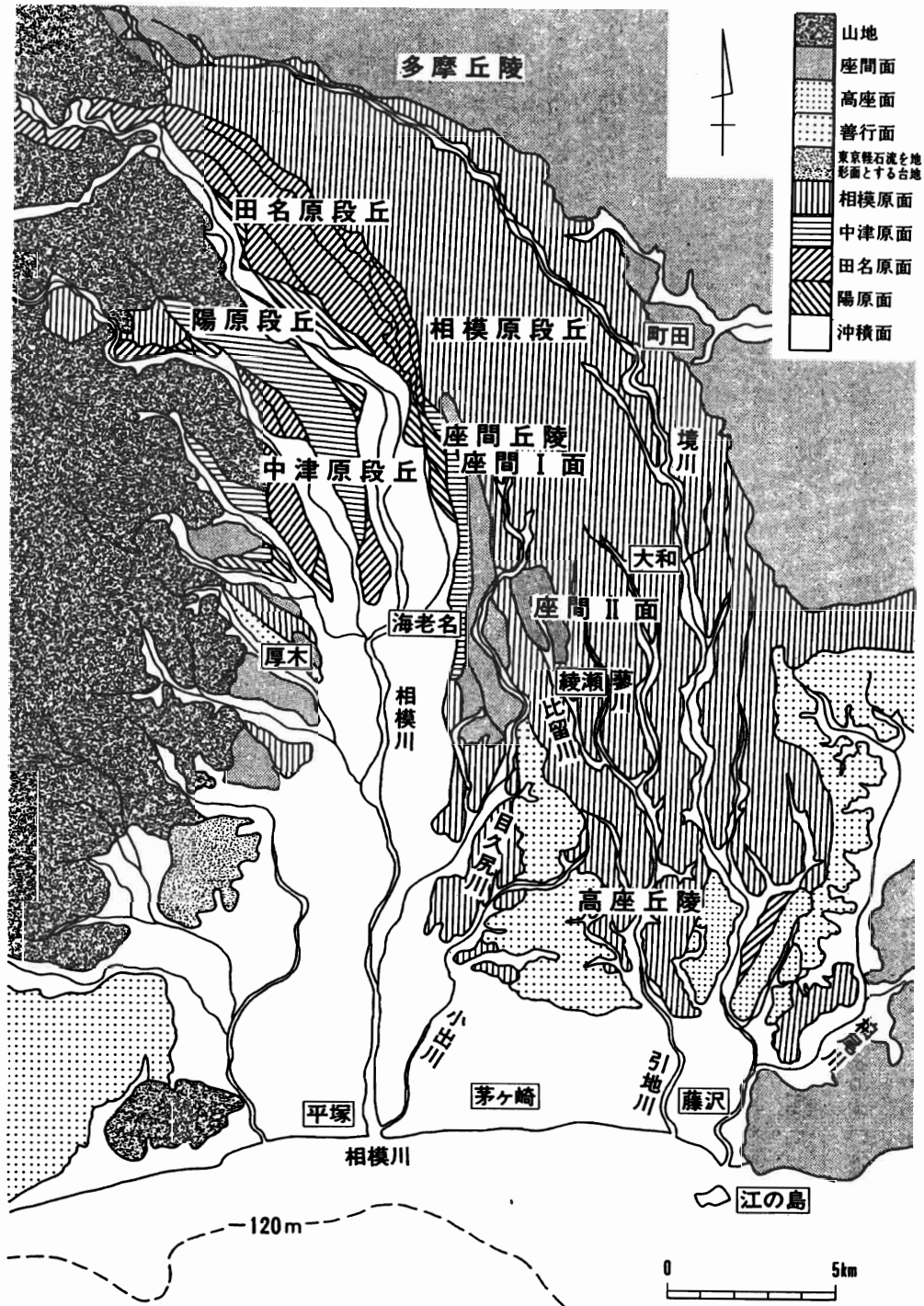
丘面では薄いローム層が堆積し、より古い段階に離水してローム層堆積の始まった高位の段丘面では厚いローム層の堆積が認められる。

相模野台地上は基本的に一部の丘陵部を除いて緩やかに南北に傾斜する広大な平坦面が形成されているが、その中でも台地を開析して南流する目久尻川・鳩川・姥川・比留川・蓼川・引地川・境川・目黒川の中小河川流域には、それらの中小河川によって形成される小支谷が発達し、台地頂部の広大で平坦な地形に比して複雑に入り組んだ地形を呈している。

(2) 構成する丘陵・各段丘面の形成時期と堆積ローム層

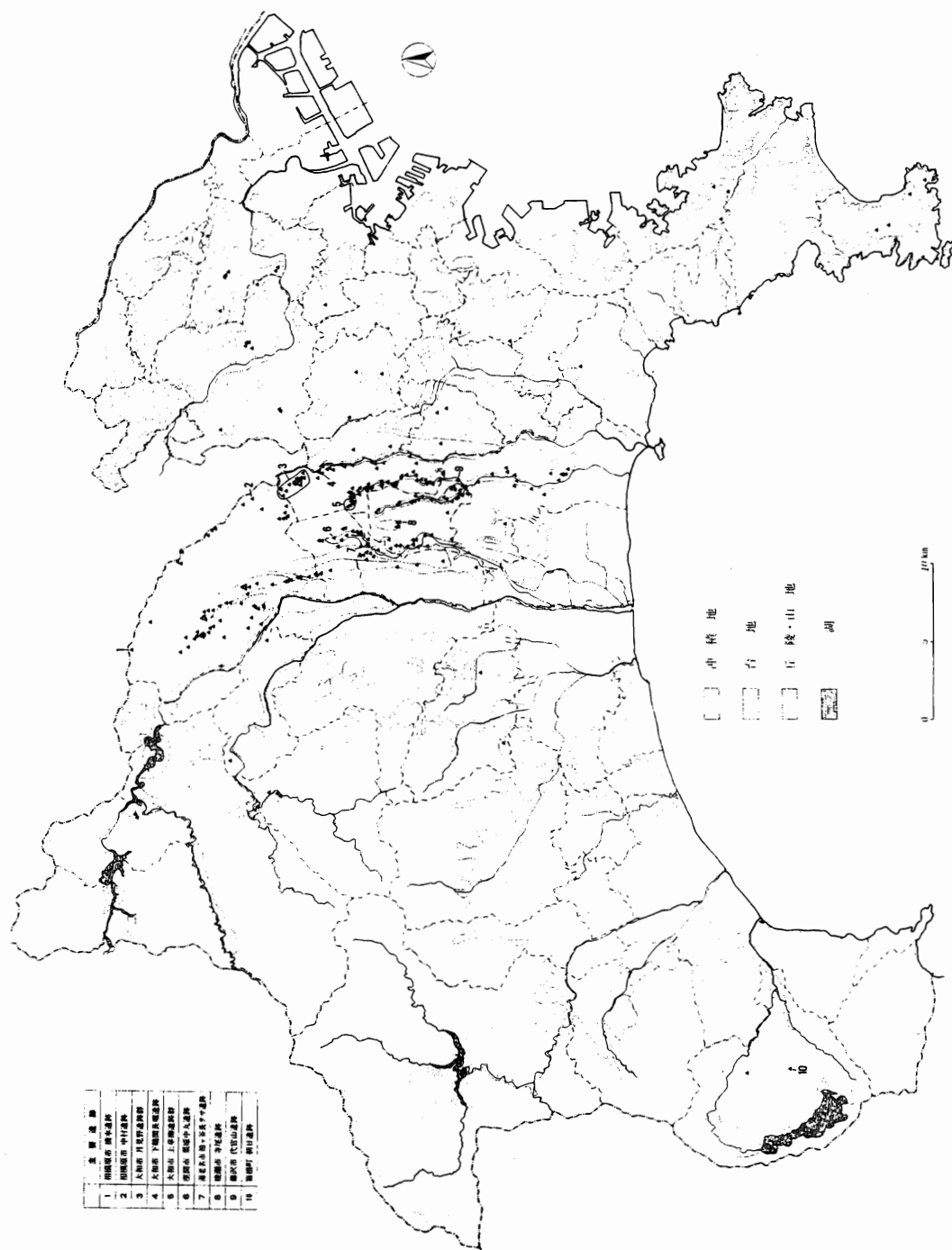
相模野台地は座間丘陵、高座丘陵、相模原面、中津原面、田名原面、陽原面からなる6面の段丘面によって構成されている。これらの段丘面はその形成時期や地形面に堆積しているローム層がそれぞれ異なっている。より高位の段丘面の離水開始時期は古く、河成砂礫層・海成砂礫層上に堆積しているローム層も厚いものとなっている。

相模野台地を構成する各段丘面の推定形成時期と堆積するローム層は、座間丘陵の座間I面が約28万年

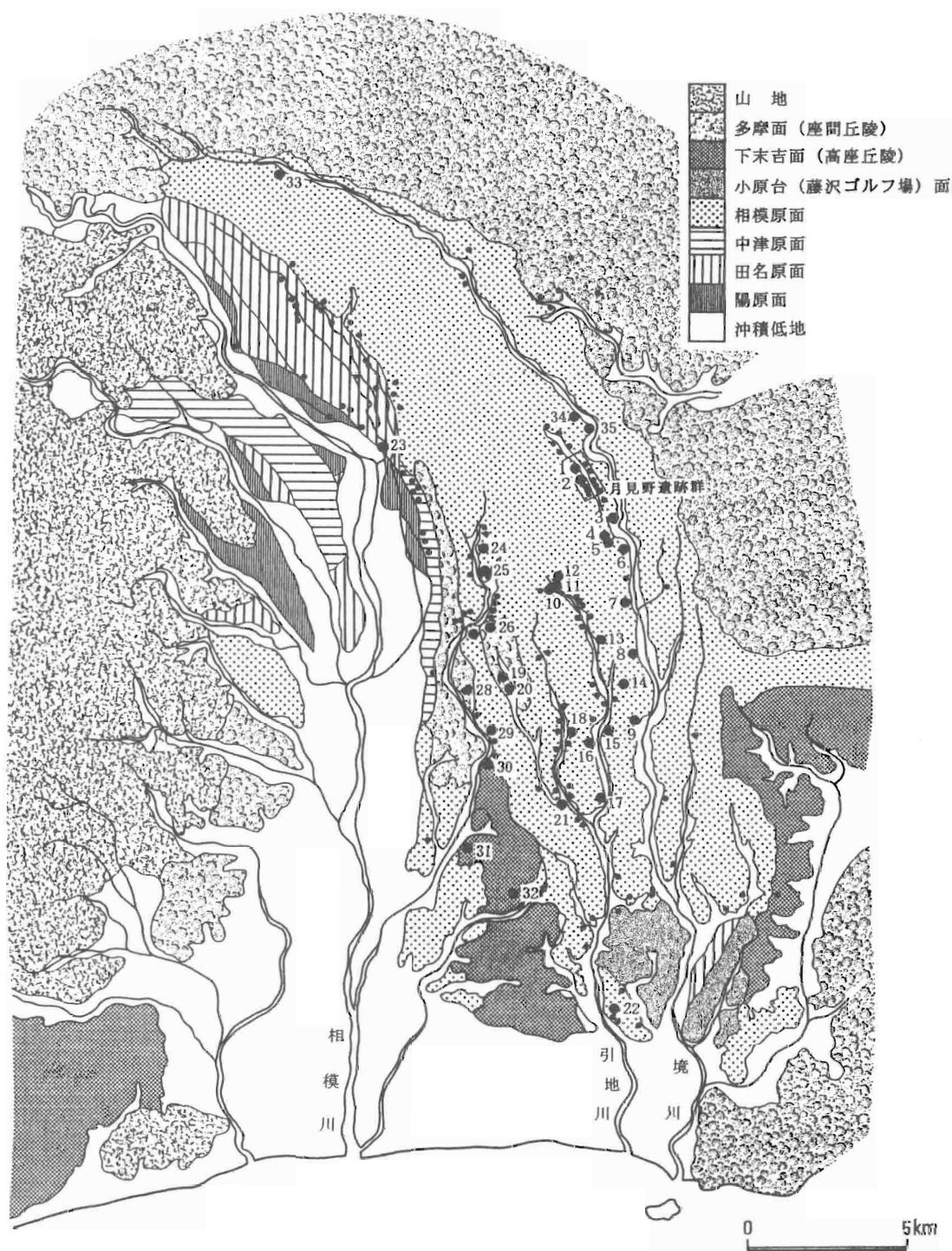


第3図 相模野台地と周辺の地形面区分 (織笠 1998 より引用改変)

前で多摩下部ローム層の最上部層以上、座間II面が約16万年前で多摩上部層の最上部層以上、高座丘陵が約13万年前で下末吉ローム層以上、相模原面が約5～6万年前で武蔵野ローム層・立川ローム層、中津原面が約2～3万年前で相模野下位スコリア(S2S)以上の立川ローム層、田名原面が約2万5千年前で始良Tn火山灰(A・T)から相模野上位スコリア(S1S)以上の立川ローム層、陽原面が約1万5千年前で古富士泥流前後以上の立川ローム層である。



第4図 神奈川県の新石器時代遺跡分布図(神奈川県立埋蔵文化財センター 1990より引用改変)



- |                |                  |              |                 |               |
|----------------|------------------|--------------|-----------------|---------------|
| 1. 大和市No.210遺跡 | 2. 上野遺跡第1地点      | 3. 台山遺跡      | 4. 長堀北遺跡        | 5. 下鶴間長堀遺跡    |
| 6. 長堀南遺跡       | 7. 深見諏訪山遺跡       | 8. 大塚戸遺跡B地点  | 9. 上和田城山遺跡      | 10. 上草柳第3地点遺跡 |
| 11. 上草柳第2地点遺跡  | 12. 上草柳第1地点遺跡    | 13. 草柳中村遺跡   | 14. 県営高座渋谷団地内遺跡 | 15. 福田札ノ辻遺跡   |
| 16. 神明若宮地区内遺跡  | 17. 代官山遺跡        | 18. 本蓼川遺跡    | 19. 報恩寺遺跡       | 20. 寺尾遺跡      |
| 21. 地蔵坂遺跡      | 22. 大庭根下遺跡       | 23. 下溝上谷開戸遺跡 | 24. 栗原中丸遺跡      | 25. 栗原中谷遺跡    |
| 26. かしわ台駅前遺跡   | 27. 柏ヶ谷長ヲサ遺跡     | 28. 小園前畑遺跡   | 29. 早川天神森遺跡     | 30. 吉岡遺跡群     |
| 31. 用田バイパス関連遺跡 | 32. 湘南藤沢キャンパス内遺跡 | 33. 橋本遺跡     | 34. 下森鹿島遺跡      | 35. 中村遺跡      |

第5図 相模野台地の旧石器時代遺跡分布図

## 2. 相模野台地の遺跡分布と立地

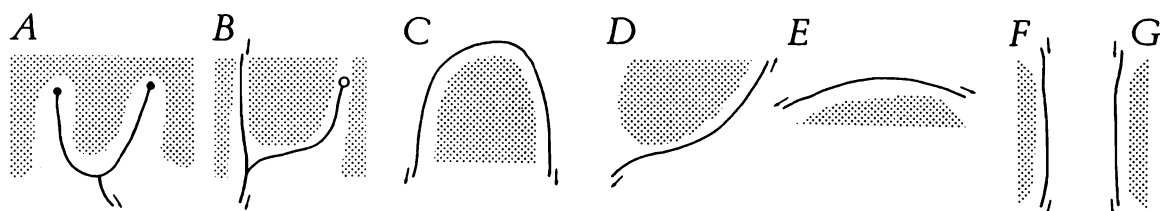
### (1) 遺跡分布と遺跡立地の特徴

全国的にも多くの旧石器時代遺跡が集中し、数多くの調査が行われている神奈川県旧石器時代遺跡は、消滅・流失等で遺跡周知以前に失われ不明であるものを除いて現在確認されている限りでは約200ヶ所といわれている。神奈川県のような土壌堆積の厚い地域では、現地表で遺跡を確認することは困難であることが多く、このため存在している遺跡の実数は現在確認され周知されている遺跡数より多いと推定される。

これらの遺跡分布は、県全域に広範囲にわたって隈無く存在しているのではなく、その分布傾向には偏在が認められ、県央部に展開する相模野台地上にそのほとんどの遺跡が集中している。その他わずかに遺跡の分布が認められるのは、川崎・横浜市域の多摩丘陵部、横須賀・三浦市域の三浦半島丘陵部、厚木・伊勢原市域の相模川右岸に発達する丘陵部や神奈川県西部の丘陵部である。旧石器時代遺跡は神奈川県のような土壌堆積の厚い地域では、現地表では確認することが困難である。また、前述したような消滅・流失などの諸条件にさらされる考古学資料である遺跡とそこから認められる分布は、見かけ上の分布である要素を大きく含んでいるが、それらの条件を含んでいるにしても相模野台地に集中分布する事は、旧石器時代にあつて相模野台地が地形的必然性やその他生活全般に関わる行動に対する欲求や諸条件を満たしていたからであり、意識を持って選択されていたといえよう。

さて、県下旧石器時代遺跡のほとんどが集中分布する相模野台地であるが、台地内に微視的に目を転じてみると、同一台地内でも台地全域にまで遺跡が立地し分布していないことが見えてくる。相模野台地上に立地する旧石器時代遺跡は、特に台地を開析して南流している目久尻川・鳩川・姥川・比留川・蓼川・引地川・境川・目黒川など中小河川流域の台地上又は丘陵上に点在または密集して分布していることが認められる。この傾向は、近年旧石器(先土器・岩宿)時代研究プロジェクトによって行われた相模野最古の立川ローム層下底から立川ローム層最上部の旧石器時代最終末までの遺跡資料集成によって示された各層位ごとの遺跡分布図(旧石器(先土器・岩宿)時代研究プロジェクト1994~1999)から読みとると、相模野台地上のみでなく多摩丘陵や相模川右岸・三浦半島・神奈川県西部丘陵部に遺跡分布が爆発的に拡大拡散している様相を呈する旧石器時代最終末から土器出現期以外はほぼ台地上を開析して流れる中小河川流域崖線上に各期をつうじて繰り返し遺跡が形成されていることが窺える。

旧石器時代遺跡立地の特徴は、更に時代が下った段階での遺跡立地の特徴にみられるような丘陵部や相模川のような大規模河川によって形成された低地や台地上・丘陵上を積極的に選択しているのではなく、相模野台地内の中小河川流域の崖線上を繰り返し選択して遺跡が形成された結果といえよう。更に、旧石器時代遺跡が集中して分布している中小河川流域の崖線部の微地形に注目してみよう。相模野台地を開析して流れる中小河川流域は、それらの中小河川によって形成された小支谷が発達し複雑な地形を呈していることは前述したところであるが、中小河川流域崖線上に一様に分布しているわけではなく、発達した小支谷の谷奥部分ではなく、小支谷から本流へ突出する部分に遺跡が集中して立地している様相が捉えられる。また、それらの遺跡立地の中でも特に集中する部分が、中小河川上流部から水源地付近、または支流と本流の合流部分に形成される舌状の突出部分、中小河川の蛇行によって形成された舌状突出部などに認められ、遺跡群を形成している。これらの各遺跡での調査成果では、複数の石器集中地点(ブロック)と複数の礫群が濃密に集中して検出され、併せて検出確認された文化層も重複関係をもっていることが確認されている。



第6図 遺跡群立地の諸類型 (砂田 1997)

## (2) 遺跡立地の諸類型とその評価

相模野台地での旧石器時代遺跡の分布とその立地には、台地を開析して流れる中小河川との密接な関係が存在していることが認められた。このような状況は、中小河川流域を移動の際に利用していたであろうと推定させるものであり、中小河川沿いのルートが彼らの「みち」であった可能性が高い。更に、前述したところではあるが、台地上の中小河川崖線上の遺跡立地は、相模野台地で確認されている旧石器時代最古の段階からその最終末段階に至る各

時期においても変わることなくほぼ繰り返し選択されていた遺跡立地である。また、中小河川沿いの遺跡立地の中でも、上流部から水源地、支流と本流の合流部などや河川の大きな蛇行による舌上突出部に遺跡が集中し遺跡群を形成している場合が多く、それらの遺跡は確認されている石器集中地点（ブロック）や礫群が濃密に存在している遺跡であり、数百点を数える石器群が出土している遺跡でもある。

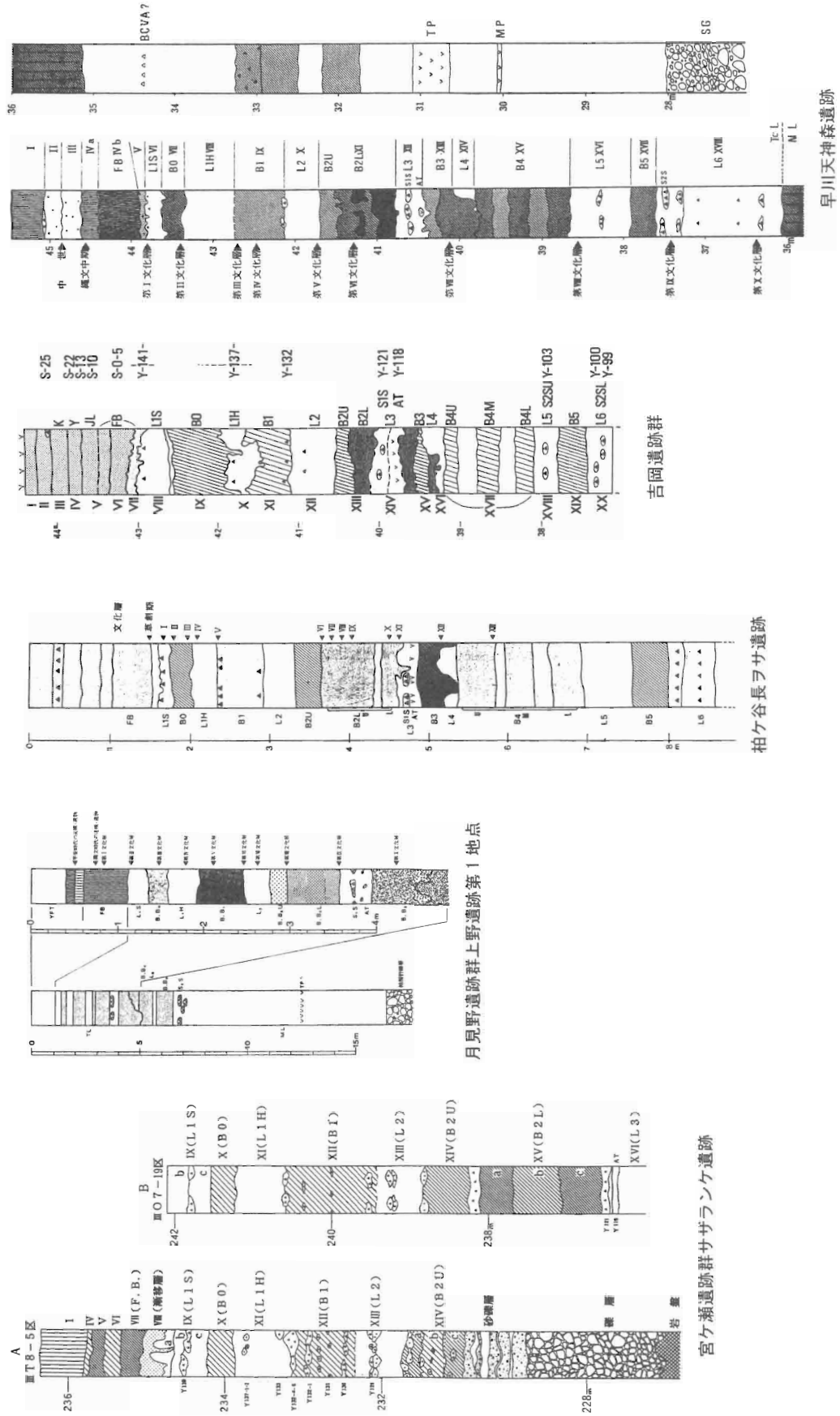
このような相模野台地上の特徴的な遺跡分布と立地は、遺跡分布・遺跡の地形の検討といった見かけ上の観察だけではなく、時間的段階ごとに遺跡間層序対比・遺跡の保有する石器群の検討・遺跡間の石器型式学的検討・遺跡間接合資料の検討などの考古学的な資料操作と研究を経れば類型化が可能となると考えられる。

遺跡群の空間的分布は、旧石器時代の集落変遷を論じた白石氏によってその変遷（白石 1992）が示され、相模野第Ⅲ期（B 2層）における遺跡群の空間分布を論じた砂田氏によって、河川的位置と石器出土点数との相関関係に7類型が認められることが提示された（砂田 1996・1997）。これらの各類型は遺跡分布と遺跡立地で前述したように、相模野台地の旧石器時代各段階にほぼ当てはまるように思われる。遺跡群の空間分布の類型や石器群の検討から、遺跡の群構成と点在の意味を集団の集約的遺跡やその他点在する狩猟に際した遺跡の形成など論じることも可能であると思われるが、しかし、あくまでも我々が知り得るのは、人力を介して検出・出土した石器群や遺跡集中地点・礫群であり、また調査規模や掘削深度もすべての調査が同一であるとすることはあり得ないことであり、現状で認められる遺跡の空間的集中と拡散をもって拠点的や大規模など位置づけと評価は慎重でありたい。

## 3. 相模野台地の層序

### (1) 相模野台地の層序

相模野台地は6面の段丘面からなっており、各段丘面は地形面の河成砂礫層・海成砂礫層を覆っている関東ローム層はそれぞれの段丘面で異なっている。相模野台地に堆積する関東ローム層は、新しい上部から立川ローム層－武蔵野ローム層－下末吉ローム層－多摩ローム層であるが、供給源に近い地形的特性によって関東ローム層の堆積は厚く最上部の立川ローム層の層厚は約7～8mを有し、このため調査の及ぶローム層の主体は立川ローム層であり、立川ローム層上部が削平されている場合など武蔵野ローム層に達することが希にある状況である。このような調査状況であるので、相模野台地で旧石器時代石器群や礫群・礫が検出され



第7図 相模野台地各遺跡の層序(各遺跡報文より引用改変)



ているのは最上部の立川ローム層中に限られている。従ってここでは各遺跡で確認された最上部の立川ローム層の層序について触れたい。

第7図に相模野台地と周辺の調査で確認された層序柱状図を示した。掲載した各遺跡は、愛甲郡清川村宮ヶ瀬遺跡群サザランケ遺跡(財団法人かながわ考古学財団1996)、大和市月見野遺跡群上野遺跡第1地点(大和市教育委員会1986)、海老名市柏ヶ谷長ヲサ遺跡(柏ヶ谷長ヲサ遺跡調査団1997)、綾瀬市吉岡遺跡群(財団法人かながわ考古学財団1996)と相模野台地の標準的ローム層として提示される綾瀬市早川天神森遺跡(神奈川県立埋蔵文化財センター1983)である。いずれも立川ローム層の下部から上部まで多くの石器群・礫群が複数の文化層として検出された遺跡である。

立川ローム層は後期古富士火山活動期の後半に形成されたものである。標準的堆積を示している相模原面以上の堆積では、層厚が約7～8mであり、B0層からB5層までの6枚の暗色帯を含む13層に大きく層序区分される。

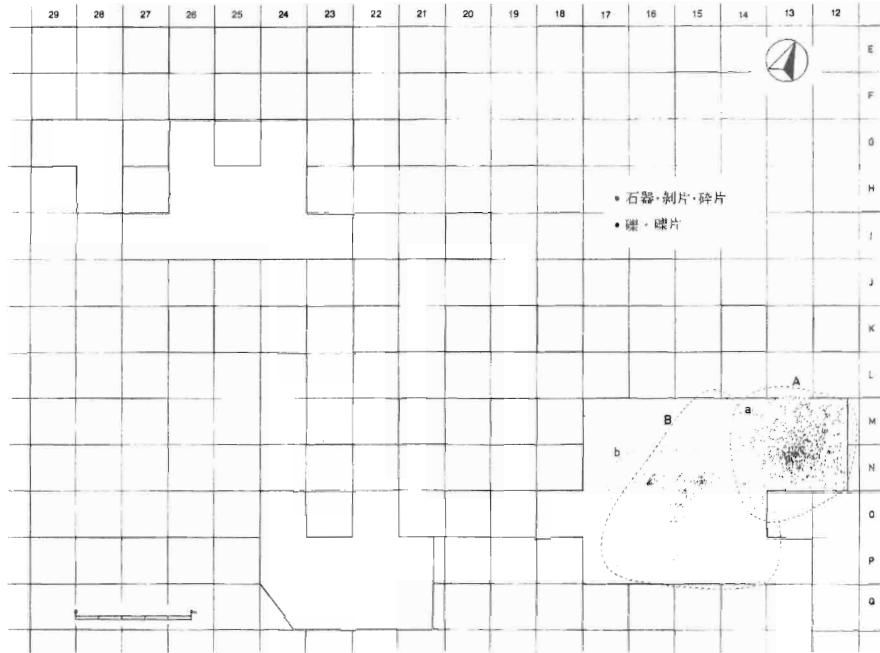
立川ローム層の最上部はL1S層と呼ばれるソフトローム層であり2層に区分される遺跡がある。以下上層から各層について触れると、1枚目の暗色帯であるB0層、ハードローム層であるL1H層でアカザブトンと呼ばれる赤褐色スコリアY137-2(上本・上杉・由井1994)が認められる。2枚目の暗色帯であるB1層、次いでL2層、3枚目の暗色帯であるB2層があり、色性の弱い上層(U)と色性の強い(L)に大別され上下層とも2～3層に分層されることがある。次いでL3層で相模野上位スコリア(S1S)(Y-121)が筋状又は団塊状に堆積し下部に始良Tn火山灰(A・T)がシラス状に堆積するが肉眼では判別できない遺跡もある。始良Tn火山灰(A・T)は広域テフラであり鹿児島湾始良火山の大規模噴火によって東日本にまで降灰しており鍵層となっている。4枚目の暗色帯であるB3層は2層に区分されることがある。次いでL4層は土壌化したローム層で、下層のB4層に挟まれた波状帯として認められる。B4層は5枚目の暗色帯で4～5層に分層される。次いでL5層、6枚目の暗色帯であるB5層、立川ローム層最下層のL6層で以下は武蔵野ローム層となる。L6層には上部に相模野下位スコリア(S2S)(Y-103)が約20cm間隔で2枚堆積している。

各遺跡では前述した層序がほぼ観察されるが、各層内の分層は遺跡ごとに異なり、層厚も遺跡間では一様ではない。また、暗色帯の色性も遺跡によってはB0層やB1層などで全く認められない遺跡もある。

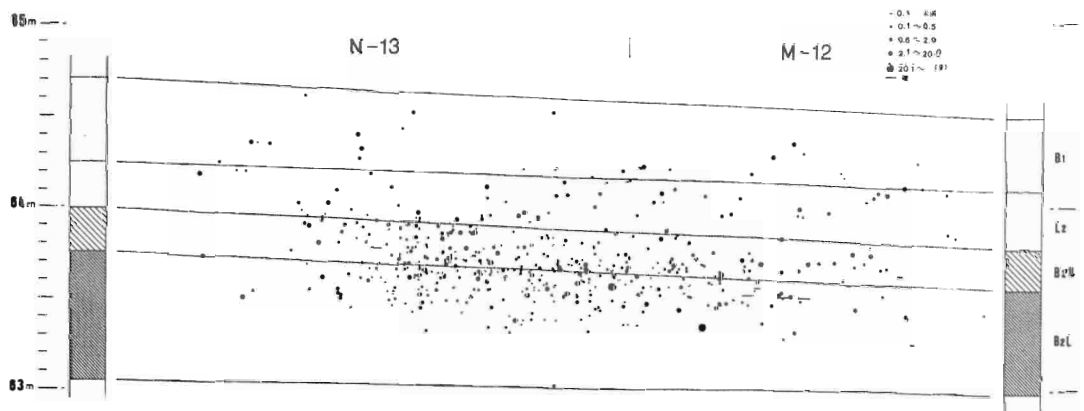
## (2) 各遺跡間の層序対比

以上のように相模野台地の立川ローム層は各遺跡で分層されている。層序の対比については、従来からL3層に包含されている始良Tn火山灰(A・T)が広域テフラであり、地域間や台地間の対比に用いられている。この始良Tn火山灰(A・T)についても最新の年代測定法によって年代が遡るなどの問題が認められるが、一つの画期として論じられることが多い。

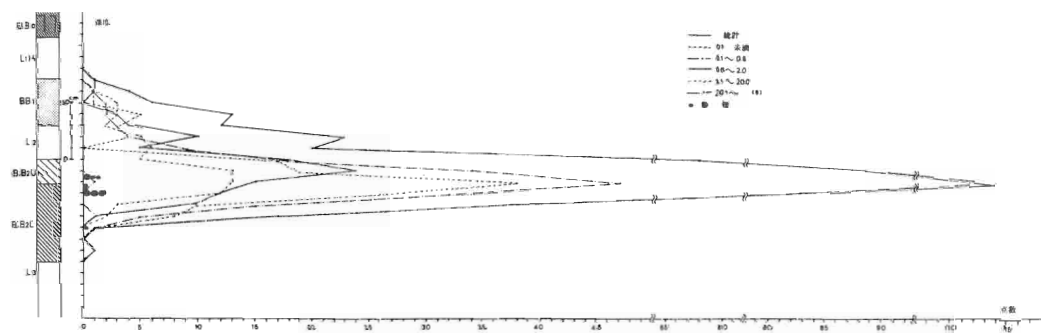
相模野台地内の各遺跡間層序対比は、各調査者の分層をそのまま遺跡間でつぎあわせて利用しているのが現状であり、各層の分層には個人差が少なからず存在している。特に暗色帯の上下層との漸移部分にその差が多いようにも思われる。この様な現状から、上本・上杉氏らによって、Y番号を付されたテフラによる層序区分を併用する分層が提唱されている(上本・上杉・由井1994)。しかし、テフラの堆積存状況も各遺跡間で一様ではないこともあり、必ずしも万能かつ有効な区分となり得ていない。



上草柳第2地点遺跡第Ⅱ文化層

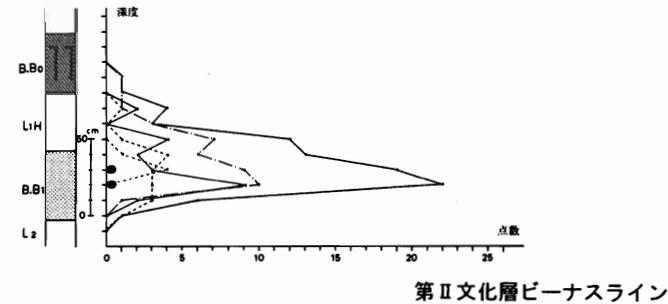
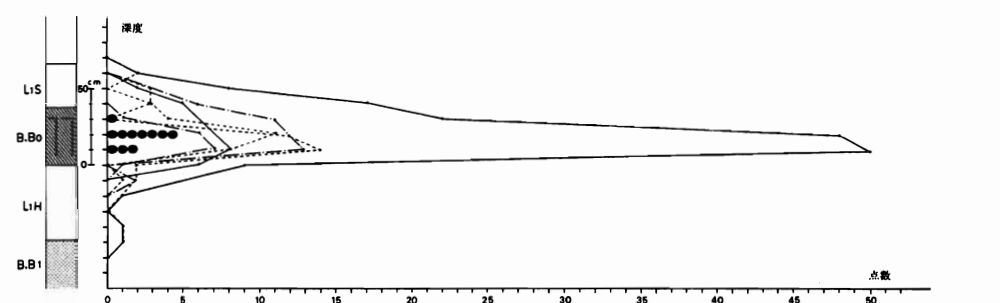
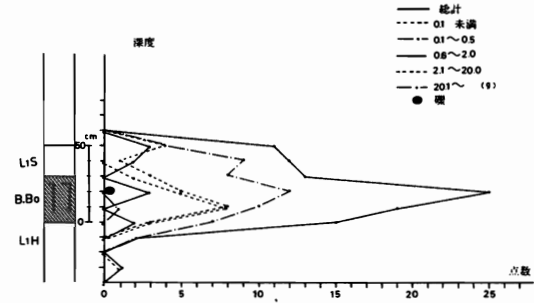
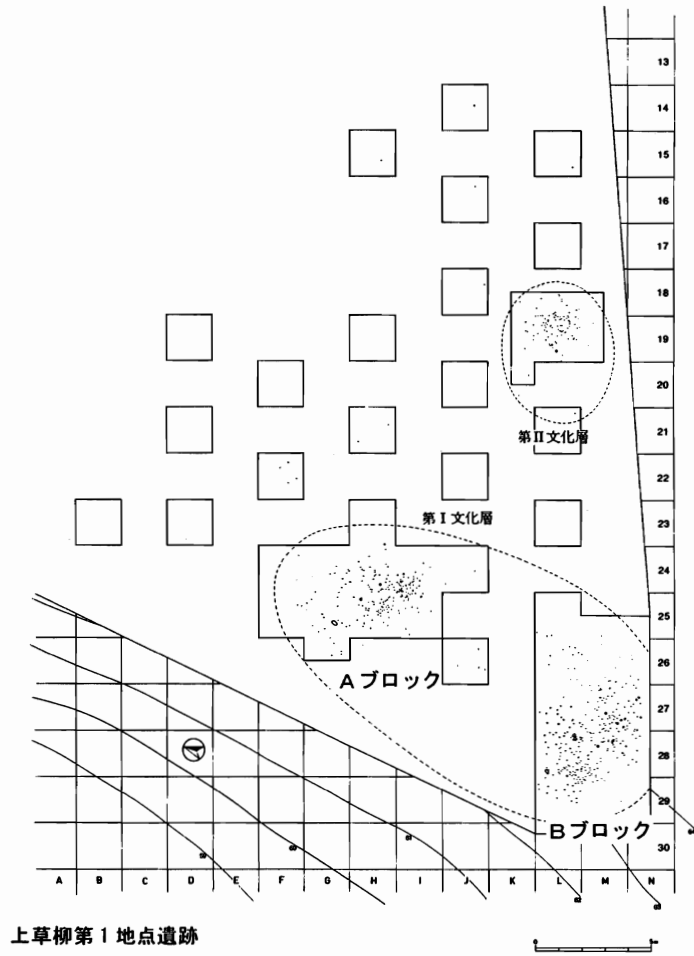


第Ⅱ文化層重量別遺物分布

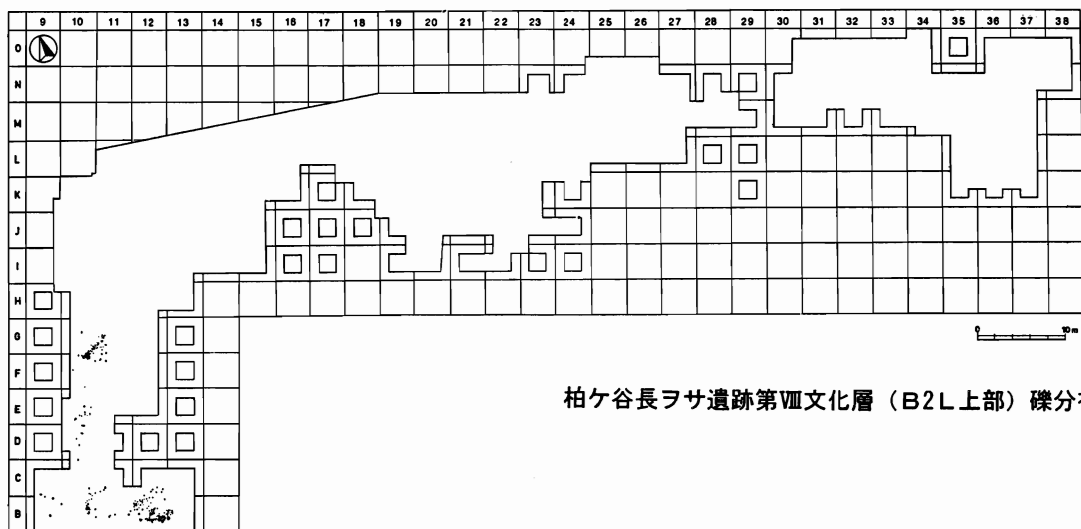


第Ⅱ文化層ビーンズライン

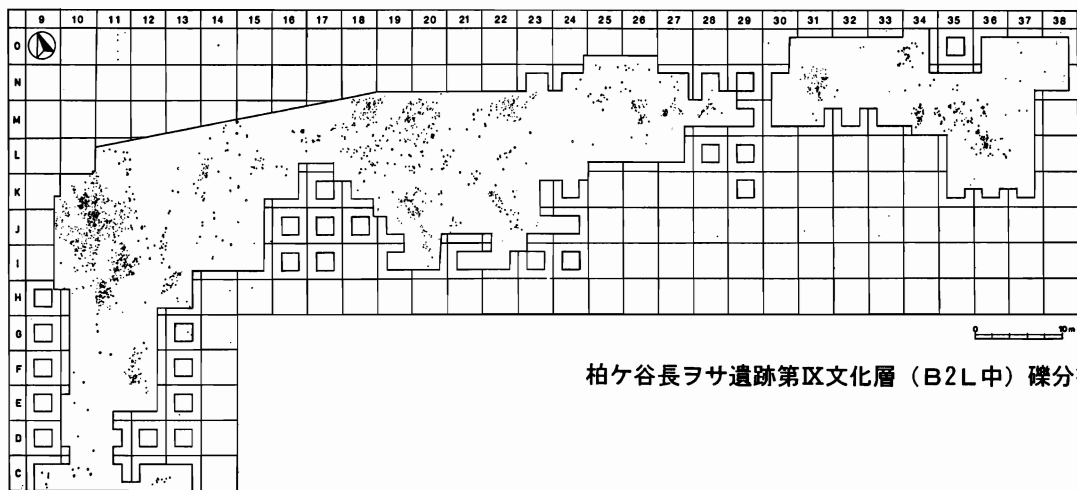
第8図 文化層の遺物分布とビーンズライン (大和市教育委員会1984引用改変)



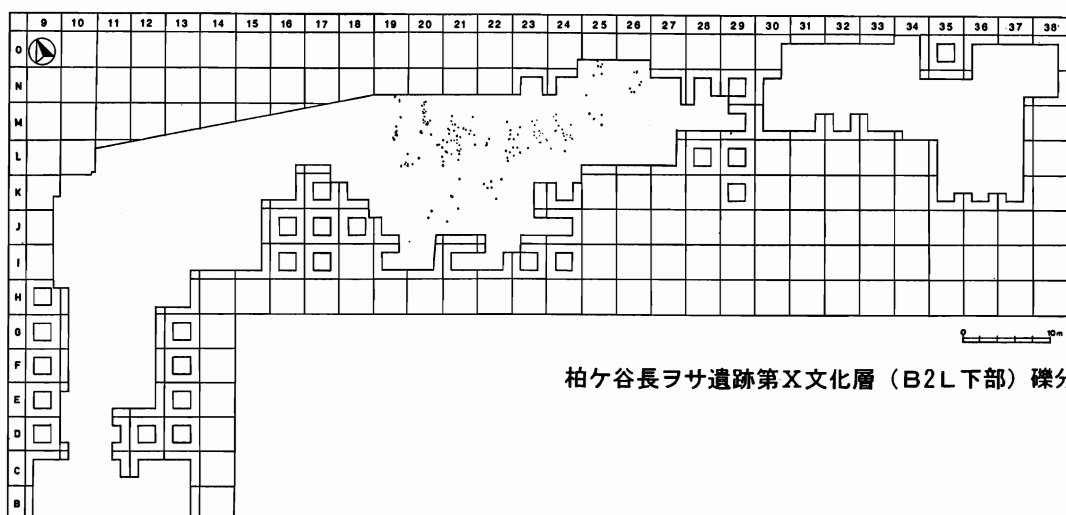
第9図 重複する文化層の遺物分布とビーナスライン (大和市教育委員会 1984 引用改変)



柏ヶ谷長ヲサ遺跡第Ⅶ文化層 (B2L上部) 礫分布

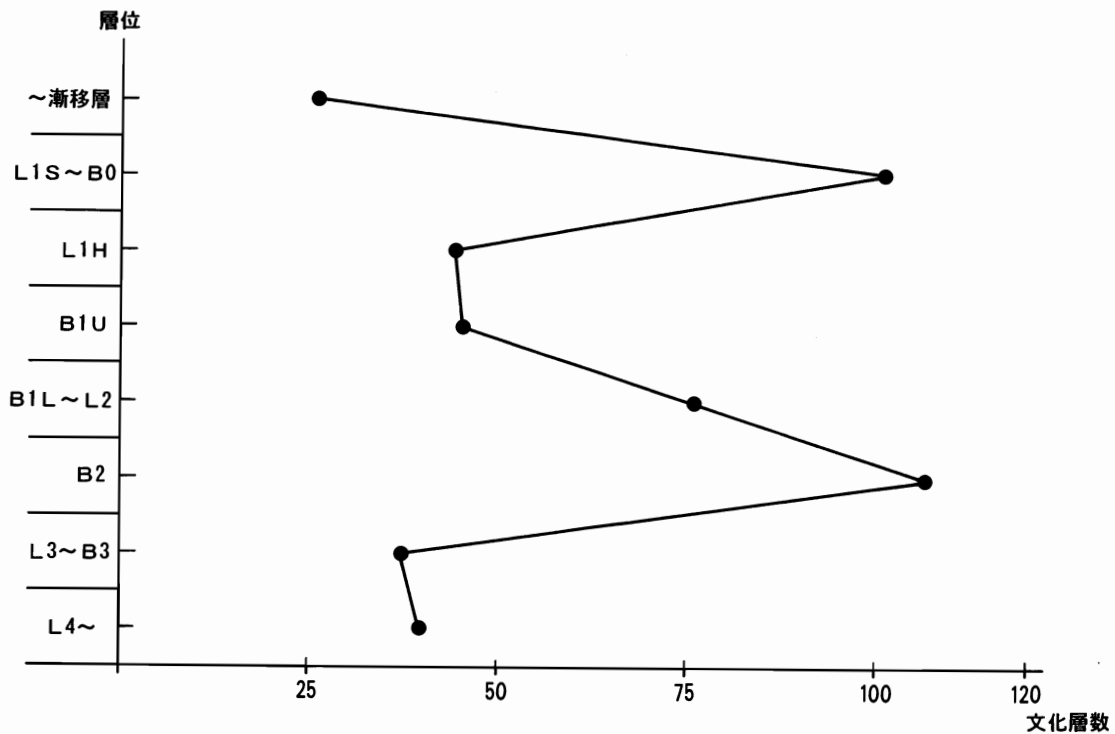


柏ヶ谷長ヲサ遺跡第Ⅷ文化層 (B2L中) 礫分布



柏ヶ谷長ヲサ遺跡第Ⅸ文化層 (B2L下部) 礫分布

第 10 図 同一層位内で重複する文化層の礫分布 (柏ヶ谷長ヲサ遺跡調査団 1983 引用改変)



第 11 図 相模野台地の層位と文化層数

#### 4. 文化層について

##### (1) 自然層位と文化層位

前述したような地質学的な立川ローム層などの層序区分を自然層位と呼び、遺跡内で確認される遺物群の包含層位を文化層と呼ぶ。ひとつの自然層位に複数の文化層が存在することもあり、複数の文化層が重層している遺跡も多く認められる。他時代の遺跡調査と違って、住居跡などの明確な掘り込みを持つ遺構がほとんど認められず、遺跡によっては遺物出土高低差が 1 m 以上にもなる旧石器時代遺跡では文化層の区分と認定が重要な方法となる。

相模野台地ではローム層の堆積が厚いという地域的特性によって、文化層の認定と区分は比較的容易に行うことができる。第 8 図に示したような重複していない文化層の認定は、石器集中地点の遺物垂直分布と共伴する礫群の垂直分布から分別でき、大和市月見野遺跡群の調査において確認された出土遺物の月見野ビーナスラインと礫群の垂直分布から当時の生活面を復元することが出来るとされている。重複している文化層についても遺物群と礫群の垂直分布の検討と併せて石器接合資料の検討・石器石材や個別別資料の検討によって、認定と区分は可能となる。氷河期に当たる旧石器時代では周氷作用によって包含されている遺物群は同一時期のものでも上下や水平方向に動く(御堂島・上本 1987) ものであり、実際調査でも遺物群は高低差を持って出土している。

##### (2) 重層する文化層

第 9・10 図に示したような重複する文化層は、相模野台地のほとんどの遺跡で認められる状況であるが、遺物群の垂直分布の検討と礫群の垂直分布の検討、また石器群の型式学的検討・石器や礫群接合資料の検討・石材及び個別別資料の検討を経て文化層を認定し分離できれば、層位的に前後関係を明確に持つ遺物群として、編年研究には良好な資料となる。そのような意味では、相模野台地の安定した層位と重複・重層する文

化層は編年研究の有効資料足り得ている。このことは筆者が改めて述べるまでもない。しかし、暗色帯の上下部分など調査者によって個人差が認められることも事実であり、また、文化層認定後の当時の生活面を自然層位内に置き換える際の層以内の上中下・上面・下底などの呼称についても統一的な見解が取られている訳ではなく、今後より詳細な編年の構築に向かって、検討していかなければならない大きな課題であろう。

しかし、相模野台地の旧石器時代遺跡分布と検出される文化層の豊富さは、編年研究には極めて有効な資料を提供しているのであり、今後とも取り組むべき魅力的な地域である。なお、層位別の検出文化層数を単純にグラフ化してみたが、B 2層とL 1 S層からB 0層が突出し、相模野台地での画期足り得るのかもしれない。

#### 引用・参考文献

- 上本進二・上杉 陽・由井将雄 1994 「南関東の立川ローム層と考古学層序—富士山東麓～神奈川県西部～相模野～武蔵野～房総半島の土層対比—」 『神奈川考古』 第30号 神奈川考古同人会
- 織笠 昭 1998 「相模川と相模野台地」 『海老名市史』1資料編 原始・古代 第2章第1節 海老名市
- 柏ヶ谷長ヲサ遺跡 1983 『先土器時代 海老名市柏ヶ谷長ヲサ遺跡発掘調査概要報告書』
- 堤 隆他 1997 『柏ヶ谷長ヲサ遺跡 相模野台地における後期旧石器時代遺跡の調査』
- 神奈川県立埋蔵文化財センター 1983 『早川天神森遺跡』 神奈川県立埋蔵文化財センター調査報告2
- 1990 『かながわの考古学』1
- 旧石器(先土器・岩宿)時代研究プロジェクトチーム 1994 「旧石器時代終末における石器群の諸問題」 『かながわの考古学』4
- 旧石器(先土器・岩宿)時代研究プロジェクトチーム 1995 「旧石器時代終末における石器群の諸問題(続) —FB層下部からL1H層の石器群の様相—」 『かながわの考古学』5
- 旧石器(先土器・岩宿)時代研究プロジェクトチーム 1996 「旧石器時代後半における石器群の諸問題—L2～B1層石器群の様相—」 『かながわの考古学』研究紀要1
- 旧石器(先土器・岩宿)時代研究プロジェクトチーム 1997 「旧石器時代後半における石器群の諸問題—B2層の石器群の様相—」 『かながわの考古学』研究紀要2
- 旧石器(先土器・岩宿)時代研究プロジェクトチーム 1998 「旧石器時代後半における石器群の諸問題—L3層からB3層の石器群の様相—」 『かながわの考古学』研究紀要3
- 旧石器(先土器・岩宿)時代研究プロジェクトチーム 1999 「旧石器時代後半における石器群の諸問題—L4層以下の石器群の様相—」 『かながわの考古学』研究紀要4
- 旧石器(先土器・岩宿)時代研究プロジェクトチーム 2000 「旧石器時代後半における石器群の諸問題—新たなる相模野編年の構築に向けて—」 『かながわの考古学』研究紀要5
- 鈴木次郎他 1996 a 『宮ヶ瀬遺跡群VI サザランケ (No.12) 遺跡』 かながわ考古学財団調査報告8
- 1996 b 『吉岡遺跡群I』 かながわ考古学財団調査報告6
- 相模考古学研究会 1971 『先土器時代遺跡分布調査報告書 相模野編』
- 白石浩之 1992 「旧石器時代後期から縄文時代草創期の集落」 『かながわの考古学』2 神奈川県立埋蔵文化財センター
- 鈴木次郎・矢島國雄 1978 「先土器時代の石器群とその編年」 『日本考古学を学ぶ』3 有斐閣
- 砂田佳弘 1996 「遺跡群の形成」 『石器文化研究』5 石器文化研究会
- 砂田佳弘 1997 「遺跡群の空間分布」 『かながわの考古学』 研究紀要2
- 諏訪間 順 1988 「相模野台地における石器群の変遷について—層位的出土例の検討による石器群の段階的把握—」 『神奈川考古』24 神奈川考古同人会
- 明治大学考古学研究室・月見野遺跡群調査団 1969 『概報 月見野遺跡群』
- 御堂島 正・上本進二 1987 「遺物の水平・垂直移動—周水作用の影響に関する実験的研究—」 『神奈川考古』23 神奈川考古同人会
- 矢島國雄 1996 「先史時代の自然環境」 『綾瀬市史』9考古 第1章 綾瀬市
- 大和市教育委員会 1984 『一般国道246号(大和・厚木バイパス)地域内遺跡発掘調査報告書』II 大和市文化財調査報告書第15集
- 大和市教育委員会 1986 『月見野遺跡群上野遺跡第1地点』大和市文化財調査報告第21集

# ナイフ形石器文化前半期の様相

鈴木次郎

(神奈川県教育庁)

## はじめに

最古の石器は何か。これは、日本列島・神奈川県内など対象範囲が異なっても常に興味のある問題の一つである。1960年代に活発に論議された日本列島の「前期旧石器時代」存否論争は、1980・81年に、宮城県山田上ノ台遺跡・座散乱木遺跡から3万年前をさらに溯る確実な石器群が発見されたことによって決着をみ、その後、東北地方を中心に前期及び中期旧石器時代の遺跡が続々と発見・調査されてきた。そして、日本の人類文化の起源は数十万年前に溯ることが確実とされた。また、南関東においても、1987年に東京都多摩ニュータウンNo.471B遺跡の武蔵野ローム下部から石器が発見されたのに続き、1999・2000年には、埼玉県長尾根遺跡・小鹿坂遺跡などの多摩ロームから前期旧石器時代の石器が発見されて大きな話題となった。ところが、昨年、こうした遺跡調査の大半に中心的に関わった人物により遺跡の捏造が行われていたことが発覚し、現在では、中期及び前期旧石器時代の遺跡の信憑性は大きく揺らぎ混迷している状況である(註1)。

一方、神奈川県内においては、今のところ武蔵野ロームやさらに下層の下末吉・多摩ロームからは確実な石器の出土は確認されていない。石器の出土層位はいずれも立川ロームに限られ、後期旧石器時代の石器群が明らかにされているだけである。

ここでは、まず神奈川県内での立川ローム下部の遺跡調査の歩みを辿りながら、この時期の石器群の編年研究がどのように進められてきたかを振り返り、その上で、ナイフ形石器文化前半期の様相を明らかにしてみたい。なお、相模野台地は、関東ロームの堆積が厚く、石器群の編年研究には絶好のフィールドとされるが、ことナイフ形石器文化前半期に関しては、ロームの厚さが逆に災いして遺跡の調査事例が少ないため、武蔵野台地や下総台地といった隣接地域の調査成果を少なからず援用せざるを得ない。こうした状況は編年研究が開始された1970年代から今日にいたるまで基本的に変わりはない。

## 1. 立川ローム下部の遺跡調査と編年研究の歩み

相模野台地においてAT(註2)よりも下層の立川ローム下部から石器をはじめて発見したのは、1967年から数年間にわたって行われた相模考古学研究会による遺跡分布調査であり、相模野No.12遺跡(相模原市古山遺跡)のB4層直下(L5層上部)から末端部に加工痕のある大形石刃が、相模野No.161遺跡のB4層下面から剥片がそれぞれ単独で発見され、相模野No.104遺跡(綾瀬市地藏坂遺跡)と相模野No.154遺跡(大和市月見野第IVB遺跡)のB3層上面からは、二側縁加工のナイフ形石器を主体とする石器群が確認された。さらに、相模野No.59・63遺跡では、相模野下位スコリア(S2S)の層位やその上位の黒色帯(B5層)から人類活動の所産と思われる礫が発見され、立川ロームの最下部(当時は武蔵野ロームと誤認していた)からも石器が出土する可能性のあることが予測されていた(相模考古学研究会編1971)。また、この分布調査によって発見された大和市月見野遺跡群や綾瀬市上土棚遺跡は、1968・69年に明治大学によって発掘調査されており、月見野第IVB遺跡のB2L層下底からは、ナイフ形石器や石刃から構成される石器群が出土している(明治大学考古学研究室月見野遺跡群調査団1969)。

1972年には、相模考古学研究会により相模野台地の最初の編年が提示された(小野他1972)。それは、遺跡分布調査と月見野遺跡群や上土棚遺跡等の調査成果に基づいた5期区分であり、石器群の内容だけではなく、遺跡数の増減・礫群の推移から海面変動・河川地形の形成・火山活動など自然環境の変化をも視野に入れた第四紀総合編年の試みであった。立川ローム下部では、B4層以下を第Ⅰ期、B2L層下部からL4層までを第Ⅱ期と区分しており、第Ⅱ期はナイフ形石器を主体とする石刃石器群により特徴付けられるとしたが、第Ⅰ期の石器群の内容は不明であった(該当する石器はL5層上部の大形石刃とB4層下面の剥片だけであった)。

筆者等は、1976年に、改めて5期区分による相模野編年を体系的に提示した(矢島・鈴木1976)。そこでは、立川ローム下部の状況はほとんど変わらず、第Ⅰ期は、相模原市長久保遺跡のS2Sの層位から剥片が出土したという情報が加わっただけで、内容はやはり不明とされた。一方、第Ⅱ期は、地藏坂遺跡の調査が行われてB3層中部、B3層上面、B2L層下部の石器群が明らかとなり(相模考古学研究会編1974)、ナイフ形石器を主体とする石器群の内容を提示し、剥片剥離技術も両設及び単設打面石核から石刃を目的剥片として剥離するものと、打面と剥片剥離作業面を交互に入替えて楕円形の大形剥片を剥離するものの2種類が存在することを指摘した。

次いで1978年に、筆者等は、対象地域を南関東各地まで広げて石器群の編年を示した(鈴木・矢島1978)。この間、相模野台地では寺尾遺跡の調査が実施されただけで(報告書は未刊行)、立川ローム下部の資料の増加はなかったが、武蔵野台地の豊富な調査成果を用い、第Ⅰ期・第Ⅱ期の内容を具体的に示した。ここでは、第Ⅰ期は、武蔵野台地の中山谷遺跡X層・西之台遺跡X層などの石器群で、剥片剥離技術に石刃技法がみられず、揉錐器・削器・ナイフ状石器などチャートを主要石材とする小形剥片石器と砂岩・粘板岩・安山岩などの礫器類により特徴付けられるとした。相模野では該当する石器群はないが、武蔵野との層位の対比からL5層よりも下層から出土すると想定した。一方、第Ⅱ期は、剥片剥離技術に石刃技法をもち、ナイフ形石器が共伴することにより特徴付けられるとし、やはり武蔵野台地の成果から前半期と後半期に区分を行った。前半期は、相模野では発掘資料がなく、武蔵野の鈴木遺跡や高井戸東遺跡のX層・IX層などが相当し、ナイフ形石器が量的に貧弱で刃部磨製を含む楕円形の石斧が特徴的に共伴するとした。これに対して、後半期は、武蔵野の鈴木遺跡や高井戸東遺跡等のV層～VII層、相模野の地藏坂遺跡・相模野No.154遺跡・月見野第IVB遺跡等のB2L層下底～B3層石器群が相当し、前半期の石斧が消失してナイフ形石器が量的に増加するとした。この編年区分は、小田静夫等の武蔵野編年の第Ⅰ文化期の細分(小田1980)にほぼ対応し、それぞれ第Ⅰ期が第Ⅰa亜文化期、第Ⅱ期前半が第Ⅰb亜文化期、第Ⅱ期後半が第Ⅰc亜文化期に相当する。

筆者等によるこの編年は、10年後の1988年に新たな情報を加えて改訂を行ったが(鈴木・矢島1988)、第Ⅰ期・第Ⅱ期の枠組みは変わらず、第Ⅰ期と第Ⅱ期前半はやはり武蔵野台地の資料により叙述し、第Ⅱ期後半にいたってはじめて相模野台地の資料により石器群の内容を説明することができた。また、第Ⅰ期の武蔵野台地遺跡Xb層では、器種組成に石斧が加わり、この点で第Ⅱ期との継続性が明らかとなった。

この10年の間には、相模野台地では、B3層上面の豊富な石器群を出土した綾瀬市寺尾遺跡(白石・鈴木1980)が報告されたのをはじめ、綾瀬市早川天神森遺跡(岡本・鈴木他1983)、海老名市柏ヶ谷長ヲサ遺跡(中村他1983、堤他1997)、相模原市橋本遺跡(金山・土井他1984)、座間市栗原中丸遺跡(大上他1984)、藤沢市代官山遺跡(砂田他1986)・根下遺跡(麻生1987)、大和市台山遺跡(麻生1988)、横浜市旭区矢指谷遺跡(乾1885)など立川ローム下部の石器群が報告され、中でも栗原中丸遺跡第IX文化層(L5層上部)と



根下遺跡第IV文化層(B4層上部)からは石斧を伴う石器群が発見されている。

一方、同じ1988年には、諏訪間順により12段階区分による相模野編年が提示され(諏訪間1988)、筆者等の第I期・第II期は段階I～段階IVに区分された。段階Iは、層位的にはL6層～立川ローム下底部とし、早川天神森遺跡及び代官山遺跡の同層位から単独で出土した「小礫素材の石器」を(人為的な石器として認め得るかどうか問題があるとしながらも)武蔵野台地のX層石器群に特徴的にみられる揉錐器や削器に相当するものとし、第I期に比定した。また、段階IIは、層位的にはB5層～B4層上部ないしB3層下部とし、ナイフ形石器の出現と石斧の共伴を特徴としていることから第II期前半に相当するものとした。これに対して、段階IIIは、層位的にはB4層上部ないしB3層下部からB3層中部とし、石斧の消失と二側縁加工のナイフ形石器の出現により特徴付けられるとして第II期後半の下層部分に相当するものとした。そして、第II期後半の上層部分に相当する段階IVは、層位的にはB3層上部からB2層下部とし、黒曜石を多用した石器群であることと、発達した石刃技法により二側縁加工のナイフ形石器の量産により特徴付けられるとした。

諏訪間等は、1991年にも相模野台地のAT下位石器群の概要をまとめているが、同様の区分で、先の論攷からそれほど時間が経過していないこともあって、提示した資料も大差はなかった(諏訪間・麻生1991)。

諏訪間の段階区分編年が発表されてから現在まで、再び10年余りを経過したが、この間にも、資料の蓄積がなされ、相模原市古淵B遺跡(松井他1990)、大和市上和田城山遺跡第4次調査(小池他1994)・大和市No.159遺跡(村沢1996)・大和配水池内遺跡(麻生1999)、綾瀬市吉岡遺跡群(砂田他1996、白石他1996)・上土棚遺跡第2・3次調査(矢島1996、矢島他1997)・地蔵坂遺跡(矢島1996、矢島他1997)、藤沢市No.399遺跡(関根1995)・同No.269遺跡(桜井1997)などの調査・報告がある。中でも、1990年から1994年まで継続的に調査された吉岡遺跡群は、A区～E区の5地点に及び、層位的にも相模野下位スコリア(S2S)直上のB5層からB3層までの各層から豊富な石器群が出土して、相模野台地のナイフ形石器文化前半期の様相を探るうえで貴重な資料を提供した。そして、吉岡遺跡群などの調査成果をもとに、立川ローム下部出土石器群の再評価(白石1996)や従来の編年の再検討(矢島他1997・1998、鈴木2000)が行われている。特に、矢島等は、従来の相模野編年を見直し、石斧と台形様石器をもつ段階を相模野第I期、石斧や台形様石器が消失して刃潰し加工の明瞭なナイフ形石器が出現する段階を相模野第II期として整理し直し、ナイフ状石器や台形様石器からなる吉岡D区B5層を第I期前半、黒曜石製の台形様石器と非黒曜石製の縦長剥片が遺跡を違えて分布するL5層～B4層下部を第I期後半、基部加工・一側縁加工・二側縁加工など各種の形態のナイフ形石器が出現するB4層上部～B3層中・下部を第II期前半、黒曜石を多用し二側縁加工のナイフ形石器が卓越するB3層上部～B2層下部を第II期後半に位置付けている。そして、第II期前半には、黒曜石を多用し一側縁加工や台形状のナイフ形石器が特徴的にみられるA群、非黒曜石の石材を多用して各種のナイフ形石器をもつB群、非黒曜石の石刃と二側縁加工及び基部加工のナイフ形石器が特徴的にみられるC群の3群からなる石器群が遺跡を違えて分布するとしている(矢島他1997・1998)。また、白石は、吉岡遺跡群のB5層・B4層出土石器群と東南北部から関東・中部地方の当該期石器群を検討し、二側縁加工のナイフ形石器が出現する以前の台形様石器石器群についてナイフ形石器文化への移行期として捉え直している(白石1996)。

## 2. AT下位石器文化の編年区分と各時期の特徴

筆者は、相模野台地の石器文化を大きく5期に区分している。AT下位の石器文化は、その中の相模野第

I期と相模野第II期に該当し、ナイフ形石器文化前半期として位置付けることができる。相模野台地を含む南関東のナイフ形石器文化は、器体の二側縁に細部加工を行った茂呂系ナイフ形石器により特徴付けられるが、相模野第I期は茂呂系ナイフ形石器が出現する前の段階、相模野II期は茂呂系ナイフ形石器が出現して発達する段階に相当する。

相模野第I期

B5層—台形様石器・ナイフ形石器の出現—

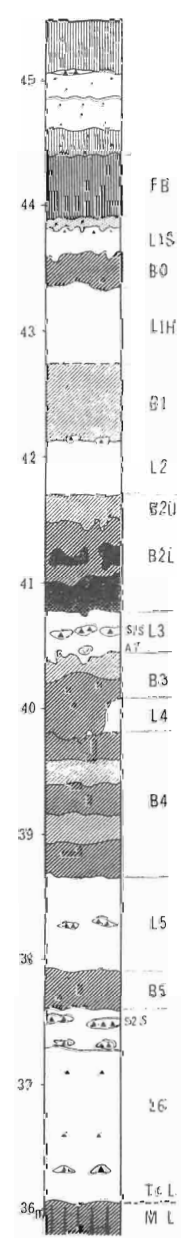
相模野台地では、これまで下末吉ロームや多摩ロームからの石器の出土はなく、立川ローム下底部から武蔵野ロームにかけて、人為的な疑いのある「石器」が数例報告されている(註3)。しかし、そのほとんどは礫層中から出土したり、自然の営力でローム中に包含された「イモ石」(註4)や「イモ石礫群」の中から単独で出土したもので、石器とする根拠の「加工痕」なども自然の営力で出来た可能性を否定できない。

現在、相模野台地最古の確実な石器群は、吉岡遺跡群D区のB5層から出土した石器群である。その出土状態は、15m×15mの範囲に6ヶ所のブロック(石器集中部)をなし、1m近い上下差をもって総数100点の石器が出土しており、石器の分布範囲内とその近くからは炭化物も集中して発見されている。こうした出土状況は、前述の「石器」とはまったく異なり、上層から発見された他の石器群とも共通している。また、100点の出土石器は、7石材、15個体の母岩からなり、この地点で石器製作を行っていたことも明らかである。

次に、吉岡遺跡群D区B5層の石器群(第2図9~21)の内容を見てみよう。

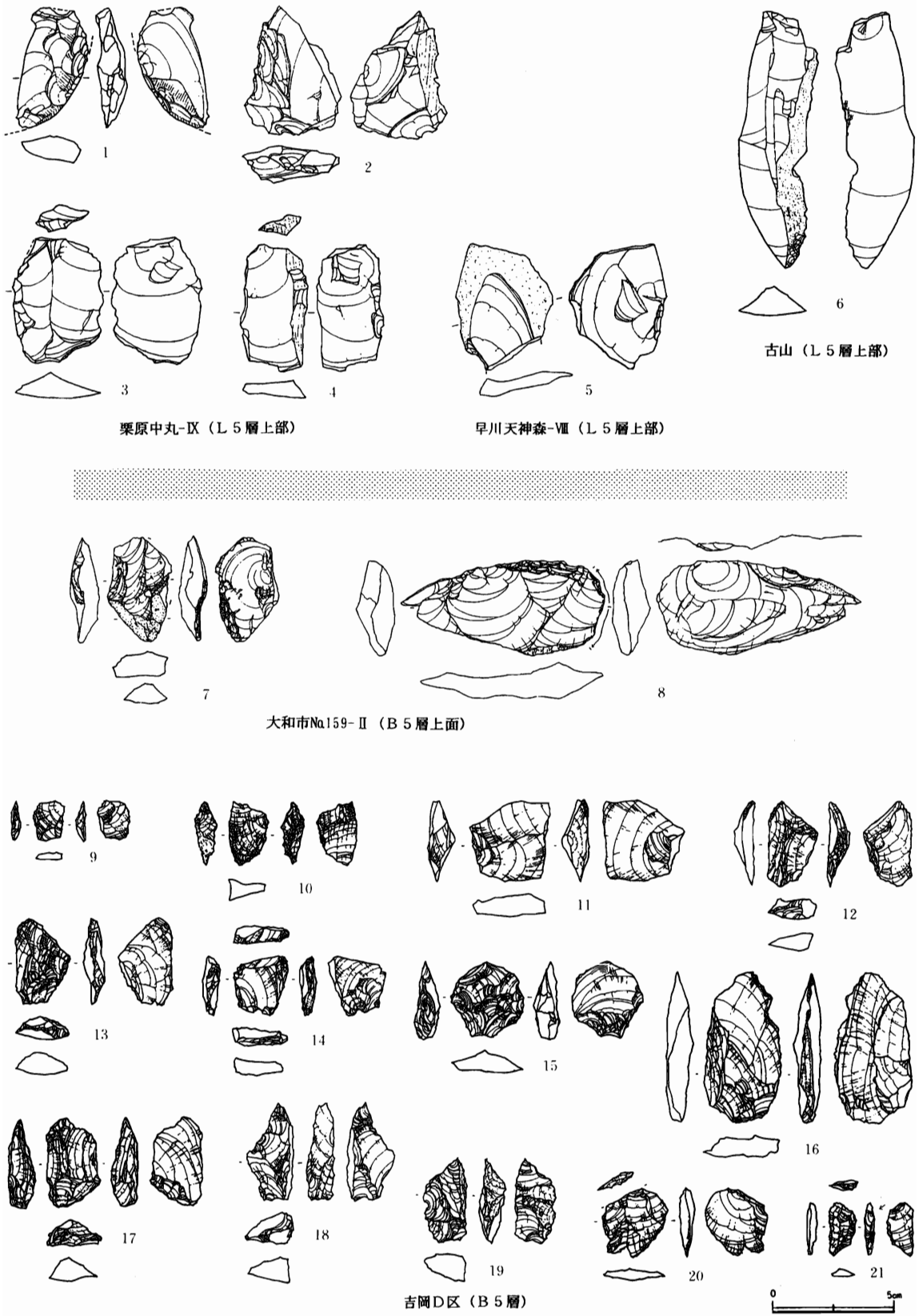
石器群は、チャートを主要石材とし、わずか1点ながら黒曜石も含む。石器の素材を得る剥片剥離技術は、90°の打面転位を繰返して長幅比1前後の幅広なすづまり剥片を剥離するものや、分厚い剥片を石核として横長剥片を剥離するもの、石核の周囲から求心状に剥離を行ってすづまり剥片を剥離するものなどがあり、石刃や縦長剥片を意図的に剥離した痕跡はみられない。

器種組成は、台形様石器・ナイフ状石器・削器・彫器などの小形剥片石器から構成され、数量的には台形様石器が主体をなす。台形様石器(9~15)は、横長剥片やすづまりの剥片を素材とし、素材の形状を変えずに微細な剥離と平坦剥離により部分的な細部加工を行っている。ナイフ状石器(16・17)は、幅広ですづまりの剥片を折断した縦長の素材を用い、形態的には基部加工のナイフ形石器である。細部加工は、微細な剥離・急斜な剥離・平坦剥離により部分的に施されるだけで、ナイフ形石器としては未発達なものといえる。削器(18・19)は、ナイフ状石器同様、剥片を折断した素材を用い、細部加工は、平坦剥離により部分的に両面調整に仕上げている。彫器(21)は、折断した剥片を素材とし、調整剥離を行った素材側縁部から折断面にそって彫刀面を作出した側刃形彫器である。また、石斧の出土はないが、石斧の調整剥片の存在から共伴する可能性が指摘されている。



早州天神森遺跡 第1図 基本層序

吉岡遺跡群D区B5層石器群の特徴は、①チャートを主要石材とする。②剥片剥離技術に石刃技法がみられない。③器種組成は、台形様石器・ナイフ形石器(ナイフ状



第2図 ナイフ形石器文化前半期の石器群(1) 下段：B5層、上段：L5層

石器)・削器・彫器・(石斧) などからなり、台形様石器・ナイフ形石器とも部分的に調整剥離がみられるだけで、未発達なものである。隣接地域においてこの石器群に対比されるのは、錐状石器や楔形石器の有無などの違いはあるものの、武蔵野台地の武蔵台遺跡・中山谷遺跡・西之台遺跡B地点・鈴木遺跡御幸第1地点などX層下部あるいはXI層出土の石器群や、下総台地の星谷津遺跡下層・大林遺跡第VII文化層・向山谷津遺跡・草刈六之台遺跡第1文化層・ヲサル山遺跡第4文化層・御山遺跡第I文化層などX層(下部)出土の石器群であり、いずれも各台地の後期旧石器時代最古の石器群として位置付けられている。これらの石群は、礫器・叩石などの大形礫石器や石斧とチャートを主要石材とする小形剥片石器から構成され、後者は、錐状石器や未発達な台形様石器をもち、中山谷遺跡・武蔵台遺跡ではナイフ状石器を伴う。これらのナイフ状石器も、細部加工は明瞭な刃潰しといえない粗雑な調整剥離であるが、形態的には基部加工のナイフ形石器として捉えられる。また、武蔵台遺跡Xb層や鈴木遺跡御幸第1地点XI層では数点の縦長剥片を連続剥離した痕跡がみられ、石刃技法の萌芽として理解される。しかし、石刃や縦長剥片を組織的に剥離する石刃技法は確立しておらず、剥片石器も石刃を素材としていない。これは、相模野台地のL5層や武蔵野台地のX層上部の石器群と大きく異なる点であり、相模野第I期前半期の特徴として捉えられる。

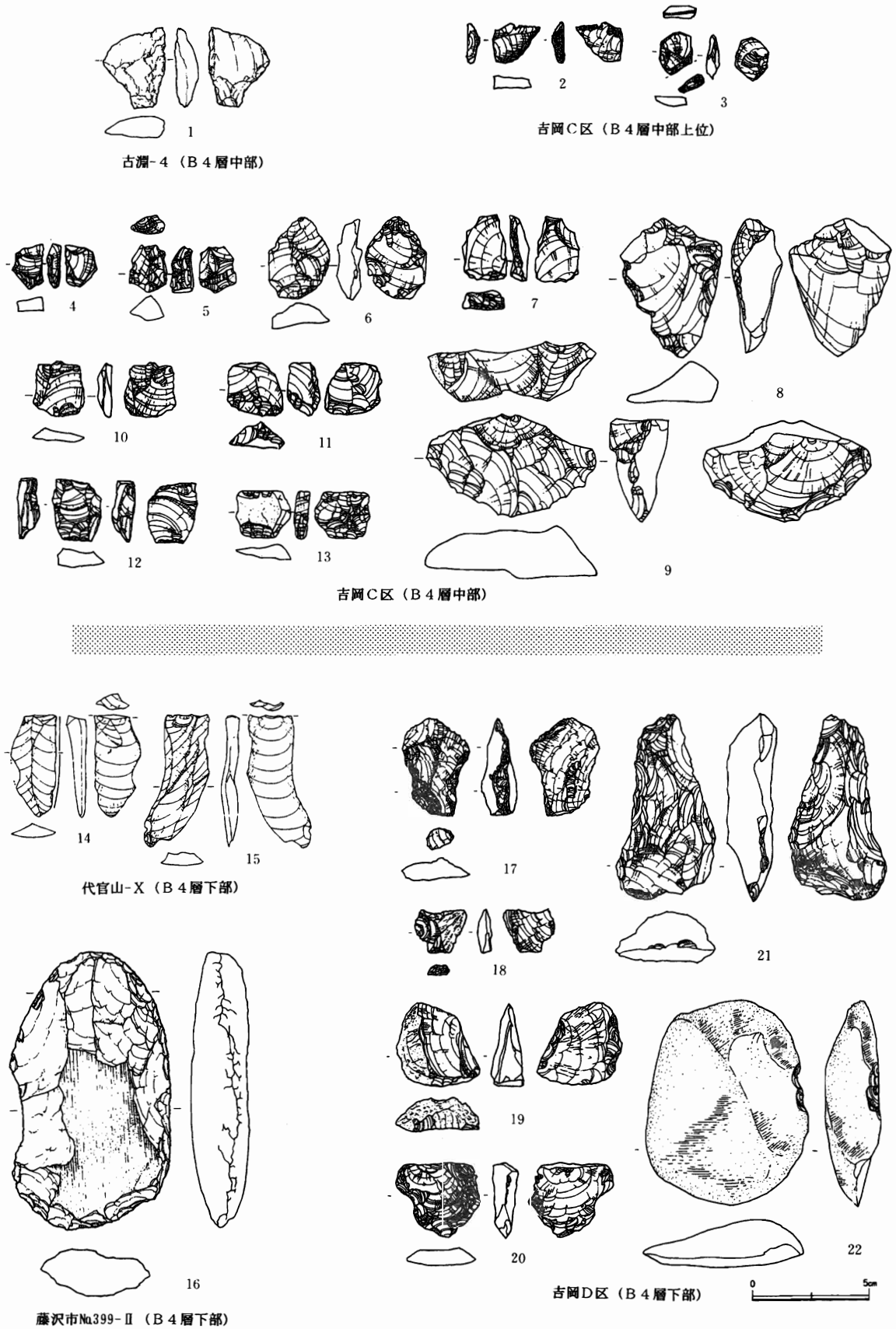
相模野台地で吉岡D区B5層と同じく相模野第I期前半期に比定される可能性のある石器群は、B5層上面から石器が出土した大和市No.159遺跡第II文化層である。出土石器は、黒曜石製の台形様石器(第2図7)と凝灰岩製の石斧の調整剥片を再利用した剥片石器(第2図8、石斧の可能性はある)など少ないが、台形様石器は、やはり横長剥片の末端部裏面の一部分に平坦剥離を行っただけの粗雑な細部加工により作られている。資料数が少ないこともあるが、本石器群でも縦長剥片や石刃は存在しない。

#### L5層—石刃技法の成立—

L5層出土の石器群(第2図上段)は、古山遺跡・早川天神森遺跡第VIII文化層・栗原中丸遺跡第IX文化層・大和配水池内遺跡第XIV文化層などがあり、いずれもB4層直下のL5層上部から石器が出土している。

古山遺跡では、黒色頁岩製の大型石刃(6)が単独で出土しており、末端部の一側縁に細部加工が加えられ、部分加工のナイフ形石器として捉えることが可能である。また、早川天神森遺跡第VIII文化層では、細粒凝灰岩製の台形様石器(5)と剥片の2点の石器が出土しており、台形様石器は、横長剥片の頭部裏面と末端部に部分的な細部加工を行っただけのもので、粗雑な調整剥離による。栗原中丸遺跡第IX文化層では、10点の石器が出土しているが、台形様石器やナイフ形石器は出土していない。剥片石器の石材はチャートと細粒凝灰岩で、やや幅広い縦長剥片(3・4)の連続剥離がみられる。削器(2)は剥片素材の石核の可能性があり、他には刃部を磨製した石斧の断片(1)と台石・磨石がある。大和配水池内遺跡第XIV文化層では、120点の遺物が出土している。報告書が未刊で詳細は不明であるが、少数の石刃・縦長剥片を伴い、5個体の石斧やスクレイパー・楔形石器とともに、基部加工・部分加工のナイフ形石器がみられる。

L5層の石器群の特徴をみると、①石材は、チャート・凝灰岩・頁岩・黒曜石などが用いられる。②石刃技法ともいえる石刃や縦長剥片の連続剥離がみられる。③ナイフ形石器は、石刃や縦長剥片を素材とした基部加工と素材末端部に加工した部分加工がみられ、細部加工は微細な剥離や極めて部分的な剥離など、やはり未発達なものが多い。④台形様石器は、早川天神森遺跡第VIII文化層の1例のみであるが、細部加工はやはり粗雑である。⑤石斧を伴う。ことなどが指摘され、こうした特徴は、武蔵野台地や下総台地のX層上部の石器群にみられる。武蔵野台地では、石刃を素材とした基部加工・部分加工のナイフ形石器が高井戸東遺跡・下山遺跡・嘉留多遺跡などから、細部加工の粗雑な台形様石器が武蔵台遺跡・高井戸東遺跡・西台後藤田遺



第3図 ナイフ形石器文化前半期の石器群(2) 下段：B4層上部、上段：B4層中部

跡などから出土しており、石斧は各遺跡から出土している。また、相模野台地では、資料が乏しいため詳しい剥片剥離技術は明らかではないが、武蔵野台地の豊富な資料からは、石刃技法ともいえる縦長剥片の連続剥離、盤状剥片を用いた石核からの横長剥片の剥離、90°の打面転位を伴う剥片剥離、両刃礫器のように打面と剥片剥離作業面を交互に入替えて剥離するもの等各種の剥片剥離工程がみられる。一方、下総台地では、御山遺跡第Ⅱ文化層・新空港No.55遺跡下層などが相当する。

この時期の石器群は、いまだ二側縁加工のナイフ形石器は出現していないが、剥片剥離技術に明瞭な石刃技法がみられることで、吉岡遺跡群D区B5層などの石器群とは異なり、相模野第Ⅰ期の後半期として位置付けられる。

## 相模野第Ⅱ期

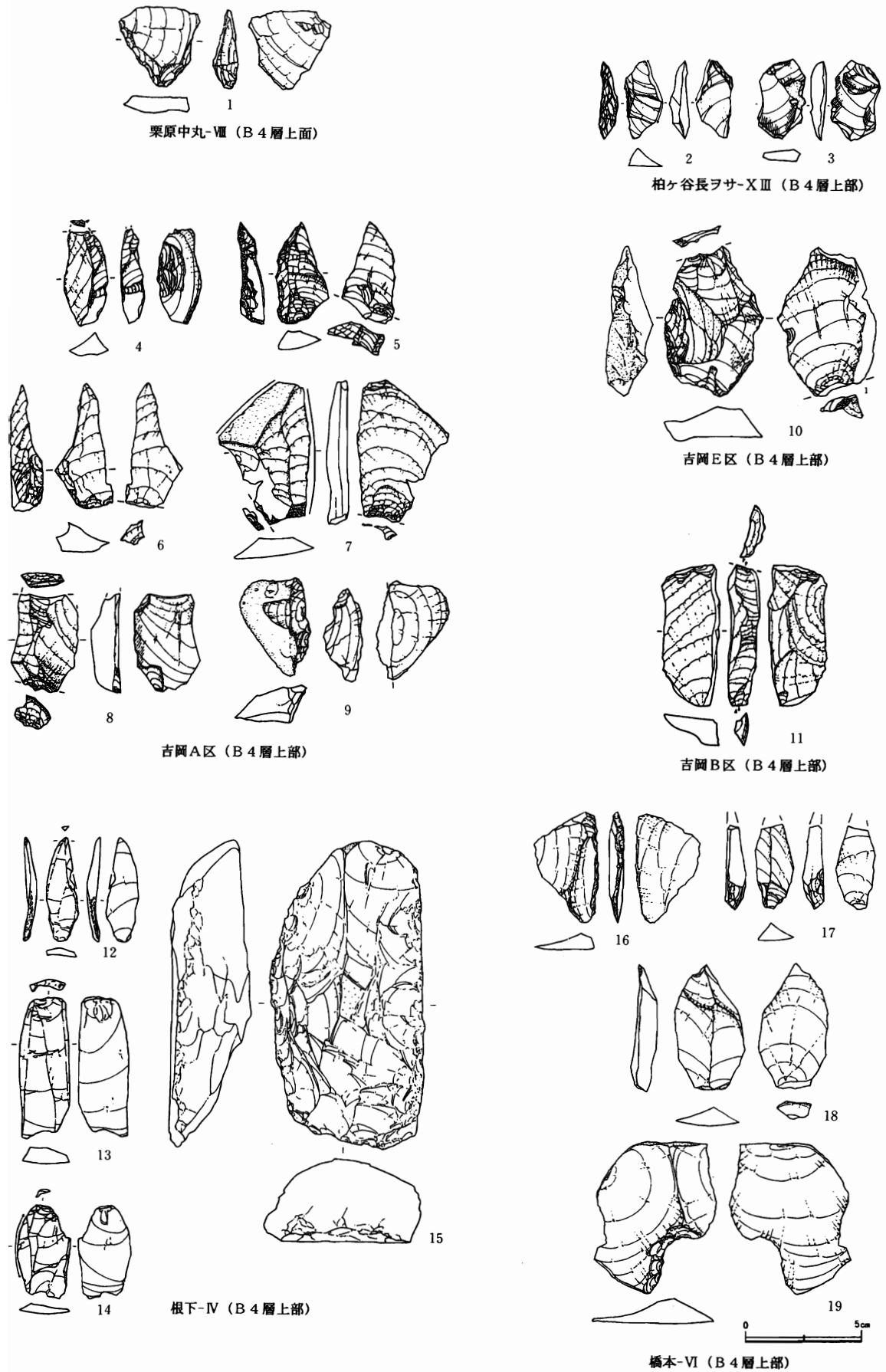
### B4層 一 台形様石器の発達と茂呂系ナイフ形石器の出現一

B4層は約1mの厚さをもち、ナイフ形石器文化は、このB4層が堆積する時代に大きな変貌を遂げている。B4層は、通常、上中下3層の暗色部とその間層の暗黄褐色ロームから構成され、ここでは、B4層の下部・中部・上部と分けて石器群の特徴をみているが、二三を除き、石器群の資料はやはり貧弱である。

B4層下部(第3図下段)では、吉岡遺跡群D区(17~22)が代表的で、黒曜石を主要石材とし、90°の打面転位による剥片剥離が多くみられる。器種組成は、台形様石器・削器等の小形剥片石器と刃部磨製の石斧(21)からなる。台形様石器(17~19)は、平坦剥離による側縁部の細部加工が顕著にみられ、B5層・L5層の台形様石器に比べて技術的な発達が窺える。また、代官山遺跡第Ⅴ文化層ではガラス質黒色安山岩・凝灰岩等を石材とした縦長剥片(14・15)の連続剥離がみられ、藤沢No.399遺跡第Ⅱ文化層では刃部磨製の石斧(16)が2点出土している。

B4層中部(第3図上段)では、吉岡遺跡群C区から多量の資料が出土している(4~9)。石材は、ガラス質流紋岩・チャート・珪質頁岩・流紋岩質凝灰岩・ガラス質黒色安山岩など多様で、90°打面転位による剥片剥離と剥片素材の石核からの剥片剥離等がみられる。器種組成は、各種の楔形石器をはじめ台形様石器・ナイフ形石器・搔器・削器などから構成される。楔形石器(10~13)は、両極技法の存在を示すもので、尖頭状石器とされたもの(6)も楔形石器の一種であると考えられる。ナイフ形石器(5)は粗雑な加工ながら二側縁加工である。古淵B遺跡第4文化層では、両側縁に平坦剥離による細部加工が施された黒曜石製の台形様石器(1)が出土している。また、同じ吉岡遺跡群C区のB4層中部上位では、石刃素材の黒曜石製の台形様石器が報告されているが(2)、この石器は、一側縁加工または二側縁加工のナイフ形石器の欠損品と思われる。

B4層上部(第4図)では、吉岡遺跡群A区(4~9)と橋本遺跡第Ⅵ文化層(16~19)(註5)からまとまった資料が出土しているほか、吉岡遺跡群B区(11)及びE区(10)・根下遺跡第Ⅳ文化層(12~15)・柏ヶ谷長ヲサ遺跡第ⅤⅢ文化層(2・3)などがある。石器群の特徴をみると、各遺跡とも細粒凝灰岩とガラス質黒色安山岩などを主要な石材とし、吉岡遺跡群A区では特にガラス質黒色安山岩を多用している。剥片剥離技術は、90°打面転位による剥片剥離、剥片素材の石核からの横長剥片の剥離、縦長剥片の連続剥離などがみられる。器種組成は、台形様石器・ナイフ形石器・削器・彫器などの小形剥片石器と石斧・礫器・叩石・磨石などの大形礫石器から構成される。台形様石器は、栗原中丸遺跡第Ⅷ文化層(1)(註6)・橋本遺跡第Ⅵ文化層(16)から出土しているが、細部加工はやや急斜な調整剥離が特徴的である。ナイフ形石器は、縦長剥片を素材とした基部加工が吉岡遺跡群A区(6・7)・同E区(10)・根下遺跡第Ⅳ文化層(12)・橋本遺跡第



第4図 ナイフ形石器文化前半期の石器群(3) B4層上部

VI文化層(17)から、一側縁加工が吉岡遺跡群A区(5)と柏ヶ谷長ヲサ遺跡第XIII文化層(2)から、二側縁加工が吉岡遺跡群A区(4)からそれぞれ出土している。この中で、吉岡遺跡群A区の二側縁加工のナイフ形石器は、横長剥片を素材として裏面に平坦剥離と微細な剥離によって加工したもので、製作技術上は台形様石器に近く、茂呂系ナイフ形石器とは程遠いものである。また、石斧は、根下遺跡第IV文化層(15)・吉岡遺跡群C区から打製石斧が出土している。

これまでB4各層の石器群の内容をみてきたが、その特徴は、①石材は、黒曜石を主体とする石器群と凝灰岩・ガラス質黒色安山岩などを主要石材とする石器群があるが、後者においても台形様石器やナイフ形石器は黒曜石を石材とする場合がある。②剥片剥離技術は、90°打面転位による剥片剥離をはじめ、石刃技法ともいえる縦長剥片の連続剥離、盤状剥片石核からの横長剥片の剥離などが下部から上部まで一貫してみられる。③台形様石器は、下部と中部では平坦剥離による細部加工を両側縁に施したものが多いが、上部ではやや急斜な細部加工が目立つ。④ナイフ形石器は、中部や上部では基部加工・一側縁加工とともに二側縁加工が存在する可能性が高い。⑤石斧は、下部から上部まで一貫して存続する。などが明らかにされた。しかし、相模野のB4層から出土した台形様石器とナイフ形石器の総数は、それぞれ10点以下とあまりにも資料が少なく、果たしてこの時期の石器群の実体を示しているのかどうか疑問である。このため、台形様石器やナイフ形石器のあり方については、資料の豊富な武蔵野台地・下総台地の調査成果を参考にする必要がある。

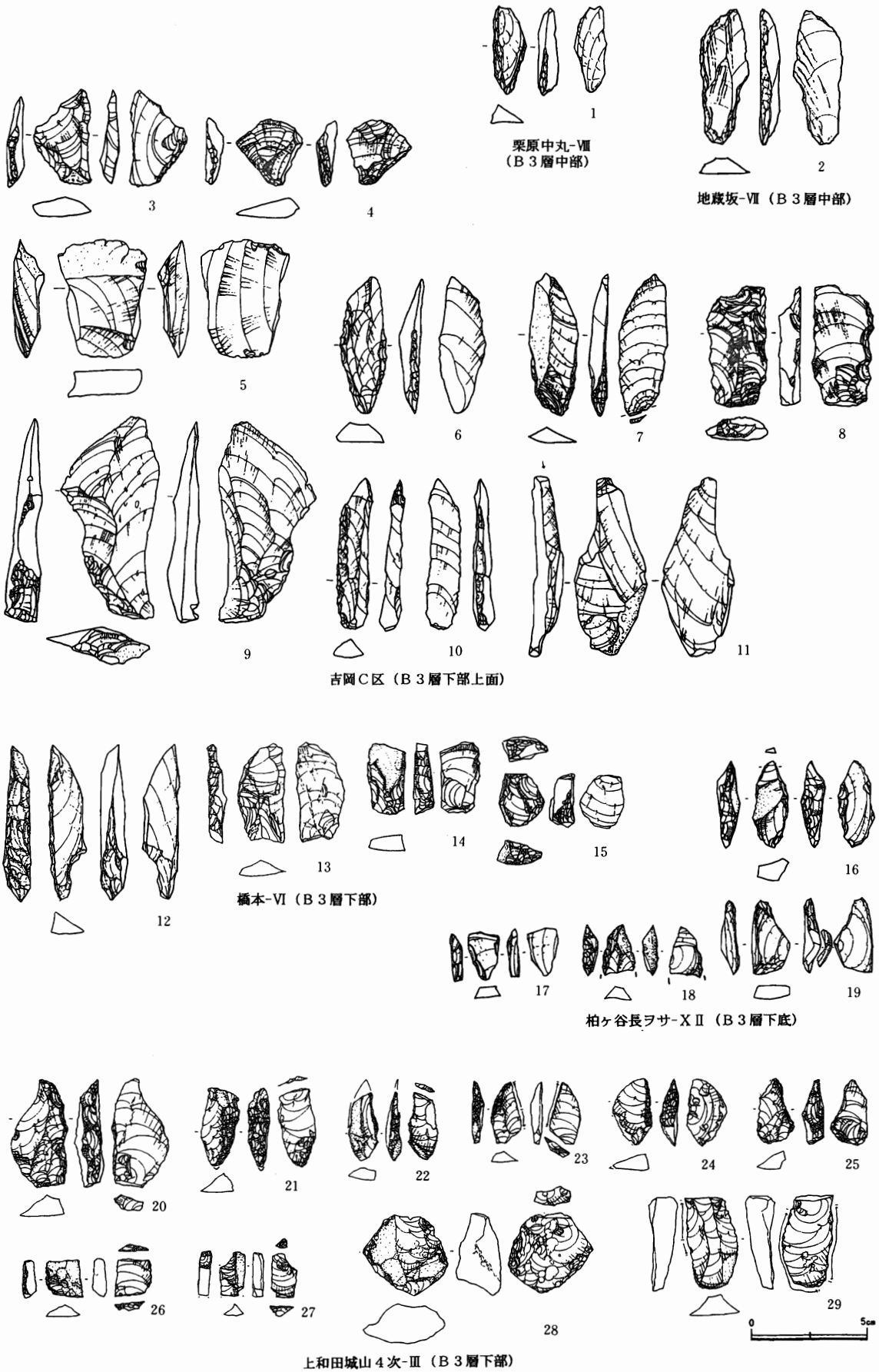
武蔵野台地では、台形様石器は、IX層下部や中部で特に発達し、横長剥片を素材とすることや裏面加工・平坦剥離など台形様石器独特の石器製作技術が顕著となる。しかし、IX層上部では、数量的にもやや減少し、細部加工もナイフ形石器に一般的な急斜な調整剥離が目立つようになる。一方、ナイフ形石器は、X層で安定してみられた基部加工がIX層にも引継がれ、特にIX層下部では基部の加工が顕著に施されたナイフ形石器が多い。また、一側縁加工のナイフ形石器や二側縁加工の茂呂系ナイフ形石器が、もみじ山遺跡・鈴木遺跡・四葉地区遺跡などのIX層下部から出土しており、この段階に出現したと思われる。また、下総台地でも武蔵野台地と同様、IX層下部において台形様石器と基部加工のナイフ形石器がもっとも発達するが、中山新田I遺跡や四ツ塚遺跡などのIX層下部では石刃素材の二側縁加工のナイフ形石器が相伴しており、IX層中部～上部では二側縁加工のナイフ形石器が増加して台形様石器を凌駕している。また、同じIX層中部～上部の芋窪遺跡や大林遺跡では、吉岡遺跡群C区B4層中部の石器群と同じ両極技法と楔形石器が卓越した石器群がみられる。

このように、武蔵野・下総両台地のIX層石器群には、二側縁加工のナイフ形石器が出現しており、今後、相模野台地においてもB4層から二側縁加工のナイフ形石器が出土することが予測される。相模野第II期は、二側縁加工のナイフ形石器の出現を最大の特徴とするが、B4層では数量的には多くないと考えられ、石斧が根下遺跡第IV文化層などB4層上部(IX層上部)まで存続することから、B4層の石器群を相模野第II期の前半期として捉らえることができる。

#### B3層—石刃技法と茂呂系ナイフ形石器の発達—

B3層では、B4層以下の各層に比較して調査遺跡が多く、資料の豊富な石器群もみられる。代表的な石器群は、B3層下部では、橋本遺跡第VI文化層・上和田城山遺跡4次調査第III文化層・柏ヶ谷長ヲサ遺跡第XII文化層・吉岡遺跡群C区、B3層中部では、栗原中丸遺跡第VII文化層・台山遺跡第IV文化層・地藏坂遺跡第VII文化層、B3層上部～上面では、寺尾遺跡第VI文化層・相模野No.154遺跡・地藏坂遺跡第VI文化層・上土棚遺跡3次調査第VII文化層などがある。



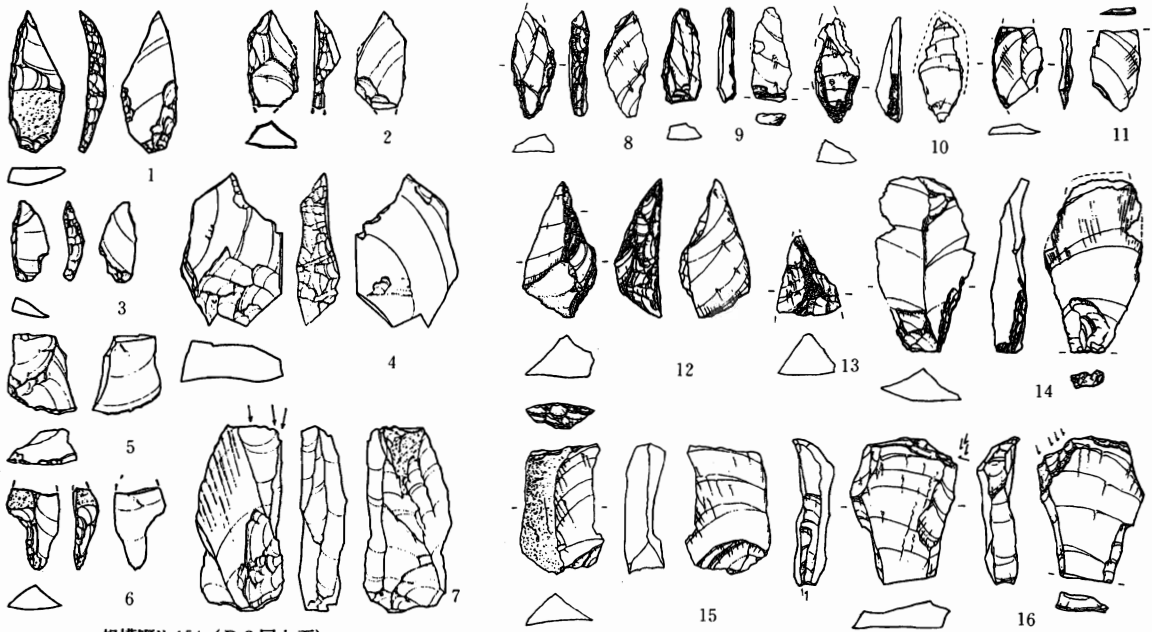


第5図 ナイフ形石器文化前半期の石器群(4) B3層中～下部

相模野第Ⅱ期の後半期に位置付けられるB3層の石器群は、B4層に特徴的に共伴する石斧が消失し、石刃技法と石刃素材の一侧縁加工や二側縁加工のナイフ形石器が発達するが、B3層下部～中部の石器群とB3層上部～上面の石器群とでは、細部で内容が若干異なる。

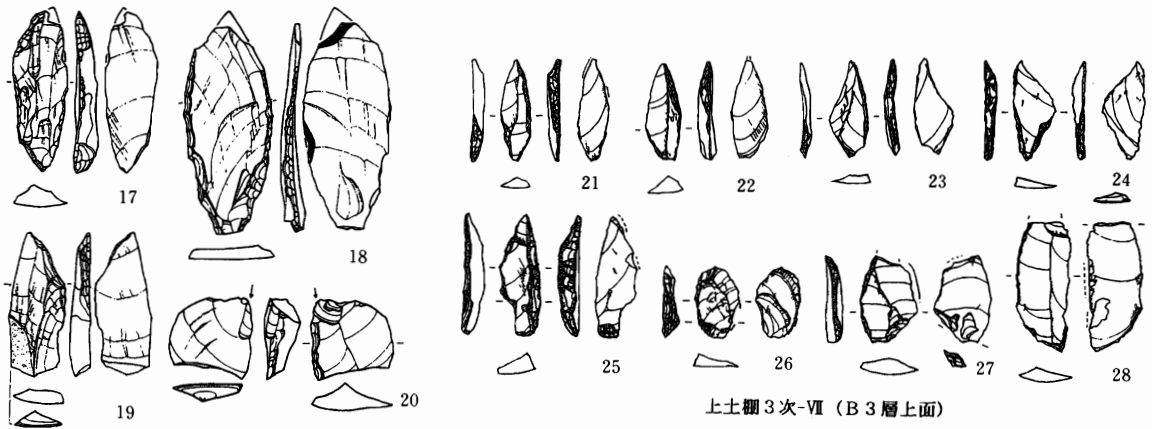
B3層下部～中部(第5図)では、石材は、上和田城山遺跡4次調査第Ⅲ文化層(20～29)のように黒曜石が卓越する石器群もみられるが、黒曜石以外にも凝灰岩・ガラス質黒色安山岩・頁岩など多様な石材を用いている。剥片剥離技術は、大半の石器群で石刃や縦長剥片の連続剥離を行う石刃技法が卓越してみられ、90°打面転位を伴う剥片剥離や両刃礫器状の石核から打面と剥片剥離面作業面を交互に入替えて剥片剥離を行うもの、剥片素材の石核から横長剥片を剥離するものなどもみられる。器種組成は、ナイフ形石器・台形様石器・搔器・削器・彫器・楔形石器などの剥片石器と磨石・叩石などから構成される。ナイフ形石器は、二側縁加工や一侧縁加工など各種の形態がみられる。黒曜石を主要石材とする上和田城山遺跡4次調査第Ⅲ文化層では一侧縁加工のナイフ形石器(20～25)が、凝灰岩・ガラス質黒色安山岩を主要石材とする吉岡遺跡群C区では石刃等を素材とした基部加工のナイフ形石器(7・9・10)が、それぞれ特徴的にみられる。また、二側縁加工のナイフ形石器では、刃部側の基部が抉入状に加工された石器が橋本遺跡第Ⅵ文化層(12)・地藏坂遺跡第Ⅶ文化層(2)にみられる。一方、台形様石器(3・4・17)は、量的に少なくなり、細部加工もナイフ形石器と同じ急斜度の調整剥離が卓越する。相模野台地では、今のところ二側縁加工のナイフ形石器が多量に出土した石器群はないが、武蔵野台地や下総台地のⅦ層石器群をみるとB4層に対比されるⅨ層段階に比べて二側縁加工のナイフ形石器の発達が明らかである。特に、下総台地の北海道遺跡・復山谷遺跡・聖人塚遺跡・東林跡遺跡等では石刃素材の二側縁加工のナイフ形石器が多くみられ、その中には、橋本遺跡第Ⅵ文化層や地藏坂遺跡第Ⅶ文化層にみられた刃部側の基部が抉入状に加工されたナイフ形石器もみとめられる。

一方、B3層上部～上面(第6図)では、石材は、黒曜石が圧倒的に多くなり、大半の石器群が黒曜石を主要石材とする。その産地は、寺尾遺跡第Ⅵ文化層では信州産が圧倒的多数を占めて少数の伊豆柏峠産が加わっているのに対して、他の石器群では伊豆柏峠産が主体をなす。剥片剥離技術は、石刃技法と90°打面転位を伴う剥片剥離がともにみられ、このほか両刃礫器状の石核からの剥片剥離もみられる。寺尾遺跡第Ⅵ文化層では、石刃を含む縦長剥片の剥片剥離工程が数個体で復元されているが、それは90°の打面転位を頻繁に行うもので、剥離される剥片もやや幅広の縦長剥片が多い。これに対して、地藏坂遺跡第Ⅵ文化層では、おなじ黒曜石を石材としながら武蔵野台地の鈴木遺跡Ⅵ層と同じく打面再生を伴った石刃技法がみられる。器種組成は、茂呂系二側縁加工をはじめ各種の形態からなるナイフ形石器を中心に、搔器・削器・彫器・楔形石器などから構成され、台形様石器はほとんど姿を消す。寺尾遺跡第Ⅵ文化層では、こうした黒曜石製の二側縁加工ナイフ形石器を多量にもつ石器群(第2～5ブロック、29～47)がある一方で、ガラス質黒色安山岩等を石材とし、少数のナイフ形石器・彫器・剥片からなる石器群(第1ブロック、17～20)が同じ層位から地点を違えて出土しており、後者については、ナイフ形石器の大きさや形態上の違いから、時期的にやや先行する石器群と捉らえる見方もある(服部1992)。しかし、両者は同時に残されたものではなく、前者が拠点的な集落として黒曜石を用いて大量のナイフ形石器を製作しているのに対して、後者は一時的な野営地と思われ、石器の製作を行った痕跡も残していない。同様の事例は地藏坂遺跡第Ⅵ文化層においてもみられ、黒曜石を主体として石器製作を行ったブロックと非黒曜石の搬入石器を少数残したブロックの両者が存在する。両者のナイフ形石器の大きさの違いは、時期的な違いではなく、おそらく石材差による素材の大き



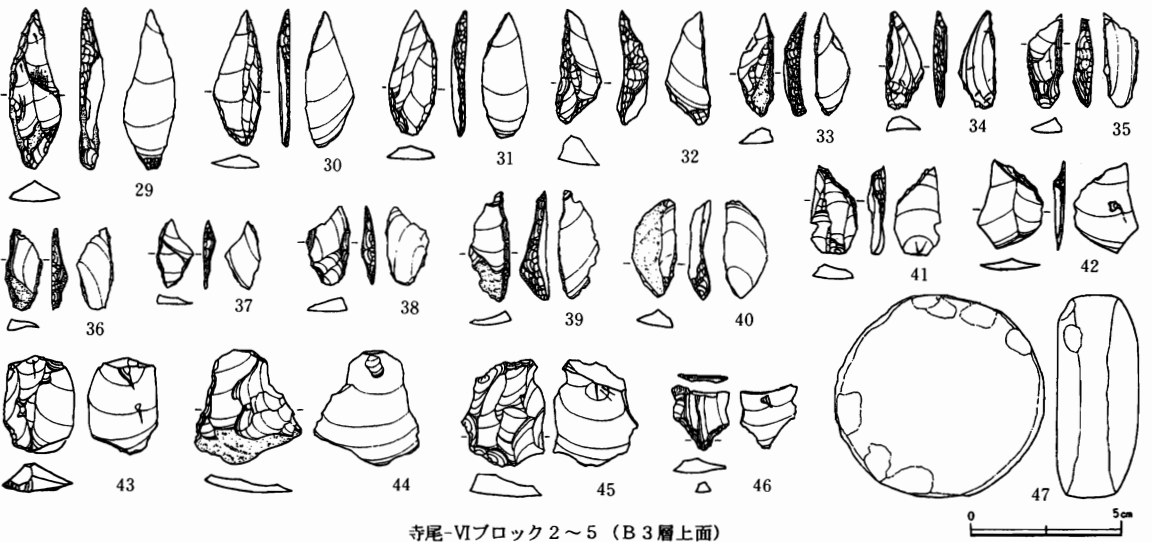
相模野No.154 (B3層上面)

地藏坂-VI (B3層上面)



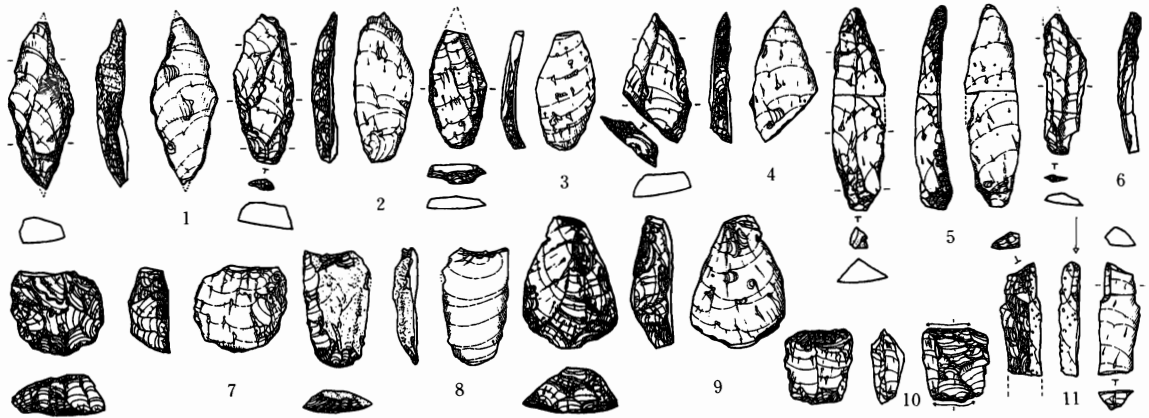
寺尾-VIブロック1 (B3層上面)

上土棚3次-VII (B3層上面)

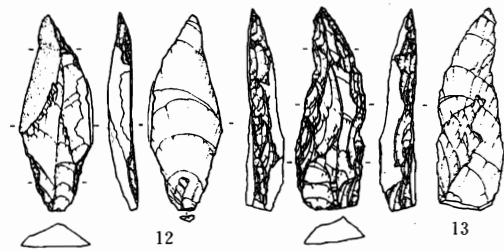


寺尾-VIブロック2~5 (B3層上面)

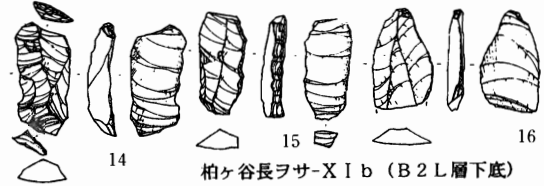
第6図 ナイフ形石器文化前半期の石器群(5) B3層上面



慶応SFC-V (B2L層下部)



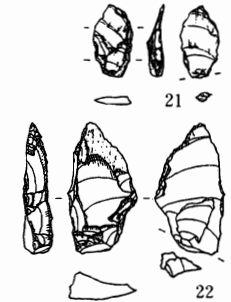
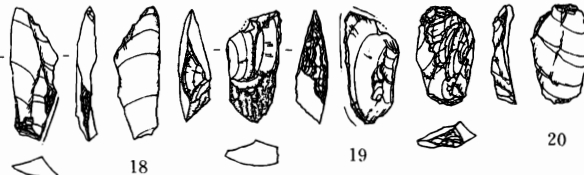
柏ヶ谷長ヲサ-X I a (B2L層下底)



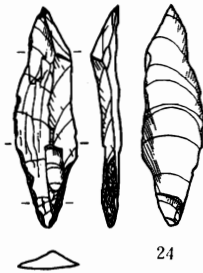
柏ヶ谷長ヲサ-X I b (B2L層下底)



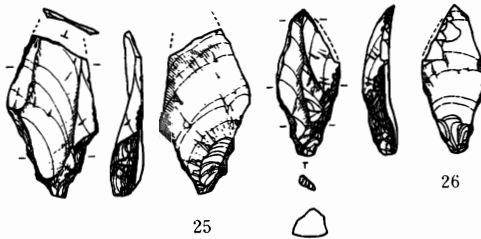
上土欄3次-VI (B2L層下底)



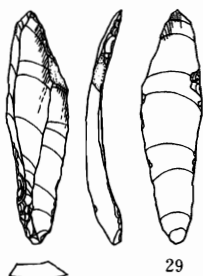
地蔵坂-IV (B2L層下部)



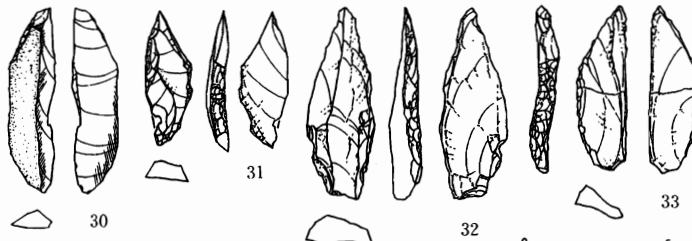
慶応SFC-VI (L3層)



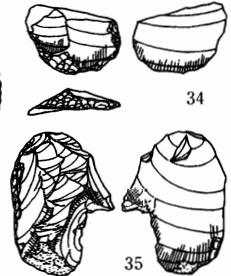
地蔵坂-V (B2L層下底)



橋本-V (L3層)



栗原中丸-VII (B2L層下底)



第7図 ナイフ形石器文化前半期の石器群(6) L3層~B2L層下部

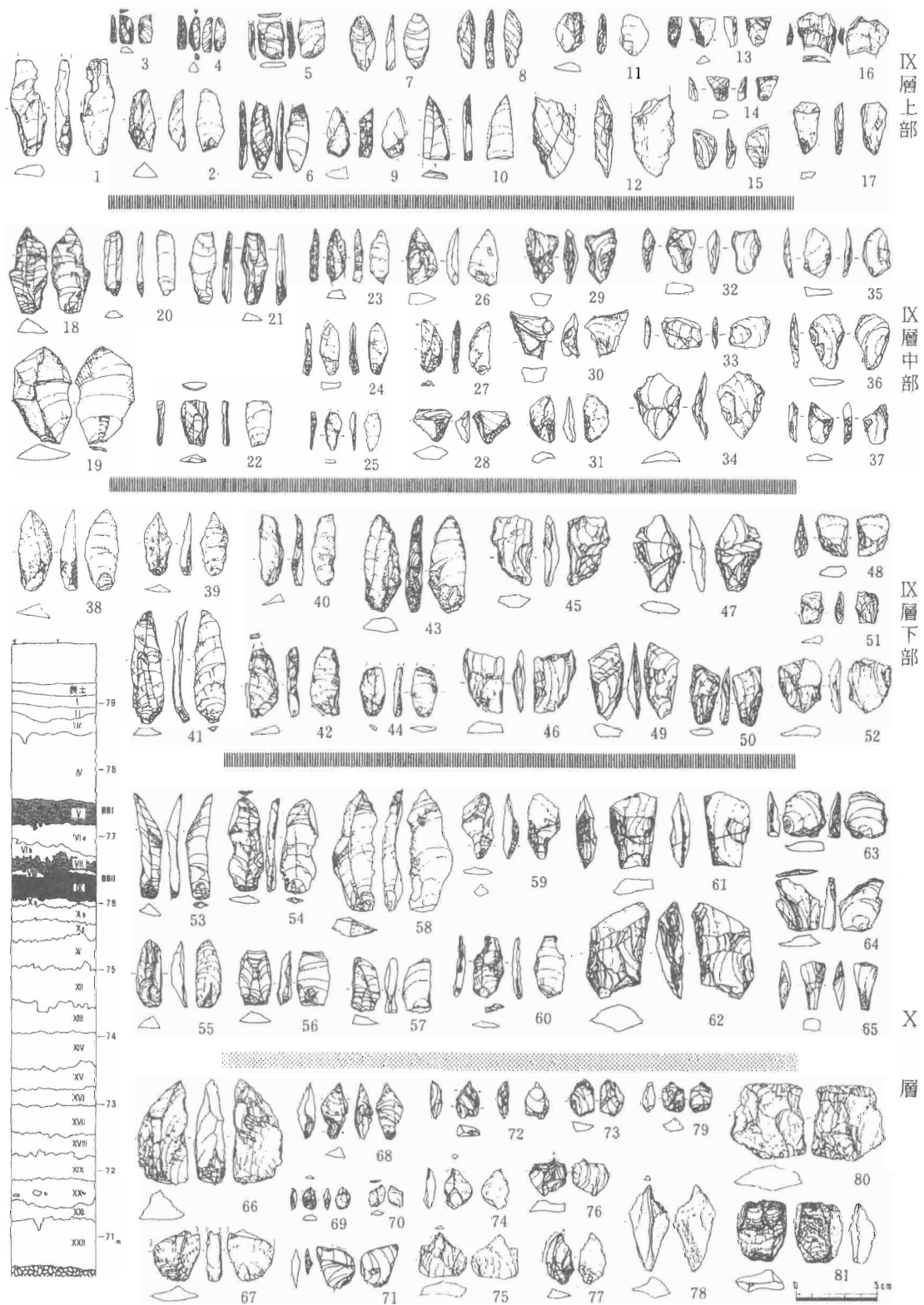
さの違いによるものと思われる(註7)。

最後に、AT上位のB2L層下部～L3層の石器群(第7図)をみてみよう。それは、橋本遺跡第V文化層(29～35)、月見野IVB遺跡、地藏坂遺跡第V文化層(23)、同第IV文化層(21・22)、上土棚遺跡3次調査第VI文化層(17～20)、慶應SFC遺跡第VI文化層(24～26)、同第V文化層(1～11)、柏ヶ谷長ヲサ第XI文化層(12～16)、栗原中丸遺跡第VII文化層(27・28)など、いずれも黒曜石を主要石材とする石器群である。黒曜石の石材産地は、橋本遺跡第V文化層だけが寺尾遺跡第VI文化層と同じく信州産を主体とし、他の石器群は柏峠や畑宿の伊豆箱根系統の黒曜石を主体とする。これらの石器群の多くは、石刃技法を基盤とするもののナイフ形石器は多様である。橋本遺跡第V文化層や慶應SFC遺跡第V文化層は、石刃素材の二側縁加工と基部加工・部分加工からなり、前者はさらに国府型など横長剥片素材のナイフ形石器(32・33)をもつ(註8)。また、上土棚遺跡第3次調査第VI文化層は、鋸歯状剥離による二側縁加工で角錐状石器に類似するもの(17)・石刃素材の基部加工(18)・切出形(19)からなり、地藏坂遺跡第IV文化層では素材の打面を残した二側縁加工で切出形に近いもの(21・22)が特徴的にみられる。一方、ナイフ形石器以外では、上土棚遺跡第3次調査第VI文化層や慶應SFC遺跡第V文化層では拇指状搔器(7～9、20)、柏ヶ谷長ヲサ遺跡第XI a文化層では角錐状石器(註9)(13)など、後続する石器群を特徴付ける石器も出土しており、AT降灰後の石器群には相模野第III期への移行期的な様相が窺える。

### 3. ナイフ形石器文化前半期の様相

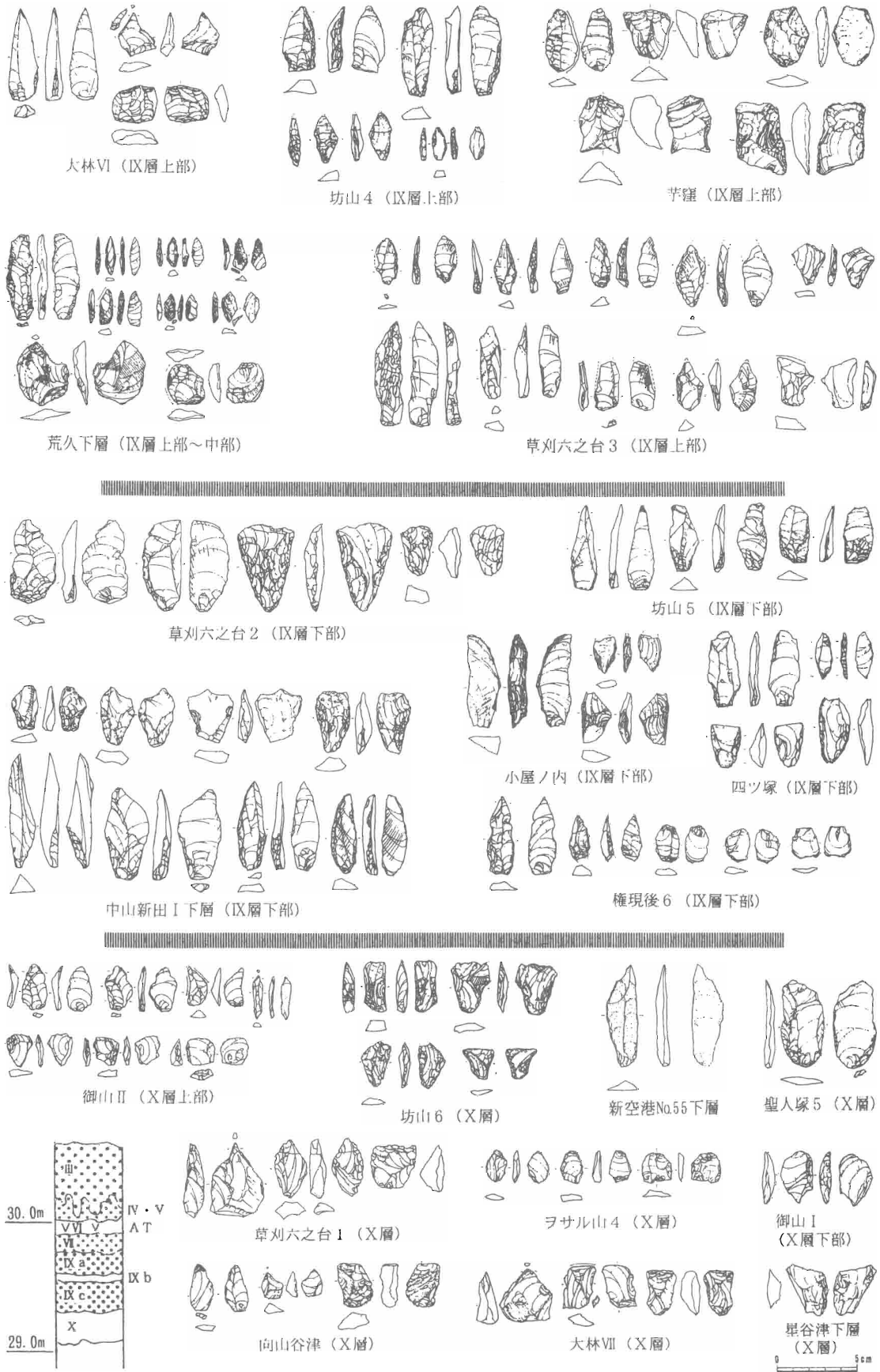
これまで、筆者の編年区分をもとに相模野台地のAT下位の石器群について概観した。ここでは、個別石器群の細部の特徴は異なっているが、各時期の剥片剥離技術や細部加工技術等の技術基盤と器種組成あるいは各器種の形態的・形式的な特徴によって捉えられる石器群の構造は、大凡共通している。

相模野第I期の前半期では、横長剥片やすづまり剥片を剥離する各種の剥片剥離技術を基盤とし、その剥片を素材として未発達な台形様石器やナイフ形石器・削器・錐状石器・彫器等各種の小形剥片石器を製作している。そして、台形様石器やナイフ形石器の細部加工は、素材の折断とともに裏面あるいは両面に微細な剥離や平坦剥離により施されるものが特徴的であり、平坦剥離による両面への調整剥離は削器にもみられる。このような剥片剥離技術や調整剥離技術は、おそらく前時代からの系統を引継いだものと考えられる。一方、武蔵野台地の鈴木遺跡御幸第1地点XI層や武蔵台遺跡Xb層などでは石刃技法の萌芽が確認され、吉岡遺跡群D区B5層のナイフ形石器には部分的ながら両面からの急斜な調整剥離が確認されるなど、ナイフ形石器文化を特徴付ける新たな石器製作技術も認められ、こうした新旧の石器製作技術を併用した石器群のあり方にナイフ形石器文化初期の様相を垣間みることができる。そして、後半期になると、横長剥片やすづまり剥片を剥離する剥片剥離技術に加えて、石刃・縦長剥片を連続剥離する石刃技法が確立し、前者が台形様石器、後者がナイフ形石器との対応関係が明確になる。しかし、ナイフ形石器の形態は、基部加工と部分加工に限られ、細部加工は、ナイフ形石器・台形様石器ともやはり粗雑な調整剥離が多い。こうした二種類の剥片剥離技術と台形様石器・ナイフ形石器との対応関係は、基本的に相模野第II期にも引継がれるが、その前半期には、特に、平坦剥離による細部加工を行った台形様石器が発達し、相模野第I期から第II期前半までは、まさしく台形様石器群の発達過程として捉えられる。これらの時期は、また、刃部磨製を含む石斧を特徴的に伴い、台形様石器群をもう一面で特徴付けている。一方、相模野第II期前半には、ナイフ形石器は、基部加工や部分加工の形態に加えて新たに一側縁加工や二側縁加工の形態が出現し、その後半期



1 四葉地区遺跡IX層上部、2・10~12・17 烏屋敷遺跡IX層上部、3~6・16 高井戸東遺跡IX層上部、7・8・15 成増との山遺跡IX層上部、9・13・14 根ノ上遺跡IX層上部、18・19・28 高井戸東遺跡IX層中部、20・23・24 東早洲遺跡IX層中部、21・22 武蔵台遺跡IX層中部、25~27 大門遺跡IX層中部、29~31 比丘尼橋遺跡B地点IX層中部、32~37 下里本邑遺跡IX層中部、38~40・51・52 もみじ山遺跡IX層下部、41・49・50 高井戸東遺跡IX層下部、42 東早洲遺跡IX層下部、43 鈴木遺跡IX層下部、44 四葉地区遺跡IX層下部、45・46 比丘尼橋遺跡B地点IX層下部、47・48 多聞寺前遺跡IX層下部、53・54・63・64 高井戸東遺跡X層、55・60・61 武蔵台遺跡Xa層、56・57 下山遺跡X層、58 嘉留多遺跡X層、59 多摩蘭坂遺跡X層、62 茂呂遺跡B地点X層、68・72・74・81 武蔵台遺跡Xb層、65 西台後藤田遺跡Xa層、66・67・70・76・77 中山谷遺跡X層、69・71・73・79 鈴木遺跡御幸第1地点XI層、75・78・80 西之台遺跡B地点X層

第8図 武蔵野台地区~X層出土の石器群(鈴木2000による)



第9図 下総台地IX~X層出土の石器群 (鈴木 2000 による)

には、石斧の消失とともに、茂呂系二側縁加工のナイフ形石器が増加して台形様石器を凌駕する。特に、B3層上部～上面では黒曜石製の茂呂系ナイフ形石器が発達する一方で、台形様石器はほとんど消失するが、あるいは、この石器は、ナイフ形石器の技術基盤の中に取込まれて切出形ナイフ形石器へと形態変化したとも考えられる。このように、相模野第Ⅱ期前半から後半にいたる石器群の推移は、茂呂系ナイフ形石器の出現から発達過程として捉えられ、相模野第Ⅰ期から第Ⅱ期に及ぶナイフ形石器文化前半期の様相は、台形様石器群から茂呂系ナイフ形石器群への移行過程を示すものとして理解される。

なお、石刃技法を基盤とする茂呂系二側縁加工のナイフ形石器を主体とする石器群は、AT上位のB2L層下部でもみられるが、これらの層位からは、後続の相模野第Ⅲ期を特徴付ける切出形ナイフ形石器や角錐状石器・拇指状搔器などを共伴する石器群もみられ、相模野第Ⅱ期から第Ⅲ期への移行は、不整合面のように一時に変換したのではなく、徐々に進行したことが窺われる。AT上位の石器群のこうした特徴をみると、始良火山大噴火のAT降灰による寒冷化など自然環境への影響が間接的に石器文化にも影響して石器群の変革や異系統の石器の波及をもたらし、やがて石刃技法の一時的な衰退と細部加工における鋸歯状剥離の発達など、石器群の構造の改変に至ったものと思われる。

#### 註

註1 2000年11月、宮城県上高森遺跡と北海道総進不動坂遺跡の2000年の発掘調査において、藤村新一により遺跡捏造が行われたことが明らかとなった。藤村は、山田上ノ台・座散乱木両遺跡の調査以来、20年の間に実施された北海道・東北・関東地方の前・中期旧石器時代の遺跡調査の大半に調査員として参加し、自身の手で多数の石器を発見している。このため、この問題は、今回捏造が明らかとなった2遺跡だけに止まらず、藤村が関わったすべての遺跡とその出土石器の信憑性が全面的に問われることになった。現在は、これらの遺跡の出土石器の真偽について、関係者によって検証作業が進められている段階であり、今後の検証作業の推移を見守っていきたい。

註2 ATとは、始良丹沢火山灰の略称である。この火山灰は、はじめ神奈川県丹沢山塊で確認されたことから丹沢パミス(TnP)と呼ばれていた。かつては、相模野台地の立川ロームの下限は明確ではなく、貝塚爽平等は、B3層下底が波状帯をなしその上下で岩相が大きく異なることから、B3層の下底を立川ロームと武蔵野ロームの境界と考え(貝塚・森山1969)、相模考古学研究会による遺跡分布調査でもこのように扱っていた。その後、町田洋は、相模野台地のB2層・B3層という2枚の黒色帯の間層(L3層)の相模野上位スコリア(S1S)直下にみられる丹沢パミスの鉱物組成の大半が火山ガラスであり、武蔵野台地の立川ロームの2枚の黒色帯(V層とⅦ～Ⅸ層)の間層(Ⅵ層)にある火山ガラスに比定できることに注目して両台地の黒色帯の対比を行い、相模野台地の立川・武蔵野両ロームの境界を相模野下位スコリアの約1m下層とした(町田他1971)。その後、この丹沢パミスの正体は、南九州の始良カルデラの入戸火砕流(シラス台地の構成地層を形成した噴出物)に伴って飛来した火山灰であることが明らかにされ、始良丹沢火山灰(AT)と呼ばれるようになった。ATは、日本列島のほぼ全域に広く分布する広域火山灰であり、日本各地のロームの対比に鍵層として用いられ、各地の旧石器時代石器群の編年対比を可能とした。

註3 まず、出土層位からは中期旧石器時代に相当する武蔵野ロームからの出土「石器」がある。吉岡遺跡群A区(砂田他1996)の東京軽石層(TP)の下層からは、上下両端が折損した剥片の側縁に急角度の加工が加えられたような安山岩製の「削器」と、自然礫の表面に調整痕ともみられる傷のついた「使用痕のある礫」や「敲打痕のある礫」が出土しているが、前者は、器面の状態から火山からの噴出物である岩片の可能性が指摘されている。また、吉岡遺跡群D区(白石他1996)の武蔵野ローム中からは、「敲打痕のある礫」と「礫器」が出土しており、代官山遺跡(砂田他1986)の相模野礫層(武蔵野ロームの下層)からは、礫層を構成する礫とともに縦長剥片の側縁に加工痕が施されたような「石器」が出土している。次に、立川ローム最下部のL6層からは、早川天神森遺跡(岡本・鈴木1983)では「削器」と「揉錐器」、



代官山遺跡では「搔器」と「加工痕ある剥片」、吉岡遺跡群B区(砂田他1996)では「剥片」と「敲打痕のある礫」や各種の「加工痕ある礫」が、いずれも「イモ石」に混じって出土している。

これらの「石器」は、その大半が礫の一部に加工痕や敲打痕の可能性のある痕跡が観察されるもので、「剥片」や「剥片素材の石器」も礫が節理面で割れたものや火山噴出物の岩片であったり、自然の営力で偶発的に生じた「石器」の可能性を否定できないものである。また、「石器」の出土状態も、単独出土か人類活動の痕跡とは思えない「イモ石」や「イモ石礫群」に伴出したものであり、この点からも人為的な石器と積極的に認定することはできない。これらの「石器」は、将来、その出土層位と同一層位から確実な石器群が発見された時点で再評価されるべきで、現段階では石器の可能性のある資料があるという認識に留めておきたい。

- 註4 相模野台地では、B4層よりも下層の立川ローム下部及び武蔵野ロームから「イモ石」と呼ばれる直径数cm以下の小礫が出土し、地点によっては「イモ石」が集中した「イモ石礫群」となって発見される場合もある。これらの小礫は、相模川の礫種に一般的な凝灰岩類が多く、その円磨度から供給起源は河川礫であると考えられる。通常、基盤礫層に近い層位を除き、河川礫は風成層の立川・武蔵野ローム中に自然には包含されないことから、礫群の構成礫などローム中の礫は、人類の手によって遺跡に持込まれて残されたものと解釈されている。それは、大きさが拳大を中心に大半が重量100g以上で人為的に選択されていたことが窺え、礫面には、変色(赤化)やヒビ割れ、スス・タール状の付着物など火熱を受けた痕跡が認められる場合が多いことにもよる。これに対して、「イモ石」は、重量100gを超えるものは1%未満で、ほとんどが20g未満の大きさにすぎず、火熱を受けた痕跡が認められるものもない(岡本・鈴木他1983)。こうした「イモ石」は、武蔵野台地においても同様にみられ、多摩川の一時的な増水によって台地上にまで氾濫した結果ローム中に包含されたと考えられたこともあった(加藤1977)。しかし、台地上では各地点に等しくみられ、台地よりも高位の丘陵部のローム中にも含まれることから、河川の氾濫によるものではなく、むしろ一時的な突風によって河川の小礫が飛ばされて台地上に到達した可能性が考えられる。このように考えると、立川ローム下部から武蔵野ロームが堆積した時代の景観は、森林が発達せず疎林や草原であった可能性がある。
- 註5 橋本遺跡第VI文化層は、報告書によればB3層下部に主体的に分布する一群とB4層上部に分布の中心をもつ一群に分けられ、ここでは、報告書の出土位置等の記載により、各層位に特定できる石器を分けてそれぞれ図示した。
- 註6 栗原中丸遺跡第VIII文化層は、B3層中部出土のナイフ形石器・剥片など6点とB4層上面出土の台形様石器1点の合計7点からなり、厳密には2枚の文化層に分けられる。
- 註7 石材によりナイフ形石器の大きさが異なることは、宮ヶ瀬上原遺跡第V文化層(鈴木他1977)でも確認されている。上原遺跡第V文化層では、硬質細粒凝灰岩と黒曜石では同じ形態のナイフ形石器の大きさが明確に異なっており、両者の共伴関係は複数のブロックで確認されている。これは、黒曜石の原石の大きさとともに、黒曜石が在地の石材に比べて貴重な存在で石核が小さくなるまで利用されているためと思われる。
- 註8 国府型ナイフ形石器を含む2点の横長剥片素材のナイフ形石器は、ともに黒曜石以外の石材を用い、出土位置は、黒曜石製石器が集中するブロックから離れた単独出土である。両石器の周囲には、第IV文化層や第VI文化層の石器が散漫ながら分布しており、出土層位(レベル)は第V文化層の他の石器よりやや下層で、むしろ第VI文化層に近い。
- 註9 柏ヶ谷長ヲサ遺跡第XI a文化層出土の角錐状石器は、縦長剥片を素材として素材の打面を残し、器面の細部加工も縁辺部に限られて素材背面の剥離面を広く残すなど、典型的な角錐状石器とはいえない。

#### 参考文献

- 麻生順司 1987 『藤次市大庭根下遺跡発掘調査報告書』 根下遺跡発掘調査団  
 麻生順司 1988 『神奈川県大和市台山遺跡発掘調査報告書』 台山遺跡発掘調査団  
 麻生順司 1999 「(仮)大和配水池内遺跡」『第6回石器文化研究交流会—発表要旨—』 pp. 36~40  
 乾 哲也 1885 『矢指谷遺跡発掘調査報告書』  
 大上周三他 1984 『栗原中丸遺跡』神奈川県立埋蔵文化財センター調査報告3

- 岡本孝之・鈴木次郎他 1983 『早川天神森遺跡』神奈川県立埋蔵文化財センター調査報告 2
- 小野正敏他 1972 『小園前畑遺跡発掘調査報告書』綾瀬町文化財調査報告 1
- 織笠 昭 1998 「第3章 先土器時代」『海老名市史 1 資料編 原始・古代』
- 貝塚爽平・森山昭雄 1969 「相模川沖積低地の地形と沖積層」地理学評論 42-2 pp. 85~105
- 加藤好武 1977 「“いも石”の分布特徴から見た高井戸東遺跡における立川ローム降灰時代の自然環境に関する一考察」『高井戸東遺跡(駐車場西地点)』
- 金山喜昭・土井永好他 1984 『橋本遺跡 先土器時代編』
- 小池 聡他 1994 『上和田城山遺跡第4次調査』大和市上和田城山遺跡調査会
- 桜井準也 1997 「No.269 遺跡」藤沢市文化財調査報告書 32
- 相模考古学研究会編 1971 『先土器時代遺跡分布調査報告書 相模野篇』
- 相模考古学研究会編 1974 『地蔵坂遺跡発掘調査報告書』綾瀬町文化財調査報告 2
- 白石浩之 1996 「中期旧石器時代終末から後期旧石器時代にかけての石器群に対する新視点」神奈川考 32 pp. 19~36
- 白石浩之他 1996 『吉岡遺跡群Ⅱ』かながわ考古学財団調査報告 7
- 白石浩之他(旧石器時代研究プロジェクト) 1998 「旧石器時代後半における石器群の諸問題—L 3層からB 3層の石器群の様相—」『かながわの考古学』研究紀要 3 pp. 1~14
- 白石浩之他(旧石器時代研究プロジェクト) 1999 「旧石器時代後半における石器群の諸問題—L 4層以下の石器群の様相—」『かながわの考古学』研究紀要 4 pp. 1~14
- 白石浩之他(旧石器時代研究プロジェクト) 2000 「旧石器時代における石器群の諸問題—新たなる相模野編年の構築に向けて—」『かながわの考古学』研究紀要 5 pp. 1~18
- 白石浩之・鈴木次郎 1979 『寺尾遺跡』神奈川県埋蔵文化財調査報告書 18
- 鈴木次郎 2000 「相模野台地におけるナイフ形石器文化の出現」神奈川考古 36 pp. 33~56
- 鈴木次郎・矢島國雄 1978 「先土器時代の石器群とその編年」『考古学を学ぶ』1 pp. 144~169
- 鈴木次郎・矢島國雄 1988 「先土器時代の石器群とその編年」『考古学を学ぶ』1(新版) pp. 154~182
- 砂田佳弘他 1986 『代官山遺跡』神奈川県立埋蔵文化財センター調査報告 11
- 砂田佳弘他 1996 『吉岡遺跡群Ⅰ』かながわ考古学財団調査報告 6
- 諏訪間順 1988 「相模野台地における石器群の変遷について—層位的出土例の検討による石器群の段階的把握—」神奈川考古 24 pp. 1~30
- 関根唯充 1995 「No.399 遺跡」藤沢市文化財調査報告書 30 pp. 1~34
- 堤 隆他 1997 『柏ヶ谷長ヲサ遺跡』(柏ヶ谷長ヲサ遺跡調査団)
- 中村喜代重他 1983 『先土器時代海老名市柏ヶ谷長ヲサ遺跡発掘調査報告書』柏ヶ谷長ヲサ遺跡調査団
- 服部隆博 1992 「ナイフ形石器の型式学的研究—特に始良T n火山灰降灰前後のナイフ形石器を対象として—」考古論叢神奈川 1 pp. 17~37
- 町田洋他 1971 「南関東の立川・武蔵野ロームにおける先土器時代遺物包含層の編年」第四紀研究 10-4 pp. 290~305
- 松井泉他 1990 『神奈川県相模原市古淵B遺跡』
- 村澤正弘 1996 『大和市No.202 遺跡第1地点1~3次調査、大和市No.159 遺跡』大和市文化財調査報告書 63
- 矢島國雄・鈴木次郎 1976 「相模野台地における先土器時代研究の現状」神奈川考古 1 pp. 1~30
- 矢島國雄 1996 「第2章先土器時代」『綾瀬市史 9 別篇 考古』
- 矢島國雄他 1997 「相模野第Ⅱ期をめぐる諸問題(1)」綾瀬市史研究 4 pp. 1~46
- 矢島國雄他 1998 「相模野第Ⅱ期をめぐる諸問題(2)」綾瀬市史研究 5 pp. 39~68
- 明治大学考古学研究室月見野遺跡群調査団 1969 『概報月見野遺跡群』

# 相模野ナイフ形石器文化の終焉

織笠 昭  
(東海大学)

## はじめに

相模野先土器時代におけるナイフ形石器文化の「終末期」とは一体何か。これが本論に与えられた課題である。その編年的位置は何処にあるのだろうか。そして「終末期」という慣用語が実体を持った形でとらえ得るのだろうか。「石器文化」の視点(註1)から見なおさなくてはならない。

結論をまず提示する。相模野におけるナイフ形石器文化の終末とは尖頭器文化成立の直前である。この時期としては日本列島屈指の層序堆積を有する相模野台地の層位では、B2UからL2に相当する。相模野先土器時代編年(矢島・鈴木1976他)に照らせば第Ⅲ期から第Ⅳ期へ移り変わる時期である。このような編年的位置を与えることで相模野におけるナイフ形石器文化から尖頭器文化への移行、及び周辺地域とのつながりの実態が知られることになる。本論はそのための検証過程である。以下、次のような検討の手順をとる。

- ・ 相模野第Ⅲ期の内容および層位的範囲の確定。
- ・ 相模野第Ⅲ期とそれに続く第Ⅳ期前葉との比較。
- ・ ナイフ形石器文化から尖頭器文化にかけての相模野の特質解明。

以上の3点について、層位、遺跡分布の状況をふまえながら、石器組成にかかる数量変化と組成を構成する石器形態の型式的検討を主とした分析をすすめる。紙幅の関係で詳細分析には至らないが、その枠組みは示すことにする。

相模野ではこれまで層位と遺跡分布を把握しながら石器組成や石器製作技術およびその構造的特質の検討によって、編年がなされている。直接的な出発点は、相模考古学研究会諸氏による地道な分布調査の成果(相模考古学研究会1971)にある。鈴木次郎・矢島國雄両氏によって総括され(矢島・鈴木1976, 鈴木・矢島1978)、近年その全体像がまとめなおされた(鈴木1994, 矢島1996)。その間、さまざまな研究者によって編年内容の検討が深められたが、相模野第Ⅲ期と第Ⅳ期に関しては、神奈川考古同人会と石器文化研究会によるシンポジウムによって一定の内容集約がなされた(神奈川考古同人会編1979・1982・1983, 石器文化研究会編1996・1998・2000a・b)。特に後者では相模野を初めとする南関東の資料集成と検討が果たされ、これにより相模野第Ⅲ・Ⅳ期とこれに対応する南関東編年が全国規模での比較検討の一基準となることが明らかにされたのである。

本論はそれらの成果をふまえながら、『石器文化研究5・8』における資料集成(栗原・畠中・大塚・井関・加藤1996, 笠井2000, 吉田2000)にその後の資料をつけ加え検討の基盤とした(第1・2表)。遺跡の選択に際しては単独出土資料およびそれに相応する事例と正報告未刊によって数量不明の事例は省いた。表中の数量に関しては報告書および実資料の再点検によって変更を加えた部分がある。遺跡の配列は流域別とした。遺跡名の一部は略称を用い文化層名を加えた。出土層位は各報告書によって確認しなおした。石器の種類配列は狩猟用刺突具を主とするもの、加工具としての剥片石器、礫石器、剥片剥離過程関連資料の順とした。「その他の石器」は「二次加工のある剥片」や「リタッチド・フレイク」とされるものを一括した。剥片に二次加工を施せば、決してそれは剥片ではないからである。層位呼称は本文も含め略称を用いた。以上の

点に誤りがあれば、全て筆者の責任である。表中の文献については全て省略させていただいた。

なお、本稿作成に際しては阿曾正彦氏、織笠明子氏より多大な助力を得た。また、いつもながら石器文化研究会、石器に学ぶ会の皆様には御教示を賜っている。砂田佳弘氏、栗原伸好氏には個別的な質問にも懇切丁寧にご答えていただいた。深く感謝いたします。

## 1. 相模野第Ⅲ期の概要

これまで43遺跡・文化層から計13677点の石器が確認されている(以下、本文・表ともに文化層数は遺跡数に含め表現する)。大和市月見野第ⅢC遺跡や綾瀬市上土棚遺跡、地蔵坂遺跡の本報告未刊資料が加われば、その数量はさらに増す。その層位的範囲はB2L下部からL2下部付近までである。ATを含む層準より上位のL3上部ではまとまった資料はまだない。L2下部の資料も実際はB2U上面と言い換え得る例である。

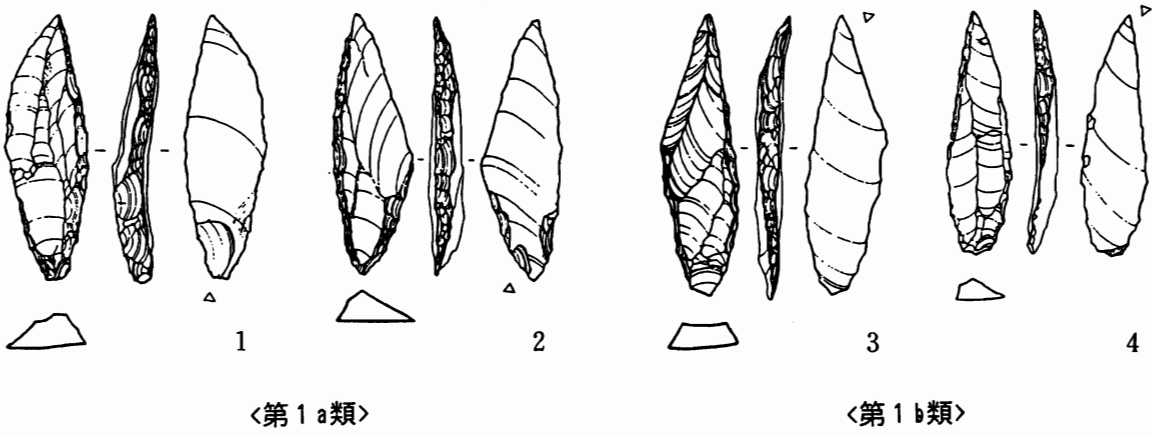
石核・剥片類・礫石器を別とする剥片石器組成の量的中心はナイフ形石器である。微細な剥離痕のある剥片類を別とする1217点中565点であり、全体の46.4%を占めている。この時期を特徴付ける角錐状石器は6.0%程度である。尖頭器は大和市県営高座渋谷団地内遺跡第Ⅴ文化層、および全体の数量は不明だが相模原市下九沢山谷遺跡(中村1979)の事例がある。前者2点のうちの1点は楔形石器と見ることできる。第2図においてはそのように図示した。また柏ヶ谷長ヲサ遺跡第Ⅸ文化層の事例については、これを角錐状石器としてとらえる視点も有用と判断し図示した。これら以外はいずれも破損例であり確実なものとはいえない。その他にはスクレイパーが全体の22.8%を占めているが、その多くがスクレイパーと見なし得る「その他の石器」を加えれば41.7%となる。彫器や錐器は多くはない。彫器は単打形、錐器は錐部横断面三角形例を主とする。ここで注目されるのが楔形石器である。表の上では5遺跡20点であるが、正報告未刊の上土棚遺跡第Ⅵ文化層(B2L下部)で多数が確認されている(矢島1996)。既存資料を再検討すれば、遺跡数、総点数ともに増加するものと予測される。礫石器では石斧や礫器は少ないが、磨石(多孔質安山岩礫)はしばしば集積した状態で発見されているのもこの時期に特徴的な点である。

ナイフ形石器から台石まで15種類の石器を掲げたが、総点数が1000点を超える遺跡例では10種以上の石器が確認されている。総点数の多さと石器の種類豊富さがほぼ比例的な関係であることがわかる。

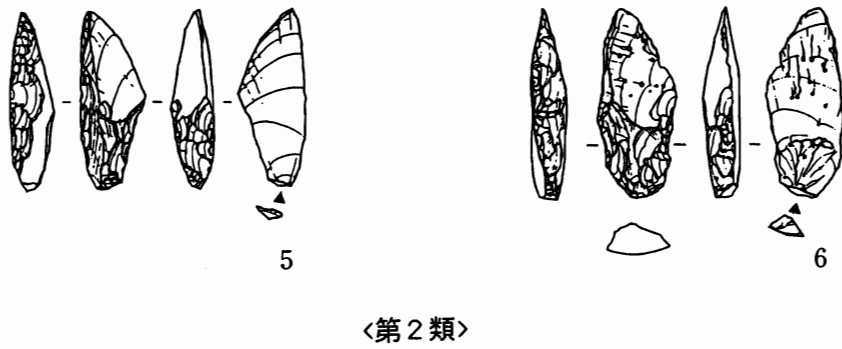
以上が全体の傾向である。各種の石器のうち先後の時期に比べ型式的特徴のとらえられる石器形態について、いまいし細かく見ていこう。

ナイフ形石器形態の種類は先後の時期に比べて多様であることは明らかである。茂呂系ナイフ形石器の類別とその組み合わせによる群別を、時期と地域は多様な資料を取り上げているが、これを第1図に示す(織笠1996)。縦長の素材剥片打面部を二次調整によって除去し、その素材末端部を石器先端部に設定する第1a類(第1図1・2・7)、その素材末端部を石器基端部に定する1b類(3・4・8)そして同様の素材剥片打面部を除去することなく、素材末端部を先端部に、素材打面部を基端部に固定する第2類(5・6・9)の全てがみられる。ただしその量的主体は第2類であり、第1類の場合も、そのほとんどは第1a類である(織笠1996)。この点が、この時期における型式的特徴といえる。縦長剥片素材の事例としては他に基部調整の事例が多い。この場合は素材剥片の末端部は石器先端部側に固定される。この時期は石器に残される剥離痕の種類も大・中・小と多様である。鋸歯状剥離痕とも言える大形の剥離痕も顕著であり、縦長剥片製ナイフ形石器の中には基部が抉入状を呈し、いわゆる剥片尖頭器と比較し得るものもある(小谷1990)。

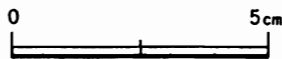
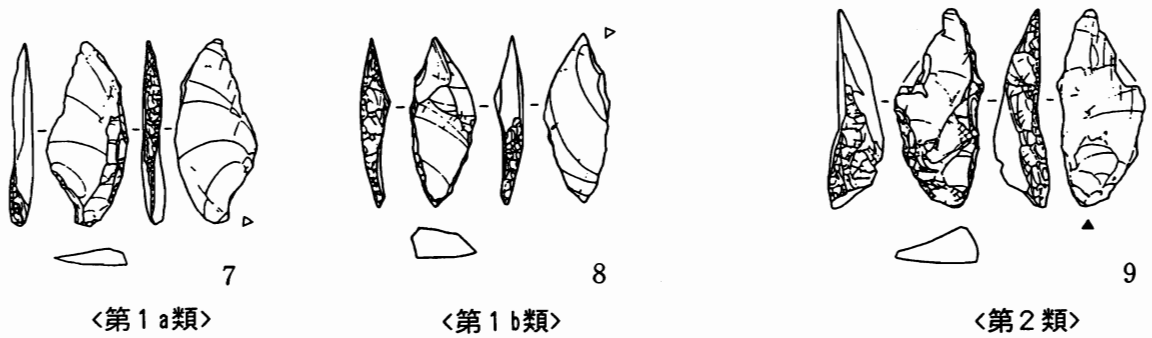
第1群 埼玉県砂川遺跡



第2群 東京都自由学園南遺跡第2文化層



第3群 神奈川県長堀南遺跡第III文化層



第1図 茂呂系ナイフ形石器の三様態 (織笠 1996 より)

第1表 相模野第Ⅲ期の遺跡と石器組成

流域	遺跡名	層位	計	ナイフ 形石器	角錐状 石器	尖頭器	スクレ イパー	彫器	鋸器	楔形 石器	その他 の石器	微・剥	打製 石斧	礫器	磨石	敲石	砥石	台石	剥片	碎片	石核	原石 類
相-1	川尻V	B2L上部	60	3			3				1	5			15	2			26		5	
目-1	栗原中丸VI	B2U	34	7															19	8		
目-2	かしわ台駅前IV	B2U	5									3							2			
目-3	かしわ台駅前V	B2L間層部	7																6		1	
目-4	柏ヶ谷長ヲサVI	B2L上面	183	13			4		1	1	2				2				128	28	4	
目-5	柏ヶ谷長ヲサVII	B2L上部	234	9			3		1		2	1	1						193	15	9	
目-6	柏ヶ谷長ヲサVIII	B2L上部	1121	23	2		7	3	1	3	2	2			12			1	869	150	46	
目-7	柏ヶ谷長ヲサIX	B2L中部	2855	113	2	2	37	1	1	3	17	18			48	10			2373	102	124	4
目-8	柏ヶ谷長ヲサX	B2L下部	279	13	2		9				4	2							214	7	27	1
目-9	柏ヶ谷長ヲサXI	B2L下底	9	4	1											2			2			
目-10	上今泉谷	B2L上部	14	1			2	1									1		7		1	1
目-11	大松原東IV	B2中部	38	1			2	1					4						27	1	2	
目-12	小園前畑	B2L上面~B2U	50	4	1						2								23	15	5	
目-13	早川天神森VI	B2L上部	84	9	2		18								4	1			41		9	
目-14	吉岡C・D区	B2L上部	2025	123	22		82	18	5	5	68	25		4	261	13	3	19	573	679	124	1
目-15	南葛野II	B2U	491	21	8	1	23	2	1		19	1			1	2			380		32	
小-1	慶応SFCIV	B2U	606	9	6		10	1			15			1		3			538		23	
小-2	慶応SFCV	B2L中部	2016	37			20	1		7	32			1					1907		11	
比-1	寺尾V	B2L上面	6	1								1			1				1		2	
蓼-1	地藏坂II	B2U上面	54	4			1				5	1							15	26	2	
蓼-2	地藏坂III	B2L上面	94	3			4				2	1			2				55	22	5	
蓼-3	地藏坂IV	B2L間層部	2	1							1											
蓼-4	地藏坂V	B2L下底部	9	1							2								5		1	
引-1	上草柳第2地点II	B2L上部	577	9	10		8				1	2							342	199	6	
引-2	草柳一丁目	B2L中部	138	16			3	1			8								33	71	6	
引-3	高座渋谷団地V	B2U	547	53	2	2	9	1			23	11							267	155	24	
引-4	福田丙二ノ区III	B2L中部	121	4															48	66	2	1
引-5	福田札ノ辻IV	B2U	10									2							8			
引-6	福田札ノ辻V	B2L上部	34	4								2							25		3	
引-7	福田札ノ辻VI	B2L下部	21	1															20			
引-8	神明若宮Ⅲ第1B	B2U上面	23	3															14	6		
引-9	代官山VI	B2U下位	1375	46	4	1	9	3	1		20	25		1		3			330	921	11	
引-10	代官山VII	B2L上半部	17	5							2								8	2		
引-11	根下I	B2U~L2	26		1		2								2				20		1	
引-12	南鍛冶山	B2U	75	3			1				1					1			62	3	4	
黒-1	月見野上野1Ⅷ	B2L上面	52	2	3							1							44		2	
黒-2	長堀南VI	B2L上部	27		2		1				1							1	20		2	
境-1	橋本IV	B2U	173	9			10							5					127	11	11	
境-2	中村VI	B2U上部	2		1							1										
境-3	上和田城山IV	B2U	26	3	2	1						1		2					11	1	5	
境-4	上和田城山V	B2L中部	52	1	1		3			1						2			38	3	3	
境-5	藤沢市NO. 424	B2U	100	4			7					2							53	32	2	
白-1	本入ござっぱらIV	B2U~L2	5	2	1														2			
総計			13677	565	73	7	278	33	11	20	230	111	1	14	348	40	3	21	8876	2523	515	8

第2表 相模野第IV期 (L2~B1下・中部) の遺跡と石器組成

流域	遺跡名	層位	計	ナイフ 形石器	尖頭器	スクレ イパー	彫器	錐器	楔形 石器	その他 の石器	微・剥	打製 石斧	礫器	磨石	敲石	砥石	台石	剥片	碎片	石核	原石 類
鳩-1	田名稻荷山Ⅲ	B1下部	4	2														2			
目-1	栗原中丸Ⅴ	B1中部	3420	219	2	23	14			45	80							2984		53	
目-2	早川天神森Ⅴ	B1中部	4	1														3			
小-3	慶応SFCⅢ	B1下部	630	22	4	3	3			13	1			2	1			555		26	
比-1	寺尾Ⅳ	B1下部	273	18		3	1			7	2							130	108	4	
蓼-1	本蓼川Ⅱ	L2~B1下部	30	9	3													13		5	
引-1	上草柳第2地点Ⅰ	B1中部	48	9		2					2							26	7	2	
引-2	上草柳第4地点Ⅰ	B1中部	22	1														16	5		
引-3	草柳一丁目	B1中位	27	9							1				1			13	3		
引-4	県営高座渋谷団地内Ⅳ	B1下底	70	5	2				1	1	1						1	44	10	5	
引-5	福田丙二ノ区Ⅱ	B1下部	643	57		9	3		4	13	4			3	5		1	434	90	20	
引-6	福田札ノ辻Ⅲ	B1下部	9															5		4	
引-7	神明若宮地区内Ⅲ	L2上面	10							3								6		1	
黒-1	大和市NO. 210Ⅱ	B1下底	489	1	9		1			8	2							285	183		
黒-2	月見野上野1Ⅵ	B1下底	697	10	4	3				4	6				1			665		4	
黒-3	月見野上野3Ⅲ	B1下部	10	2		2					3							3			
黒-4	下鶴間甲一号Ⅳ	B1下部	194	7	1	2				2	1				5			79	87	10	
境-1	橋本Ⅲ	L2~B1	2603	179	2	61	4						3		11		1	2107	84	151	
境-2	古淵B2-b	B1下部	837	45	5	12	1		4	7	10			1				720		32	
境-3	古淵B3	L2	91	7		1		1		1								79		2	
境-4	下森鹿島Ⅲ	B1下部	498	40	6	14	4			15	12			1	6			350		50	
境-5	中村Ⅴ	B1下部	1996	220	7	19	3		1	15	107			1	2			1580		41	
境-6	長堀北Ⅵ	B1下部	470	58	2	1	1			9	3							316	73	7	
境-7	下鶴間長堀Ⅲ	B1下部	4686	263	10	13	9	2	2	54	25			1	8			2366	1900	33	
境-8	長堀南Ⅳ	L2上面	1799	127	1	27	3			20	41		2	4	14		1	1507		52	
境-9	長堀南Ⅴ	L2中部	276	20		3				2	3			1	1			237		9	
境-10	深見諏訪山Ⅳ	B1下部	270	22	7	2				1	5							231		2	
境-11	今田Ⅲ	B1下部	27	6	1	3				2			1		2			8		4	
総計			20133	1357	66	203	47	3	12	222	309		6	14	57		4	14764	2550	517	

凡例

相-相模川  
鳩-鳩川  
目-目久尻川  
小-小出川

比-比留川  
蓼-蓼川  
引-引地川  
黒-黒川

境-境川  
白-白旗川  
微・剥-微細な剥離痕のある剥片

第3表 相模野第三・IV期の遺跡の層位別石器組成集計

層位	遺跡数	計	ナイフ 形石器	角錐状 石器	尖頭器	スクレ イパー	彫器	錐器	楔形 石器	その他 の石器	微・剥	打製 石斧	礫器	磨石	敲石	砥石	台石	剥片	碎片	石核	原石 類
B1下・中部	26	19766	1332		66	199	47	2	12	219	306		6	13	56		4	14448	2550	506	
L2	2	367	27			4		1		3	3			1	1			316		11	
B2L上面～B2U	21	3937	187	29	5	80	7	3	1	89	50		9	8	9			2099	1228	133	
B2L上	11	4314	190	38		124	22	7	8	77	37	1	4	292	17	3	21	2152	1111	207	3
B2L中	5	5099	168	3	2	65	4	1	11	57	22		1	48	12			4378	177	146	4
B2L下	6	327	20	3		9				7	2				2			247	7	29	1
総計	71	33800	1924	73	73	481	80	14	32	452	420	1	20	362	97	3	25	23640	5073	1032	8

第4表 相模野第三期の流域別石器組成集計

流域	遺跡数	計	ナイフ 形石器	角錐状 石器	尖頭器	スクレ イパー	彫器	錐器	楔形 石器	その他 の石器	微・剥	打製 石斧	礫器	磨石	敲石	砥石	台石	剥片	碎片	石核	原石 類
相模川	1	60	3			3				1	5			15	2			26		5	
目久尻川	15	7429	341	40	3	187	26	10	12	116	56	1	4	328	29	3	20	4857	1005	384	7
小出川	2	2622	46	6		30	2		7	47			2		3			2445		34	
比留川	1	6	1								1			1				1		2	
蓼川	4	159	9			5				10	2			2				75	48	8	
引地川	12	2964	144	17	3	32	5	1		55	42		1	2	4			1177	1423	57	1
目黒川	2	79	2	5		1				1	1						1	64		4	
境川	5	353	17	4	1	20			1		4		7		2			229	47	21	
白旗川	1	5	2	1														2			
総計	43	13677	565	73	7	278	33	11	20	230	111	1	14	348	40	3	21	8876	2523	515	8

第5表 相模野第四期の流域別石器組成集計

流域	遺跡数	計	ナイフ 形石器	角錐状 石器	尖頭器	スクレ イパー	彫器	錐器	楔形 石器	その他 の石器	微・剥	打製 石斧	礫器	磨石	敲石	砥石	台石	剥片	碎片	石核	原石 類
鳩川	1	4	2															2			
目久尻川	2	3424	220		2	23	14			45	80							2987		53	
比留川	1	273	18			3	1			7	2							130	108	4	
小出川	1	630	22		4	3	3			13	1			2	1			555		26	
蓼川	1	30	9		3													13		5	
引地川	7	829	81		2	11	3		5	17	8			3	6		2	544	115	32	
目黒川	4	1390	20		14	7	1			14	12				6			1032	270	14	
境川	11	13533	987		41	156	25	3	7	126	206		6	9	44		2	9501	2057	383	
総計	28	20133	1359		66	203	47	3	12	222	309		6	14	57		4	14764	2550	517	



横長剥片製ナイフ形石器の種類と数量の多さもこの時期の特色である。横長剥片を石器長軸に対して横位に用いる切出形石器はもとより、基部調整例も少なくない。今後、注意すべき事例である。そしてごく少数であるが、西日本における国府型ナイフ形石器に匹敵する例のあることも忘れられない。量的・層位的に限定されるが、海老名市柏ヶ谷長ヲサ遺跡第IX文化層がよく知られている。単独資料と見なすべきものなので表には含めていないが、相模原市橋本遺跡のB2 L出土例も同様の例である。この種の石器と共通する形態は他にもいくつか散見される。

角錐状石器は特徴的な存在ではあるが10点以上の出土例は2遺跡にすぎない。器体中央部が横断面三角形を呈するものと台形を呈するものがある。長さは約3.0 cmから6.0 cm前後に集中し、長幅比は二対一から四対一の範囲を主とする。西日本の原産地付近に見られる大形例に比べれば、きわめて小形で寸づまりであると言える。裏面加工の顕著なものは稀である(織笠 1988)。

スクレイパーはナイフ形石器に次ぐ量的主体である。ラウンド・スクレイパーが目立つが、上草柳第2地点第II文化層と早川天神森第VI文化層を対象とした織笠明子氏の分析によれば、大・中・小の剥離痕の重なりにより50~100°前後の刃角を有し、刃部幅・刃部高の数値が大きく肉厚なスクレイパーが特徴的である。一つの石器から複数の刃部が確認されることが多い。刃部平面形に外彎形・直線形・内彎形の種類がある。これらの点も先後の時期に比べて特徴的な点である(織笠明 1993)。今後、遺跡による偏在性の検討を経なければならぬが、相模野台地の一般的傾向として理解されることだろう。以上の石器以外では、すでに述べたように楔形石器のあり方がこの時期の特徴としてとらえられる可能性がある。

石器製作の過程は多彩な石器組成内容に対応するかのように多様である。細かな石核調整の痕跡は少ないが、縦長剥片用石核、横長剥片用石核、打面転位石核等が見られる。接合資料や石材別・母岩別分類を観察すると、筆者が南関東の剥片剥離過程の8分類とした大方を認めることができる。特に、瀬戸内技法との対比の上で殿山技法とした剥片剥離過程第6類(織笠 1977・1987b)を示す剥片素材の石核が特徴的である。

剥片剥離も種々の形で組み合わせることで、多様な石器形態の形成を可能にしている。そこではある種の石器と特定の剥片とが結びついたり、ある種の石器と多様な剥片剥離過程とが結びついたりしている例が観察される。一方、多種の石器が特定の剥片剥離過程と結びついたり、また一連の剥片剥離過程から作出される例もある。後者は一連の剥片剥離過程において多種の調整剥離過程が組み込まれることで、一連の石器製作過程を石器組成の形成を可能とする剥片剥離過程第6類や第8類を背景とするものである。つまり素材作出の多様性と素材に応じた石器の作り分けがあるわけである。こうしたあり方がこの時期の石器製作技術における構造的特徴である。しかし武蔵野台地の東京都新橋遺跡(織笠 1977)や同・自由学園南遺跡(萩谷・萩 1991)で実践されたような一遺跡を単位とする実証的研究は、相模野においてはすべて今後の課題である。本稿でこの点を詳述しないのは紙幅の関係もあるが、最大の理由はそうした実践的研究の不足にある。

石材は栗原ら(1996)の集計によれば伊豆・箱根方面の黒曜石を最多とし、硬質細粒凝灰岩がこれに次ぐ。この両者で約80%を占めるが、もちろん遺跡や細かな時期差による片寄りはある。他にガラス質黒色安山岩とホルンフェルスが一遺跡において15%以上を占める場合もある。チャート・メノウ・赤玉石・珪質岩・黒色頁岩・流紋岩も僅かだがある。磨石・敲石等の礫石器には安山岩・閃緑岩・斑瀲岩等が利用される。石材の組成としては、本時期に先行する時期よりも多様である。

遺構としては礫群が先後に時期に比べて広く多量に確認される。配石もみとめられる。大地を掘り込んだ遺構はいまだ確認されていない。炭化物片の集中部については、なお今後の課題である側面が強い。

## 2. 相模野第Ⅲ期の諸段階

相模野第Ⅲ期の全体的概要は以上の通りであるが、ではその始まりと終わりはどのような特徴をもって編年的に区分されるのだろうか。本地域の特質である厚い層位堆積の中の多数の重層的出土例から、層的に区分して見なおしてみよう。もちろん土層の堆積自体は地形による変化や小地域的な多様性があり、スコリア比較によるさらなる検討も必要であるが、他地域に比べ、層位との対応による区分はより有効であると判断されている(栗原他 1996)。第1～3表、第2図を参照しながら検討する。

### (1) B2L下部

L3上部に比べ、その存在は明確化するものの、いまのところ遺跡数、石器点数ともに少ない。1980年代後半以降の調査による上土棚・地蔵坂遺跡の全容が明らかにされれば、その数量はB2L中部以降に匹敵するものとなる可能性がある。

茂呂系ナイフ形石器第2類(第2図47)、基部調整ナイフ形石器(48)、切出形石器(49)が出そう。厳密な分析を可能とする資料はまだ少ないが、素材に応じた作り分けというこの時期の特徴を指摘することができる。角錐状石器(50)の出現はまさにこの段階である。スクレイパー(51)や上土棚遺跡の多数の楔形石器(52)もまた時期の特徴をよく具備している。なお、相模野第Ⅲ期設定の時点ではこの段階は第Ⅱ期とされていた。しかし、その後の資料の増加と筆者による分析結果からここを第Ⅲ期としてとらえる(織笠 1987c)。ナイフ形石器の型式的再検討から、その形態組成がB2L中・上部とより強い連続性を持つこと、茂呂系ナイフ型石器第2類が一貫して連続すること、肉厚で刃部幅・高の数値の高いスクレイパーや角錐状石器の登場すること、黒曜石が箱根産を主体とすること、そしてそれらの剥片剥離過程と調整剥離過程との結びつきが、第Ⅲ期全体としての共通性を持つことが理解される。近年ではB2L下部の上土棚遺跡第Ⅵ文化層が「相模野第Ⅲ期の様相を色濃く持っているようにも観察される」と指摘されている(矢島 1996)。1996年に石器文化研究会によって実施された「シンポジウムA T降灰以降のナイフ形石器文化」における「V～IV層下部の石器群～相模野台地の様相～」(栗原他 1996)ではおおむね筆者の指摘する範囲が資料の集成と検討における分析の範囲とされ、結論も同様であった。この点に触れたほとんどの方も結論としては筆者の見解とほぼ一致した(石器文化研究会編 1996・1998)。服部隆博氏の指摘するように、時期の移行過程として一部の遺跡例になお検討の余地はあるものの(服部 1992・1996)、本時期の始まりについての総体的意見としてはほぼ落ち着いたものとして良いだろう。また、愛鷹・箱根山麓編年第Ⅲ期の範囲もこれらによく対応するものととらえられている(笹原 1995・1996・1998, 瀬川 1995, 富樫 1998)。筆者の編年対応(織笠 1996)との比較研究が展開可能となったのである。

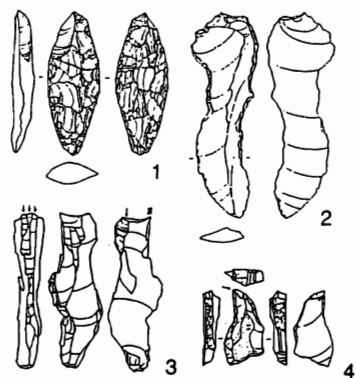
以上のように、B2L下部はまさに相模野第Ⅲ期の構造的特質とそれに支えられた形態のあり方を示すものとして理解される。

### (2) B2L中部

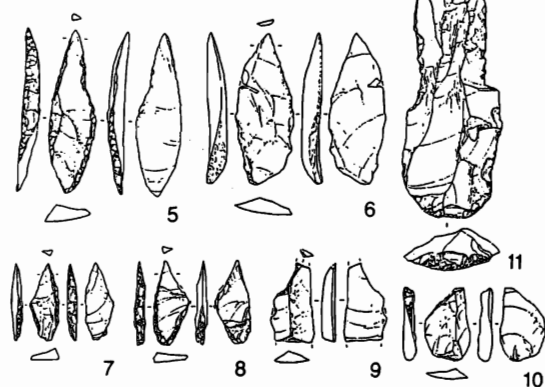
本時期の多彩な内容が国府型ナイフ形石器とともにその全貌を現す(36～38・41ナイフ形石器、40角錐状石器、42・43スクレイパー、44楔形石器、45彫器、46錐器)。柏ヶ谷長ヲサ遺跡第Ⅸ文化層のような大規模遺跡例が存在するものの、やはり相模野台地全体としての遺跡数は多くはない。

なお、藤沢市慶応SFC遺跡第Ⅴ文化層は本報告後もB2L下部として示されることが少なくない。筆者は本報告による検討結果を尊重し、B2L中部として位置付けている。茂呂系ナイフ形石器第2類(36)、第1a類を主体とする等の型式的特徴から(織笠 1996)、またスクレイパー(42・43)や石材のあり方から見て

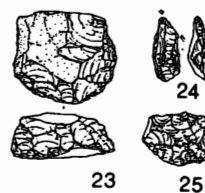
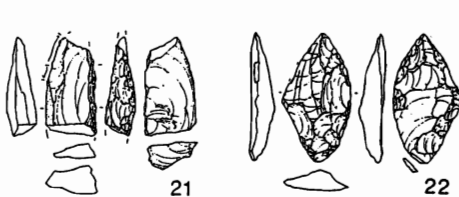
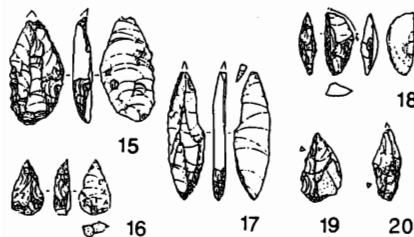
<B 1下~中部>



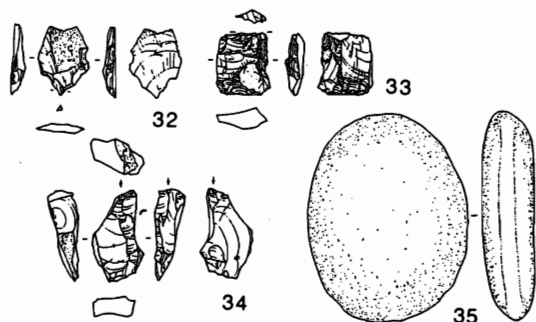
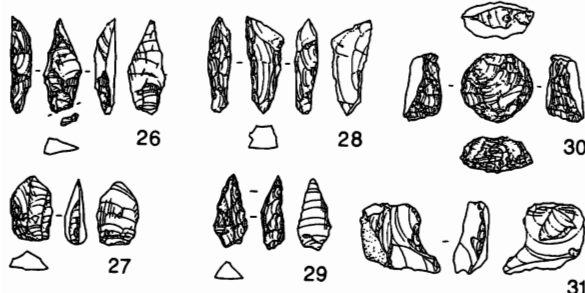
<L 2>



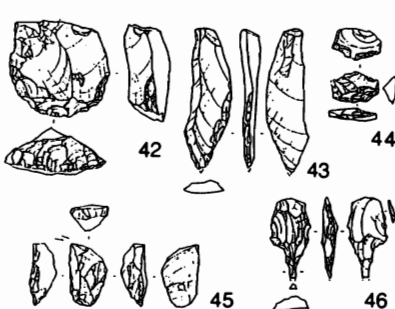
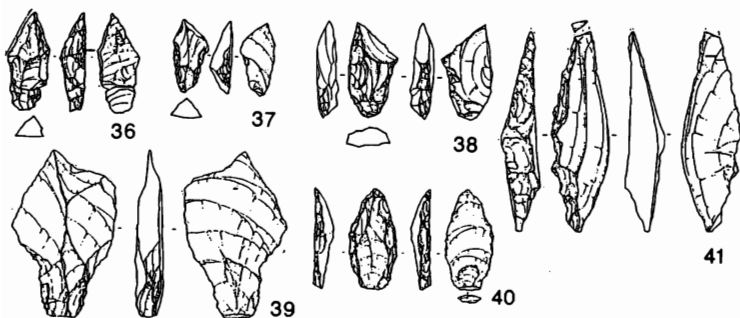
<B 2 U>



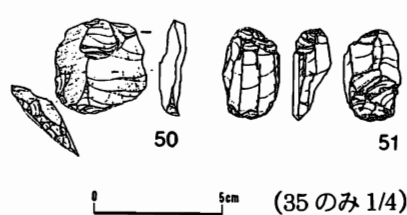
<B 2 L上部>



<B 2 L中部>



<B 2 L下部>



0 5cm (35のみ 1/4)

(1 深見諏訪山IV、2~4 栗原中丸V、5~11 長堀南V、12・13 鳥居前、14 吉岡A区、15~20・22~25 県営高座渋谷団地内V、21 神明宮III、26~35 吉岡C・D区、36~46 柏ヶ谷長ヲサIX、47・49・52 上土棚VI、48・50 柏ヶ谷長ヲサXI、51 柏ヶ谷長ヲサX)

第2図 ナイフ形石器文化から尖頭器文化へ

十分に第Ⅲ期と見なし得る(栗原他 1996)(註2)。

### (3) B2L上部

遺跡数が増加する。相模考古学研究会の分布調査結果(相模考古学研究会編 1971)を加えれば倍以上の遺跡・文化層数になる。だが発掘された石器点数はB2L中部とあまり変わらない。

ナイフ形石器(26・28)の基本的な傾向はB2L中部に共通するが、茂呂系ナイフ形石器第1類はごく稀な存在になる。第2群(26)主体である。それまで量的に少なかった角錐状石器(29)が増加する。相模野台地において角錐状石器が10点以上出土する遺跡はこの層位のみである。また綾瀬市吉岡遺跡群C・D区のように大量の磨石(35)が確認された点やスクレイパーの最も多い点も特徴的である。錐器(32)、楔形石器(33)、彫器(34)もある。

### (4) B2L上面～B2U

遺跡数がさらに増加する。相模考古学研究会の分布調査結果による68例を加えれば87遺跡・文化層の多きを数える。その一方で石器の数量はあまり変わらない。ナイフ形石器(15～21)は多いが、磨石は今後、発見の可能性はあるものの、激減といってもよい減り方である。なお、スクレイパー(23)、彫器(24)、楔形石器(25)等の加工具も減少の傾向にある。そして、それまでになく特徴的な変化も生じてくる。

第一はB2L上部からの現象が拡大し、継続する。すなわち、南関東の国府型ナイフ形石器は既にその受容の段階である変容を示しているが(織笠 1987c・1993)、上土棚遺跡第Ⅳ文化層そして大和市神明若宮遺跡第Ⅲ文化層のように、石器がより変容したかのようなナイフ形石器(21)が見られることである。角錐状石器も相似した状況である。

第二は県営高座渋谷団地内遺跡第Ⅴ文化層や下九沢山谷遺跡第Ⅳ文化層のように、両面あるいは半両面調整で特異な剥離面を有する尖頭器(22)を出土する遺跡が現れるようになることである。そして、それに伴出するナイフ形石器の基部は入念な調整により、丸味を帯びたり、素材剥片の打面部がそのまま残され平縁な状態で残値されたりする。

以上の2点から、ここでは第Ⅲ期が終焉に向かっており、第Ⅳ期への胎動もまた見せ始めることが確認される。

これまでB2L下部～B2Uまでの相模野第Ⅲ期を大きく四分して見てきた。ここでそれらの全体的な特徴と、層位的な累重関係からみた第Ⅲ期内部の変化についてまとめてみよう。

この時期の最大の特徴はナイフ形石器や角錐状石器等の狩猟用刺突具と考定される石器と、スクレイパーを中心とする切る、削る、叩く、擦るといった機能を考定できる加工具とが、ほぼ一対一の割合で存在することである。このうち横長剥片を横位に用いるナイフ形石器や角錐状石器が顕現することは西南日本全体と共通する点である。国府型ナイフ形石器出現はその象徴とも言えよう。刃部幅・刃部高において高い数値を有する甲高で肉厚のスクレイパーもまたそうした傾向の中にある。一方では茂呂系ナイフ形石器のように関東・中部地方南部に普遍的なナイフ形石器も継続して存在する。先行・後続する石器群とのつながりを示す要素である。

これらの特徴を層位的時間的な流れとして見直してみる。

第Ⅲ期の条件については既に述べたが、B2L下底・下部付近に相当する最初の段階で、基本的な特徴は出さそう。次のB2L中部では、いよいよ国府型ナイフ形石器(41)が出現するが、それは登場の段階で、既に南関東的な変容を示している(織笠 1992)。磨石集積遺構や多数の礫群・配石を伴う大規模な遺跡も出現する。

茂呂系ナイフ形石器は第2類(36)と第1b類を中心に構成される。B2L上部では角錐状石器(29)やスクレイパー(30・31)、磨石(35)類が一気に増加する。遺跡数もまた増加してくる。ナイフ形石器の形態はより多様化するが、茂呂形ナイフ形石器は第1類がほぼ消滅し第2類(26)が主体となる。B2L上面～B2UはB2L上部よりも加工具(23～25)の比率がやや下がり、両面あるいは半両面で特異な剥離痕を有する尖頭器(22)が僅かではあるが登場する。B2Uにおけるこの2点の特徴は当然、後続する時期への胎動を示すところだろう。遺跡数はさらに増加していく。なお国府型ナイフ形石器の変容の度合いが強いと思われるような例も散見される。

以上は相模の第Ⅲ期を4つの段階に区分する中で把握できる変化の流れである。一部には個々の遺跡における微妙な層位的位置付けの再検討を要する例もあるが、それは今後の課題である。しかしそうした点を考慮してもなお、4段階区分に基づく変化の様相をとらえるのは十分に可能である。こうした細分についての否定的見解もあるが(諏訪間 1996)、細別の変化の理解なくして大別的把握はなし得ない。細別と大別の相関関係については縄文式土器研究の良き先例がある。その成果と問題点をふまえながら相模野編年の大別と細別に挑まなければ、時期観の固定化が生じ、各時期の石器分化が何故に変化するのかという視点は生まれまいだろう。

### 3. 相模野第Ⅳ期前葉と第Ⅲ期との関係

筆者は相模野第Ⅳ期を尖頭器文化の概念に基づき(織笠 1989)、これを三分している(織笠 1987 a・1991)。以下はそれを前提とした上での議論である。

L2中部からB1下・中部の段階は相模野第Ⅳ期に突入し、その内容に大きな変化が生じる。しかしL2上面をB1下底と読み変えれば、確実にL2層中を主体とするまとまった事例は極限され、その数量も多くはない。ほとんどはB1層に含まれることに注意しよう。第2・3表に掲げた主要2遺跡における尖頭器の出土例はない。石器組成や各種石器の形態組成も、ナイフ形石器を別とすれば、その全容を現すには至っていない。礫群は規模等に変化は現れるものなお継続する。

こうしたL2の状況に比べ、B1下・中部では一挙に遺跡数が増加する。まとまった資料数の知られる遺跡は26遺跡だが、断片的な資料は未報告例、相模考古学研究会による確認例を加えれば60遺跡を越えることになるだろう。出土石器の数量も第Ⅲ期を越えるほどである。

石器組成ではどうか。第Ⅲ期に特徴的であった角錐状石器や甲高な刃部を有する肉厚なスクレイパーは、ほぼその姿を消す。石核、剥片類、礫石器、微細な剥離痕のある剥片を別とする剥片石器組成の量的中心はナイフ形石器(第2図5～10)である。剥片石器は1877点中1359点を数え、72.4%を占める。その他の石器を別とすると1658点中1359点、82.0%になる。狩猟用刺突具の代表例としてこの時期を特徴付ける尖頭器(1)を加えると1425点となり、剥片石器総数1877点中の75.9%、その他の石器を除いた同総数は1658点中の85.9%を占めるほどである。このように一般的な加工具の数量は減少するが、一方では、スクレイパーは第Ⅲ期全体の数量に迫るほどとなり、特に縦長剥片製のエンド・スクレイパー(11)が顕著である。彫器(3・4)は第Ⅲ期全体よりも多くなる。さらに礫石器では敲石が多い。今のところ原石類が1点も報告されていない点と併せ考えると、石器製作上の変化および原石入手過程の変化をも考慮することができる。

組成表に掲げたナイフ形石器から台石までの15種類の石器をみると、総点数が1000点を越える遺跡においても10種類以上の石器が確認されている例は1遺跡しかない。第Ⅲ期に比べ一遺跡における組成上の片

寄りの強いことがわかる。そして加工具の比率が著しく減少している。

さて狩猟用刺突具と加工具の比率が変化したのは何故だろうか。各種の石器の形態細分および型式的な視点から見直してみよう。

ナイフ形石器は横長剥片を横位に用いたものは姿を消し、縦長剥片製がそのほとんどを占める。茂呂系ナイフ形石器主体の例である。茂呂系第2類はほぼその姿を消し、第1a類(6・8)と第1b類(5・7)に統一される。第Ⅲ期が第2類中心の茂呂系第2群であったのに比し第1群の特徴を示し、それぞれが鮮やかな対照をなす。そしてそこには埼玉県砂川遺跡(戸沢 1968)で第Ⅲ形態とされた切截用のナイフ形石器が伴う。狩猟用刺突具としてのナイフ形石器のみならず、加工具としてのナイフ形石器が、実はかなりの比率を占めるわけである。相模野第Ⅱ期においても綾瀬市寺尾遺跡第Ⅵ文化層(鈴木 1980)のようにこうしたナイフ形石器は存在する。しかし砂川遺跡について勝山百合氏が指摘したように(勝山 2000)こうした例で幅広のものでは50~80°台と大きな正面先端角を持ち量的にも安定して出土する。これは第Ⅳ期における新たな特徴と言えるだろう。このことはナイフ形石器自体の機能的かつ用途的な分化を想定させる。第Ⅲ期では明瞭ではなかった現象である。その背景にはやはり尖頭器、特にその初期よりの男女倉型尖頭器(1)の出現を考えねばならないだろう。

さらにエンド・スクレイパー(11)や上ヶ屋型彫器(4)、小坂型彫器(3)、そして神山形彫器の変容したもの等、中部地方北部から東北地方へかけての地域と比較可能な型式の特徴を有する加工具が増加する。第Ⅳ期の成立に際しては周辺地域との比較研究の必要となる所以である。そして相模野第Ⅲ期に対応する時期の中部高地ですでに尖頭器が普及していたとすれば、尖頭器の導入もまた中部地方北部とのつながりを持つ契機となったと考えることもできる。

また石器製作技術の構造も大きく変化する。その剥片剥離過程の種類は第Ⅲ期に比べ明らかに減少し、より統一的なあり方を見せる。石核調整が入念になる一方、調整剥離の種類も鋸歯状の例が著しく減少する。第Ⅲ期に比べれば一定した剥片剥離過程に対し小・中の剥離痕に結果される調整剥離によって多様な種類の石器が製作されている。この点は横長剥片を剥離する過程や大形の剥離痕がほとんど見られなくなること、そしてナイフ形石器形態の種類が減少することに対応するものだろう。

砂川型刃器技法は砂川遺跡に見られるような剥片(剥離過程)と石器との結び付き方であると考えられる。そうした結び付きの構造は第Ⅲ期と比較することでより鮮明になる。ただしその全体像は必ずしも従来考えられていたほど様ではないだろう(砂田 2000)。そして尖頭器製作技術の全容はなお明らかにされていない。これこそが今後の課題である。

石材は伊藤 健氏・三瓶裕司氏の集成(2000)および砂田佳弘氏の集成(2000)によれば、硬質細粒凝灰岩と信州産を主とする黒曜石で60%以上を占める。大和市域付近でチャートの多い等の小地域差も指摘されている。他にホルンフェルス、ガラス質黒色安山岩、黒色頁岩等があり、硬質砂岩、黄玉石、メノウ、流紋岩も少量見られる。礫石器には砂岩を中心に安山岩類、斑糲岩類等が用いられる。

さて、B1の主要26遺跡中、16遺跡で尖頭器が出土している。61.5%の出現率である。流域別に見ても資料総数の少ないところを別とすれば、ほぼ全流域に普及している(第5表)。第Ⅲ期の同様の表とは対照的である(第4表)。尖頭器の出現とその普遍化が明確になったのである。そしてこれに伴う種々の変化は尖頭器の出現をその契機として考えざるを得ない。これが相模野尖頭器文化成立の段階である。

#### 4. 相模野尖頭器文化の成立とナイフ形石器文化の終焉

尖頭器文化の成立とは、言い換えればナイフ形石器文化の終焉である。なおナイフ形石器が継続していても、新たな石器の出現と普及、組成を構成する石器の種類の変替と変化、そしてそれを支える石器製作構造の変化は単なる段階的変化ではない。まさしく戸沢充則氏のとらえる石器文化の階程的变化に他ならない(戸沢 1965・1990)。石器文化という視点から考えるなら、相模野尖頭器文化の成立はナイフ形石器文化の終焉ということになるのである。

これを相模野の層位から見てみよう。B1では確実に新たな文化階程に入っていると見てよい。ではL2ではどうか。ナイフ形石器の様相は既にB1と同様である。だが尖頭器の存在は明確ではない。これは何故か。

さらにL2の出土例を見るとB1に共通する内容を持つ石器群だけではないことに注意しよう。ここまで一切触れず、表にも含めていないが、吉岡遺跡群A区L2層中位(仲田・砂田 1997)と本報告未刊ではあるが、藤沢市鳥居前遺跡L2層(栗原 1997)の石器群を見よう。吉岡遺跡群A区では、その資料数は少ないものの、報告において「L2層でも古相」と指摘されている。同時にその剥片剥離過程は第IV期としての一部のあり方としてとらえうる可能性も指摘されている。この点は第IV期における剥片剥離過程の実態が究明されるべき所以でもある。さらに尖頭器製作との関連も指摘されている。では二次加工石器自体ではどうか。唯一のナイフ形石器は茂呂系第2類(第2図14)である。石材は良質だが箱根柏峠産の黒曜石と報告されている。また鳥居前遺跡L2層では縦長剥片を用い平坦な基部を有するナイフ形石器(12)と槌状剥離痕を有する尖頭器(13)が出土している。尖頭器製作の痕跡もみられる。石材は「安山岩」である。鳥居前遺跡のようなナイフ形石器は第III期のどの段階から出土したとしても、さほどおかしくはない。

第III期B2Uでは2遺跡から若干の尖頭器が出土している。だが、相模野尖頭器文化と言えるほど、量的空間的に普及しているわけではない(第3・4表)。一方では第III期の剥片剥離過程の一部は尖頭器素材作出に適う剥片剥離過程との共通点を持つ。吉岡遺跡群A区L2、鳥居前遺跡L2層の事例をそうした点から考えれば、第III期的様相の石器群がL2まで継続したとも考えられる。しかしそのあり方は断片的であり、決して第III期のB2L層の内容をそのまま示すものではない。

吉岡遺跡群A区L2層・鳥居前遺跡L2層出土例と長堀南遺跡第V文化層とが時間的に併存するものであるなら、そしてL2において今後もB1下部のように多数の尖頭器を出土する例がないとしたら、L2こそがナイフ形石器文化終焉の時期を示す層位であるということになる。だが、そもそも、L2は遺跡数、遺物数が少ない。長堀南遺跡第V文化層のナイフ形石器自体は明らかに第IV期的である。だが尖頭器の存在は明らかではない。本論におけるこれまでの検討や一般的な第III期と第IV期との区分の根拠を見ても、これは一つの矛盾であるだろう。そこであらためて遺跡の数量的変化を層位的に見直してみたい(第3表)。

L2は明らかに遺跡数、遺物数が少ない。B2UやB1下部に比べれば極端に少ないと言って良い。筆者はかつてL3上部やL2における遺物、遺跡の僅少さから、これらの層位の反映する時期を「空白期」としてとらえた。L3上部は相模野第II期と第III期の間、L2は第III期と第IV期の間であり、時期の差による内容の変化が、空白期における集団の移動がひとつの契機としてあるだろうことを指摘した(織笠 1991)。今回の資料数の変化や内容の検討からは、やはり同様の見解を示さなくてはならない(註3)。ただし既に指摘したとおり、空白期といっても遺跡、遺物が皆無であったわけではない。今後は、逆にそうした少数例をどう評価するかが問われることになるだろう。

そこで吉岡遺跡群 A 区 L2 層・藤沢市鳥居前遺跡 L2 層と長堀南遺跡第 V 文化層の二者の検討が必要となるわけである。前者は第 III 期的、後者は第 IV 期的であるとも言える。だが吉岡遺跡群 A 区 L2 層と長堀南遺跡第 V 文化層の両遺跡の内容からは尖頭器が共伴したとしてもおかしくはない。だが尖頭器はない。鳥居前遺跡 L2 層に尖頭器はあるが、そのナイフ形石器は第 IV 期的ではない。こうした現状を前提とするなら、次のような変遷を考えることができるのではあるまいか。

まず第 III 期の第 4 段階である B2U では 2 遺跡における両面あるいは半両面調整尖頭器の出土例がある。そこでの石器組成は十分に第 III 期的内容をもっている。しかしそこでのナイフ形石器は茂呂系にせよ切出形石器にせよ、平縁あるいは丸味を帯びた基部を有するものが含まれている。それらは須藤隆司氏 (1989) や大竹憲昭氏 (大竹 1998)、宮坂 清氏 (1996) の指摘する V~IV 層下的な様相 (相模野第 III の様相) を有する男女倉遺跡 B・J 地点 (森嶋・川上編 1975) と共通する形態である。そして第 III 期において尖頭器を伴う遺跡のひとつである県営高座渋谷団地内遺跡第 V 文化層には 1 点ではあるが、杉久保型ナイフ形石器的な特徴を有する石器 (第 2 図 17) もある。この時期以降の状況を見ても信州方面との共通性、つながりが背景にあったと考えられる。

第 III 期第 2 段階における国府型ナイフ形石器の出現は、南関東と東海、信州、北陸全般を含めた中部地方の広い範囲とのつながりを考えざるを得ない。それがどの程度の頻度であり得たかは問題だが、しかし第 III 期第 4 段階における尖頭器の断片的出現の登場の背景が、ここにあったと思われる。須藤隆司氏による「砂川様相確立過程」と「槍先形尖頭器の成立過程」との関係についての指唆 (須藤 1996) も含めた相模野第 III 期第 4 段階石器群の再構成が必要なかもしれない。

ところが長堀南遺跡第 V 文化層のような L2 のナイフ形石器は男女倉遺跡 B・J 地点のナイフ形石器とは異なる。それはむしろ静岡県東部、愛鷹・箱根山麓編年第 III 期 (層位的には当該地の BB1~BB0、相模野第 III 期に編年的に対応する) のナイフ形石器の一面に、より共通する。すなわち、それらのナイフ形石器は茂呂系第 1 類と第 2 類の共伴する茂呂系第 3 群の様相であり、相模野第 III 期に比べれば、圧倒的に第 1 類が多い。この第 1 類こそが相模野 L2~B1 下・中部に普遍的なナイフ形石器なのである。そしてそのとき用いられる黒曜石は、いずれの地域においても信州産を主体としている。

ここにおいて、L2 付近における愛鷹・箱根山麓方面と南関東、特に相模野との深い関係が考定されるわけである。そして遺跡数のあり方から考えれば、それはつながりと言うよりも、より深い関係を考えなくてはならない。神奈川県内における箱根方面から秦野盆地にかけての地域の重要性がここに認識されるわけである。近年の研究成果 (大倉・加藤 1995、手島 2000) のさらなる進展が必要とされる所以である。

相模野第 III 期から第 IV 期にかけて伊豆・箱根周辺の多彩な石材がみられることは伊豆・箱根の東西の地域間諸関係を示すものとして、今後も注意していくべきだろう。近年、関東地方の多彩な石材について関東およびその周辺との具体的なつながりの検討がすすめられている (柴田 1996、山本 1996 等)。さらに石器の形態的型式的変化との対応を深めることで、石器文化変遷の動態にも迫ることになるだろう。それは学史的課題でもある (織笠明 1999)。

さて、相模野第 III 期の茂呂系ナイフ形石器は第 2 群の様相を主とし、第 3 群の様相の色合いは薄い。一方、愛鷹・箱根山麓第 III 期は茂呂系第 3 群の様相を示している。関東・中部南半における茂呂系ナイフ形石器文化分布範囲は、そうした小地域的な差異から成り立っている。そして相模野第 III 期や第 IV 期前葉の茂呂系ナイフ形石器は愛鷹・箱根山麓第 III 期や信州の一部の遺跡が示す第 3 群の茂呂系ナイフ形石器形態組成の一部



によって自らの形態組成を型式化していたのである。こうした経緯を単一地域の自律的变化と考えることができるだろうか。それは困難なことだろう(註4)。少なくとも中部地方南部を含めた生活領域の変化や集団移動を考慮しなければ理解できる事象ではないと思われる。

以上の結果に基づき、相模野におけるナイフ形石器文化の終末期が何処にあるかという問いかけにあえて答えるなら、それはL2付近にあるということになる。だがそれは正しくは一つの石器文化の終末であって、終末「期」として明確化できるものではない。「終末期」とか「移行期」といった実体不明な概念的用語は無用であり、編年的細別にに基づく連続と不連続の検討こそが果たされるべきだろう。真の展望ある結論がこれである。

## おわりに

以上が、本論冒頭に示した課題への解答である。ここで得た結論は、今後、さらに詳細な実体的分析を経て、実態化した形をもって映像化していきたいと願っている。だが、相模野先土器時代編年のある到達点は、そこでの課題とともに示し得たと考えている。編年は大別と細別の相関関係の中で検証されなければならない。そのためには石器形態下の形態理解(安蒜 1973)に基づく形式的検討の積み重ねが必要とされる。そうした試みを経た上で、これを、たとえば岩宿Ⅱ石器文化、岩宿Ⅲ石器文化として広く総括すべきだろう。ただし、それは各石器文化やその階程を固定的にとらえるものではなく、ある流れをもった変遷の過程としての側面をも併せもつものである。編年の大別と細別の意義もまたここにある。

相模野という狭い、しかし素晴らしい地域の特性が相模野先土器時代という視点から再構成されてきたことは学史の示すところである。ここで仮に旧石器時代と言うならば、ジョン・ラボックが「ヨーロッパにおいては」という限定付きで示し(Lubbock 1865)、その後展開されたヨーロッパ編年と相模野編年とがどれほど対比可能なのか、一度は世界史的な視点で論じられるべきだろう。独善的旧石器時代観が何をもたらすか、20世紀末の日本考古学界が痛みを持って経験した事実を忘れてはならない。

## 註

註1 筆者の石器文化観は 1987a、1989、1993 において学史的検討をふまえながら示した。「石器文化」は編年研究の枠組みと単位を設定する上でも欠くことのできない方法的視点である(織笠 1994)。なお筆者の相模野編年観の全体像は(1998a)を参照されたい。

註2 本報告書の文責者である五十嵐 彰氏は慶応 S F C 第 V 文化層の位置付けに関して、あらためて述べるころがあった(五十嵐 1998)が論旨不明確である。筆者の示したナイフ形石器の形態・型式観とその具体的表現に一切触れずに観念的な言辞を羅列することは不毛以外の何者でもない。自らの石器形態・型式観を明らかにし、資料の具体的な再検討を果たすべきである。評論ならざる評論は不要である。再論は慎重な分析と責任をもった発言でなされるべきだろう。

註3 筆者の「空白期」に対して諏訪間 順氏から否定的見解をいただいた(諏訪間 1996)。ここでその根拠のすべてについての反論を記す。①「L3層はAT降灰やS1Sなどによって短期間に形成された」ということだが、では何故L3は土壌化したのか?「L3」の上下の年代が「短期間」であることは年代学的土壌学的にどのように説明できるのか?②「L3やL2に限らず無遺物層は細かく見れば存在し」「ワン・フォール・ユニットの降下火山灰が土壌化したもの」ということだが、L3やL2の全体がそうであることはどのように証明できるのか?併せて本稿で示したL2とB1下部における共通点と相違点の生じた理由を、そうした見方によって理解できるのか?③「B3上面～B2L中までは遺跡数は少ない」ことは具体的な数値を示して述べるべきである。氏のいう「資料数」の根拠は何処にあるのか?B3上面につい

ては綾瀬市内出土資料の報告に待たねばならない部分がある。これとL3上部を同等に論ずることが可能か?さらに相模野のB4やB5においてもどれほどの遺跡数が確認されているかは周知のことだろう。武蔵野・下総とは事情が異なるのである。④「集団移住した中部高地や愛鷹・箱根山麓に相模野の空白期となるL3からB2L下底部に対比される遺跡が多いとは言えない」ということだが、これは筆者や笹原芳郎氏(1995、1996a・b)、須藤隆司氏(1996)、富樫孝志氏(1998)との編年観の相違による。諏訪間氏の編年対比には地域性の考慮が表現されていない。中部高地や愛鷹・箱根山麓と相模野のナイフ形石器やスクレイパーについての具体的な比較分析をお願いしたい。なお、筆者は「移動」とは言っているが「移住」と表現してはいない。⑤「渋川遺跡の編年的位置付けは確認されておらず、直接対比することは問題である」ということだが、百歩ゆずってそれは当然であると言おう。だがそのままでは百年河清を待つ例えのとうり、何の進展もない。そして「直接対比」しようという試みがなければ、何をどうがんばっても対応のできるわけがない。そして④・⑤に共通する問題だが、諏訪間氏による相模野第Ⅲ期についての編年は当初(1988)より一貫して大別の段階にとどまっている。現状では完璧な細分もあり得ないが、しかし本文中でも触れたように、細別なき大別をもって時期や石器文化の変遷は論じられないし、ましてや地域間対比もできないはずである。なお諏訪間氏の細分批判に対する反批判は西井幸雄氏の論説に尽くされている(1998)。併せ参照されたい。

註4 相模野に限定せずに尖頭器および尖頭器文化の成立を考える場合は、当然、また別な議論が必要である。尖頭器の出現に関しては従来より諸説あり、白石浩之氏(白石1989)や高見俊樹氏(高見1989)とによってよくまとめられている。白石氏による角錐状石器との関連の指摘(白石1974)は、いまなお検討課題として継続している。相模野においては、角錐状石器・ナイフ形石器・尖頭器の3者の関係を石器器体角度研究の視点から追求した田中裕子氏の試みが今後の方向のひとつを示している(田中1999)。ただし、田中氏はB2とB1上部との比較を主としているために、編年的なつながりという点で問題を残している。時間的空間的な資料設定を変えた上でなら、また石器器体角度計測法の新たな開発を加えるとすれば、従来の諸説を統合した上での問題解明も不可能ではない。

#### 引用・参考文献

- 安蒜政雄 1973 「関東地方における切出形石器を伴う石器文化の様相」『駿台史学』32 駿台史学会
- 五十嵐 彰 1998 『『慶応藤沢第Ⅴ文化層こうもり編』の提唱—範囲と細分についてのコメントに代えて—』『石器文化研究』6 石器文化研究会
- 伊藤 健・三瓶裕司 2000 「石器組成とブロックの規模からみた『砂川』—石器経済活動の空間的組織—」『石器文化研究』9 石器文化研究会
- 大倉 潤・加藤 学 1995 「秦野市における先土器時代・縄文時代草創期の遺物」『秦野の文化財』31 秦野市教育委員会
- 大竹憲昭 1998 「中部高地・野尻湖周辺のⅣ下・Ⅴ層の様相について」『石器文化研究』6 石器文化研究会
- 織笠明子 1993 「スクレイパー刃部の形態的研究」『大和市史研究』19 大和市役所
- 織笠明子 1999 「石器石材研究」『石器文化研究』7 石器文化研究会
- 織笠 昭 1977 「先土器時代・石器」『新橋遺跡』Occasional Papers4 国際基督教大学考古学研究センター
- 織笠 昭 1987a 「相模野尖頭器文化の成立と展開」『大和市史研究』13 大和市役所
- 織笠 昭 1987b 「殿山技法と国府型ナイフ形石器」『考古学雑誌』72-4 日本考古学会
- 織笠 昭 1987c 「国府型ナイフ形石器の形態と技術(上・下)」『古代文化』39-10・12 古代学協会
- 織笠 昭 1988 「角錐状石器の形態と技術」『東海史学』22 東海大学史学会
- 織笠 昭 1989 「尖頭器文化とは何か—文化・考古学的文化・石器文化—」『長野県考古学会誌』59・60 長野県考古学会
- 織笠 昭 1991 「先土器時代人の生活領域—集団移動と領域の形成—」『日本村落史講座』6 雄山閣出版
- 織笠 昭 1992 「南関東における国府型ナイフ形石器の受容と変容」『えびなの歴史—海老名市史研究—』3 海老名市企画部市史編さん室

- 織笠 昭 1993 「石器に見る文化との出会い—先土器時代の柏ヶ谷長ヲサ遺跡から—」『えびなの歴史—海老名市史研究—』5 海老名市企画部市史編さん室
- 織笠 昭 1994 「時を紡ぐ人たち—岩宿石器文化の編年付けとその変遷—」『第2回岩宿フォーラム／シンポジウム群馬の岩宿時代の変遷と特色予稿集』 笠懸野岩宿文化資料館・岩宿フォーラム実行委員会
- 織笠 昭 1996 「列島内対比—V～IV下層の茂呂系ナイフ形石器を基軸に—」『石器文化研究』5 石器文化研究会
- 織笠 昭 1998 a 「先土器時代」『海老名市史』1 海老名市
- 織笠 昭 1998 b 「先土器時代の限定形態と広域比較」『石器文化研究』6 石器文化研究会
- 笠井洋祐 2000 「相模野台地北部」『石器文化研究』8 石器文化研究会
- 勝山百合 2000 「砂川遺跡からみた『砂川期』のナイフ形石器」『石器文化研究』9 石器文化研究会
- 神奈川考古同人会編 1979 「特集ナイフ形石器文化終末期の問題」『神奈川考古』7 神奈川考古同人会
- 神奈川考古同人会編 1980 「特集ナイフ形石器文化終末期の問題(Ⅱ)」『神奈川考古』8 神奈川考古同人会
- 神奈川考古同人会編 1982 『シンポジウム南関東を中心としたナイフ形石器文化の諸問題<資料>』 神奈川考古同人会
- 神奈川考古同人会編 1983 「シンポジウム南関東を中心としたナイフ形石器文化の諸問題」『神奈川考古』16 神奈川考古同人会
- 栗原伸好・島中俊明・大塚健一・井関文明・加藤 学 1996 「V～IV層下部の石器群～相模野台地の様相～」『石器文化研究』5 石器文化研究会
- 小谷龍司 1990 「剥片尖頭器の研究—主として統計的手法による分析—」『旧石器考古学』40 旧石器文化談話会
- 相模考古学研究会編 1971 『先土器時代遺跡分布調査報告書相模野篇』 相模考古学研究会
- 笹原芳郎 1995 「第2期・第3期の石器群」『静岡県考古学会シンポジウムIX愛鷹・箱根山麓の旧石器時代編年予稿集』 静岡県考古学会
- 笹原芳郎 1996 「愛鷹・箱根(第3期について)」『石器文化研究』5 石器文化研究会
- 笹原芳郎 1998 「石器群の変化について」『石器文化研究』6 石器文化研究会
- 柴田 徹 1996 「V～IV下層段階の南関東における石器石材の採集地推定について」『石器文化研究』5 石器文化研究会
- 白石浩之 1974 「尖頭器出現過程における内容と評価」『信濃』26-1 信濃史学会
- 白石浩之 1989 『旧石器時代の石槍』 東京大学出版会
- 鈴木次郎 1980 「第VI文化層」『寺尾遺跡』神奈川県埋蔵文化財調査報告書18 神奈川県教育委員会
- 鈴木次郎 1994 「南関東地方の様相」『第2回岩宿フォーラム／シンポジウム群馬の岩宿時代の変遷と特色予稿集』 笠懸野岩宿文化資料館・岩宿フォーラム実行委員会
- 鈴木次郎・矢島國雄 1978 「先土器時代の石器群とその編年」『日本考古学を学ぶ』1 有斐閣
- 須藤隆司 1989 「中部槍先形尖頭器文化の成立」『長野県考古学会誌』59・60 長野県考古学会
- 須藤隆司 1996 「中部・東海・北陸地方におけるV・IV下層段階の石器群—列島内対比の視点から—」『石器文化研究』5 石器文化研究会
- 砂田佳弘 2000 「砂川時代の剥片剥離工程」『石器文化研究』9 石器文化研究会
- 諏訪間 順 1996 「V～IV下層段階の石器群の範囲—最終氷期寒冷期に適応した地域社会の成立—」『石器文化研究』5 石器文化研究会
- 瀬川裕市郎 1995 「愛鷹・箱根山麓の旧石器時代研究のあゆみ」『静岡県考古学会シンポジウムIX愛鷹・箱根山麓の旧石器時代編年予稿集』 静岡県考古学会
- 石器文化研究会編 1996 「シンポジウムA T降灰以降のナイフ形石器文化～関東地方におけるV～IV下層段階石器群の検討～」『石器文化研究』5 石器文化研究会

- 石器文化研究会編 1998 「記録・論評・回答集シンポジウムA T降灰以降のナイフ形石器文化～関東地方におけるV～IV下層段階石器群の検討～」『石器文化研究』6 石器文化研究会
- 石器文化研究会編 2000 a 「シンポジウム砂川—その石器群と地域性—資料集成南関東各地域の基礎的検討」『石器文化研究』8 石器文化研究会
- 石器文化研究会編 2000 b 「シンポジウム砂川—その石器群と地域性—予稿集」『石器文化研究』9 石器文化研究会
- 芹沢長介 1954 「関東及び中部地方における無土器文化の終末と縄文文化の発生に関する予察」『駿台史学』4 駿台史学会
- 高見俊樹 1989 「中部高地における尖頭器の研究史と研究方向」『長野県考古学会誌』59・60 長野県考古学会
- 田中裕子 1999 「関東西南部における尖頭器文化成立についての一考察」『石器に学ぶ』2 石器に学ぶ会
- 手島咲子 2000 「西相模・三浦半島の基礎的検討」『石器文化研究』8 石器文化研究会
- 富樫孝志 1998 「愛鷹・箱根山麓編年第3期の開始」『石器文化研究』6 石器文化研究会
- 戸沢充則 1965 「先土器時代における石器群研究の方法」『信濃』17-4 信濃史学会
- 戸沢充則 1968 「埼玉県砂川遺跡の石器文化」『考古学集刊』4-1 東京考古学会
- 戸沢充則 1990 『先土器時代文化の構造』 同朋舎出版
- 仲田大人・砂田佳弘 1997 「A区L2層の遺構と遺物」『吉岡遺跡群』Ⅲ かながわ考古学財団調査報告 20 財団法人かながわ考古学財団
- 中村喜代重 1979 「神奈川県相模原市下九沢山谷遺跡の石器群」『神奈川考古』7 神奈川考古同人会
- 西井幸雄 1998 「V～IV下層段階の範囲と細分の可能性」『石器文化研究』6 石器文化研究会
- 萩谷千秋・萩 幸二 1991 「第Ⅱ文化層」『自由学園南遺跡発掘調査報告書』東久留米市埋蔵文化財調査報告書 16 東久留米市教育委員会
- 服部隆博 1992 「ナイフ形石器の型式学的基礎研究—特に始良Tn火山灰降灰前後のナイフ形石器を対象として—」『考古論叢神奈河』1 神奈川県考古学会
- 服部隆博 1996 「石器組成」『石器文化研究』5 石器文化研究会
- 宮坂 清 1989 「尖頭器石器群の石器組成」『長野県考古学会誌』59・60 長野県考古学会
- 森嶋 稔・川上 元編 1975 『男女倉』 和田村教育委員会
- 矢島國雄 1996 「先土器時代」『綾瀬市史』9 綾瀬市
- 矢島國雄・鈴木次郎 1976 「相模野台地における先土器時代研究の現状」『神奈川考古』1 神奈川考古同人会
- 山本 薫 1996 「V～IV下層段階における石材組成およびガラス質黒色安山岩製石器の入手元について」『石器文化研究』5 石器文化研究会
- 吉田 望 2000 「相模野台地南部」『石器文化研究』8 石器文化研究会
- Lubbock, John 1865 “Prehistoric Times” Williams and Norgate

# 相模野細石器編年の到達点

砂田 佳弘

(財団法人かながわ考古学財団)

## 1. 細石器の研究史～本州以南

- 1930 前後 細石器(microlith)の訳語 江上波夫・水野清一等
- 1935～1937 細石器(中石器)存否論 八幡一郎、江上・水野
  - ・北海道の細石器、モンゴル、曾根、:1977 戸沢充則「細石器(中間)学派」
- 1947 相沢忠洋による、岩宿の発見が、八幡の「細石器」からの発想。
- 1949 岩宿の発掘が、10年前からの、細石器の存否論争と土器の共伴の有無を明らかにしようとした。
- 1954 芹澤長介論文「関東及び中部地方に於ける無土器文化の終末と縄文文化の発生とに関する予察」  
根の上・栗原・曾根等「小形石器の一群を、縄文文化とは別の、無土器文化の伝統の中において理解したい。」
- 1953 矢出川遺跡の発見 芹澤・岡本勇
- 1954b 芹澤所論 矢出川の石器
  - ・細石刃(small-blade)、細石核(micro-core)幾何学形態の細石器(geometric microlith)を伴わない。
  - ・沖積世初頭で、土器・石鏃を伴わない、縄文時代に先行する石器文化。
- 1957b 鎌木義昌 井島Ⅰ(上層:細刃器)、井島Ⅱ(下層:幾何学形態の細石器)
- 1959b 芹澤 荒屋型彫器 ・矢出川対荒屋 西日本対東日本
- 1959 鎌木 北九州と瀬戸内の資料から
  - ①船底形、②円錐形、半円錐、③台形石器など幾何学形態の細石器の三つのグルーピング。
  - ①と②は「北九州のかなり接近した地域に、遺跡を異にして発見されるということは、両石器群が同時代的な存在ではない」
  - 矢出川と荒屋の組成差とは異なり、石器文化の編年を細石核の形態に求めようとした。
- 1960 杉原荘介 福井洞穴の発掘。細石器に土器が伴う。細石核が半円錐(第4層)→船底(第3・2層)
- 1961 芹澤「梯形(台形)石器・細石器に含まれるか、小形ナイフに属するか」
- 1963 輪島誠一・麻生優 百花台遺跡での、細刃器と台形石器
- 1971 杉原・戸沢 原遺跡での細石器(上層)とナイフ形石器(下層)
  - ナイフ形石器の小形化。あるいは、ナイフ形石器の細石器化。
- 1965 杉原・小野真一 休場遺跡の報告
  - 細刃器用石核(micro-blade core)の中に、細石核(micro core)、舟底形石核(keeled core)の二種。
  - 細刃器用剥片のうち、折断されて残った中間部のみを「細刃器」
  - 半円錐状細石核→円錐状細石核→円筒状細石核→粗製舟底状細石核→精製舟底状細石核
- 1965 麻生 円錐形(半円錐形)→舟底形:福井の成果から。
  - 「中部地方南部の矢出川・休場石器文化と、北部の荒屋・中土石器文化を、同じ編年軸の上で扱うというようなことには無理があった。またあいまいな分類基準にもとづいて細石核の形状を分類し、それによって例えば九州から北海道までの細石器文化を全国縦断的に対比することも不可能である。」(戸沢 1979 pp. 17)

## 2. 細石器の研究史～北海道～

○1959～1961 荒屋遺跡(型彫器)が調査の経緯。

○1961 吉崎昌一 湧別技法の発見

- ・ 1959 芹澤・吉崎 細石器の発生過程が北海道で追認: 自生説
- ・ 1961 白滝型舟底形石器→札骨段階(湧別技法による舟底型細石核が出現)
- ・ 1963 札骨段階→白滝型舟底形石器: 水和層年代による編年の逆転現象
- ・ 1965 加藤晋平 東シベリアの細石器技術の変遷過程を基礎にする。  
紅葉山グループ(円錐形、円筒形細石核)  
緑が丘グループ(側縁に槌状剥離をもつ細石核主体)  
白滝型舟底形石器は細石器文化のグループ ex. 杉原 1965、戸沢 1967、  
紅葉山型細石核→札骨型細石核・白滝型細石核  
北海道の細石器文化の変遷過程は東シベリアと同一歩調であり、自生説は疑問
- ・ 1967 後期白滝文化
- ・ 1973 「白滝型コアビュランがマイクロコアとしての機能もつ」

近年の調査・柏台遺跡群の恵庭 a 火山灰層(15～18ka)の下位から、峠下型、オシヨロッコ型等が層位を違えて出土。

- ・ 白滝遺跡群の豊富な接合資料、今金町美利河遺跡の調査。

## 3. 相模野細石器編年の到達点

- a. 到達点の意味するところ。
- b. 各地域での出土事例の増加。
  - ・ 北海道の大規模調査。
  - ・ 畿内、中国地方の削片系(恩原遺跡)。
  - ・ 四国(奥谷南岩陰遺跡)。
  - ・ 九州(帖地遺跡)。
- c. 接合資料による細石核の形態変化の検証。
  - ・ 北海道(白滝遺跡群、柏台遺跡)。
  - ・ 新潟県(樽口遺跡)

細石核の形態のみにとらわれた変遷、編年感が如何に危険であるかが認識されつつある。

「各々の(細石核)の形は、原材の形状や大きさ、作業の進行状態によって生み出されたバラエティ」(小林 1965)。

### 論証1. 相模野細石器の変遷 その(砂田 1997)後、ケーススタディとしての相模野細石器

- ・ 「相模野の細石器～その発生と展開に向けて～」(砂田 1988)
  - ①細石核による型式設定の問題点と「細石刃製作工程」による分析方法の確立。  
ex. 下鶴間長堀型、代官山細石刃製作工程
  - ②細石刃の大型化と石材種の変遷。
  - ③細石刃製作工程の出現過程。
  - ④細石器遺跡の分布の推移。











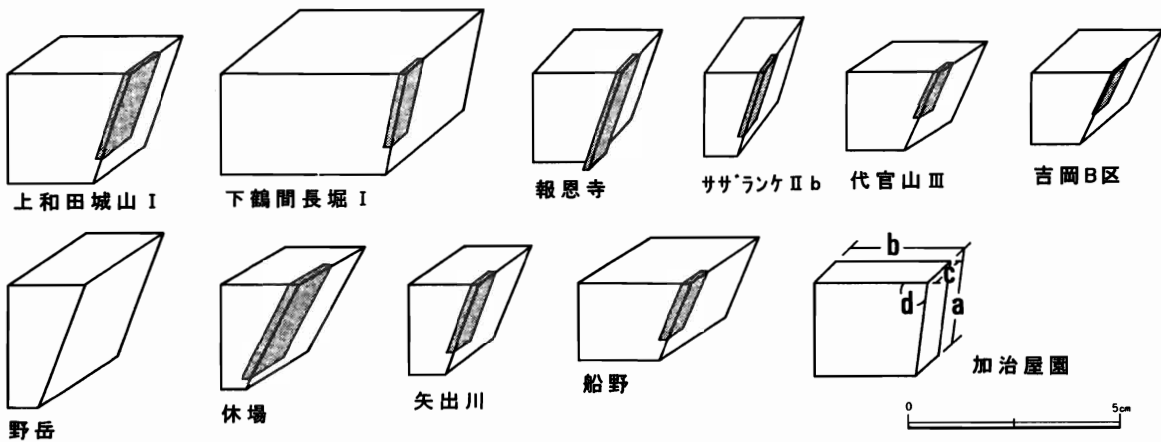
・細石器出土遺跡の漸増(1988→2000: ≒2 遺跡/年)

- a. 23 文化層→44 文化層(その他:大和市大和配水池、綾瀬市吉岡B区II期、横須賀市一本松など)
- b. 宮ヶ瀬サザランケ遺跡IIb文化層(1996 報文)、吉岡遺跡群B区L1H層上部層(1998 報文)、杉久保蓮谷遺跡(2000 調査、未報告)

第5表 細石核の大きさ

遺跡名	層位	点数	作業面 a*cm	打面長 b*cm	打面幅 c*cm	剥離角(180-d°)
上和田城山 I	LISU	12	2.75	2.85	1.53	108
下鶴間長堀 I	L1SL	25	3.12	4.38	2.44	101
報恩寺	BB0U	12	2.24	2.05	1.49	108
代山 II	BB0U	11	2.36	1.59	1.41	105
サザランケ II b	BB0L	12	2.09	1.41	1.58	108
代官山 III	L1HU	33	2.05	2.25	1.35	115
吉岡B	L1HU	72	1.83	1.98	1.49	116
野岳		24	3.11	1.80	2.14	110
休場		16	2.76	1.89	1.76	114
矢出川		59	2.30	1.61	1.51	110
船野		29	2.01	2.65	1.91	113
加治屋園		49	2.23	2.67	7.26	96

\* 細石刃核の出土点数 10 点以上の文化層(細石刃剥離作業面の長さ、打面の長さ、打面の幅、細石刃剥離角の平均値)。

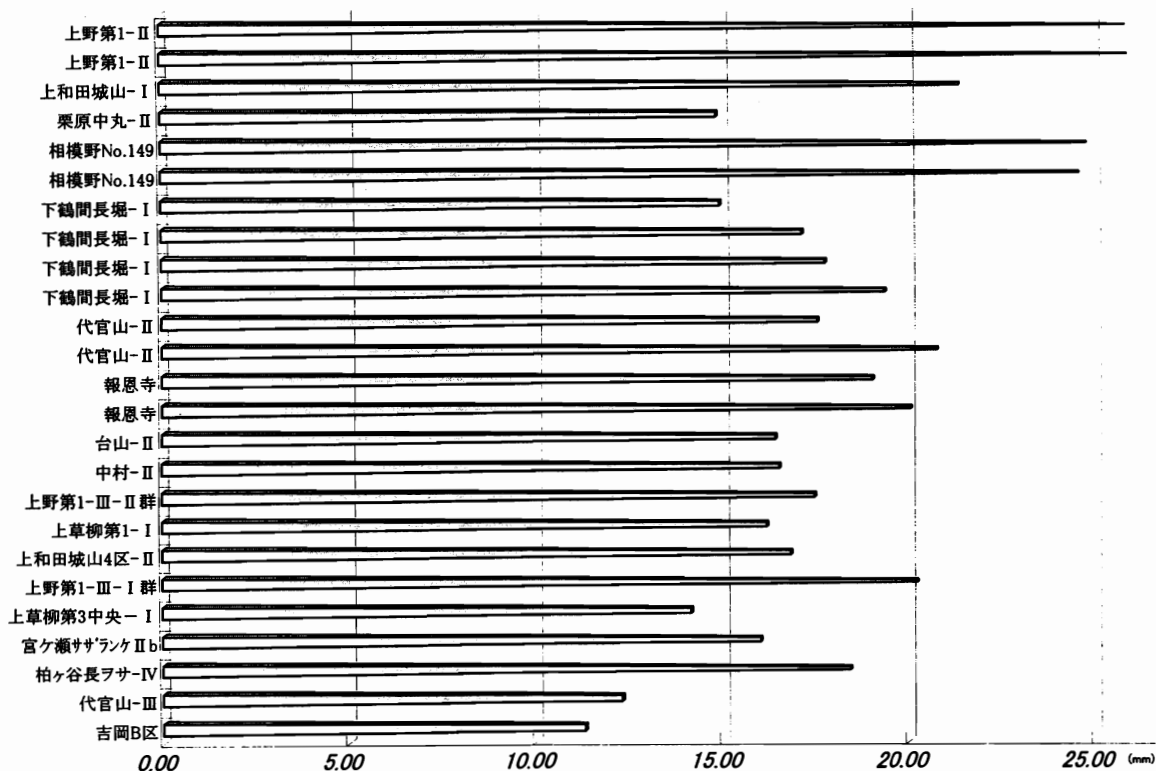


第1図 細石刃核と細石刃の大きさ模型

\* 細石刃核と細石刃の平均した大きさを数値化と図示化によって、遺跡単位の細石刃核、細石刃の大きさを比較。  
相模野編年の吉岡B区→上和田城山の変遷を下段の従来型に充当すると、船野→矢出川→休場→野岳。  
細石刃核・細石刃の大きさ比較では、小→大へという変遷の可能性が推察される。

第6表 細石刃の大きさ

遺跡名	長さ*mm	幅*mm	段階	層位	厚さ*mm	重さ*g	点数	石材
上野第1-II	25.85	10.71	4	LIS上部	4.28	1.25	7	安山岩・凝灰岩
上野第1-II	25.80	11.40	4	LIS上部	5.00	1.55	4	安山岩
上和田城山-I	21.33	8.50	4	LIS最上	2.16		3	珪質頁岩・凝灰岩
栗原中丸-II	14.82	8.78	3	LIS下部	2.32	2.75	28	黒曜石
相模野No.149	24.55	6.58	3	LIS下部	1.99		27	チャート
相模野No.149	24.75	6.71	3	LIS下部	2.13		26	安山岩
下鶴間長堀-I	19.33	6.35	3	LIS下部	1.98	2.35	20	チャート系
下鶴間長堀-I	17.73	5.96	3	LIS下部	1.90	2.05	36	凝灰岩系
下鶴間長堀-I	17.11	6.21	3	LIS下部	1.78	1.66	6	粘板岩系
下鶴間長堀-I	14.90	4.95	3	LIS下部	1.81	1.50	8	黒曜石
新戸		8.50	3	LIS下部	2.25	3.75	4	黒曜石
代官山-II	20.73	7.90	3	BBO上	2.26	4.16	3	チャート
代官山-II	17.52	6.72	3	BBO上	1.92	3.17	4	黒曜石
報恩寺	20.03	6.51	3	BBO上面	1.98		10	黒曜石
報恩寺	19.00	6.00	3	BBO上面	1.82		11	チャート
台山-II	16.40	5.40	3	BBO上面	2.20		68	黒曜石
中村-II	16.50	6.75	3	BBO中心	2.50	1.75	2	黒曜石
上野第1-III-II群	17.45	6.75	3	BBO中位	2.61	4.00	7	黒曜石
かしわ台駅前-I		5.80	3	BBO中心			29	黒曜石
上草柳第1-I	16.16	6.54	3	BBO中位	2.46	2.52	11	黒曜石
上和田城山4区-II	16.81	4.81	2	BBO下部	1.63		16	黒曜石
上野第1-III-I群	20.20	6.64	2	BBO下底	2.30	3.20	12	黒曜石
上草柳第3中央-I	14.13	6.06	2	BBO下部	1.93	2.00	21	黒曜石
宮ヶ瀬サランクIIb	16.00	5.00	2	BBO下部	1.30	1.30	12	黒曜石
かしわ台駅前-II		6.03	2	LIH上位			19	黒曜石
柏ヶ谷長ヲサ-IV	18.40	6.00	2	LIH上部	2.10	2.00	22	黒曜石
代官山-III	12.30	4.30	1	LIH上部	1.30	0.70	148	黒曜石
吉岡B区	11.30	4.30	1	LIH上部	1.40	0.70	229	黒曜石

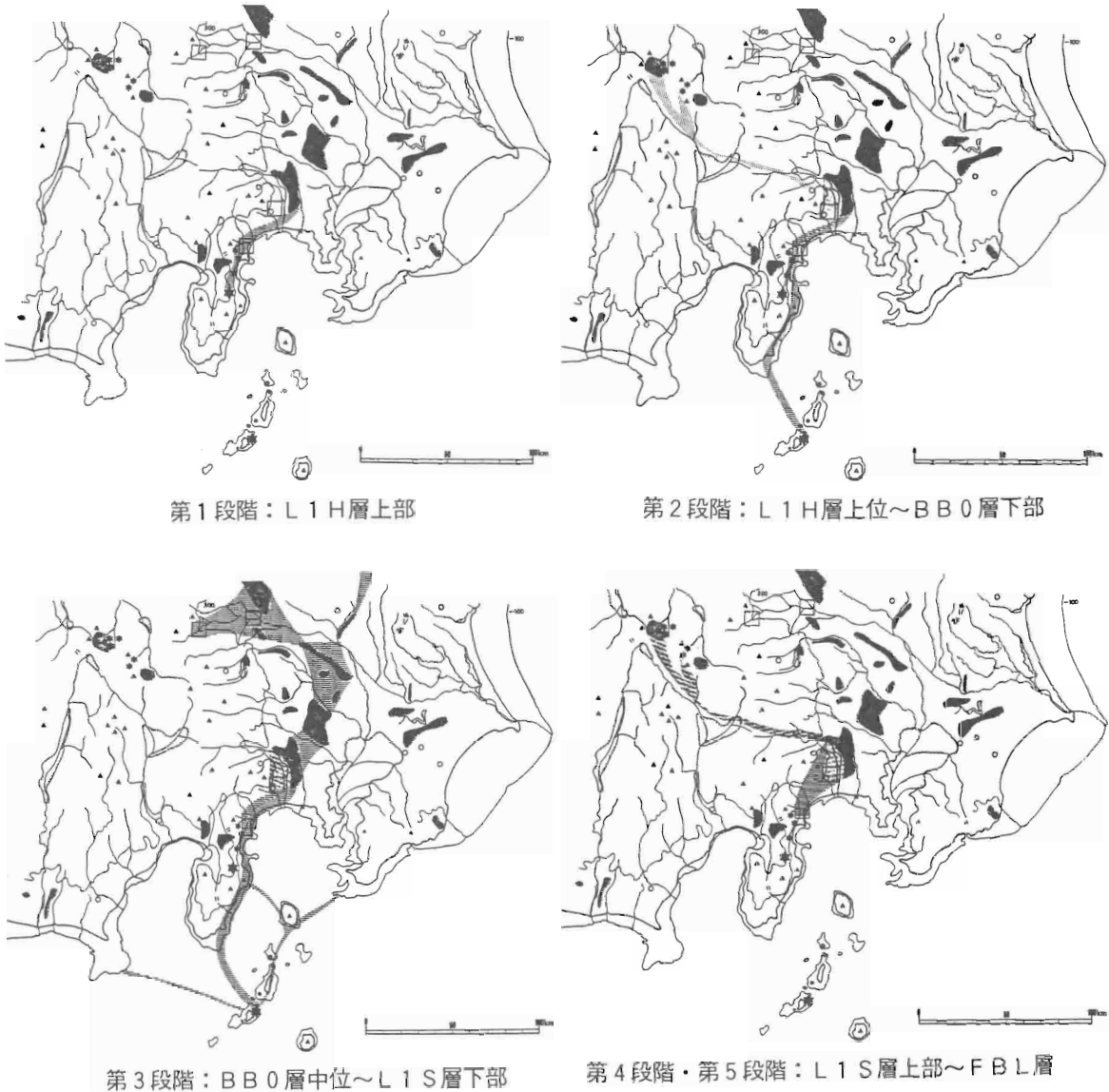


第6表付図 細石刃の長さ

\* 完形細石刃の大きさ(長さ、幅、厚さ、重さ)と石材種。

\* 付図は表6を基礎に、横軸に完形細石刃の平均長さを、縦軸に層序に対応した石材別各遺跡単位文化層位を示している。

出現期細石刃の長さ1センチ余りから、最終末には2センチ半と、幅、重さともに倍化している。ただし、この長さ倍増は漸移的とは言え、全文化層位を相対化した上での全体的な傾向を示すにすぎない。中でも、柏ヶ谷長ヲサー-IVは、BB0層上位の値であり、上野第1-IIIもL1S層下部の値である。こうした古期大形に対して、下鶴間長堀-Ⅰや栗原中丸-Ⅱの黒曜石製などはBB0層下半部に相当する長さであり、上和田城山-ⅠはBB0層上面などの新期小形も存在する。下鶴間長堀-Ⅰでは、非黒曜石製は黒曜石製に比較し長いもの他遺跡よりも短小である。ただし、新期細石器遺跡同一文化層位の中でも、非黒曜石製細石刃が長大なのは、三ノ宮・下谷戸でもガラス質黒色安山岩製の細石刃である。しかし、総ての黒曜石が小形なのではなく、大形から小形まで9つにグループ分けられ、硬質頁岩製が小形であるほかは、中形に属する大きさである。



第2図 相模野細石刃の石材利用原産地変遷図

\* 細石器に利用される石材原産地は、時期的変遷とともにその産地が変容し、産地の組み合わせが変移する。

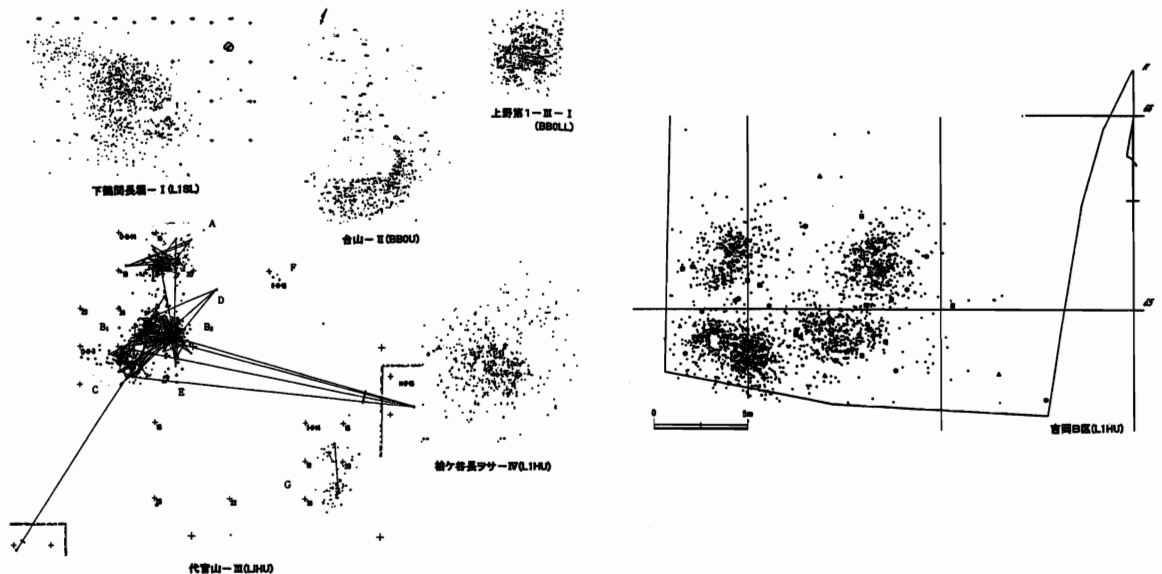
第1段階：L1H層上部では、伊東から中伊豆を結ぶ柏峠の黒曜石が限定的に利用する。

第2段階：L1H層上面では、伊豆七島神津島産の黒曜石が加わり、BB0層下位で新たに信州系の黒曜石が加わり、和田峠産を主体に麦草峠、柏峠産が混在する。(望月・堤 1997、鈴木 1996 報文)。

第3段階：BB0層中位からL1S層下部では、神津島産黒曜石を中心に、BB0層中位ではチャート、L1S層下部ではさらに凝灰岩が加わる。

第4段階・第5段階：L1S層上部以降は、ガラス質黒色安山岩、凝灰岩、チャート、粘板岩、砂岩を使用する。

寺尾-Iの黒曜石製細石刃1点は神津島産である(鈴木 1999)。

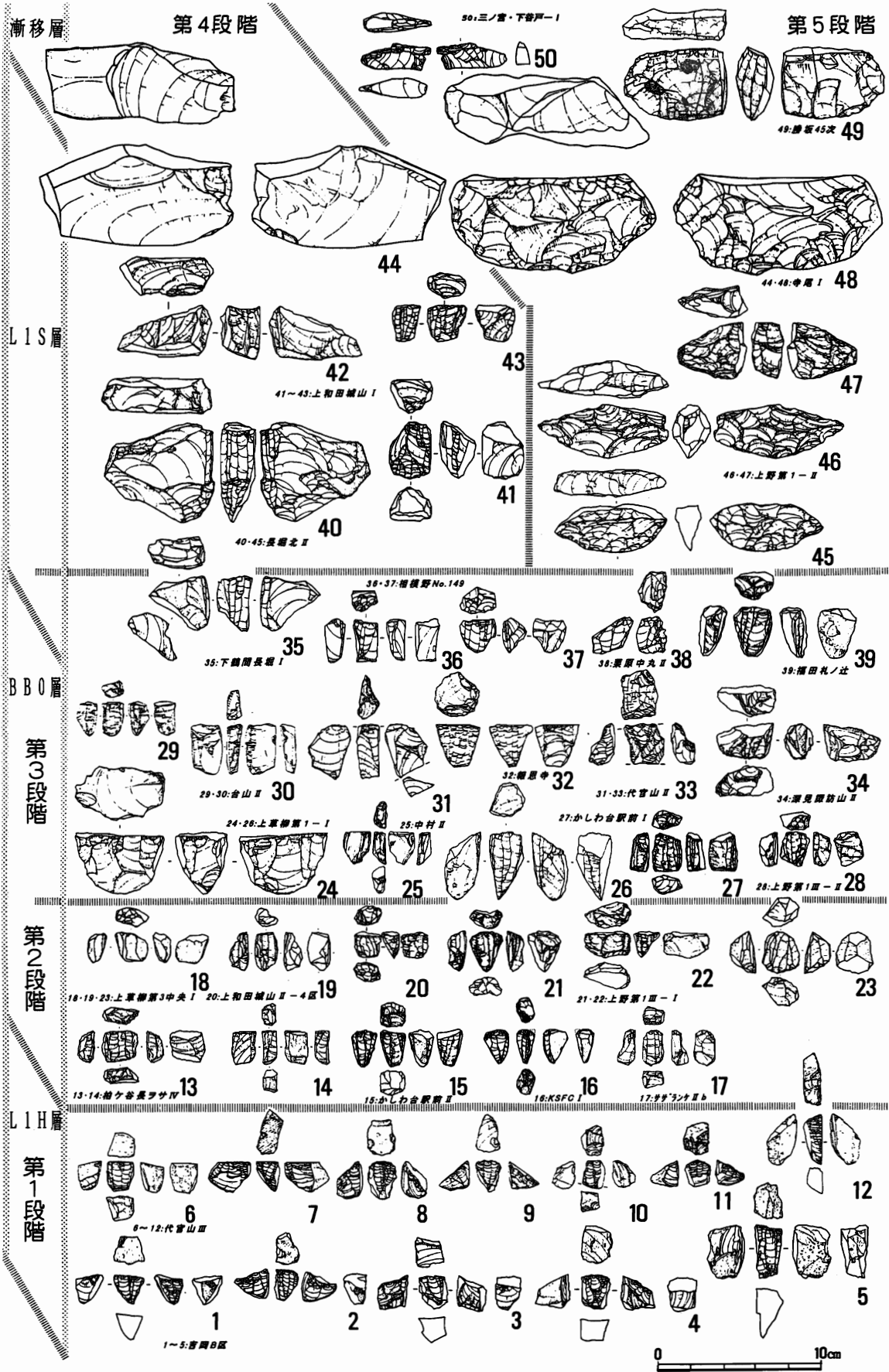


第3図 集中地点の平面分布状態

出現期の吉岡遺跡群B区では、北側に開口部のある径4メートル前後で平面分布核のある集中地点が4カ所、代官山遺跡-IIIでも核があり、西北方向に開口する径2メートル～3メートルの集中地点が3～4カ所の隣接する。しかし、その後の細石器石器群における分布は多くても二地点の集中である。BB0層下部の宮ヶ瀬サザランケ遺跡では西側に、BB0層上面の台山-IIでは北側に希薄な集中地点を付属するようである。また、単独あるいは集中地点として分離できない場合も含め径3～8メートルと、出現期の分布範囲に比較し広範である。しかし、代官山-IIIのB集中、吉岡B区の第2集中など、平面分布の形態がダルマ状態を呈するように、分布の重複状態を示す集中地点においては、分布の切り合い関係をも検討すべきである。L1S層下部の下鶴間長堀-Iはそうした断続的時間を表示する分布状態の一例態である。さらに、柏ヶ谷長ヲサーIVが径4メートルの単独分布であることもBB0層以降の集中地点に類似し、石材組成の相違はもとより、出現期細石器石器群と一線を画す要因でもある。

#### 論証2. 「細石器」の範囲と「細石刃」の範囲。

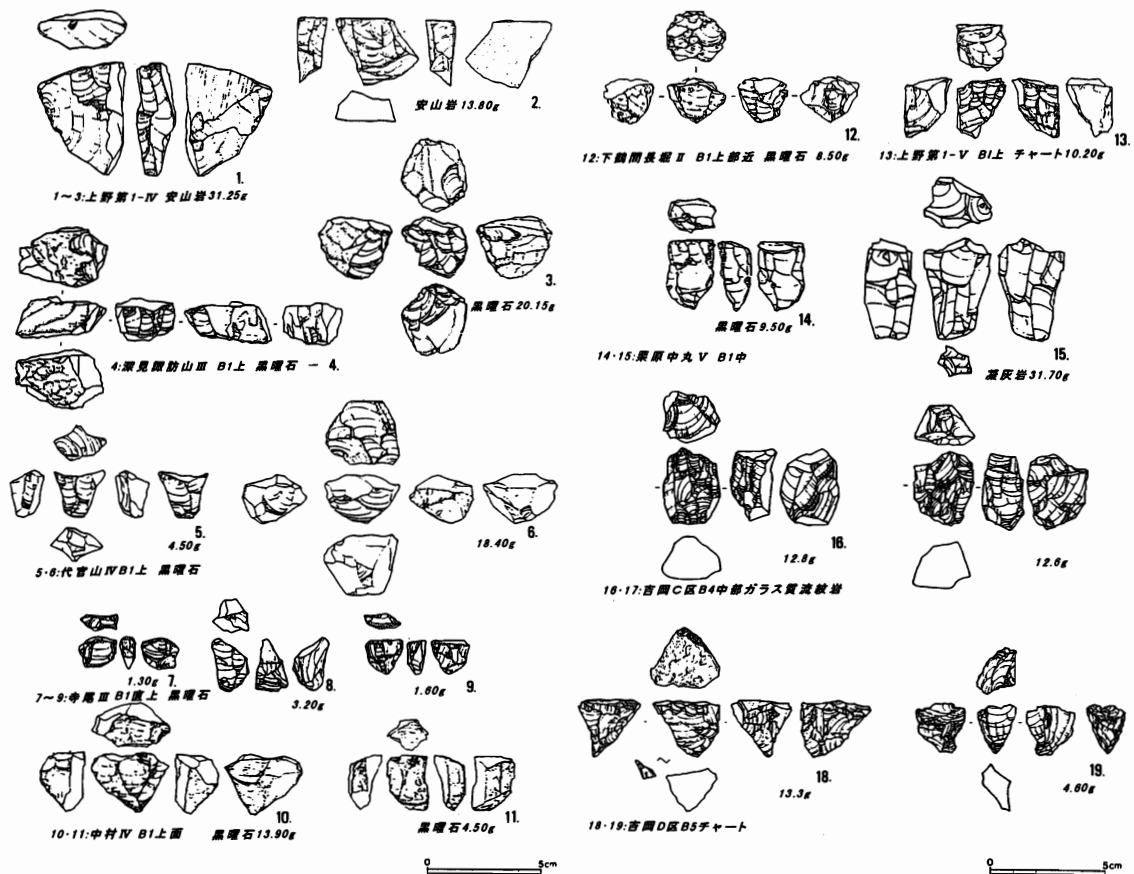
\* 原遺跡、百花台遺跡等の細石刃と細石器(台形石器等)、細石刃と幾何形ナイフ形石器等といった異なる器



第4図 相模野細石刃製作工程の変遷

種間相互の検討はあらためて提議せざるを得ない。所謂、小型ナイフ形石器がナイフ形石器の範疇でなく、細石器としての小型ナイフ形石器として議論すべき可能性がある。しかし、現状では日本の細石器研究自体が、細石刃(マイクロブレイド)を中心とした細石器研究において進展した経緯がある。そうした細石器研究の現状を踏まえた上で、相模野における細石刃製作工程の出現をその出自と背景から明かとする。

- a. 相模野最古の細石器石器群(細石刃製作工程)以前の剥片剥離工程の実体。
- b. 層位別の類細石刃核の変遷。細石刃核との比較。



第5図 L1H層中位以前の類細石核

\* 最近のAMSによる年代測定値44資料をOxCal3.3によって暦年補正を行ってみた。宮ヶ瀬No. 11遺跡が15,425 CalBP (L1S上面)、吉岡遺跡群B区が19,850 CalBP (L1H層上部)、用田バイパスⅡ地区中央が20,280 CalBP (L1H層中部)、福田丙二ノ区21,350 CalBP (BB1層上部)、福田丙二ノ区22,600 CalBP (BB1層下部)、用田バイパスⅢ地区北が22,725 CalBP (BB1層下部)、宮ヶ瀬No. 13・No. 13C遺跡が22,800 CalBP (BB1層下部)という地層累重の法則のとおり整然とした暦年補正を得ている(砂田1999報文)。相模野細石器の暦年補正による時間幅が、4425年と算定される。BB1層下部にみる三遺跡200年間の差異は遺跡単位では10年単位の差異でしかなく、各遺跡ごとの暦年補正值の資料数を増すことにより、編年の基軸として絶対年代が補強されることとなる。ただし、遺跡間、石器間の相対年代の差は、遺跡担当者、石器観察者の基本的なモノを視る目が肝要であることは言うまでもない。



## 日本細石器石器群研究の生い立ち

阿部朝衛	2000	2	新潟県荒川台遺跡第七次調査略報	帝京史学 15	pp. 195-218
小畑弘己	2000	12	ジュクタイ文化・セレジヤム文化再考植刃槍と両面加工石槍――	九州旧石器 4-橘昌信先生還暦記念特集号-	pp. 249-278
鎌田洋昭	2000	12	南九州における細石刃文化期の剥離システムについて―高須川流域遺跡群の様相―	九州旧石器 4-橘昌信先生還暦記念特集号-	pp. 215-234
神 剛史	2000	11	両面調整尖頭器の変遷感―相模野台地における検討―	専修考古 8	pp. 25-50
鈴木忠司・黒坪一樹	2000	12	岩宿時代敲石類石器研究への一視点―桑飼下遺跡出土資料から―	九州旧石器 4-橘昌信先生還暦記念特集号-	pp. 355-366
多田 仁	2000	12	船野技法による細石核の細分について	九州旧石器 4-橘昌信先生還暦記念特集号-	pp. 235-248
日高広人	2000	12	天神河内第1遺跡出土の未公開資料について	九州旧石器 4-橘昌信先生還暦記念特集号-	pp. 349-353
宮田栄二	2000	12	細石刃の打面と頭部調整について―細石刃製作技術の追求のために―	九州旧石器 4-橘昌信先生還暦記念特集号-	pp. 203-214
村崎孝宏	2000	12	九州における細石刃文化期の研究(1)―神子柴・長者久保系石器群の波及と展開―	九州旧石器 4-橘昌信先生還暦記念特集号-	pp. 279-288
吉留秀敏	2000	2	遺跡分布からみた細石器文化―九州島における動態―	第24回九州旧石器文化研究会	pp. 1-10
吉留秀敏	2000	12	井尻B遺跡の旧石器	九州旧石器 4-橘昌信先生還暦記念特集号-	pp. 193-202
岡本東三	1999	10	神子柴文化をめぐる40年の軌跡―移行期をめぐるカオス―	先史考古学研究 7	pp. 1-22
鈴木次郎	1999	3	寺尾・栗原中丸両遺跡の石器石材の再検討	かながわの考古学 研究紀要 4	pp. 110-133
寺崎康史	1999	4	北海道細石刃石器群理解への一試論	先史考古学論集 8	pp. 71-88
寺崎康史	1999	10	細石刃石器群の変遷とその終末	日本考古学協会1999年度大会研究発表要旨	pp. 11-12
深澤幸江	1999	3	上和田城山遺跡における細石器の形態学的一考察	埋蔵文化財の保管と活用のための基礎的整理報告書2―上和田城山遺跡篇―	pp. 180-186
深澤幸江	1999	5	L1Hの細石器文化	石器に学ぶ 2	pp. 63-104
福井淳一	1999	10	細石刃石器群の出現―柏台1遺跡―	日本考古学協会1999年度大会研究発表要旨	pp. 9-10
山田 哲	1999	4	北海道の前中期細石刃石器群についての研究―常呂郡馴子府町緑丘B遺跡石器群の再検討―	先史考古学研究 8	pp. 1-70
出穂雅美	1998	3	北海道常呂郡置戸町雄勝嘉藤遺跡における採集資料	北海道旧石器文化研究 3	pp. 13-28
岩谷史記	1998	11	細石器文化期の集落構成1「ブロッカー遺物集中分布の視点から」	第23回九州旧石器文化研究会「九州島における細石器文化の石器と技術」	pp. 28
大沼克彦	1998	4	日本旧石器時代の細石刃製作用岩石加熱処理に関する研究	日本旧石器時代の細石刃製作用岩石加熱処理に関する研究 平成8年度～平成9年度科学研究費補助金(萌芽的研究)研究成果報告書	pp. 5-32
白石浩之	1998	11	細石器文化の諸問題―原料・技術・分布―	第23回九州旧石器文化研究会 九州の細石器文化―九州島における細石器文化の石器と技術―	pp. 1-21
高倉純・出穂雅美	1998	3	頓別平野および宗谷丘陵における細石刃石器群	北海道旧石器文化研究 3	pp. 29-38
堤 隆	1998	4	氷期の終末と細石刃文化の出現―小型石器にみる環境変動への適応	科学 68-4	pp. 329-336
橋本勝雄	1998	3	関東細石器考	千葉県立中央博物館研究報告5-2	pp. 117-135
麻生敏隆	1997	3	佐賀県東松浦郡相知町輪殿窟―九州における細石器文化期の洞穴遺跡の一例―	人間・遺跡・遺物 3	pp. 393-401
荒井幹夫	1997	3	西南日本における細石器文化の様相―競合する諸仮説―	人間・遺跡・遺物 3	pp. 48-62
押野一貴	1997	3	静岡県芝川町駿河小塚遺跡出土細石刃核について	人間・遺跡・遺物 3	pp. 118-132
加藤博文	1997	3	技術体系とその多様性の解釈:細石刃石器群の事例について	筑波大学先史学・考古学研究 8	pp. 1-29
下川達彌・萩原博文	1997	3	細石刃石器群の出現・展開と泉福寺洞穴	人間・遺跡・遺物 3	pp. 63-89
杉浦裕幸	1997	5	豊田地域の細石刃について	三河考古 10	pp. 181-192
砂田佳弘	1997	11	日本列島細石器文化の編年へ向けて	第22回九州旧石器文化研究会「九州の細石器文化 細石器文化の開始と編年研究」	pp. 415-428
高倉純・出穂雅美・中村祐一・高瀬克範	1997	3	常呂川流域における細石刃石器群の採集資料	北海道旧石器文化研究 2	pp. 15-24
高橋春栄・立木宏明	1997	3	新潟県朝日村中原野北遺跡C地点採集の石器	新潟考古 8	pp. 31-37
田中英司	1997	3	状態の原位置論	人間・遺跡・遺物 3	pp. 133-146
堤 隆	1997	6	更新世末期における礫器使用行動の意味―細石刃段階における礫器顕在化についての解釈―	長野県考古学会誌 82	pp. 29-41
永塚俊司	1997	3	荒屋系細石刃石器群における一つの定点	人間・遺跡・遺物 3	pp. 90-117
望月明彦・堤 隆	1997	3	相模野台地の細石刃石器群の黒曜石利用に関する研究	大和市史研究 23	pp. 1-36
山原敏朗	1997	3	帯広市泉町A遺跡の細石刃核について	北海道旧石器文化 2	pp. 25-30
雨宮瑞生	1996	2	南九州の幅狭型細石刃核	考古学雑誌 西野元先生退官記念論文集	pp. 1-13
白石典之	1996	2	日本における細石刃石器群編年研究とその問題点	考古学雑誌 西野元先生退官記念論文集	pp. 14-25

相模野細石器編年の到達点(砂田佳弘)

砂田佳弘	1996	4	愛鷹・箱根山麓の細石器～相模野からみた編年の覚え書き～	静岡県考古学会シンポジウムIX「愛鷹・箱根山麓の旧石器時代編年」収録集	pp. 83-85
堤 隆	1996	10	削片系細石刃石器群をめぐる技術組織の様相—中ッ原細石刃石器群を中心として—	古代 102	pp. 36-61
光石鳴巳	1996	3	恩原2遺跡における細石刃石器群の技術論的考察	恩原2遺跡	pp. 155-167
宮田栄二	1996	1	南九州における細石刃文化終末期の様相	坂詰秀一先生還暦記念論文集 考古学の諸相	pp. 961-978
大沼克彦	1995		湧別技法における石核打面の再生について	王朝の考古学	pp. 3-9
島田和高・中島 透	1995		諏訪湖東岸遺跡群採集の細石核	長野県考古学会誌 76	pp. 52-57
白石典之	1995		中央日本における細石刃石器群の展開	群馬考古学手帳 5	pp. 1-28
多田 仁	1995	11	四国西南部の船野型細石核	旧石器考古学 51	pp. 85-89
雨宮瑞生	1994	3	南九州細石刃の幅狭化についての一小考	日本と世界の考古学—現代考古学の展開—	pp. 62-67
織笠 昭	1994	11	日本列島の細石器文化	中日古人類・史前文化淵源関係国際学術研究討論会 柳川国際シンポジウム発表要旨	pp. 22-29
島立 桂	1994		西南日本における細石刃文化の起源と展開	千葉県文化財センター研究紀要 14	pp. 215-229
下瀬洋一・藤野次史	1994	5	山口県宇部市川津遺跡採集の細石核	旧石器考古学 48	pp. 75-82
白石典之	1994	10	細石刃核の打面と作業面のなす角度の分析	古代文化 46-10	pp. 1-14
砂田佳弘	1994	3	相模野細石器の出現—器種変遷と石材流通—	國學院大學考古学資料館紀要 10	pp. 1-41
砂田佳弘	1994	3	吉岡遺跡群B区	第1回石器文化研究交流会発表要旨	pp. 53-57
砂田佳弘	1994	5	相模野細石器の変遷	神奈川考古 30	pp. 1-20
堤 隆	1994	3	細石刃はどのように使われたか?	大和市研究 20	pp. 1-29
萩谷千明	1994	10	IV期—細石器文化—	第2回岩宿フォーラム/シンポジウム 群馬の岩宿時代の変遷と特色 予稿集	pp. 37-42
藤本 強	1994	3	細石器(Ⅲ)—シリア ヤブド岩陰の細石器—	東京大学文学部考古学研究室研究紀要 12	pp. 51-74
松下晴子	1994	12	中国内蒙古自治区ドロットの細石器—京都大学人文科学研究所蔵品の商会—	考古学雑誌 80-1	pp. 120-145
阿部朝衛	1993	10	細石刃技法の把握	細石刃文化研究の新たな展開Ⅱ	pp. 161-170
阿部朝衛	1993	11	新潟県荒川台遺跡の細石刃生産技術の実態—荒川台技法の提唱—	法政考古学 20	pp. 1-22
稲田孝司	1993	9	細石刃文化と神子柴文化の接点—縄文時代初頭の集団と分業・予察—	考古学研究 40-2	pp. 21-46
大沼克彦	1993	10	細石刃剥離に関する実験的研究	細石刃文化研究の新たな展開Ⅱ	pp. 171-184
小畑弘己	1993	10	東アジアの植刃器について	細石刃文化研究の新たな展開Ⅱ	pp. 213-226
織笠 明	1993	10	細石刃研究の最も基礎的な形態	細石刃文化研究の新たな展開Ⅱ	pp. 192-205
加藤真二	1993	10	中国華北の細石刃文化	細石刃文化研究の新たな展開Ⅱ	pp. 126-139
加藤博文	1993	4	サハリン・北海道地域における細石刃技術の受容の様相—近年の日ロ両国の調査成果から—	古代文化 45-4	pp. 3-12
加藤博文	1993	10	シベリアの細石刃文化	細石刃文化研究の新たな展開Ⅱ	pp. 140-157
木崎康弘	1993	10	九州で細石器文化が始まった頃	細石刃文化研究の新たな展開Ⅱ	pp. 12-20
栗島義明	1993	6	湧別技法の波及—削片系と在地系の細石刃核について—	土曜考古 17	pp. 1-37
栗島義明	1993	10	細石器器群の終焉	細石刃文化研究の新たな展開Ⅱ	pp. 88-102
栗島義明	1993	10	細石刃文化と石材環境	細石刃文化研究の新たな展開Ⅱ	pp. 185-191
桜井準也	1993	10	細石刃文化遺跡と河川次數	細石刃文化研究の新たな展開Ⅱ	pp. 252-266
佐藤宏之	1993	10	細石刃石器群の行動論的分析のための視点	細石刃文化研究の新たな展開Ⅱ	pp. 299-310
島立 桂	1993	3	相模野台地における槍先形尖頭器と細石刃の展開	潮見浩先生退官記念論文集	pp. 61-76
島立 桂	1993	10	細石刃と槍先形尖頭器の併存とその意味	細石刃文化研究の新たな展開Ⅱ	pp. 64-66
白石典之	1993	3	北東アジアの細石刃石器群—技術よりみた時間・空間的変遷とその背景—	筑波大学先史学・考古学研究 4	pp. 1-30
白石典之	1993	10	細石刃文化の出現過程	細石刃文化研究の新たな展開Ⅱ	pp. 3-11
白石典之	1993	11	北海道における細石刃石器群の展開	物質文化 56	pp. 1-29
白石浩之	1993	10	細石器器群の終末と神子柴型・長者久保系石器群の関連性について	細石刃文化研究の新たな展開Ⅱ	pp. 75-87
鈴木忠司	1993	10	細石刃文化と生業	細石刃文化研究の新たな展開Ⅱ	pp. 267-279
砂田佳弘	1993	7	細石器技法の発達	考古学の世界 古代を拡大する②関東・中部	pp. 88-89
砂田佳弘	1993	10	細石器の出現—相模野の検証—	細石刃文化研究の新たな展開Ⅱ	pp. 21-59
諏訪間順	1993	10	相模野台地における細石刃石器群と尖頭器	細石刃文化研究の新たな展開Ⅱ	pp. 67-74
早田 勉	1993	10	日本列島とその周辺の指標テフラ	細石刃文化研究の新たな展開Ⅱ	pp. 115-125
高橋昭治・武田良夫・熊谷常正	1993	8	岩手県岩洞湖大橋遺跡の石器群—北上山地の細石刃資料	岩手考古学 5	pp. 27-36

田村 隆	1993 10	野辺山を視る眼	細石刃文化研究の新たな展開Ⅱ	pp. 280-298
辻本崇夫	1993 10	細石刃文化期の遺構	細石刃文化研究の新たな展開Ⅱ	pp. 235-251
堤 隆	1993 7	スクレイピングに用いられた細石刃	佐久考古通信 58	pp. 8-9
堤 隆	1993 10	細石刃の使用に関する二・三の問題	細石刃文化研究の新たな展開Ⅱ	pp. 206-212
堤 隆	1993 10	日本の細石刃文化遺跡と細石刃文化資料	細石刃文化研究の新たな展開Ⅱ	pp. 311-318
中村由克	1993 10	細石刃文化期の石囲い炉	細石刃文化研究の新たな展開Ⅱ	pp. 227-234
橋本勝雄	1993 9	略説・日本細石器文化研究の現状と課題	史館 24	pp. 1-23
橋本勝雄	1993 10	日本細石器文化研究の現状と課題	細石刃文化研究の新たな展開Ⅱ	pp. 103-114
松浦五輪美	1993 3	西南日本の細石刃文化について一特に、「野岳・休場型」、「船野型」細石核を中心に	潮見浩先生退官記念論集	pp. 77-92
森島 稔	1993 10	中部高地の細石刃過程の課題	細石刃文化研究の新たな展開Ⅱ	pp. 60-63
吉井雅勇	1993 10	中部日本の細石刃文化	新潟考古学談話会会報	pp. 7-13
宇田川浩一	1992 10	千葉県細石刃文化期細分試案	千葉県の歴史 44	pp. 30-44
織笠 昭	1992	日本列島における細石刃の研究	北方ユーラシアにおける細石刃石器群の起源と拡散	pp. 4
がい、べい	1992	中国の細石刃石核	北方ユーラシアにおける細石刃石器群の起源と拡散	pp. 7
加藤真二	1992 3	中国細石刃文化の展開とその背景	筑波大学 先史学・考古学研究 3	pp. 1-30
桜井美枝	1992	細石刃石器群の技術構造一山形県角二山遺跡の分析一	東北文化論のための先史学歴史学論集	pp. 441-462
佐藤宏之	1992 10	北方系削片系細石器石器群と定住化仮説	法政大学大学院紀要 29	pp. 55-83
佐藤宏之	1992	関東地方における北方系削片系細石器石器群の「移行期」に果たした役割	北方ユーラシアにおける細石刃石器群の起源と拡散	pp. 14
白石浩之	1992	細石器文化の研究一西南日本の細石器文化について	人間・遺跡・遺物一わが考古学論集 2一	pp. 41-58
橋 冒信	1992	西南日本における細石器文化	北方ユーラシアにおける細石刃石器群の起源と拡散	pp. 3
田中英司	1992	もうひとつの製作工程一泉福寺洞穴の細石器一	人間・遺跡・遺物一わが考古学論集 2一	pp. 59-74
テレビヤコフ、アソニー	1992	極東南部における細石刃技術の発生と発達	北方ユーラシアにおける細石刃石器群の起源と拡散	pp. 9
ド・ロス・ド・フ、ニコライ・アルテミエフ	1992	エニセイ河流域の更新世遺跡における細石刃石器群	北方ユーラシアにおける細石刃石器群の起源と拡散	pp. 15
藤本 強	1992 12	細石器(Ⅱ)幾何学形細石器の分類とその歩み	東京大学文学部考古学研究室研究紀要 11	pp. 125-150
藤本 強	1992	細石刃の使用	日本とシベリアの先史文化交流に関する日ソ共同調査	pp. 43-54
リ、センボク	1992	韓国の細石核に関する形態学(予稿)	北方ユーラシアにおける細石刃石器群の起源と拡散	pp. 10
リ、モンゴ・コン、ヒョンヒョ	1992	韓国、スヤング遺跡の剥片尖頭器と細石刃核	北方ユーラシアにおける細石刃石器群の起源と拡散	pp. 20
小畑弘己	1991 9	東アジアにおける細石刃文化終末期の様相	九州旧石器文化研究会第15回例会発表要旨	
織笠 昭	1991 3	西海技法の研究	東海大学紀要文学部 54	pp. 63-96
桜井美枝	1991 12	北方系細石刃文化の南下	考古学ジャーナル 341	
徐 淑・加藤真二	1991 11	中国山西省・涇河流域の細石器文化	旧石器考古学 43	
谷口康浩	1991	木曾開田高原柳又遺跡における細石刃文化	國學院雑誌 92-2	pp. 21-51
堤 隆	1991	相模野細石刃文化における石器装備の構造	大和市史研究 17	pp. 1-32
富田逸郎	1991 9	南九州における「ナイフ形石器と細石核の共伴例」について	九州旧石器 2	
森本和男	1991 3	k-Means分析による細石器遺跡の分析	第4回考古学におけるパーソナルコンピューター利用の現状	pp. 26-36
吉沢 靖	1991	中ノ原遺跡群5B地点の細石刃文化	第4回佐久地方遺跡発掘調査報告会	pp. 14-23
織笠 昭ほか	1990	細石器文化・縄文時代草創期文献目録	神奈川考古 26	pp. 151-173
加藤 稔	1990	東北日本の細石刃核一「湧別技法=角二山型」以前の諸型式について一	伊東信雄先生追悼考古学古代史論叢	pp. 25-49
加藤 稔	1990	山形県の細石刃核	第3回東北日本の旧石器文化を語る会予稿集	pp. 35-36
川口 潤	1990	白草遺跡の細石刃文化	第3回長野県旧石器文化研究交流会一発表要旨一	pp. 22-25
国学院大学考古学研究室・谷口康浩	1990	開田高原柳又遺跡A地点の細石刃文化	第3回長野県旧石器文化研究交流会一発表要旨一	p. 7
(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団	1990	埼玉県白草遺跡の細石刃文化	考古学ジャーナル 324	pp. 7-10
砂田佳弘	1990	ナイフ形石器と細石器の分布	神奈川県下における主要遺跡の分布と問題点 かながわの考古学 1	pp. 4・5
高橋春栄	1990	新発田市上ノ山C遺跡採集の舟底形細石刃核	北越考古学 3	pp. 52-53
千葉英一	1990	北海道の細石刃	第3回東北日本の旧石器文化を語る会予稿集	pp. 30-34
堤 隆	1990	野辺山原における細石刃文化の様相	第3回長野県旧石器文化研究交流会一発表要旨一	pp. 26-34
中島芳栄	1990	中ノ原遺跡群1G地点採集の細石器について	佐久考古通信 51	pp. 13-15
藤本 強	1990	細石器(Ⅰ)一細石器のもつ意味・ソ連極東地域と北海道出土資料の比較一	東京大学文学部考古学研究室研究紀要 9	pp. 1-23
細野高伯	1990	市之関前田遺跡の細石刃文化	第3回長野県旧石器文化研究交流会一発表要旨一	pp. 17-21
山田巖・森野譲	1990	埼玉県砂川遺跡発見の細石核	旧石器考古学	pp. 71-76

相模野細石器編年の到達点(砂田佳弘)

由井茂也・吉沢 靖・堤 隆	1990	信濃野辺山原の細石刃文化—中ツ原 5 B 地点の細石刃文化資料から—	古代文化 42-11	pp. 1-18
吉沢 靖・吉井雅勇 中ツ原遺跡群 5 B 地点 発掘調査団	1990	中ツ原遺跡群 5 B 地点の細石刃文化	第3回長野県旧石器文化研究交流会—発表要旨—	pp. 2-6
伊藤恒彦	1989	細石刃石器群の成立と尖頭器石器群の関連について—相模野台地の場合—	『長野県考古学会誌59・60』「シンポジウム特集号 中部高地の尖頭器文化」	pp. 294-298
梶原 洋	1989	シベリア・極東・アラスカの細石器文化	考古学ジャーナル 306	pp. 2-5
白石典之	1989	特集 旧石器時代の東アジアと日本：細石刃石器群の出現過程	季刊考古学 29	pp. 66-69
鈴木次郎	1989	槍先形尖頭器石器群と細石刃石器群の時間的關係	『長野県考古学会誌59・60』「シンポジウム特集号 中部高地の尖頭器文化」	pp. 291-293
タンサオ	1989	中国細石刃技術の起源について	考古学ジャーナル 312	pp. 13-16
千葉英一	1989	北海道の細石器文化	考古学ジャーナル 306	pp. 6-11
鶴丸俊明	1989	東アジアにおける細石刃製作技術	季刊考古学 29	pp. 62-65
萩原博文	1989	西日本の細石器文化	考古学ジャーナル 306	pp. 22-26
橋本勝雄	1989	東日本の細石器文化—東北・北陸・中部高地・関東・東海地方の研究の動向—	考古学ジャーナル 306	pp. 12-21
水村孝行	1989	埼玉の細石刃文化に関する覚書	埼玉県立博物館紀要 15	pp. 3-28
吉留秀敏	1989	大分県津津町採集の細石器について—田良原B遺跡・奥畑遺跡	九州旧石器 創刊号	pp. 115-121
岡村道雄	1988	日本旧石器時代史 7 細石刃文化の編年と地域性	季刊考古学 22	
砂田佳弘	1988	4 相模野の細石器—その発生と展開に向けて—	神奈川考古 24	pp. 31-64
西井幸雄	1988	関東地方細石器文化小考	転機 2	pp. 1-35
宮田栄二	1988	九州の細石器文化	鹿児島考古 22	pp. 58-70
石井浩幸	1987	細石器文化の技術基盤と展開	山田史学 6	pp. 14-38
出居 博	1987	4 日本列島への細石刃文化伝播に関するノート	唐沢考古 7	pp. 46-51
小畑弘己	1987	西南日本の楔形石核とその系譜について	東アジアの考古と歴史 中	pp. 1-29
堤 隆	1987	相模野台地の細石刃石核	大和市史研究 13	pp. 1-43
西村尋文	1987	備前瀬戸の細石刃文化	第4回中・四国旧石器文化談話会発表要旨	
比田井民子	1987	関東 細石器遺跡 再考	東京都埋蔵文化財センター研究論集V	pp. 181-194
松浦五輪美	1987	中・四国地方の細石刃文化	第4回中・四国旧石器文化談話会発表要旨	
吉田英敏	1987	3 縄文草創期文化（S期）、細石器文化（M期）、ナイフ形石器文化（K期）	寺田・日野 I	pp. 550
綿貫俊一・堤 隆	1987	荒屋遺跡の細石刃文化資料	長野県考古学会誌	pp. 1-19
阿部朝衛・高橋春栄	1986	新潟県関川村荒川台遺跡の細石刃核	考古学雑誌 71-4	pp. 102-109
石井浩幸	1986	越中山遺跡群における細石器文化の探求—湧別技法による細石刃生産技術をめぐる—	庄内考古学 20	pp. 33-49
小林達雄	1986	日本列島旧石器時代文化の3時期について	国立歴史民俗博物館研究報告 11	pp. 1-42
堤 隆	1986	矢出川遺跡における船野系細石刃文化資料について	旧石器考古学 32	pp. 119-124
牛ノ浜 修	1985	九州における細石刃研究—分類と編年研究のあゆみ—	考古学ジャーナル 243	
梶原 洋	1985	シベリアにおける細石刃研究の現況	考古学ジャーナル 243	pp. 15-18
加藤晋平・松本美恵子	1985	日本細石刃文化の源流	史艸	pp. 39-82
鎌木義昌・小林博昭	1985	近畿・中国・四国地域の細石刃研究	考古学ジャーナル 243	
佐川正敏	1985	中国の細石刃研究の現状と課題	考古学ジャーナル 243	
鈴木忠司	1985	再論日本細石刃文化の地理的背景—生業論への視点	論集日本原史	
橋 昌信	1985	九州における細石器文化の共伴遺物	肥後考古 5 特集 熊本の旧石器文化	pp. 167-180
鶴丸俊明	1985	「広郷型細石刃核」論—その形質と意味	論集 日本原史	pp. 113-138
森嶋 稔	1985	中部高地における二つの細石刃文化	考古学ジャーナル 243	
森嶋 稔	1985	中部高地の楔形細石刃核	信濃 37-11	pp. 158-168
安藤政雄	1984	2 日本の細石器文化	駿台史学 60	pp. 133-159
織笠 昭	1984	2 細石器文化組成論	駿台史学 60	pp. 71-93
加藤晋平	1984	2 日本細石器文化の出現	駿台史学 60	pp. 38-56
賈 蘭坡	1984	中国細石器的特性和他的伝統、起源と分布	賈蘭坡旧石器時代考古論文選	pp. 194-201
鈴木次郎	1984	細石器（本州地方）—関東・中部南部を中心に—	季刊考古学 4	
橋 昌信	1984	2 日本細石器文化の地域性	駿台史学 60	pp. 57-70
辻本崇夫	1984	2 細石器文化の遺構	駿台史学 60	pp. 94-117
堤 隆	1984	上草柳地区出土の細石刃について	『一般国道246号（大和・厚木バイパス）地域内遺跡発掘調査報告Ⅱ』大和市文化財調査報告書 15	
橋本勝雄	1984	3 細石刃技法	考古学ジャーナル 229	pp. 26-29
米村 衛	1984	2 日本細石器文化の終末	駿台史学 60	pp. 118-132

小畑弘己	1983	九州の細石刃文化	物質文化 41	pp. 1-12
織笠 昭	1983	細石刃の形態学的一考察	人間・遺跡・遺物—わが考古学論集 1—	pp. 77-104
木崎康弘	1983	東日本細石核技術展開についての一理解	旧石器考古学 26	pp. 75-102
木村英明	1983	細石器 (北海道)	季刊考古学 4	pp. 70-72
鈴木忠司	1983	日本細石器文化の地理的背景	角田文衛博士古稀記念論叢	
鈴木忠司	1983	日本細石器文化の地理的背景—先土器時代遺跡論の試み—	考古学叢論	
橘 昌信	1983	細石器 (九州地方)	季刊考古学 4	pp. 64-66
堤 隆	1983	矢出川遺跡採集の細石刃文化資料について	旧石器考古学 26	pp. 135-145
戸沢充則	1983	日本における細石器文化研究の発祥地 矢出川遺跡	信濃考古 79	pp. 3-6
西村尋文	1983	中部瀬戸内地方における細石刃生産技術の検討	旧石器考古学 26	pp. 75-102
橋本勝雄	1983	長崎県福井洞穴の細石刃生産技術について—第2・3層を中心として—	考古学論叢 I	pp. 105-135
米村 衛	1983	9 北海道における先史時代終末の様相	駿台史学 58	pp. 25-45
安蒜政雄	1982	9 中国の石器—中科院・中国社会科学院寄贈の複製標本について—	駿台史学 55	
藤本 強	1982	3 常呂川流域の細石刃	北海道考古学 18	pp. 1-22
木崎康弘	1981	12 九州地方の細石核	熊本史学	pp. 62-77
高尾好之	1981	6 駿河小塚出土の舟底形細石核	静岡県考古学研究 10	pp. 9-15
西井龍儀	1981	6 細谷No. 3遺跡の石器群について	大鏡 7	pp. 6-31
上野修一	1980	北海道の細石器文化と角二山との関係	越中山かわら版 4	pp. 25-26
川崎純徳	1980	茨城県における細石刃核について	婆良岐考古 1	pp. 5-10
茂山 護	1980	哇原型細石核	宮崎考古 6	p. 18
安蒜政雄	1979	9 日本の細石核	駿台史学 47	pp. 152-183
小田静夫	1979	9 関東地方の細石器文化	駿台史学 47	pp. 66-80
小野 昭	1979	9 瀬戸内沿岸地方の細石器文化	駿台史学 47	pp. 120-132
織笠 昭	1979	9 中部地方北部の細石器文化	駿台史学 47	pp. 81-98
杉原荘介	1979	9 特集にあたって (特集 日本細石器文化の研究)	駿台史学 47	pp. 1-2
鈴木次郎・矢島國雄	1979	9 神奈川県綾瀬市報恩寺遺跡の細石刃石器群	神奈川考古 6	
鈴木忠司	1979	9 中部地方南部の細石器文化	駿台史学 47	pp. 99-119
橘 昌信	1979	9 九州地方の細石器文化	駿台史学 47	pp. 133-151
鶴丸俊明	1979	9 北海道地方の細石刃文化	駿台史学 47	pp. 23-50
戸沢充則	1979	9 日本における細石器の研究	駿台史学 47	pp. 3-22
矢島國雄	1979	9 東北地方の細石器文化	駿台史学 47	pp. 51-65
加藤晋平	1976	北アジアの旧石器文化におけるクサビ形石核について	歴史・人類 4	
橘 昌信	1975	宮崎県船野遺跡における細石器文化	考古学論叢 3	
安蒜政雄	1973	関東地方における切出形石器を伴う石器文化の様相	駿台史学 32	
鈴木忠司	1973	8 野岳遺跡の細石核と西南日本における細石刃文化	古代文化 23-8	pp. 175-192
小田静夫	1971	10 台形石器について	物質文化 18	pp. 1-13
杉原荘介・戸沢充足	1971	佐賀県原遺跡における細石器文化の様相	考古学集刊 4-4	pp. 1-36
中森成行	1971	6 先土器文化終末から縄文文化への移行について—細石刃文化を中心として—	信濃 23-6	pp. 63-67
小林達雄	1970	日本列島における細石刃 Industry	物質文化 16	pp. 1-10
大塚和義	1968	4 本州地方における湧別技法に関する一考察	信濃 20-4	pp. 1-10
吉崎昌一	1967		『タチカルシュナイ遺跡』	
麻生 優	1966	細石器文化	『日本の考古学 I 先土器時代』	pp. 161-172
加藤晋平	1965	北海道の石刃	歴史教育 13-3	pp. 15-21
小林達雄	1965	昭和39年度における日本旧石器文化研究の動向	歴史教育 13-3	pp. 1-
杉原荘介・小野真一	1965	静岡県休場遺跡における細石器文化	考古学集刊 3-2	pp. 1-33
芹沢長介・鎌木義昌	1963	北九州における細石器文化の編年	日本考古学協会研究発表要旨 38年度大会	
白滝団体研究会	1963		『白滝遺跡の研究』	
鎌木義昌	1961	3 西日本の細石刃文化	歴史教育 9-3	pp. 34-38
鎌木義昌	1961	12 白滝遺跡と北海道の無土器文化	民族学研究 26-1	pp. 13-23
芹沢長介	1961	日本における細石器文化	歴史教育 9-3	pp. 10-16
芹沢長介	1960	細石器問題の進展(四)	貝塚 96	

相模野細石器編年の到達点(砂田佳弘)

鎌木義昌	1959	細石器問題の進展(三)	貝塚 88	
河合善代治・吉田英敏・紅村弘	1959	3 岐阜県海老山遺跡における無土器文化の石器について	考古学雑誌 44-4	pp. 1-6
杉原荘介・吉田格・芹沢長介	1959	東京都茂呂における関東ローム層中の石器文化	駿台史学 9	
芹沢長介	1959	9 新潟県荒屋遺跡における細石刃文化と荒屋型彫刻刀について(予報)	第四紀研究 1-5	pp. 174-181
芹沢長介	1958	細石器問題の進展(一)	貝塚 82	
芹沢長介	1958	細石器問題の進展(二)	貝塚 83	
鎌木義昌	1957	6 西日本の無土器文化 特に瀬戸内を中心として	私たちの考古学13	pp. 15-22
芹沢長介	1957	日本における細石器文化	考古学ノート 1	
芹沢長介	1956	小形石刃と小形石核	石器時代 3	
吉崎昌一	1956	6 日本における Blade industry	西郊文化 14	pp. 13-17
杉原荘介・大塚初重	1955	常総台地における関東ローム層中の石器文化 市川市丸山遺跡について	駿台史学 5	
芹沢長介	1954	関東及び中部地方に於ける無土器文化の終末と縄文文化の発生とに関する予察	駿台史学 4	pp. 65-106
渡辺 仁	1950	北海道の連続割製技術と石器工業との関係	人類学雑誌 61	pp. 109-116
渡辺 仁	1948	所謂石刃と連続割製法に就いて	人類学雑誌 60-2	pp. 33-38
八幡一郎	1937	日本に於ける中石器文化的様相に就いて	考古学雑誌 26-7	
八幡一郎	1936	日本新石器時代初期の石器	民族学研究 2-3	
八幡一郎	1936	信州諏訪湖底「曾根」の石器時代遺跡	ミネルヴァ 2	pp. 12-19
八幡一郎	1935	3 北海道の細石器	人類学雑誌 50-3	pp. 44-46
八幡一郎	1935	4 日本旧石器時代と細石器の問題	科学知識 15-4	

本文献一覧は、細石器石器群研究関連文献であり、報告書は含まれていない。  
文献中の横実線は、1980年以降は1年単位、それ以前は10年単位としている。

\* 2000年11月5日は、旧石器研究者のみならず、考古学の縁に関与してきた多くの輩に失望と憤怒、そしてある種の合点を察知させた。俯くその姿に何ら感情は読みとれないし、ビデオで証拠とされた2000年度二遺跡以外は真実だとするその声には、もはや聞く耳をもつことは不可能である。その後の、東北旧石器文化を語る会の石器検討会や発掘された日本列島2000の展示を観察するにつけ、その石材・器種・鉄分附着・加熱処理などの奇妙な一致は、モノ言わぬ石器が雄弁にその真実を語ろうとしているのである。

しかし、四半世紀にもわたって捏造を野放した点には、石器研究者として理由の如何を問わずに矜持を正して真摯にお詫びしなければならない。捏造癖は、考古学における氏の登場から始まった。それですべての疑問が氷解する。再調査の要不要を論ずるならば、考古学としての説明責任が、発掘調査なのだろうが、調査に投ずる莫大な税金はこれまた国民への説明が必要である。昨年未まで投入した億単位の費用は、町興し・村興しに一時の夢を与えたが、その実態は空虚な絵空事でしかなかった。司直の手を拝借してでもの徹底的な真実の追求が必要ではなかろうか。

今世紀の石器研究は始まったばかりだか、一朝一夕には到達点を見極めることは困難である。

ただし、今時スキャンダルがもたらした一点の光明と言え、従来アットホームな土壌にあった石器研究に、一つでも多くの徹底的な議論が芽生える可能性を生じさせたことである。次の世紀への大いなる糧となるべく、今回のシンポジウムがひとつの手がかりとなることを望むのである。

# 相模野編年の問題点

白石 浩之

(愛知学院大学)

## はじめに

相模野編年は1976年に矢島國雄・鈴木次郎両氏によって発表されて以来、今日で実に24年を経た。そして矢島・鈴木両氏の論文発表から12年後に諏訪間順氏が相模野編年の再構築を行い、12年を経ている(註1)。12年を論文の画期とするならば、新たなる相模野新編年が構築される時期であるが、その気配は今のところ窺うすべもない。したがって両相模野編年が脈々と生き続けている点を大いに評価すべきであろう。しかし長期間にわたって新たなる編年研究が認められない現状は、率直に言って憂うべきである。次代を担う若い研究者が既存の編年観以外に具体的な方策を見いだせないのか、それとも時期区分そのものに重きをおかず、別の研究領域に照準をあわせているのか。いづれにしても相模野の石器を分析するにあたっては、いやおうなく各自の編年観が求められることから、既成の相模野編年にとらわれることなく、様々な観点からの新相模野編年の誕生が期待される所以である(註2)。

上述の点から、武蔵野から相模野そして新たに東海地域を旧石器研究のフィールドとしていこうとする者からみた相模野編年像を腹藏なく述べておこう。

## 1. 相模野編年について

相模野台地では火山灰が厚く堆積し、明瞭な鍵層が多く認められるためにテフクロロジーの研究が活発に行われている。とりわけ更新世の末期はおよそ3万数千年～1万数千年前の2万年間で、下層から相模野下位スコリア(S2S)、B5層、B4層、B3層、始良Tn火山灰(AT)、相模野上位スコリア(S1S)、B2層、B1層、B0層、浅間火山灰層(UG)などの鍵層が肉眼または鉱物分析で確認され、おおよその年代も提供されている(町田1971・町田・鈴木1971、上本・上杉・由井・米澤・中村1994)。

相模野台地で検出される旧石器はいわゆる後期旧石器時代に相当すると考えられている(註3)。採集ないし出土した石器群をもとに鈴木次郎、矢島國雄両氏は相模野編年を構築した(矢島・鈴木1976)。この編年は岡本勇、松沢亜生両氏等の相模野台地での端緒となる分布調査(岡本・松沢1965)から11年目、引き続き相模考古学研究会の本格的な分布調査から9年目にあたる(相模考古学研究会1971)。また明治大学と月見野遺跡群調査団の合同で行われた月見野遺跡群の発掘調査(明治大学考古学研究室外1969)から8年目にあたる。これらの諸成果を基にテフクロロジーと整合し、出土した石器群を石器組成、石器製作技術、遺跡分布のあり方から5期に区分(註4)したのである(矢島・鈴木前掲)。このようにいち早く発表された相模野編年は層位的出土例に裏打ちされた編年モデルとして、他地域とりわけ火山灰が薄い層位的出土例が顕著でない地域の石器編年を考えるうえで大いに役だったのである。そして鈴木氏は1994年に、1ナイフ形石器出現以前の石器文化(相模野第I期)、2ナイフ形石器文化前半(相模野第II期)、3ナイフ形石器文化後半(相模野第III～IV期)、4槍先形尖頭器文化(相模野第IV期前半)、5細石刃文化(相模野第V期後半)、6大形槍先形尖頭器文化(神子柴・長者久保系文化—縄文時代草創期初頭)と全国編年に向けて体系化した(鈴木1994)。

一方諏訪間順氏は立川ローム層が非常に厚く堆積していることから良好な石器群の層位的出土例を重視し、「移りゆく石器文化の一つの過程(段階)をそれぞれ表すものとして、積極的に評価する必要があるのではないだろうか」とし、出土石器を12段階に区分したのである(諏訪間1988)。諏訪間氏の段階論は、特徴的な石器文化として括れる最小の単位を一段階として捉えたものである。各段階では段階設定の理由を明白にし、新たに石材を区分の大きな一つとして考えている。この論文は鈴木、矢島論文とは次項で述べるように、対象的な編年区分であったために、注目されることになった。

## 2. 大別と細別

鈴木・矢島両氏の五期区分と諏訪間氏の12段階は前者が大別、後者が細別による編年区分であることは明らかであり、それ故両者の編年はかみあうことはない。五期区分はそれぞれ特徴的な石器群を最大の単位として括ったものを画期として捉えたものである。その根底には主として技術構造つまり剥片剥離技術—剥片素材—石器形態を通した観点からの区分であった。それ故編年の道筋を捉える上では非常に有効であった。しかし問題が全くないわけではなかった。その一つがI期の設定である。I期は既に報告者が説明しているように、立川ロームと武蔵野ロームの境界がB3層中の波状帯とし、L4層より下層を武蔵野ローム層とし、その層に包含されている石器群をI期と捉えたのである。つまりこの段階ではI期は武蔵野ローム層から出土した石器を対象としていたのである(註5)。その後地質学の再検討もあって(町田・鈴木1971)、武蔵野台地や下総台地でのX層やIX層出土の石器群を基に立川ローム層最下底から出土した石器として第I期と変更したのである。しかし相模野台地ではB4層以下で明瞭な石器群が未だ検出されていなかったため、武蔵野台地の中山谷遺跡X層(J.E.キダー・小田編1975)や西之台遺跡B地点X層(小田・キーリー1973)出土の珪岩製石器に注目して当該期をI期としたのである。このように相模野で不確実であった石器群を他地域の石器群を借定してI期として据える方法は当時としてみれば、やむを得ないことであったかもしれないが、相模野の地域史的な解明という視点からみると、良策であったとは言えまい(註6)。相模野I期の画期が不明瞭であったことは、結果としてI期とII期の区分があいまいになったと見られる。そのためにII期の前半と後半の二区分に問題が生じたと筆者は観ている。というのはII期をB4層～L5層(前半期)とB2下底部～B3層上部(後半期)に区分しているが、前半と後半では期内でのまとめは難しく、むしろ画期として区分されねばならない。つまり局部磨製石斧と台形様石器やナイフ状石器の一群と切(折)断手法を携えて大形の縦長剥片の素材を変形して製作された二側縁加工のナイフ形石器の一群とは同じ枠組みの中で論じられないと考えられるからである。筆者は該期の後半を後期旧石器時代の始まりと考えている点で前半とは画期をなすものと捉えている。

鈴木・矢島両氏によるV期設定は層位的にL1H層からL1S層にかけての石器群をまとめて画期としたものである。先に見てきたように、鈴木氏はV期前半を槍先形尖頭器、V期後半を細石刃文化とし、縄文時代草創期の神子柴・長者久保系石器群をV期からはずしている。しかし該期は細石器や石槍の石器群が入り交じっている。それ故、前半と後半に特徴的な石器群として分離出来ないのではないか。そのような点からV期の特徴とは別にして神子柴・長者久保系石器群を分離すべきではないと考える。このような点はIV期後半にも同様に問題が存在する。それはナイフ形石器と槍先形尖頭器(石槍)の関係である。該期はナイフ形石器が凌駕することをもってナイフ形石器文化後半としている。しかし石槍もかなり卓越してくる。したがって単一の石器文化を代表させた石器文化の捉え方は問題があろう。複合した石器群について技術構造を柱と



した編年区分は説明が難しい(註7)。

かくて矢島・鈴木両氏の画期は当初から5期設定をしたために、石器群の大きな変化も期内で前半と後半といった中で細分せざるを得なくなっている。そのうえ石器の技術構造によって区分した画期と技術構造によらない自然層をもとに区分した画期が入り交じり、結果として不統一な点が見受けられるのである。

この点諏訪間氏の12段階説は、石器の層位的出土例を基にしている。石器群の特徴と自然層を整合させ、混乱がない。しかし細かいところでは問題がある。例えば段階ⅠはL6層に置いているが、石器として不明瞭なものである。そして段階ⅡはB5層下底からB4層上部までとしているが、B5層の石器群とB4層の石器群は大きく異なっている。それ故諏訪間氏の編年も層位的に上部へ向かうほど細分化が進み、下部ほど大別的な区分となっており(註8)、今後検討すべき点を残している。

諏訪間氏は筆者が月見野期の初頭に月見野Ⅱ遺跡を位置づけている点を批判した(諏訪間 2000)。諏訪間氏の区分からすれば、段階Ⅵと考えてのことであろう。しかしこの点は月見野遺跡群の報告が刊行されていないのでそれ以上の分析ができない。それ故筆者は武蔵野台地における野川遺跡のⅣ2層とⅣ1層の層位的出土例を重視したのである。周知のようにⅣ2層は凝灰岩を主石材とした砂川期の石器群である。それに対してⅣ1層は黒曜石を主石材としたもので、ナイフ形石器は二側縁加工や端部加工が存在するが、前者は基部が先鋭でなくなり、後者は量的に顕著でなくなっている。また石槍とは同一母岩があり、片面加工や両面加工で、槌状剥離尖頭器は顕著でなくなっている(J. E. Kidder・小山・小田・白石 1970、小林・小田・羽鳥・鈴木 1971)。この野川Ⅳ1層と月見野Ⅱ遺跡の石器群は黒曜石の用い方や、ナイフ形石器の形態、石槍の多様化等からほぼ同時期とみなせられ、最終的に筆者は月見野期と判断したのである。最も諏訪間氏に言わせれば、砂川刃期技法を持っていれば、Ⅵ期の所産とするが、両設の打面から剥離する剥片剥離技術は月見野期にも残る蓋然性が高く、その点からのアプローチだけでは説得力がない(註9)。

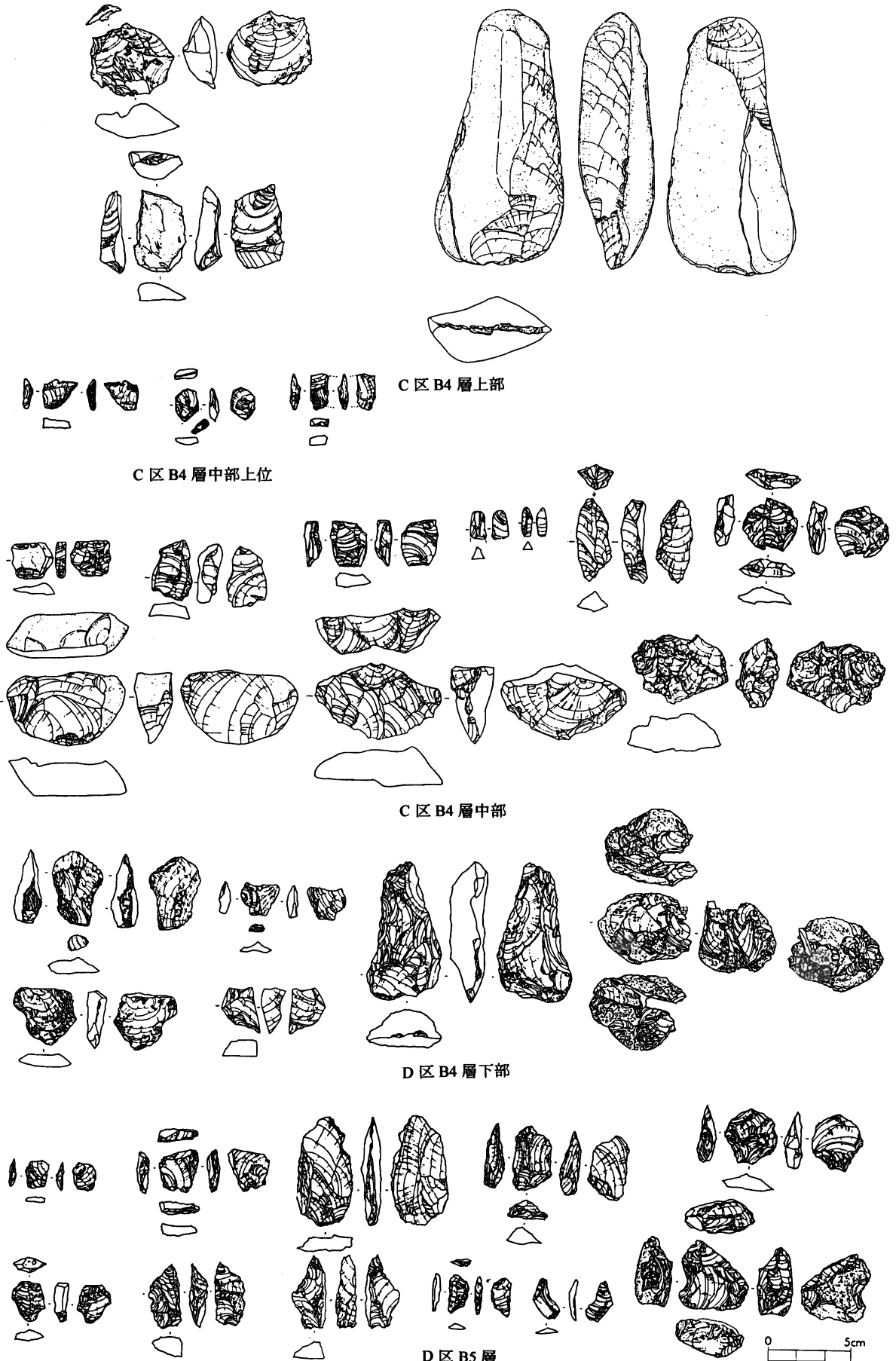
また諏訪間氏は段階Ⅸから段階Ⅹにかけては細石器が主で石槍は『残存器種』として、共存という立場に立たない。残存器種とはなんであろう。石槍はL1H層中部で卓越する。そしてB0層になると量的には安定しないが、既存の中・小形の石槍の中に大形の石槍を積極的に取り入れる。かくて素材に見合う石槍の大きさに対応していくのである。ちょうど石槍と細石器が二極化していくのもその頃かと考えられる。

### 3. 相模野編年における諸問題

#### (1) 相模野最古級の石器群

吉岡遺跡群ではB4層の石器群が3文化層に分かれて検出された。とりわけC区ではB4層中部、B4層上部で石器群が出土した。そしてD区ではさらにその下層のB4層下部、B5層から石器群が出土した(第1図)。このように吉岡遺跡群では下層から石器群が出土したことにより、武蔵野台地の石器群と肩を並べることになった。のみならずB5～B4層は出土層位が明瞭であったことから、武蔵野台地から出土した最古級の石器群を見直すことにもなったのである(白石・砂田 1996)。

B5層から出土した石器群は台形様石器、ナイフ状石器、鋸歯縁石器(削器)、彫器等からなる。石器の素材は寸づまりの剥片を素材にしており、しかも素材の基部と端部の軸線がずれたものが目立っている点である。また後期旧石器時代のような削器とは異なり、鋸歯縁の加工をした削器が出土している。台形様石器とした中には、一側縁に加工が施された例もあるが、その多くは部分的な加工が刃部と側縁とのなす角の部分に施されている。したがってB4層下部の黒曜石製の台形様石器は錯向剥離が特徴的に施されるが、そのよ



第1図 吉岡遺跡群C・D区B5層～B4層上部の出土石器

うな加工はB 5層の台形様石器には認められない。また基部加工のナイフ状石器は寸ぶまりの縦長ないし横長の剥片を素材としたもので、基部ないし先端部に加工が施されている。

これらの石器はチャートが主体を占めるのも石器群としての特徴の一つとなっている。

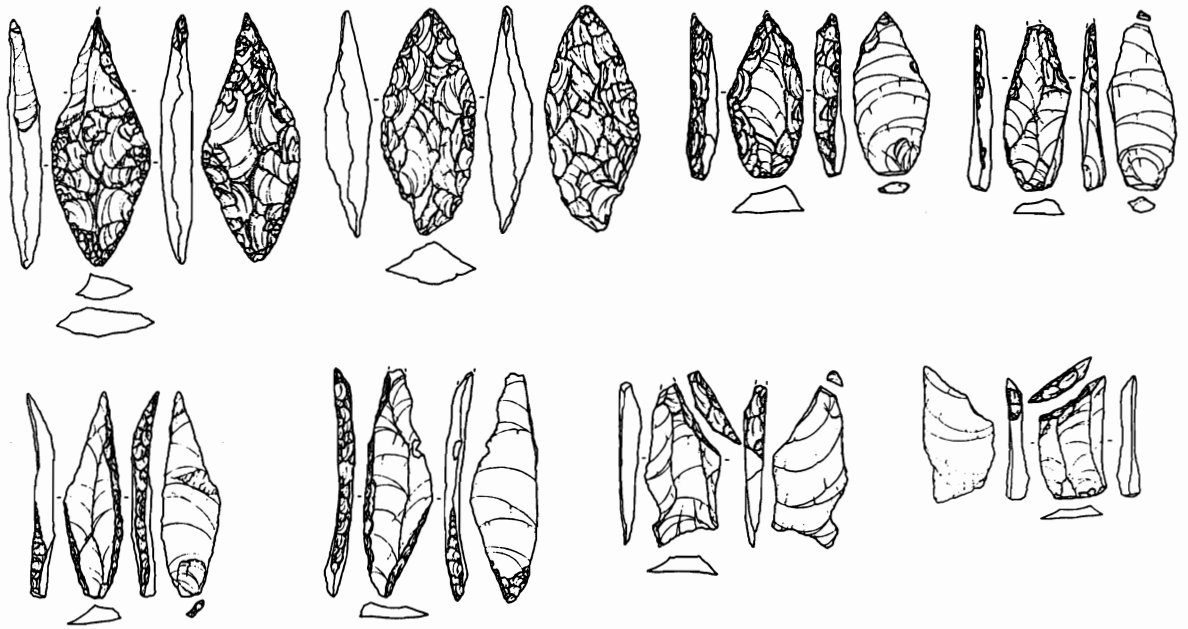
B 5層の石器群については立川ローム層最下底に位置することから後期旧石器時代初頭期とする考えがあるが、筆者はこの点については異議を唱えた(白石 1996)。というのは今までこの石器群は武蔵野台地でもX層ないしX I層の石器群として取り上げられ、ナイフ形石器との関連の中で出土量も多くない状況から、よく分からない石器として扱われてきた。武蔵台遺跡でXb層や鈴木遺跡御幸第1地点X I層(1982)から出土しているにもかかわらず武蔵野台地における石器群の中で最古級の石器群としてその重要性に対する評価が活発でなかったように思われる(註10)。

特に関東地方から中部地方にかけてはチャートを主石材とした時期であり、その最も古期例は長野県石子原遺跡であり(岡村 1972)、東京都西之台遺跡B地点X層(小田・C.T. キーリー1980)を経て吉岡遺跡群B 5層の石器群が相当するものと考えている(白石前掲)。

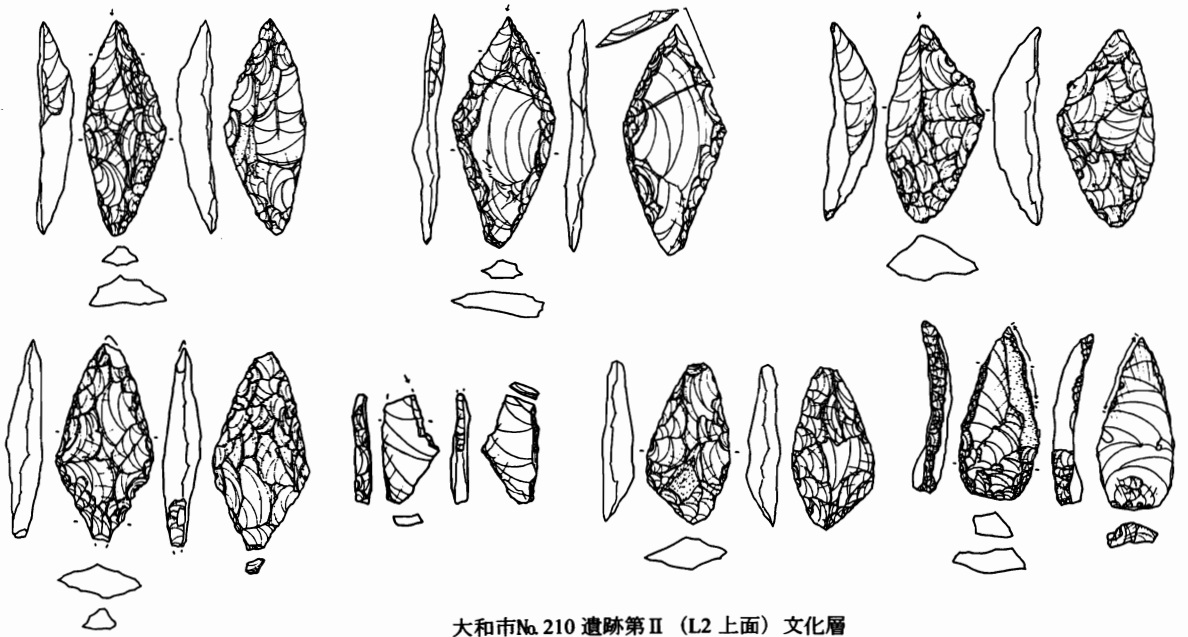
筆者はこれらの最古級の石器群を中期旧石器時代の最末期にあて、B 4層の台形様石器と石斧をもつ一群を中期旧石器時代と後期旧石器時代の移行期とした。そしてB 3層の切断手法とそれによる二側縁加工のナイフ形石器が登場する段階を後期旧石器時代の初頭期として捉えたのである(白石前掲)。

## (2) L 2層の石器群

相模野台地における石器群は層位的出土例に恵まれている。しかし各層位から万弁なく出土するかと言えばそうではない。B 2層下部～B 1層上部にかけては顕著に出土している。この点については武蔵野台地でも同様な傾向があり、遺跡数の増加は人口増加や集団の繰り返れる回帰的な様相とも捉えられた(白石 1983、安蒜 1985、織笠 1991、野口 1995)。L 2層については今まで文化層が認められないとする考えに対して、栗原伸好はL 2層に文化層が存在する点を説く(栗原 1999)。確かにL 2層については用田バイパス関連遺跡用田鳥居前遺跡(栗原 2000)、長堀南遺跡(麻生 1987)、大和市No210遺跡(小池 1999)等で出土しているが、B 1層下部と比較すると遺跡数は少ない。このことから、L 2層に文化層は認めず、無人状態にあったと解し易い。しかし下層すなわちB 2 U層の石器群からの系譜を考えると、L 2層に文化層が存在する方が無理がない解釈であろう。下九沢山谷遺跡(中村 1979)や渋谷高座団地内遺跡(小池 1996)ではB 2 U層から切出形石器と共に左右非対称形の素材面を大きく残した片面加工の石槍が出土している。この石槍は形態的に槌状剥離尖頭器の外形に類似している(白石 1999)。しかし槌状剥離尖頭器は肩をもつ部位の上方から槌状剥離を施して削片を作り出しているのに対して、B 2 U層の左右非対称形の石槍は槌状剥離を用いることなく、肩をもつ部位が最終剥離面ではなく、素材面で形成されているのである(註11)。しかしB 1層下部には槌状剥離尖頭器と共に、類槌状剥離尖頭器とも称すべき素材面を残した例が大和市下草柳遺跡第2地点(堤 1984)で出土していることから、B 2 U層の影響と考えられる。大和市No210遺跡では安山岩が用い、槌状剥離尖頭器と木葉形尖頭器の形態が共に器体の下半部に両肩ないし一方のみ肩を有している。このことから槌状剥離尖頭器の原形であることは明らかである(註12)。注意される点はナイフ形石器が僅少で1点出土している例は砂川期のナイフ形石器とは言い難い。もしそうであるならば、B 2 U層～L 2層にかけてナイフ形石器とは別に、一方に第一次剥離面ないし槌状剥離面を有す左右非対称形の片面、両面、周辺加工の石槍や木葉形尖頭器の一群が存在していた可能性がある。しかしそこでは良好な両設からの剥離面をもつ縦長剥片も作られていたことから砂川期のナイフ形石器を受け入れる技術基盤は有していたと見るべきで



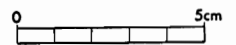
中村遺跡C地区第V (B1 下部) 文化層



大和市No. 210 遺跡第II (L2 上面) 文化層



県営高座渋谷団地内遺跡第V (B2U) 文化層



第2図 相模野台地における角錐状石器・木葉形尖頭器・槌状剥離尖頭器の関連

あろう。しかし砂川期では良質の黒曜石を用いて槌状剥離尖頭器が製作されるようになり、他方二側縁加工や端部加工のナイフ形石器や木葉形尖頭器は在地の石材といった分極化を図っていくのであろう(第2図)。

### (3) 終末期の石器群

B0層～L1S層にかけては細石器と石槍が交互に認められる。細石器はホロカ系の細石核から削片系の細石核へと大きく転換する時期である。また石槍は大形の石槍が搬入される場合もあるが、基本的には前代から引き続いている。

問題は削片系の細石核と荒屋形彫器を組み合わせた石器群が相模野台地では検出されていない。筆者は荒屋型彫器と削片系の細石核の石器群は橋本勝雄が利根川以南に及んでいないとする指摘を重視したい(橋本1986・1998)。というのはそれらの石器群が分布する地域にはホロカ系の細石核は逆に希少である。また相模野台地ではホロカ系の細石核は比較的多く、それらの細石器群を下地として、在地石材を主体とした削片系の細石核と石槍が組み合わさっていると見るべきであろう(白石1998)。このことは前段階のホロカ系の細石核にも僅かながらの石槍が伴出しており、その継続性を重視したいのである。

## 4. 研究の方向性

かくて相模野編年の大別編年と細別編年もその後の良好な石器群の発見によって、矛盾が生じていることは事実である。大別編年はその相模野台地で検出された石器群の特徴を大きく捉え、その先後関係の道筋を与える役割を担うものであった。そして資料の増加と共に細別編年が提示されたのである。大別から細別へと石器群の追究は必然的に流れていかざるを得ない。

両相模野編年の最も大きな問題点は、数字による区分(第Ⅰ～Ⅴ期、段階Ⅰ～ⅩⅡ)であろう(註13)。というのは上述したように、新発見の資料が画期に入り込んだ入りするとその資料の取り扱い、ひいては期内に矛盾を承知で説明せざるを得なくなる、加えて第Ⅰ期ないし段階Ⅰは今後ますます下層から石器が発見される蓋然性が高いことから期幅が際限なく広がるであろう。

このことから筆者は遺跡名を冠した画期を設けることにしている。岩宿Ⅰ期、後田期、寺尾期、岩宿Ⅱ期、砂川期、月見野期といったような区分法である(白石1996)。複合し石器群や新発見の石器群が検出された場合でも画期間に挿入することは容易であろう。

## おわりに

以上相模野編年について捉えてきたが相模野という地域史を率先して解明に努力されてきた鈴木次郎、矢島國雄両氏、そして諏訪間順氏に改めて敬意を表したい。本稿は相模野旧石器に対する望郷の念に駆られ、思いつくまま(いや大いに遠慮して!)に入力してしまった。非礼があれば、お許し願いたい。

なお、本稿は1999年度かながわ考古学財団旧石器プロジェクトの研究課題であった。プロジェクトチームのメンバーとの討議の中で本稿は醸成されたことを明記し、メンバーの方々に感謝申し上げる。

## 註

註1 筆者は矢島國雄・鈴木次郎1976「相模野台地における先土器時代研究の現状」『神奈川考古』1と諏訪間順1988「相模野台地における石器群の変遷について」『神奈川考古』24を相模野編年の基本文献として重視したい。論者の真の時代区分論を知るには初出論文に最もその視点が投影されていると考えるからである。その後に上書きされた文献は初出論文を補筆または訂正されたものである。したがってその点を同

列に扱おうと相模野編年の動向を正しく判断で出来ないと考える。

- 註2 様々な報告書の中で、結論のみ「相模野Ⅲ期、段階Ⅴに相当するであろう。」との記述が多々見られる。このような短絡的な結論ではなく、画期として区分した理由や背景を考察しながら利用すべきであって、何がどのように相模野編年と共通性があり、異質性があるのかを検討することの方が先決であろう。また編年区分は何も石器形態やその組成対比だけではない。遺構や石材、さらにはナイフ形石器、石槍、細石器毎の編年区分も有意なことであろう。
- 註3 筆者が該期を「いわゆる後期旧石器時代」としたのは、以下次の理由による。後期旧石器時代の時期区分は立川ローム層と武蔵野ローム層の地質学的視点、大凡3万年前を境として、後期旧石器時代といわゆる前期旧石器時代(本来の中期旧石器時代)との年代的な視点から区分された。しかし立川ローム層と武蔵野ローム層の境界層位は地質学者によってより下層へと考え方が変わってきた。現状では相模野の立川ローム層の最下底はS2S層の下位と推定されている。相模野の最古級の石器群は出土層位2枚あるS2S層の上位の下部にあり、(上本・上杉・由井・米澤・中村1994、上杉他1996)は概ね地質学者が認める武蔵野ローム層の上部の深さに近づいて出土し、その年代は3万年を遙かに越している。また考古学的に該期の石器群を上部から出土した石器群と比較すると、後期旧石器時代よりも中期旧石器時代の石器群に親近性があると考えている。したがって筆者は中期旧石器時代の終末と後期旧石器時代の始まりについては抜本的に見直す必要性があると考えている。この点についての具体的な論稿は拙稿1996で述べてある。
- 註4 1976年鈴木・矢島両氏による相模野編年の4年前に『小園前畑遺跡発掘調査報告書』の中で、5期区分の骨格が既に提示されている。
- 註5 1972年の『小園前畑遺跡』の報告書では註書きで「・・資料が少なく性格が不明な部分を第Ⅰ期として区別したのであって、第Ⅱ期との境界は今後の検討によって決定されるものである。」としている。時期区分の根幹にゆらぎがあった。
- 註6 地域史的研究はその地域の独自の歴史を追究することにある。武蔵野台地の最古級の石器群を借定した捉え方は相模野編年というより相模野・武蔵野編年になろう。矢島・鈴木両氏は1976年第Ⅰ期をB4層より下位の石器群を相模野第Ⅰ期に置いた(矢島・鈴木1976)。その段階ではⅡ期の初源をL5層まで遡る可能性が指摘されている。
- 吉岡遺跡群ではAT降灰以前の良好な石器群が検出され、C・D区ではB5層→B4層下部→B4層中部→B4層上部→B3層下部上面→L3層が層位的に検出された(白石1996)。このことにより、筆者はⅠ期の上限がさらにB5層をさかのぼる可能性があると考えており、Ⅰ期幅は長くなるのが充分予測され、画期としての見直しがせまられよう。
- 註7 V期の石器群も基本的には(4)同様問題がある。つまりⅣ期幅を規定しているためにⅣ期以降はすべてV期に集約せざるを得なくなるため、Ⅱ～Ⅳ期の区分と比べると極めて曖昧である。
- 註8 検出された遺跡数は上層ほど多く、下層ほど少ない。そのために下層では段階Ⅱに相当する吉岡遺跡群B4層において少なくとも3文化層が確認された。とりわけ中層は概ね下総台地で出土する石器群に共通しており、武蔵野台地では顕著に出土していない。相模野台地でまとまって出土したのは初めての事例であろう。
- 註9 砂川期と月見野期の間形態として新たな画期として設ける案も当然あるが、筆者はそのようには捉えない。移行する石器は前者と後者の特徴を当然含んでいる。
- 註10 例えばナイフ形石器と並行し、石器組成が不備なものも捉えた時期も学史の中で認めることが出来る(鈴木・矢島1976)。しかし1978年には両石器群に編年差があることを指摘する(鈴木・矢島1978)。
- 註11 石槍の出現については1999の拙稿がある。この中では鈴木・矢島両氏と論争があり、筆者の見解を述べている。
- 註12 大和市No.210遺跡は調査面積が限定されているので、詳細な点は不明であるが、当石器群には石核が認められないが、同一個体はNo.10・27で削片や剥片が認められる。とりわけNo.10は削片があつて関連する槌状剥離尖頭器が認められない例があることから、ここで製作された槌状剥離尖頭器の製品を搬出した

ものであろう。とりわけ、No.25 は周辺加工の石槍の未製品であり、比較的大きな剥片を素材としている。このように大和市No.210 遺跡の槌状剥離尖頭器は単独個体も少なからず存在するが、剥片を持ち込んで製作している例も見受けられる(小池 1999)。B 1 下部層出土の黒曜石製槌状剥離尖頭器の搬入の場合と L2 層上部の在地石材を利用した場合での違いかもしれない。

註 13 その頃、武蔵野台地では Keally、小田静夫両氏によって相次いで発掘調査が行なわれ、phase I～IV の 4 期に区分している(Keally 1972、小田・Keally 1973)。Phase I は X 層～V 層、phase II は V 層上部、IV 層、III 層で phase II a は IV 下層、II b 層は IV 中、IV 上層、phase III 層は細石器、phase IV は大形両面石槍をあてた。そして赤澤威・小田静夫・山中一郎 1980『日本の旧石器』で第 I 文化期を第 I a 亜文化期、第 I b 亜文化期、第 I c 亜文化期、第 II 文化期を第 II a 亜文化期、第 II b 亜文化期、第 III 文化期、第 IV 文化期に区分した。

筆者も荒井幹夫氏と共にナイフ形石器の時期を 3 期に大別したことがある(白石・荒井 1976)。その折には第 2 期の切出形石器や角錐状石器の石器群を中心として、後続する茂呂型ナイフ形石器を主体とした石器群前半と後半に分けてこれを 3 期、前段階の 1 期を前半と後半に区分したことがある。

なお、小林達雄氏は旧石器を後期旧石器時代以前を 1 期、ナイフ形石器および共伴する石槍、親縁な台形石器を 2 期、3 期を細石器の 3 時期に区分して列島を俯瞰している(小林 1986)。

### 引用文献

- 赤澤 威・小田静夫・山中一郎 1980 『日本の旧石器』立風書房
- 麻生順司 1987 「第IV文化層」『神奈川県大和市長堀南遺跡発掘調査報告書』大和市文化財調査報告書 28
- 安蒜正雄 1985 「先土器時代における遺跡の群集的な成り立ちと遺跡群の構造」『論集・日本原史』吉川弘文館
- 伊藤恒彦 1987 「第4章先土器時代の調査 第V文化層(C地区)」『中村遺跡』
- 上杉陽・白石浩之・上本進二・砂田佳弘・米澤宏・由井将雄 1996 「神奈川県綾瀬市蟹吉岡遺跡群のテフラ層位」『第四紀露頭集-日本のテフラ』
- 上本進二・上杉陽・由井将雄・米澤宏・中村喜代重 1994 「南関東の立川ローム層と考古学土層」『神奈川県考古』30
- 岡村道雄 1973 「石子原遺跡の旧石器」『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(飯田市内その3)』
- 岡本勇・松沢亜生 1965 「相模野台地における関東ローム層中遺跡群の研究」『物質文化』6
- 小田静夫・C. T. Keally 1973 『武蔵野公園遺跡 I』野川遺跡調査会
- 小田静夫・C. T. キーリー 1980 「小金井市西之台遺跡 B 地点」『東京都埋蔵文化財調査報告書』7
- 小野正敏他 1972 『小園前畑遺跡発掘調査報告書』綾瀬市文化財調査報告第一集
- 織笠昭 1991 「先土器時代人の生活領域-集団移動と領域の形成」『日本村落史講座VI』
- 栗原伸好 1999 「相模野第III期と第IV期の間-相模野第III期・第IV期の石器群の連続性の存在に関する予察-」『神奈川県考古』35
- Keally, C. T. 1972 The earliest cultures in Japan. Monumenta Nipponica XXV II, 2
- 小池 聡 1996 「第IV章 旧石器時代の調査」『神奈川県大和市県営高座渋谷団地内遺跡』
- 小池 聡 1999 「第II文化層」『大和市No.210 遺跡』大和市文化財調査報告書 71
- 小林達雄・小田静夫・羽鳥謙三・鈴木正男 1971 「野川先土器時代遺跡の研究」『第四紀研究』10-4
- 小林達雄 1986 「日本列島旧石器時代文化の3時期について」『国立歴史民俗博物館研究報告』11
- 相模考古学研究会 1971 『先土器時代遺跡分布調査報告書 相模野篇』
- 白石浩之・荒井幹夫 1976 「茂呂系ナイフ形石器を主体とした石器群の変遷」『考古学研究』23-2
- 白石浩之 1983 「考古学と火山灰層序」『第四紀研究』23-4
- 白石浩之・加藤千恵子 1996 「吉岡遺跡群 旧石器時代 I」『かながわ考古学財団調査報告』7
- 白石浩之・砂田佳弘 1996 「付編 吉岡遺跡群」『綾瀬市史』9
- 白石浩之 1996 「中期旧石器時代終末から後期旧石器時代にかけての石器群に対する新視点」『神奈川県考古』32

- 白石浩之 1998 「細石器文化の諸問題—原料・技術・分布—」『九州の細石器文化—九州島における細石器文化の石器と技術—』第23回九州旧石器文化研究会
- 白石浩之 1999 「旧石器時代の研究の論争とその意義—石槍の出現を中心として—」『岩宿発掘50周年記念日本旧石器時代研究50年と今後の展望』
- J. E. キダー・小田静夫編 1975 『中山谷遺跡』国際基督教大学考古学研究センター1
- 鈴木次郎・矢島國雄 1978 「先土器時代の石器群とその編年」『日本考古学を学ぶ(1)』
- 鈴木次郎・矢島國雄 1988 「先土器時代の石器群とその編年」『新版 日本考古学を学ぶ(1)』
- 鈴木次郎 2000 「相模野台地におけるナイフ形石器文化の出現」『神奈川考古』36
- 鈴木次郎 1994 「南関東地方の様相」『群馬の岩宿時代の変遷と特色』予稿集 第2回岩宿フォーラム/シンポジウム
- 諏訪間順 1988 「相模野台地における石器群の変遷について」『神奈川考古』24
- 諏訪間順 2000 「「砂川」の時間的枠組みとその前後の変遷」『石器文化研究』9
- 明治大学考古学研究室・月見野遺跡群調査団 1969 『概報月見野遺跡群』
- 堤 隆 1984 「第5節 L1H下部～B. B1出土の石器」46号(大和・厚木バイパス)地域内遺跡発掘調査報告』Ⅱ 大和市文化財調査報告書15
- 戸田正勝 1982 「第Ⅳ文化層」『鈴木遺跡御幸第1地点』
- 中村喜代重 1979 「神奈川県相模原市下九沢山谷遺跡の石器群」『神奈川考古』7
- 野口 淳 1995 「武蔵野台地Ⅳ下・Ⅴ上層段階の遺跡群」『旧石器考古学』51
- 町田 洋 1971 「南関東のテフクロロジー(Ⅰ)」第四紀研究10-1
- 町田 洋・鈴木正男 1971 「火山灰の絶対年代と第四紀後期の編年—フィッシュトラック法による試み」『科学』41
- 橋本勝雄 1986 「東日本の細石器文化—東北・北陸・中部高地・関東・東海地方の研究動向—」『考古学ジャーナル』306
- 橋本勝雄 1998 「関東細石器考」『千葉県県立中央博物館研究報告』5
- 矢島國雄・鈴木次郎 1976 「相模野台地における先土器時代研究の現状」『神奈川考古』1



# 相模野旧石器編年の年代観 ( $^{14}\text{C}$ 年代測定法と暦年代)

御堂島 正  
(神奈川県教育庁)

## はじめに

考古学の研究対象となる考古資料がいつのものであるかを知ることは研究の前提として非常に重要である。考古学では型式論的方法や層位論的方法により、考古資料の新旧(相対編年)を明らかにしてきたが、考古資料自体に年代が書かれている場合等一部の例外を除いて、暦年代を求めることはできない。そのため、後期旧石器時代についても、炭素 14 ( $^{14}\text{C}$ ) の放射壊変を利用した  $^{14}\text{C}$ 年代測定法によって求められた年代値が暦年代の目安として用いられてきた。「目安」にとどまってきた背景は  $^{14}\text{C}$ 年代測定への信頼性が高くないと思われていたことにあるが、その原因は、試料選択の誤りや暦年代への変換の誤解によるものであった可能性が高いという(今村 1999)。

しかし、近年、加速器技術を用いた  $^{14}\text{C}$ 年代測定法(AMS法)、年輪年代法(光谷 1999)、湖沼堆積物(年縞)編年(福澤 1999)等の高精度年代測定法の著しい発展がみられる。とりわけ、後期旧石器時代の年代の決定に関連が深い  $^{14}\text{C}$ 年代測定法については、測定技術の著しい進歩と  $^{14}\text{C}$ 年代測定値から暦年代(註1)への変換(較正と呼ばれる。)のためのデータベースの確立が進められている。その結果、従来考えられていた年代は、概ね縄文時代後期以前についてはより古くなり、年代観の修正が必要となったこととともに、暦年代による議論が可能になろうとしている。

ここでは、 $^{14}\text{C}$ 年代測定法と較正暦年代について概観し、若干の展望を述べたい。なお、年代測定の専門家ではないため、理解が不十分であったり誤解がある可能性があるため、より詳しくは別掲の文献等を参照していただきたい。

## 1. 炭素 14 ( $^{14}\text{C}$ ) 年代測定法の概要

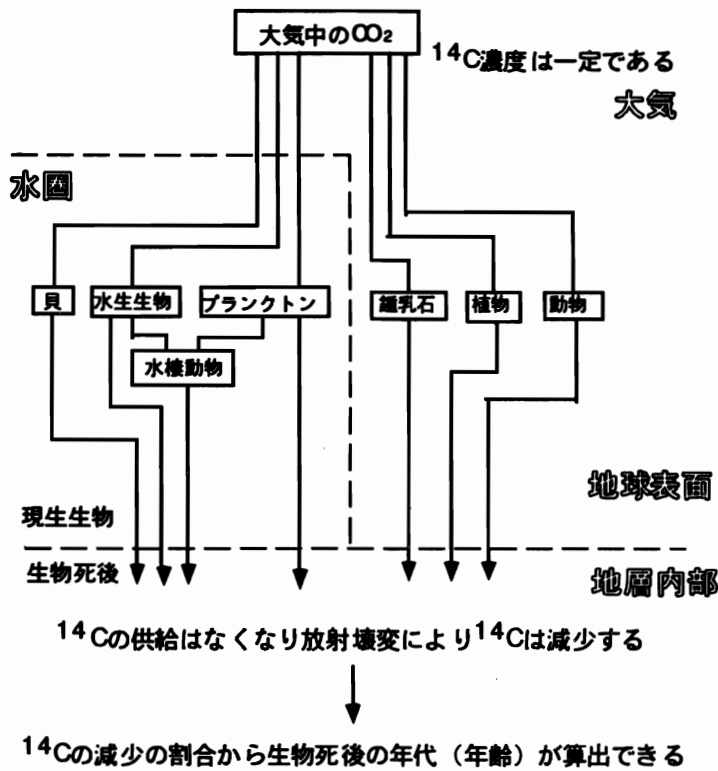
### (1) 測定の原理

$^{14}\text{C}$ 年代測定法は、放射性炭素  $^{14}\text{C}$ が放射壊変し、5730 年でその個数が半分になる(半減期)という原理を応用して、年代を測定する方法である(第1図)。

環境中にある  $^{14}\text{C}$ は、地球に降り注ぐ宇宙線によって、中性子と窒素が核反応を起こして生成される。生成された  $^{14}\text{C}$ 原子は、酸素と結びつき二酸化炭素となり、安定同位体  $^{12}\text{C}$ 、 $^{13}\text{C}$ からなる二酸化炭素と混合して地球表面に拡散する。一方では  $^{14}\text{C}$ はベータ線を放出し、元の窒素に変わっている。

$^{14}\text{C}$ 年代測定法では、核実験による  $^{14}\text{C}$ の付加や化石燃料の燃焼による  $^{14}\text{C}$ 濃度の希釈が起こっていない19世紀以前では、地域差もほとんどなく、大気中の  $^{14}\text{C}$ 濃度は一定であると仮定されている。大気中の  $^{12}\text{C}$ 、 $^{13}\text{C}$ 、 $^{14}\text{C}$ の存在比は、ほぼ  $0.989:0.011:1.2\times 10^{-12}$ で、 $^{14}\text{C}$ は  $^{12}\text{C}$ の1兆分の1しか存在しない(中村 2000a)。

植物は大気中の二酸化炭素を用いて光合成を行うが、その際、安定同位体  $^{12}\text{C}$ 、 $^{13}\text{C}$ とともに  $^{14}\text{C}$ も大気中と同じ比率で取り込む。食物連鎖により動物もほぼ同様な比率となり、動植物の生存中は  $^{14}\text{C}$ 濃度は大気中とほぼ等しくなる。しかし、動植物が死んだ場合、 $^{14}\text{C}$ が新たに補給されないため、 $^{14}\text{C}$ 濃度は時間の経過とともに一定の割合で減少する。その濃度が半減するのが5730年(半減期)である。したがって、測定試料



第1図 <sup>14</sup>C年代測定の原理(中村 2000aより)

とともに一定の割合で減少する。その濃度が半減するのが5730年(半減期)である。したがって、測定試料中に<sup>14</sup>Cがどの程度減少しているかが分かれば、その試料が死んだ年代が計算できることになる。

<sup>14</sup>Cの半減期は、現在のところ5730年が最も信頼できる値として認められているが、年代測定の際には、<sup>14</sup>C測定法を開発したリビーが用いた5568年を使用することが国際的な慣例になっている(中村 2000a)。

なお、測定年代は、1950年を基点に過去に遡った年代で示され、年代値の誤差は、主に<sup>14</sup>Cの計数誤差で、1標準偏差(1σ)で示される(○○±△△[yr]BP。BPはbefore presentまたはbefore physicsの略)。

ここで注意しておくべき事は、過去の<sup>14</sup>C濃度は一定と仮定されているが、実際は宇宙線による<sup>14</sup>Cの生成率の変化と大気から海洋や生物圏への移行速度の変化によって変動していることである。また、場所による影響もあり、南半球では海洋からの影響が大きいため、大気拡散速度が遅く濃度が低いこと、海洋表層水は大気と二酸化炭素交換をしているが、深層にも拡散しているため濃度が低い(リザーバー効果)ことなども留意すべき点である。

また、環境中の炭素は、安定同位体<sup>12</sup>C、<sup>13</sup>Cと放射性同位体<sup>14</sup>Cから構成されるが、その存在比は、物質の種類によって大きく異なっている。そのため、<sup>14</sup>C年代値の正確度を高くするためにはこの同位体分別の補正が必要とされる(中村 2000a)。

年代測定の対象とされる試料は、陸棲動植物化石、木片、木炭、泥炭、サンゴ、貝殻、プランクトンなど炭素を含有する物質である。ただし、河川や湖沼あるいは汽水域に生息する水草や魚介類等は、岩石中の炭酸塩や石灰岩等起源の二酸化炭素により<sup>14</sup>C濃度が低くなっていることがあり、年代測定試料として適当ではない。また、湖沼や海洋生物を食料とする陸上動物や食物連鎖の頂点にある人間が、どの程度大気の<sup>14</sup>C

濃度を反映しているか問題がある。したがって、高精度年代測定には、一般に木材、木炭、堅果、漆などが最適であるという(今村 1999)。

## (2) 放射能測定法と加速器質量分析法

### a 放射能測定法

放射能測定法は、従来より行われていた方法で、試料を化学的に処理し二酸化炭素やアセチレンの形にしてガス比例計数管を用いて $^{14}\text{C}$ 濃度を測定する「ガス比例計数法」とアセチレンからベンゼンを合成して液体シンチレーションカウンターでベータ線を測定する「液体シンチレーション法」がある。

従来法では、非常に安定した測定装置が開発され、高精度・高確度で試料中の $^{14}\text{C}$ 濃度を測定することが可能であり、年代の較正曲線(キャリブレーションカーブ)作成のための樹木年輪の $^{14}\text{C}$ 測定に用いられている。すべての測定機関で達成されているわけではないが、測定誤差 $\pm 20$ 年以下の高精度な測定も行われているという(北川 1999a)。

欠点としては、通常1~5gの試料が必要とされ、試料調整の手間と時間、測定時間がかかることなどがあげられる。

### b 加速器質量分析法(AMS)法

1970年代の後半に核物理学の研究に使われる加速器技術を応用して、加速器質量分析法(AMS法)が実用化された。従来法が $^{14}\text{C}$ の崩壊によるベータ線を用いて $^{14}\text{C}$ 濃度を定量するのに対して、加速器の技術によって炭素を原子ごとに分離して負イオンの状態にし、その個数を直接数えるものである。

この方法の利点としては、試料の量が従来の千分の一(0.2~1mg)ときわめて微量でも測定可能であること、測定可能な年代が5~6万年前まで拡大されたこと(従来法では3~4万年前)、1試料の測定時間が1~2時間と大幅に短縮されたこと(従来法では約20時間)があげられている(中村 2000a)。

### c 放射能測定法とAMS法の信頼性

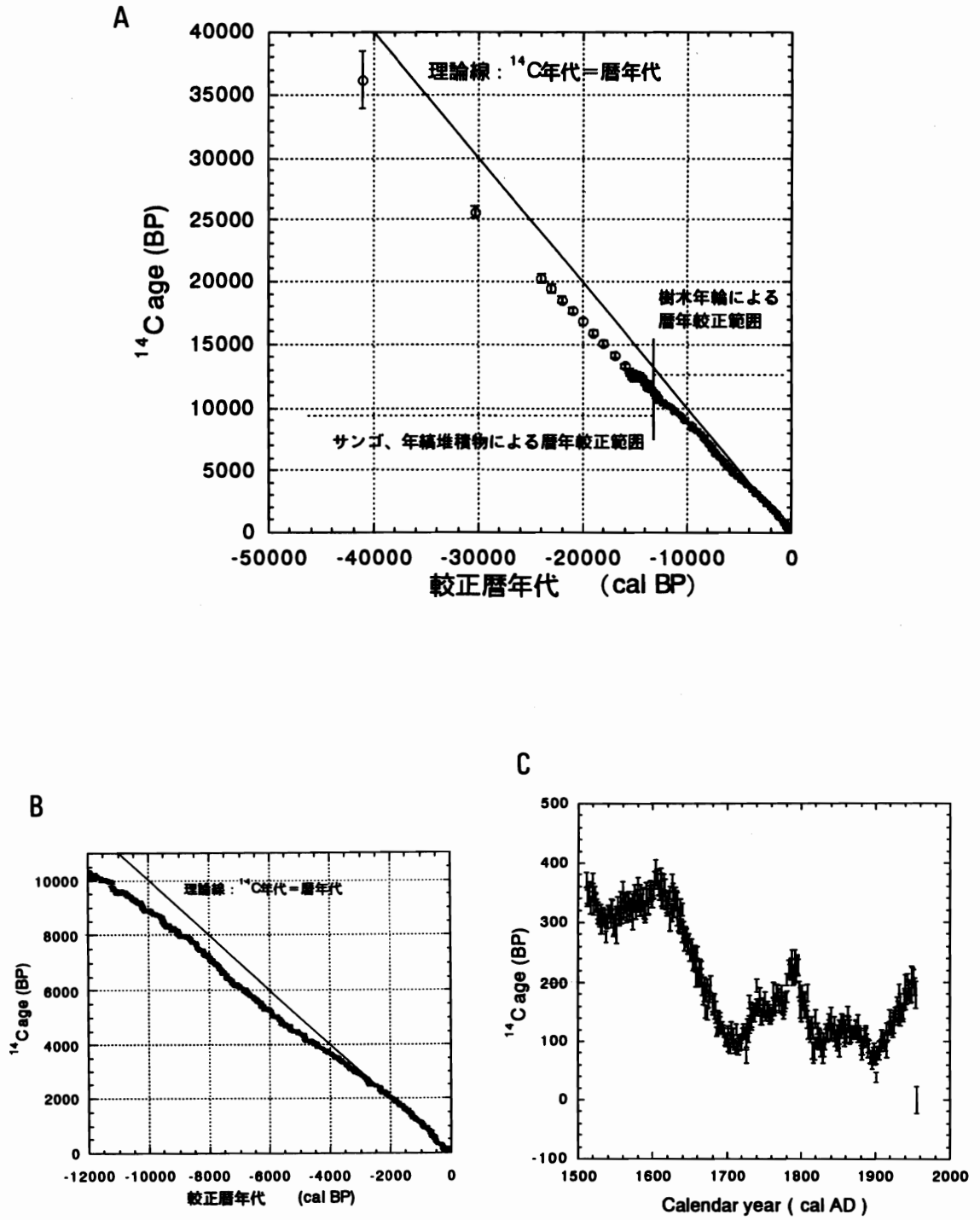
最近の考古学ではAMS法だから信頼性が高いという誤解から、AMS法を妄信的に好む傾向があることが指摘されている(今村 1999、北川 1999a)。

AMS法では、試料に複雑な化学処理を施して固体炭素(グラファイト)を合成する必要がある。この処理が微量の試料に対して行われるので、その際のわずかなミスやコンタミネーションによって、測定される年代の正確度に大きな影響が出る。また、AMS法での測定誤差は一般的に $\pm 50$ 年であり、従来法で達成されているような高精度( $\pm 20$ 年以下)の測定を行うことはできないという。したがって、試料の状態を十分に考えて、測定に十分な試料を用いることができるならば、従来法による測定を考える必要がある(北川 1999a)。

## 2. $^{14}\text{C}$ 年代から較正年代へ

$^{14}\text{C}$ 年代値は、過去の大気中の $^{14}\text{C}$ 濃度が一定であるという前提によって測定された年代値であるが、実際は時間とともに大気中 $^{14}\text{C}$ 濃度は大きく変動していることが明らかになっている。

$^{14}\text{C}$ 年代測定法が実用化された当初、年代が判明している試料と $^{14}\text{C}$ 年代値が一致しない主な原因は、半減期の不正確さに求められた。そのため、正確な半減期によって補正されたが、不一致の解消には至らなかった。その後、大気中 $^{14}\text{C}$ 濃度の経年的に大きく変動していることが明らかになり、単なる補正ではなく、年代の確定した試料を高精度で測定して過去の $^{14}\text{C}$ 濃度の変動を調べ、 $^{14}\text{C}$ 年代値からより正確な年代に較



第2図  $^{14}\text{C}$ 年代と校正暦年代との関係 (中村 2000a より。B、Cは、Aの拡大)

正することが必要とされた。具体的には、樹木年輪やサンゴ、海洋底堆積物、湖沼年縞堆積物により得られた高確度の年代値と<sup>14</sup>C年代値を直接比較し、データベースとなる較正曲線(キャリブレーションカーブ)により、暦年代を求めるものである(第2図)。較正後の年代は、cal BPで表される(calは、calibratedの略)。

較正曲線は、1986年から国際的に標準となるものがまとめられ、その後の改正を経て1998年には24,000年前までの較正曲線(INTCAL98)が発表されている(Stiver et al.1998)。また、福井県の水月湖の湖沼堆積物(年縞)のデータにより、過去45,000年の大気中の<sup>14</sup>C濃度が求められている(Kitagawa and van der Plicht1998)。

INTCAL98の較正曲線は、AD1,955-1,551年までが樹木年輪による一年輪毎の測定値によるが、1,550から11,850 cal BPまでは10年単位で測定された年輪データ、11,850から15,585 cal BPまではサンゴや海洋底堆積物による限られたデータによるものである。また、15,585-24,000 cal BPはサンゴのデータが9点、24,000-40,000 cal BPではサンゴのデータ2点に基づいたものであり、まだ十分なデータ量とはいえない(第2図A)。このように、いまだ完成されたものではないが、INTCAL98にはまだ取り入れられていなかったKitagawaらの湖沼堆積物による測定データなどデータの充実が進められている(中村2000b)。

INTCAL98を用いた較正プログラムは、米国のワシントン大学、オランダのグローニンゲン大学、英国のオックスフォード大学のものなどがあり、国際放射性炭素協会“Radiocarbon”のホームページからダウンロードし利用することができる。

較正曲線を見ると長期変動と短期変動が認められる。長期的には約2000年前を境にそれ以前では<sup>14</sup>C年代値が若く出て、古くなるに従って次第に差は広がっている。暦年代で4000年前では約500年、数万年前では3000~5000年も<sup>14</sup>C年代値は若い方にずれる(第2図A・B)。

短期的変動は20~30年単位でみられる小刻みな変動でウイグルと呼ばれる(第2図C)。ウイグルのために、時間的に連続して生じた事件の<sup>14</sup>C年代値が逆転したり、複数の暦年代が導き出され数百年の幅の年代しか求められない場合が生ずる。

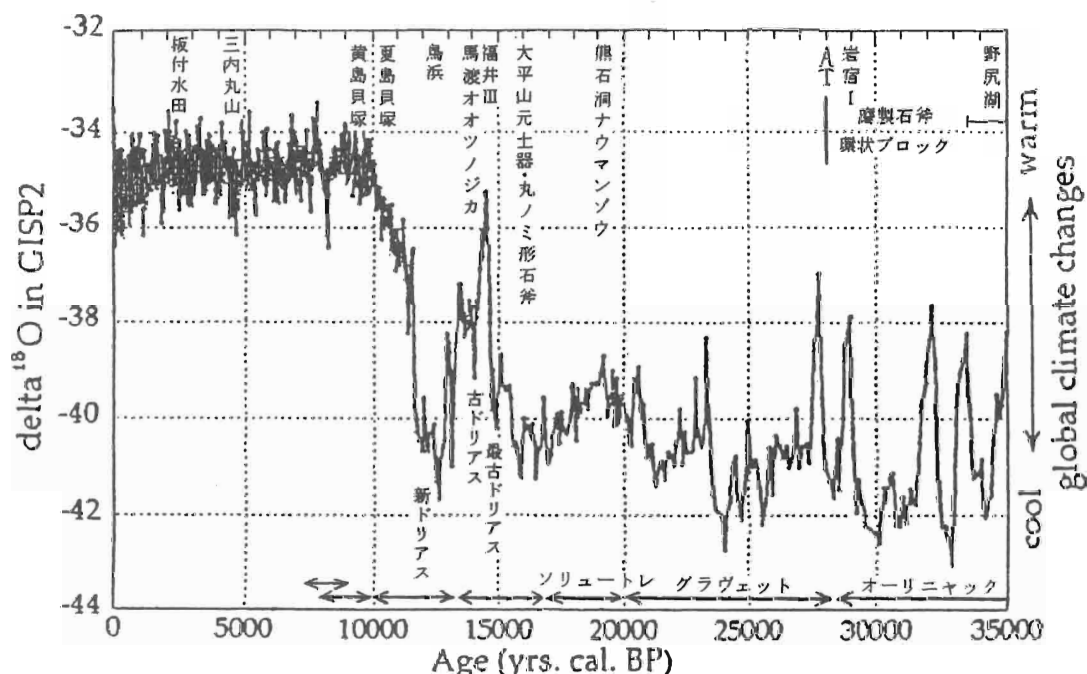
一方では、ウイグルを利用した高精度の年代決定法(ウイグルマッチング法)が考案されている。樹木年輪試料から測定された<sup>14</sup>C濃度の時間的変化パターンを既知の較正曲線のパターンと照合し、一致する部分を見つけて年代を決定するものである(古城1995、今村1999)。条件がそろえば理論的には1年の誤差で年代決定できるものであり、今後考古資料の高精度の年代決定が必要な場合には重要な役割を果たす可能性がある。

### 3. 後期旧石器時代の較正年代

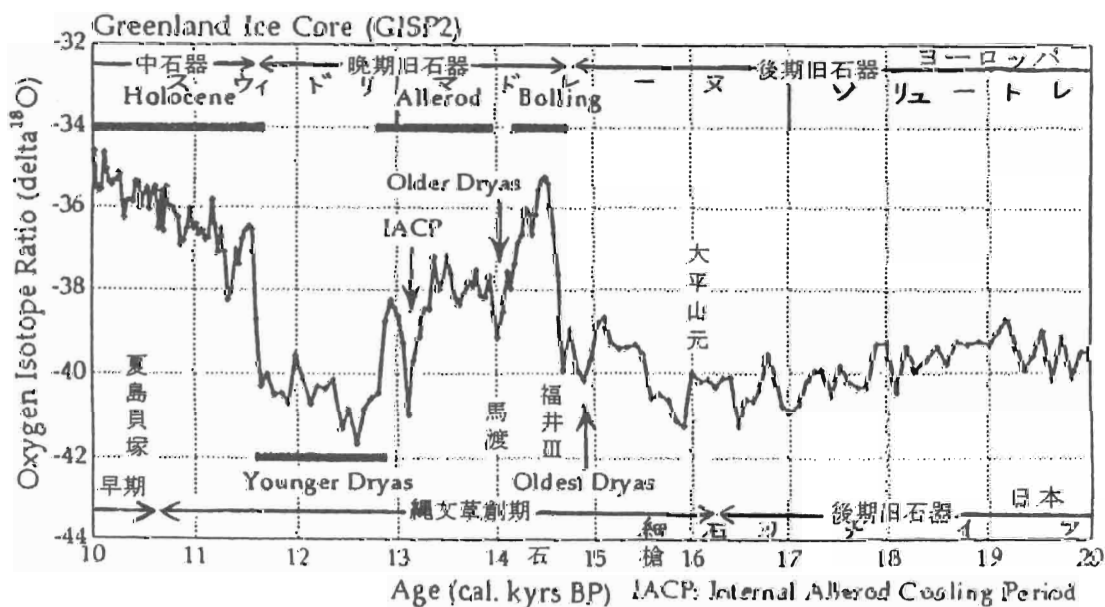
日本の後期旧石器時代に関する暦年代が示された例は、これまでのところあまり多くない。

春成(2000a・b)は、大形獣の絶滅と人類の狩猟活動との関連や縄文時代の開始について今後の方向を探るための年代枠として、旧石器時代から縄文時代にかけての較正暦年代を使用している(第3図)。

春成によると、始良Tn火山灰(AT)の降下は暦年代で約28,000年前(なお、ATの年代はTada1999では29,240 cal BPが使用されている。)、大平山元I遺跡の無文土器の年代は約16,000年前で最古ドリラス(寒冷期)より古い。岐阜県熊石洞のナウマンゾウの年代は約20,000年前、広島県帝釈馬渡のヤベオオツノジカの年代は約14,000年前とされている。



A 35,000年前から現在までの気候変動と日本での事件  
 [STUIVER et al. 1995] に記入。日本の炭素14年代はすべて  
 [STUIVER et al. 1998] を使って暦年代に直して使用



B 20,000年前から現在までの気候変動と日本での事件  
 [STUIVER et al. 1995] に記入。日本の炭素14年代はすべて  
 [STUIVER et al. 1998] を使って暦年代に直して使用

第3図 気候変動と日本列島での事件 (春成 2000a より)

また、砂田 (1999) はオックスフォード大学のプログラム OxCal3.3 を利用して、相模野台地の旧石器遺跡試料から得られた  $^{14}\text{C}$  年代の較正を試みている。対象とした遺跡は、かながわ考古学財団が最近調査し、すべて AMS 法により  $^{14}\text{C}$  年代値が求められているものである。同一文化層の複数試料の較正暦年代の平均値は次のように示されている。

宮ヶ瀬遺跡群No.11 遺跡L 1 S層上面 (n=4)	15,425 cal BP
吉岡遺跡群B区L 1 H層上部 (n=2)	19,850 cal BP
用田バイパス関連遺跡群II地区中央L 1 H層中部 (n=3)	20,280 cal BP
福田丙二ノ区遺跡B 1層上部 (n=3)	21,350 cal BP
福田丙二ノ区遺跡B 1層下部 (n=10)	22,600 cal BP
用田バイパス関連遺跡群III地区北B 1層下部 (n=6)	22,725 cal BP
宮ヶ瀬遺跡群No.13、No.13C 遺跡B 1層下部 (n=3)	22,800 cal BP

現在のところ、試料数も少なく、試行段階ではあるが、出土層位との矛盾はない。今後、年代測定の専門家の意見も聞きつつ、より下層の試料も含めて、良好な分析例を増やして行く必要がある。

近年、グリーンランド氷床のコアの安定酸素同位体組成の解析が急速に進み、過去 25 万年間の気候変動とダンスガード・オシュガーサイクルと呼ばれる最終氷期における 24 の亜間氷期が明らかになっている。これは、数十年での  $5\sim 7^{\circ}\text{C}$  の急激な温暖化とその後 500~2000 年にかけての緩やかな寒冷化で特徴づけられる気温変動である。ダンスガード・オシュガーサイクルを束ねたボンドサイクルと呼ばれる気候変動は、氷床からの北大西洋への冰山群の流出 (ハインリッヒイベント) の後の急激な温暖化によって開始されるもので、海洋循環の変動が気候システムの変更に大きく影響していることが明らかにされている (藤井 1998)。

従来日本列島の土器の出現は気候の温暖化に伴って起こったものと説明されてきたが、大平山元 I 遺跡の年代によれば、最終氷期中に出現していたことになり、この説明は再考を要する。また、最終氷期から完新世の温暖化に向かう急激な気候変動は、縄文時代草創期の出来事ということになる (堤 1999)。後期旧石器時代は、最終氷期に属するが、比較的短い周期での寒暖が繰り返されている。

このような、急激かつ小刻みな気候変動が後期旧石器の石器群の変遷とどのように対応するのか (またはしないのか)、また気候変動に伴う動植物相の変化との関連はどのようなものであったか、動植物遺体が旧石器遺跡から石器に伴って出土することがほとんど期待できない状況では、暦年代という共通の枠組をもって議論する必要がある。

#### 4. 今後の展望

気候変動や動植物相の変化など他分野の成果を考古学的分析と結びつけていくためには、共通の年代枠が必要である。また、較正曲線を見ると暦年代では時系列に沿って起こった事象が、 $^{14}\text{C}$  年代値では逆転することもあり、 $^{14}\text{C}$  年代値の信頼性を疑う原因にもなっていたと考えられる。したがって、今後は、旧石器時代の年代を述べる際には暦年代を共通枠として使用していくことが有益であると考えられる。

しかし、較正曲線の整備や考古学上の測定資料がまだ十分ではなく、現状においては、暦年代で議論できる段階までには至っていないが、今後急速にその方向に進むと予想される。現在は暦年代使用への移行期ともみることができ、様々な年代値が注釈なしに用いられている状況もみうけられる。少なくとも、どの年代測定法で行ったもので較正を行ったものかどうかを明記して使用することが混乱を引き起こさないために必

要となる。

また、校正曲線の整備は今後急激に進展し、気候変動に関するデータもより詳細に報告されるようになると予測される。相模野台地では、多くの旧石器時代遺跡が調査されてきたが、 $^{14}\text{C}$ 年代測定が行われた例は決して多くない。環境や気候等の条件を視野に入れた研究を行っていくためには、意識的に分析試料を増やして必要がある。当面は、相模野台地の旧石器時代の標準的な土層のそれぞれの暦年代を確定していくことが必要と考えられる。

## 註

註1 石、金属、紙、木などに刻まれたり書かれたりした文字資料で表現される「暦年」とは用語を区別し、「校正年代」とすべきだという意見がある(小野 2000)。用語の問題はまだ十分整理されていないが、ここでは、暦年代または校正暦年代とする。

## 引用文献

- 今村峯雄 1999 「高精度  $^{14}\text{C}$ 年代測定と考古学—方法と課題—」月刊地球 号外No.26 海洋出版, 23-31
- 小野 昭 2000 「中部ヨーロッパにおける最終氷期—後氷期の校正年代と考古学」日本第四紀学会講演要旨集 30, 200-201.
- 北川浩之 1999a 「第4章 炭素 14 年代測定と日本考古学の時代編年」『はじめて出会う日本考古学』安田喜憲〔編〕 有斐閣, 99-118
- 北川浩之 1999b 「炭素 14 年代測定の現状と新展開」月刊地球 号外No.26 海洋出版, 43-49
- 古城 泰 1995 「測定値の平均化とウイグルマッチング—高精度年代決定のための二、三のテクニックについて—」第四紀研究 34, 129-134.
- 砂田佳弘 1999 「相模野細石器の暦年補正年代」『吉岡遺跡群IX』(財) かながわ考古学財団
- 堤 隆 1999 「晩氷期へと突入する縄文草創期—シンポジウム更新世-完新世移行期の比較考古学から—」考古学ジャーナル 442, 43-44.
- 中村俊夫 2000a 「放射性炭素年代測定法の基礎」『日本先史時代  $^{14}\text{C}$ 年代』 日本第四紀学会, 3-20.
- 中村俊夫 2000b 「 $^{14}\text{C}$ 年代と暦年代への校正」『日本先史時代の  $^{14}\text{C}$ 年代』 日本第四紀学会, 21-39.
- 春成秀爾 2000a 「旧石器時代から縄文時代へ」日本文化財科学会第 17 回大会研究発表要旨集, 2-3.
- 春成秀爾 2000b 「旧石器時代から縄文時代へ—回顧と展望—」日本第四紀学会講演要旨集 30, 196-199.
- 福澤仁之 1999 「日本の湖沼年縞編年学—高精度編年と環境変動の高分解能復元」月刊地球 号外No.26 海洋出版, 181-191.
- 藤井理行 1998 「最終氷期における気候変動—Dansgaard-Oeschger サイクルとハインリッヒ・イベント」第四紀研究 37, 181-188.
- 光谷拓実 1999 「年輪年代法」『考古学と年代測定学』松浦秀治・上杉陽・藁科哲男〔編〕同成社, 26-43.
- Kitagawa, H. and van der Plicht 1998 "Atmospheric Radiocarbon calibration to 45,000yr B.P.: Late Glacial fluctuations and cosmogenic isotope production" Science 279, 1187-1190.
- Stuiver, M. et al. 1998 "INTCAL98 Radiocarbon Age Calibration, 24,000-0 calBP" Radiocarbon 40, 1041-1083.
- Tada, Ryuji 1999 "Late Quaternary Paleoceanography of the Japan Sea: An Update" Daiyonki Kenkyu38, 216-222.



神奈川県考古学会 平成 12 年度 考古学講座

## 相模野旧石器編年の到達点

2001. 3. 11

発行 神奈川県考古学会

会長 寺田兼方

編集 諏訪間 順

印刷 (株)アルファ

神奈川県考古学会事務局 平塚市北金目 1117 東海大学文学部考古学研究室内

本講座担当幹事 加藤 緑、白石浩之、明石 新、大坪宣雄、諏訪間順

表紙カット 海老名市柏ヶ谷長ヲサ遺跡第Ⅸ文化層出土 国府型ナイフ形石器 硬質細粒凝灰岩製

裏表紙 大和市深見諏訪山遺跡第Ⅳ文化層出土 男女倉型有槌尖頭器 信州産黒曜石製

